CLANNAD ～Before Story～ 直幸編

鷺ノ宮言葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＬＡＮＮＡＤ　～Ｂｅｆｏｒｅ　Ｓｔｏｒｙ～　直幸編

【Ｎコード】
Ｎ６２５８Ｉ

【作者名】
鷺ノ宮言葉

【あらすじ】
青森県の進学校に通う高校生、岡崎直幸は成績が振るわず、放課後、図書館で勉強を続けていた。
そんな直幸はやがて郷里を離れ、新しい生活を始めるのだった。

はじめに

この物語は、アニメ『ＣＬＡＮＮＡＤ』及び『ＣＬＡＮＮＡＤ～ＡＦＴＥＲ　ＳＴＯＲＹ～』に登場したキャラクター、岡崎直幸を描いた二次作品です。

アニメ『ＣＬＡＮＮＡＤ』を視聴いたしまして、良い作品だと思いました。とても印象に残る作品で、私はとても好きです。そんな素敵な作品でしたので、自分の中でも色々と想像が膨らみました。この作品に出会えたことを感謝したいと思います。

筆者は、原作であるゲームソフト『ＣＬＡＮＮＡＤ』をプレイしていませんので、さまざまな点で違和を感じられる方がいらっしゃるかもしれませんが、ご容赦ください。

また、この物語は筆者の独断と偏見と妄想によって作られたものであり、原作遵守ではありません。また、方言に無知ですので、登場人物の台詞に違和感があるかもしれませんが、その点もご容赦ください。

なにぶん、文章を書くということに不得手なため、稚拙な表現、文章等があるかと思いますが、優しい眼差しで見詰め、気づいたことをそれとなく指摘していただけると後学の糧となるかもしれません。

その辺りを踏まえた上で、楽しんでいただけたら幸いです。

それでは、お楽しみくださいませ。

序章

「起立、礼」

最後の礼を終えると、今日室内の空気は一気に緩んだ。

今日一日、やっと解放されたといわんばかりに今日室内はざわめき立つ。運動部員と思しき連中はすばやく、そして慌しく教室を飛び出していく。教室に残る者の多くは、それぞれグループをなして談笑している。

直幸はそそくさと鞄に教科書などと詰めると、教室を後にした。

階段を下りると、多くの生徒は昇降口へと向かうのだが、直幸はその流れとは逆へと歩いていった。その通路は普段あまり人気がなく寂しい感じだった。

その通路を抜けると図書館にたどり着いた。

図書館は、独特な雰囲気があった。普段利用者も少なく、物悲しい印象を受ける。しかし、読書愛好家たちにとってはむしろ適所といえるだろう。ワイワイと騒がれたのではおちおち読書もできない。せっかくの時間が台無しとなってしまう。読書家にとってはとても過ごしやすい場所だろう。

図書館には長机が列を成して整然と並べられている。この小ぎれいに整った光景がまた、図書館の行儀良さだろう。この空間には、どうにも大声で騒ぎまわるというのが似つかわしくない。直幸も自然と身を律される想いがする。

館内にはすでに幾人かが訪れていて、本を物色したり、すでに読み耽る体制を整えつつあるものもいた。

直幸も授業が終わるとすんなりと図書館を訪れたつもりだが、それでも先客がいるのだからその熱心さには感服する他ない。直幸は、どうしてそんなに熱心になれるのかと疑問に思ったりもしたが、そんな風にできることに羨ましさもあった。

直幸は、空いている机に鞄を下ろすと、そのまま席に着き、鞄か

ら教科書やノートを広げた。直幸は、図書館に本を読みに来たわけではない。勉強をしにきたのだった。

直近のテストの成績が悪く、両親にひどく叱られたのだ。そうでもなければ、図書館で勉強などするほど勉強熱心ではない。むしろ勉強は嫌いだ。だから、好き好んで本を読もうという人間の気が知れなかったし、自分がそんな連中と同じ場所で勉強する状態は何とも複雑な印象だった。

そんなことを思いつつも、直幸は机に向かわないわけにはいかないと強く感じていた。どうにかやる気を奮い立たせて問題を解いていく。しかし、程なくして壁に激突することになる。強い眠気に襲われたのだ。

直幸は目をこすったり、首を左右に振ったりして睡魔と争ってみるのだが、その闘いは激しく問題を解くどころの話ではなかった。その闘いは直幸の奮闘虚しく、あっけなく終局した。教科書を考え出した人物は表彰ものだろう。これほど効き目のある催眠術は日本中探しても他にあるまい。かくして、数式という現代科学の推移を結集した魔法によって直幸は屈服することとなった。

図書館の扉を開けると、中は粛然としていた。

敦子にとって、その雰囲気は堪らなく心地よいものだった。大多数の生徒たちが寄り付こうともしない校内の一角は、敦子にとってはおもちゃ屋や遊園地のようなワクワク感をもたらすものなのだ。

敦子はいつものように本を返却すると、新たな獲物を求めて本の森を散策し始めた。

もうすでに何度も訪れていて、本棚の配置はある程度理解していたし、特に好きな種類の本の並びは熟知していた。

それでも、散策して回るのだ。

彼女の言うには、本との間には何か言い知れぬ縁のようなものがあるのだそうだ。その時、ピンときて手に取るタイミングというも

のがあって、それが本との縁なのだという。もちろん、読んでみたい本はしっかりとチェックしておくのだが、それとは別に、新たな本たちとの出会いを求めているわけだ。それは、森林の中を歩いていて、偶然野鳥を目にするのと同じようなもので、彼女はそんな偶然を楽しんでいた。

敦子はいくつかの本を選ぶと、貸し出しのカウンターへと向かった。

本の林を抜けて、長机の横を通り過ぎようとする時、突然ガツンと大きな音が館内の静寂を打ち破り、寸暇を置かずにカラカラと乾いた音が余韻のように小音楽を奏でた。

直幸は額と鼻の辺りに痛みを感じて意識を蘇らせた。

痛みの辺りを手で押さながら、ううっと小さく呻いた。

まだまどろみの中にあるようで、直幸は状況が飲み込めない様子で首を左右に振った。

俯きかげんで顔を覆ったまま、目を開き、何度となく瞬きした。

と、突然横の方から声がした。

振り向くと、目の前には一本の鉛筆が差し出されていた。

敦子は笑い出しそうなのを必死で堪えていた。お腹の辺りもワラワラと落ち着きなく、我慢すると涙が湧き出て瞳を湿らせた。

「勉強ははかど捗ってますか?」

目の前の少女は、笑いを堪えるようにして一言声を掛けてきた。

その瞬間、直幸は硬直してしまった。

その少女の首を傾げる仕草を見せる。直幸は、ハッと我に返り、彼女から鉛筆を受け取ったが、所在無く俯いたままで、一言、ええ、と応えるのが精一杯だった。

直幸は自分の心拍や血圧が上昇していくのがわかった。それがわかると更に茹でダコのように耳まで真っ赤なり、顔が火照るのがわかった。まるで、消防車がサイレンを鳴らし、回転灯を激しく点らせ、自分の体の中を駆けずり回っているような気さえした。直幸は

鉛筆を強く握ったまま、微動だにできなかった。
直幸のそんな様子を横目に、敦子はカウンターへと向かった。
再びこみ上げてくる元を抑えようと、そっと指で唇を押さえた。
その時分、周囲もわずかにざわめき立ったが、すぐに元の図書館の風景に戻った。
カウンターの方で「これ、借ります」という声が聞こえ、直幸は反射的にカウンターの方に目をやった。
そこには一人の女生徒――先ほどの少女だろう――の後ろ姿が見えた。
カウンターでの手続きを終えると、少女は本を鞄にしまい、出入り口の方へと体を向けた。彼女が直幸を一瞥すると、直幸はまた反射的に俯いてしまった。
再び心臓が大きく鼓動する。
出入り口の戸が音を立てると、直幸は再びそちらの方を向いて注視した。
気を落ち着けようと机に正対すると、もう一度今起きた出来事を振り返った。
よく透った高い声。ギリシャ彫刻のような美しい指。微笑を浮かべた、整った顔立ち。潤んだ瞳。そして、首を傾げる可愛らしい仕草。
思い起こすだけで頭が沸騰するようだった。
直幸は何度となく、図書館の出入り口に目をやり、結局勉強に集中することができなかった。

第一章

強い日差しは夏の始まりを感じさせた。
開け放たれた窓からは気持ちのいい風が舞い込んでくる。
教壇では、教師が板書していた。時節、その説明を加えていたが、直幸の耳にはほとんど言語として届いていなかった。
とりあえず、黒板の文字をノートに書き写すものの、心ここにあらずといった感じで、自分が今何を書いているのかさえ意識の外だった。
あの日から、直幸は何かに取り憑かれてしまったようだ。あれから、どうにも授業に身が入らなくなってしまった。それまでも、授業に十分についていけていたわけではなかった。そのために、放課後も帰宅後も勉強に時間を費やしてきたのだ。
それなのに、まじめに勉強しなければいけないのに、頭を働かせようとすれば、あの時の光景が浮かび上がって、妄想が間欠泉のように沸きあがって直幸の集中力を削いだ。
直幸は、早く授業が終わってくれることを願っていた。そして、いつものように図書館へと足を運ぶ。そうすればまた、「あの女性」に会えるかもしれない。その期待で胸がいっぱいになるのだった。
図書館に行けば行ったで、ソワソワして勉強どころではなかった。出入り口のドアが開く音が鳴るたびに出入り口に目をやり、人の気配がするたびに辺りを見回した。図書館で勉強を始めると、必ずといっていいほど眠気に襲われていたのだが、不思議なことにここのところまったく眠気に襲われなかった。しかし、それで勉強が捗っているわけでもなかった。日一日経過することで、直幸の心には焦燥感が漂い始めたのか、いよいよ授業に集中できなくなっていった。
「岡崎、次読んでみろ」
教師の声が掛かる。
教室内のほぼ全員が教科書へと目を下ろす。

と、しばらくの間が空いて、教師も生徒たちも、直幸の席の方へと顔を向けた。

「おーかーざーきー」

直幸は教師の再度の呼びかけに弾かれたように立ち上がった。普段おとなしい直幸にして、まるでピンポン玉のように俊敏な動きは周りの者たちに奇妙に写った。

「えー、トンネルの出口から白塗りの柵に片側……」

「違う違う、そこじゃない。そこはもう終わってる」

教師は、直幸が音読するのを遮って間違いを指摘した。

教室内はドッと笑いが起こり、直幸は立ったままあたふたするばかりだった。

「アーいい、館田読め」

突然の指名に非難の悲鳴を上げ、館田と呼ばれた生徒が立ち上がる。

「岡崎ー、しっかり聞いとけよ」

男性教師は、低い声で軽く叱ると、教科書に目を下ろした。

直幸は着席すると、教科書を手に取り、読み上げられている箇所を探した。無事、その一文にたどり着くと一息ついた。

教師の指示により音読が打ち切られると、再び直幸が指名され、一説を読み終える。

読んでいる間も、自分が読んでいる文章の内容などほとんど頭に入ってこなかった。どうにもバツが悪く、少し憂鬱な気分だった。

しかし、そんな気分も時間と共に薄れて、また性懲りもなく図書館の少女のことを考えてしまう。

――文学少女。

それが直幸の印象だった。何処となく気品のある顔立ち。物腰は柔らかく、上品だった。都会的というのだろうか、何か、地元の人間とは違う匂いを感じる。洗練されている、というのかもしれない。それでいて、都会人のようなガツガツしたような、ミーハーな、流行に流されそうな、世俗的な“悪臭”は漂ってこない。本が大好き

で、ゆったりとしたソファに腰掛けて、紅茶でも飲みながら寛いだひと時を過ごす。そんな、英国貴婦人のようなイメージを抱いていた。

それが現実と噛み合っているかはさておき、そんな妄想に耽る時間は大いに充実した時間だった。生産的であるかどうかはともかく、何より、直幸の疲れた心を癒すのに充分な効果を発揮していた。

そんな直幸は相変わらず、図書館に通う目的を半ば忘れたかのようにソワソワと落ち着きないでいた。

図書館に入ると、まず辺りを見回した。適当な場所に荷物を置くと、ザッと棚の間を見回してみる。どう見ても本を探しているわけではない直幸の行動は、第三者には奇異に映るだろう。直幸はなるべく平静を装って、図書館内を見渡すのだった。

結局、今日も彼女はいないようだ。それがわかると、落胆して椅子に身を任せてダラリと座り込み、大きく溜め息をついた。

（何やってるんだ、僕は。）

吐いた息と一緒に儚い夢が逃げて行ったように現実に意識を戻す。勉強せねば、と心を鼓舞して教科書を広げた。

しばらくすると、ニョキニョキと睡魔が活動を始め、直幸は大きく欠伸をした。頬杖を付き、何ともつまらなそうに教科書に目をやり、鉛筆を走らせた。

諦めと共に緊張が解れ、とたんに眠気が起こってきたようだ。

もはや首に頭を支える力はなく、手のひらに預けていた。何度も瞬きを繰り返しつつ、教科書を読み進める。しっかりと頭に入っているかはともかく、とりあえず前進あるのみといった調子である。

そんな、ほとんど惰性に任せた調子で勉強していると、ガラリと後方で音がした。

ぼんやりと、鈍い反応で出入り口の方へ振り返った。

と、あの「文学少女」が視界に収まる。しかも、その瞬間に目が合った。

直幸は反射的に体を戻した。

眠気など微塵もその気配を感じさせないほどに吹き飛んでしまった。鼓動が早まり、直幸の瞳はゆらゆらと所在無く遊んだ。

再び出会うことができたが、それでどうするなどと考えてもいなかった。

だいたい、この前初めて会ったばかりで、言葉もまともに交わしていない。当然、名前など知る由もない。会ったはいいが、それで何をすればいい。どう声を掛ければいい。直幸の頭の中は喧々諤々、いくつもの言葉が激しく行きかった。自分でも驚くほど頭は回転し、どうやって声を掛けるのか、何と声を掛けるのか、行くパターンもシミュレーションを繰り返していた。しかし、どうにも答えが出ない。

どうにもならず、たまらず直幸は頭を抱えた。

その様子を見ていた敦子は、直幸の隣に近づくと声を掛けた。

「どこか、わからないところがあるの？」

「は？」

自分の思考の中に入り込んでいた直幸は何だかわからずに声の方を向いた。刹那、直幸は椅子から転げ落ちるような感覚に捉われた。実際には体を反らせただけだったが、2、3メートルは後退りした気分だった。

「どこか、わからないところがあるの？」

敦子は再び同じ台詞を繰り返した。

「あっ、ああ、いや」

直幸は教科書とノートに目を落として、やっと彼女が何のことを言っているのか察した。

「そう？　別に恥ずかしがることないわよ。頭抱えるくらいなんだから、困ってるんでしょ？」

敦子は、直幸の不安定な挙動を察してか、気を利かせて更に尋ねてみた。

この敦子の洞察はかなり的外れではあった。状況からして、勉強で悩んでいるのだろういう解釈は決して突飛なものではなかったが、

直幸のこの状況にはまったく外れていた。
直幸は次の言葉に窮した。
直幸が頭を抱えていたのは別の理由からである。目の前にやってきた敦子に動揺し、激しく狼狽してしまった。衝撃のあまり直幸の心は臨界点を超えてメルトダウンを起こしたようなものだったから、顔がどうなっているかは想像に難くない。それを恥ずかしがっているのだという解釈もできるわけだ。
しかし、その誤解を解くには更に恥ずかしい想いをしなければならないだろう。
それこそ、墓穴を掘ることになる。
直幸は思案した挙句、誤解を解くことは放棄した。
「いや、本当に、何でもないですから」
直幸はにこりと愛想笑いを浮かべる。
それは、直幸の白旗でもあった。せっかく向こうから話し掛けてきたのに、結局、話を取り持つこともできず、話題を膨らめることもできずに、諦めたのである。もちろん、自分がどうして頭を抱えていたかなど、話す度胸はなかった。
かくして、直幸は降伏宣言とばかりに愛想笑いを浮かべてその場を収めようとしたのだが、敦子はそれを受諾しなかった。
どうにも納得のできないといった様子の敦子は、直幸の向かいに座ると、身を乗り出してきた。
「大丈夫、心配しないで。お姉さんに話してご覧なさい」
敦子は、むやみに真剣な眼差しを直幸に向けてきた。
まさか、白旗を踏み倒して突進してくるとは予想だにしないことだった。直幸は思わぬ反撃に返す言葉に詰まった。
直幸は敦子の視線を避けるように目を逸らした。しかし、敦子の視線は、赤外線でも放射しているのかと思うほどだった。前頭部が熱を帯びてきて、それこそ、頭蓋骨に穴が開くのではないかとさえ思えた。
直幸は深く息を吐きだした。そのままでは危うく窒息死してしま

うところだったかもしれない。
敦子に根負けすることになったが、そのまますべての事情を話したのでは、それこそ自分から絞首台に上るようなものである。徐々に冷静になった頭で理由を作ることにした。
「あの、実は……」
口を開くと、敦子は間髪いれずにうん、うん、と首を縦に振ってくる。
敦子の積極的な姿勢に、せっかく積み上げた直幸の決意は危うく霧散するところだった。それをぎりぎりのところで踏みとどまると、後を続けた。
直幸は、図書館で勉強することになった経緯をおおよそ説明した。先のテストで成績が芳しくなく、そのことで親に叱られたこと。そうして、勉強を始めようと決意するが、家や教室では捗らなかったために図書館を選んだことなど、話して聞かせた。
そんな直幸の態度に、敦子は「真面目なのね」と感心してみせた。
「悪いって、どのくらい悪いの？」
そう聞かれた直幸はおずおずと小声で答えた。
それを聞いた敦子は何とも複雑な表情をしてみせた。
目を左右にしたり、何か言葉を発しようとしたり、何かを思案している様子だ。その――どうにか掛ける言葉を見出そうとしている――努力が返って悲しかった。
直幸は、自分の状況を冷静に考えると何だかとても哀れな気がしてきた。
実際、直幸は成績不振から両親の叱責を受けていて、少しでも挽回するために学業に励むことになったのだった。しかし、その事情をまだ出会って二度目の女学生に話すことになろうとは、何とも情けない話だと思った。
（いったい、何を相談しているんだろう）
それが直幸の率直な想いだった。
自分の恥話を聞かせているのだから、呆れられるのが落ちだろう

と思えた。そうとなれば、早々にこの話を打ち切ってこの場をなかったことにしてもらいたい気分だった。

これ以上何かをいわれたら、落ち込みすぎて井戸にでも入りたい願望に駆られる。せっかく出会えた美少女に自ら恥を話してしまったのだからそれも仕方ない。

直幸の心の中は、すでに諦めの気持ちで覆われていた。つい先刻までの湧き上がる甘酸っぱい想いなど何処吹く風である。せめて、以前のように静かに教科書を睨めっこでもさせておいて欲しいと願った。消極的な想いは加速し、もはや敦子に対して抱いていた想いそのものが分不相応な気さえしてきていた。「穴があったら入りたい」とはまさにこういうとき相応しい言葉かもしれない。

そんなネガティブシンキングを繰り返している直幸を前に、敦子は少しばかり思案して一つの提案をした。

「ねえ、それじゃあ、一緒に勉強しようか?」

それは直幸にとって意外な提案だった。

それは老婆心からだろうか、また珍しくお節介なことを提案してくるものだ。

地元でも知られる進学校で、下から数えた方がかなり早い人間に対して一緒に勉強しようなどと、いったいどういう精神をしていると出てくる言葉だろうか。少なくとも、直幸にはそれを理解するのが困難だった。

どういう意図があるのか、と正面にいる女性との顔を上目遣いにみる。

何とも可愛らしい顔をしていて、とても腹黒いことを考えているようには思えなかったから、かなり世話好きか、物好きな性格なのだろうと思った。

そんな風に敦子を眺めて勘繰っていると、

「あっ、迷惑だった?」と、直幸の意向を尋ねてきた。

口に手を当てた仕草がまた可愛らしい。

まるでセイレーンにでも魅入られたようにいちいち彼女の仕草が

気になった。それも、どれも可愛らしいと思えてならないのだから、それは一種の病気なのかもしれない。ただ、直幸自身にそこまで考える余裕はまだない。

迷惑といわれるとそれは大きく違っていた。

もし、この提案を断れば、敦子との接点は無くなりそうな気がした。それは直幸にとって大きな損失のように思えた。

真面目な性格だが、優柔不断で人付き合いも下手な直幸にとって、女生徒とお近づきになれる機会はないと思われた。実際、女友達どころか、男子生徒ですら友達と呼べるような相手はいないに等しかった。

それゆえにこれはいい機会であった。

しかし、恥ずかしい話を知られたという負い目がどうしてもあった。妙に完璧主義的なところがあって、劣等感が強かった直幸にとって、それはとても息苦しいものだった。

相手は自分のことを見下しているのではないか。

落ちこぼれの自分なんか、本当は何とも思っていないのではないか。

それを思うと、直幸はなかなか他人に心を開くことができないでいた。

それが杞憂であるなどと、到底思えなかったのである。

「迷惑だったら仕方ないけど、一緒に勉強した方がきっと捗ると思うの。ね、いいでしょ」

はっきりしない直幸に押しの一手が加えられた。

敦子の表情は少し曇り気味だった。無茶な提案をしているのではないかと心配したためでもあり、思いつめたように黙り込んでいる直幸を案じてのことでもあった。

そんな敦子の表情を見ると無性に罪悪感が沸いて出た。そこには、可憐な朝顔が萎んでしまったように何ともいえない寂しさがあった。

「駄目かな?」

念を押して訊いてくる彼女の顔が、何だが迷子犬のようにも思え

て無視するわけにはいかなかった。
直幸がコクリと頷くと、敦子の顔は再び明るい表情に戻った。
「よし、がんばりましょ」
胸の前で両拳を握ると、勇ましく言った。
敦子の嬉しそうな顔を見ると、直幸もなんだが嬉しかった。
「私は二年の清水敦子です」
それでは、と断って、彼女は簡単に自己紹介をした。
「二年の岡崎直幸です」
直幸が倣う。
「あ、同じ、二年生ですね」
敦子が気づいたというように声を上げた。
広げられた教科書を覗いていたら気づいていたかもしれない。目の前にある情報を失念していたことに照れ笑いを浮かべた。
直幸も合わせて笑みを浮かべた。
冷静に考えればわかるような早とちりだったが、相談に乗られたり、敦子が「お姉さん」などと発言したことから、なんとなく年上相手に接しているような気分になっていた。
二人して笑うと、お互いに親近感が沸いてくるようになった。
「それじゃあ、どこからする？」
勉強する教科や範囲、集まる曜日を決めて、その日は解散した。
敦子は帰り際に「よろしくね」と手を振って去っていった。
その後しばらく図書館に残っていた直幸は、とても勉強に手がつかなかった。
まさかの展開に、直幸は心躍らせるのだった。
もちろん、敦子は単なる親切心からなのだろう。別に、直幸を好いているというわけではないのだ。そう考えても、やはり嬉しいものは嬉しいのだった。敦子のような美少女と話しをする機会ができるだけでも充分満ち足りるものがあった。

木造の門を潜ると、玄関口の明かりが見える。門からはしばらく石畳が続き、左右には様々な木々が植えられていた。その眼前にはどっしりと重厚感漂う純和風の木造家屋が構えている。直幸の家は、この辺りでも目に付く立派な佇まいだった。

玄関の引き戸を引くと、ガラリを音がした。

その音を聞きつけてか、静かながらに素早い動きで着物姿の女性が現れた。背筋はまっすぐに伸び、口元はきりっと締まりなんとも凛々しい。その立ち姿は美しく、どこかの高家の女性かと思うような気風が備わっている。その姿には、初めて目にする者を圧倒するような凄みが感じられた。

「母さん、ただいま帰りました」

直幸は恭しく礼をした。

「ええ、おかえりなさい」

母と呼ばれた女性の口調は非常に丁寧で落ち着いた雰囲気であったが、どこか他人を寄せ付けない圧力と冷たさが潜んでいた。

「直幸さん。ずいぶんと楽しそうですね。なにかあったのですか？」

直幸の表情を見て、女性は尋ねてきた。

「いえ、特に何もありません」

直幸はその質問に特に応えることなく、言葉を切った。

女性はそうですか、と応え、さらに言葉を続けた。

「ここのところ、ずいぶんと帰りが遅いようですね。何か用事があるんですか？」

「はい。学校の図書館で勉強しているものですから……」

「そうですか。それはよい心掛けです。ですが、あまり遅くならないように、お帰りなさい」

そういうと、女性は家の奥へと戻っていった。

その女性の名は岡崎史乃。直幸の母親であり、美しく聡明な女性だった。

史乃は元々関東の出身で、戦時に縁戚を頼ってこの地にやってき

た。青森大空襲の際に多くの縁者を失い、孤独の身であったが、ここ岡崎家に嫁いで今に至る。

とても厳しい人で、直幸も厳しく教育されていた。

史乃が立ち去った後、直幸も自分の部屋へと戻っていった。

襖を閉めると、直幸は着替えを始めた。

直幸の部屋は落ち着いた感じの和室だった。左手の障子を開けると縁側に出る。縁側は庭を取り囲むようにコの字型に設けられていて、直幸の部屋は縁側の終着点に面していた。

直幸にとって、この家の質実剛健といった雰囲気が重苦しくて堪らなかった。両親共に厳格であり、直幸も厳しく育てられた。高校も地元の名門校に進学することになったのは両親のたっての希望、いや、岡崎家に生まれたものの義務のようなものだった。

そのために、直幸は必死で勉強して、何とか志望校に合格することができた。

しかし、そこからがまた大変だった。通うことになったのはいいが、授業についていくのも大変で、徐々に成績は落ちていった。高校一年の時はそれほど悲観するような成績ではなかったが、次第に、その遅れは顕著になり、両親からの苦言を受けた。

高校入試も必死の努力でやってきたというのに、息つく暇もなく、さらに精進せよ、である。直幸の学業へのモチベーションは急落し、投げ出せるものなら投げ出したい気分だった。

岡崎家は裕福で、何不自由ない暮らしができた。戦後、二十年近い時を経たとはいえ、空襲によって財産を失った者たちの中には、相変わらず不自由な生活を余儀なくされた者たちも多かった。高度経済成長といっても、関東以西の太平洋岸地域に比べれば明らかに後れを取っていたのである。

そうした事情の中で、直幸の悩みは贅沢ともいえたが、本人にしてみれば重苦しいことこの上なかった。特に、親の前ではそれこそ生きた心地がしなかった。

そんな直幸にとっても好きな場所があった。それが縁側から見える庭の景色だった。特に、短い夏を彩る庭の景色は心を癒してくれる存在だった。

直幸は障子を開けると、障子のへりに腰掛けるようにして庭を眺めた。

その眼前には、楽しそうに笑う敦子の姿があった。

直幸が通う青森県立青森高等学校は東北本線浦町駅から徒歩で二〇分ほどのところにあった。以前は、合浦公園内の市営野球場付近であったが、一九四五年の青森大空襲の際に焼失。その後、いくつかの経緯を経て現在地に移転となった。

元は青森第五歩兵連隊の兵舎で、その建物をそのまま校舎として利用していた。そういった経緯もあり、オカルト好きなものはそうした兵隊たちの亡霊話など、学校怪談を噂しあったものだ。

青森高校は戦後、青森高等学校と青森女子高等学校が統合しているが、生徒の男女比は男子生徒が圧倒的に多かった。自然、女子生徒は案外ともてることになった。逆に、大半の男子生徒は競争率が高く、日の目を見ないまま卒業ということになった。

ある者はこう揶揄したものだ。名門進学校として知られる、青高に合格するより、女生徒と恋仲になることの方がよほど競争率が高いと。

もちろん、青森高校は地元でも名門で知られていたから、地元にとってある程度のブランドがあり、他校の女生徒から憧れの眼差しがないこともなかった。しかし、ブランドと現実は案外とそぐわないものだった。結局、もてるのは男子生徒の中でも一握りのエリート、成績優秀者か、運動部のキャプテン辺りだった。希少な女子を巡って鼻息を荒くする男子生徒は大抵もてなかった。

多くの学生は、学生の本分よろしく学業に励んでいる。あるいは、

部活動に専念し、汗を流して、清く正しい青春時代を謳歌している。しかし、中には有り余ったエネルギーをそれらの方向に費やせない若者たちがいる。

そうした者たちは、女子生徒との甘いロマンスに憧れたりする。土臭さが染み出ているような男子生徒は大抵女性との視界に漏れてしまっていたが、それでも七転八倒しながらも挫けず玉砕を繰り返す者もいた。

でなければ、以前の直幸のようにさっさと白旗を揚げて、灰色の青春時代が過ぎ去るのを待ち続けるわけだ。

無論、早々に青春を投げ出すほどあきらめのよい者は少なかった。

「よっ、岡崎」

そう挨拶してきたのは、白取だった。

「なぁ、お前、清水と知り合いだろ」

「えっ？」

「ほら、清水敦子だよ、清水敦子。六組のさぁ」

直幸はその名前を聞いて少し驚いたが、すぐにそれも当然と思えた。彼女の容姿からして、男子生徒の中で噂になるのは必然ともいえた。むしろ、この手の話題に疎い直幸だからこそ、クラスの離れたこの教室でその名前を聞くことに驚いたのである。出会う前であれば、間違いなく会話についていけなかった。

「あ、ああ、清水さんか」

応えながら、直幸は、白取がなぜ「清水さん」のことを尋ねてきたのか、不思議だった。

「なぁ、お前、仲いいんだろ。紹介してくれよ」

何かと思えば、なんでもない、敦子にお近づきになりたい男子生徒が、普段会話もしないような直幸に声を掛けてきたのである。

（そういうことか）

直幸は心の中でそう思った。

「な、いいだろ？」

曖昧な応答を繰り返していた直幸は、結局、白取の熱意に負けて、

紹介することになった。
直幸は、なぜ自分が紹介することになるのか不思議だった。
というより、自分と敦子が一緒にいることが噂となって知られていることが意外だった。
実際、そんな風に思っていることが直幸の鈍感さだった。
清水敦子といえば、男子生徒の間では結構人気があったのだ。敦子の、どことなく都会的な均整のとれた容姿は見る者を惹きつける何かがあった。物腰が柔らかく、育ちのよさが窺えた。一方で、清水敦子という人物には謎めいたところがあった。そんな彼女だったから、当然のように男子生徒の注目を集めることになったし、想いを寄せるものも多かっただろう。
直幸と敦子の接点であった図書館はあまり人の出入りのない空間で、利用するのも大抵決まった人たちばかりだった。そんな事情もあり、二人の様子が噂として広まるまで随分な時間を要することとなった。
さらに加えれば、直幸と敦子と取り合わせはどうにもアンバランスに思えた。そもそも、直幸の存在自体が生徒たちの間で知れていない。一年次のクラスメイトですら、おぼろげな記憶になってしまうこともあるほど、周囲にとって意識されていなかった。
そんな直幸と目立つ敦子である。多くの生徒たちの間では、その取り合わせはないだろうと思われた。
それが幸いして、直幸は特に雑音にさらされることなく敦子との時間を教授することができたのである。
しかし、それが明るみに出ると、今度は、敦子と直幸が恋仲であるなどと考えられていなかった分、直幸を踏み台にして敦子に近づこうとする輩が現れたわけだ。
直幸も直幸で、それを断ることもできない甲斐性なしだった。
結局、直幸は翌日にいつものように敦子に出会うと、音楽室の前で白取が待っていることを告げた。クラスメイトとはいえ、よく知りもしない白取の紹介などしようがなかったし、二人が話をしてい

る場所にいるのも嫌な気分だった。二人が仲良く話をして、自分だけ置いていかれるような感覚が怖かったためだ。

敦子にこのことを打ち明けるのにはなかなかエネルギーが必要だったが、それでも自分の心根を話すよりはずっとスムーズに口に出た。

敦子は少し怪訝そうな顔をして、何事かを思案している様子だったが、直幸の依頼を受けて図書館を出て行った。

一人取り残された直幸は何ともいえない虚脱感に包まれていた。ぽっかりと穴が開いたようで、どうにも心も体も動かす気になれなかった。

直幸はそうした状況を打ち払うように、洗顔するように手で顔を覆い、気持ちを切り替えた。

鞄から教科書とノートを取り出し、勉強に励む。頭を使っていないと、敦子のことが思い起こされて、どうにも気が気でなかったからだ。

直幸は、教科書と格闘することで、なんとか時間の経過を忘れることができていた。

しばらくすると、敦子が戻ってきた。

「岡崎さん」

直幸が声に反応して顔を上げた瞬間、激しい衝撃と共に直幸の首は横を向いていた。

「もう、こんなことはしないで」

そういうと、彼女はそそくさと荷物をまとめて出て行ってしまった。

直幸は何が起こったのか、しばらく理解できないでいた。

ようやく敦子に平手打ちされたことに気づいたが、自分がなぜ打たれなければならないのか、わからなかった。

おそらく、白取とのやり取りが問題だったのだろうが、それにしても平手打ちとは穏やかではない。さらに、あの敦子があれほど怒った表情を見たことがなかった。

一人残された直幸は、何もできないまま、ぽつんと座ったままだった。

――もう、こんなことしないで。

その声は、決して大きなものではなかったが、強い語気に深い感情が刻まれていた。

直幸はぶたれた方を抑え、何度もその言葉を思い起こすのだった。

翌日、直幸はいつもと同じように図書館を訪れた。

正直、この場に来るのは心苦しかったが、さりとて、どこで何をすることもない。家に帰る気にもならなかったから、やはりここに来るしかない。結局、そうやってこの場に足を運んでしまう自分が情けない気もした。

（もう、清水さんは来ないかもしれない）

それを思うと、直幸は憂鬱で堪らなかった。

さりとて、することもないのでいつも通りに教科書とノートを広げる。

朝起きて、学校に行って、帰って、寝る。

連綿と同じように繰り返される、単調な日常。

そんな日常の出来事と同じように、図書館に来て、勉強をする。

ただそれだけのことである。

今までも一人でそうしてきた。

だが、直幸の心は明らかにそれまでの状況には戻らなかった。

何ともいえない寂寥感。直幸の心の奥底は、まるで闇夜の海のように静まり返っていた。

図書館のドアが鳴り、人の気配が近づいてくる。

その人物が机に向かう直幸の視界に入るほど近づくと、直幸はその方を見上げた。

瞳に映ったのは、敦子だった。

直幸は声を出すこともなく、唇を閉じることもなく見つめていた。
彼女は無言のまま、直幸の向かいに座ると、斜めに構えたまま、床の辺りを凝視していた。
直幸はそんな彼女をずっと見ていた。
直幸は、どうやらまだ彼女の怒りが収まっていないようだと感じていた。しかし、なぜここに来たのか。律義さゆえか。その事情がわからず、会えた嬉しさと、よくわからない不安とで綯い交ぜになっていた。
しばらくの沈黙をおいて、最初に口を開いたのは敦子だった。
「もう、あんなことはしないで」
敦子は先ほどの姿勢のまま、微動だにせず言った。
――もう、こんなことはしないで。
直幸は、昨日の敦子の言葉と共に光景を思い出していた。
「もう、あんなことはしないで」
同じ言葉が繰り返される。
「う、うん！」
直幸が自身の硬直を解き放つように発せられた声は本人の予想よりも大きなものだった。
敦子はそんな直幸の様子とちらりと一瞥する。
「絶対だからね」
「うん」
「もし破ったら、絶交だからね」
「うん」
直幸は二つ返事で返した。
直幸はすべてを理解していたわけではない。それでも、ここで意思を曖昧にすることは、天国への蜘蛛の糸を自ら断ち切るようなもののように思えた。なぜかはわからないが、敦子に対峙する直幸の心の中には有無を言わせぬ必死さがあった。命綱を握る腕のように、自然と力が入る。
「じゃあ、許す」

短い沈黙の後に、敦子はそう告げ、直幸と正対した。
「叩いたりして、ごめんなさい」
敦子が謝ってくると、直幸は気にしていない、という素振りを見せた。
平手を喰らったことはショックだったが、怒りはしていなかった。むしろ、酷く落ち込んでいたから、なにより安堵した。
「でも、悪いのは岡崎さんよ。私はあんなことして欲しいなんて頼んでない。自分の相手くらい自分で選ぶもの。だから、余計なことはしないでください」
敦子は脹れた。
直幸がしたことといえば、敦子に白取に会うように勧めたこと。敦子はそのことに気を害したようだ。
そう察すると、直幸は素直に謝り、今後しないと誓った。
直幸の誠実な姿を見ると、敦子はころっと機嫌を直した。そして、いつもの笑顔を見せるのだった。

直幸が敦子と仲直りしてから幾分日数を重ねていた。
その後、敦子とは相変わらず図書館であっていて、敦子ともだいぶ話しをするようになった。
直幸と敦子が知り合いであることはもうある程度知られるところとなっていた。そして、第二、第三の白取が直幸の前に現れ続けていた。一度紹介すると、同じように寄ってくる人間というのはいるものだった。
人畜無害といった印象の直幸は、完全に敦子との関係を疑われていないようだった。そこまでくると、直幸がいささか憐れにも思えるが、本人はまったく無自覚だった。いや、無意識に自認しているのではないかとさえ思えた。
そうした彼らの要求を断り続けることができたのは、押しに弱い

直幸にしてみれば驚くべき成果であった。人がよく、また人付き合いのない直幸にとって断るのはなかなかに重労働だったが、どうにか敦子との約束を破らずに済んでいた。

なぜか、敦子の窓口と化してしまっていた直幸は改めて、男子生徒の彼女へ対する熱意と人気の高さに驚くことになった。

それは同時に、ある疑問を抱かせた。紹介しただけであの剣幕である。

すでに、意中の相手がいるのだろうか？

いなければ、どんなタイプが好きなのだろうか？

今更ながらにそんな疑問を抱いた。

直幸は、改めて敦子のことを考えてみるのだった。

敦子は、よほど本が好きなのだと見えて、会話の話題は大抵読んだ本や作家についてだった。必ずしも、誰の作品、ということを気にして本を選ぶわけではなく、何か運命めいたものを感じ取って手に取ることも多いそうだ。直幸にはその辺りの感覚はまったく理解不能だった。

特に、推理小説を好んで読むことが多いらしい。江戸川乱歩は直幸も聞いたことがある名前だったが、高木彬光という作家が青森高校出身であると聞かされた時には、「へぇー。」と感嘆の声を上げた。

彼女は本のことについて話し出すと非常に饒舌になり、あまりに長く、勉強が進まないこともあったほどだ。

それでも、直幸はそんな彼女の楽しそうに話す様は見ていて楽しかった。それゆえに、途中で我に返り、話を切ろうとするのを「大丈夫だよ。」と遠慮することさえあった。

敦子は、話を聞いていなかったり、途中で制止したりすると結構わかりやすく拗ねた。一緒に勉強することにはなっていたが、それほど親しい関係でもなかった直幸にいきなり平手打ちをするなど、怒ると恐ろしいところも知った。

こうして考えてみると、直幸が当初抱いていたような「文学お嬢

様」といった勝手なイメージはだいぶ的外れだったように思われた。
《本が好き》という部分は共通していたが、ソファに座り、紅茶を飲みながら読書に耽るイギリスレディとはかなり趣きが違う。
そのことを思い出して、直幸は微笑を浮かべた。
敦子は明るい性格で、よく笑う娘でもあった。感情も抑えないし、言いたいことも結構はっきりという性格で、その点、男勝りな印象もあった。表情も豊かで、活発な部分もあった。一方、普段の立ち振る舞いは可憐で清楚な印象だ。
無邪気で子どもっぽいと思えば、大人びた言動をすることもある。そうした二面性が彼女の魅力でもあり、誤解される部分でもあった。
そんな彼女と図書館で過ごしていることが少し不思議だった。どう転んでも、縁がなさそうに思えた。
直幸は、手を止めて、敦子の顔に目を向けた。
端正な顔立ちで思わず見とれてしまいそうなほど美しい。敦子の姿を見ていると、彼女がなぜこのように自分と一緒にいるのか、疑問に思えてくる。
「ん、なぁに？」
目線に気づいたのか、敦子は直幸に声を掛けた。
直幸は、いや、と首を横に振って再び目を下ろした。
敦子と一緒にいることはとても楽しかったし、一人では能率の上がらない勉強も、幾分は効果をなしているように思えた。授業はやはり大変で、そういう意味ではまだまだ憂鬱だったが、それでも登校が依然ほど苦にはならなかった。それは直幸にとって、大きなメリットとなっていた。

「見て、見てー！　凄いねー」
風で揺れる髪を押さえながら、敦子は歓声を上げた。
目の前には青森湾が広がり、湾周辺の半島までが一望できた。

沿岸部に作られたここ、合浦公園は、東北本線浪打駅を降りるとすぐの場所にあった。青森湾に面した湾岸公園であり、併設されている青森市営球場の辺りは空襲によって焼失した青森高校の校舎があった場所でもある。

青森高校野球部は名門としても知られていて、戦後、全国高校野球選手権大会、いわゆる甲子園に出場した経験もあった。当時はまだ終戦からそれほど年月が経っていなかった時期でもあり、空襲によって沈んだ地元の人々を大いに勇気付けたものである。そのため、青森高校の野球へ対する情熱は伝統的に高く、学校を上げて球場に駆けつけて熱心に応援したものだった。さらに、高校ＯＢや地元商工会にも熱心な支援者がいて、地域を上げて大いに盛り上げてくれたものだった。

公園に並ぶ桜並木は深緑に染まっていた。並木も美しく、池がアクセントとなって風情を引き出していた。

海岸近くは白砂と緑の松が広がり、その間を爽やかな潮風が吹きぬけた。

いつも利用している浦町駅で乗車し、駅一つ。浪打駅と隣接していることもあって、交通に不自由はなかった。

しかし、直幸たちは青森高校からそのまま歩いてきたのだった。青森高校からは少し距離があって気軽に歩く、という距離でもなかったが、軽い運動という気分であればそれほど苦にならなかった。何より、素晴らしい景色によって、熱を帯びた体は心地よい疲労感となっていた。

園内には、石川啄木の詠んだ歌碑が設けられるなど、文人たちに愛された場所でもあり、青森高校出身の文豪、太宰治も、この風景によって退屈な学校生活を大いに癒されたという。

この場所を訪れることを提案したのは、言わずもがな、敦子だった。

地元民なら誰でも知っているこの場所だが、過去、文人たちもこの地を訪れたなど、直幸は不覚にも知らなかった。そもそも興味が

なかった。

こんな話も、もしも青高の国語教師がしようものなら、すぐさま睡魔に襲われ、眠りに落ちたことだろう。

それがどうだろう。敦子が語る言葉には不思議な力があり、つい聞き入ってしまうのだった。もちろん、一言一言すべてを記憶することはできないし、突然文学に目覚めるなどということもない。だが、まるで美しい演奏のように聞き惚れてしまうのだった。ようは、現金なのだけなのだが。

地元のものなら何度も訪れたことがあるだろう。敦子も例外なく、ここを訪れていた。故人が認めた、と知れば尚更、じっとしていられないに決まっている。

それでも、敦子はまるで初めて来たかのようなはしゃぎようである。

こうまで喜んでもらえると、公園の管理者たちも甲斐があるというものだろう。

そんな敦子の姿を見ていると、直幸は足を運んでよかったという気持ちになった。

敦子は海辺まで出ると、遠くの方を指差した。

ちょうど、青函連絡船が青森港を目指して航行していた。海面は逆光に照らされながら、ゆらゆらとたゆたっている。

直幸は、中学校時代からほとんど学校と自宅を往復するだけの生活をしていた。そんな直幸にとっても新鮮なものだった。青森湾や、その先に見える陸奥湾、さらには遠方に霞む稜線をじっくりと眺めた。

青森恒例の夏の風物詩といえば、ねぶた祭であろう。

青森ねぶた祭といえば、東北三大祭に挙げられる有名な祭りであり、江戸時代から続くとされる伝統的な祭りである。ねぶたと呼ば

れる独特の山車を担いで練り歩く勇壮な祭りで、毎年八月初旬に開催されていた。

ねぶたは、国道四号線と新町通りという日本の大きな通りを、青森県庁から橋本辺りまでの区画で練り歩いた。当日、その周辺では、どこから湧いて出たのか、というほどの人でごった返しになり、息をするのも大変そうな賑わいになる。

元々青森市に住んでいた幸三は、親子共々ねぶたに対する思い入れは強く、ねぶた作りには積極的に協力したものだ。また、地元の青年団が競ってねぶたを担ぎ、我らこそ一番と意気揚々と声を上げるのだった。

毎年、耳を塞いでいても春頃から祭の話が話題になってくる。ねぶたの企画、製作に、若衆の練り稽古。ねぶたの担ぎ手となることは若者たちにとっても格好の見せ場であり、こういう祭の晴れ姿というのは凛々しく見えるものである。女の子たちの注目も集めることともなった。

直幸は、幸三のツテもあって、地元青年団に顔を出していた。昔から人付き合いに積極的でない直幸は周りから浮いた存在でもあったが、それでも昨年までは練り稽古にもしっかり出ていた。

今年は成績のこともあり、幸三も練り稽古を強く推すことはなかった。それでも、ねぶたの行列に参加することは子としての義務のようなものだろう。

荒々しく、騒々しい祭の中にいるのは相当に疲れたが、それでも思い入れのある祭ではあり、楽しさもあった。

子どもの頃は、史乃に手を繋がれ、幸三の雄姿を見つめたことや、法被姿の幸三に肩車をされたことなど、いろいろな思い出があった。直幸にとって、それがとても遠い日の出来事のように思えることが寂しかった。

「えっ、出るの？」

ねぶたに参加すると聞いて、敦子は驚きの声を上げた。

こう言っては何だが、線の細い直幸とあの荒々しいねぶた祭とで

は、いまいち噛み合いが悪い。失礼な話だが、立派なねぶたが崩落するのではないかといらぬ心配をしたくなってしまう。

「うん。でも、練るわけじゃないから」

そういうと、敦子は少し残念そうな顔をするので、「子どもの頃は引いたことがある」と付け加えた。

「練りはしないけど、父さんが協力しているから、そこに入って回ると思う」

大型のねぶたは地元の商店街や商工会、組合に企業や官庁グループまで様々な団体が参加する。幸三も工業組合の繋がりで参加している。幸三は地域経済の活性化に積極的で、ねぶた祭への参加もその一つだった。

ねぶた祭の頃には、学校も夏期休暇に入っていて、気軽に参加できた。

「ふうん。そしたら、私もはねと跳人で参加しようかな……」

跳人というのは、ねぶた祭における踊り子で、ねぶたの行列の後をついて回る人のことである。跳人は衣装さえ準備すれば誰でも、どのねぶたにでも参加可能だった。

「どこにつくの？」

かなり野暮な質問ではあるが、直幸は聞かずにいられなかった。敦子は実に野暮なことを訊くと、それこそ天を仰ぎたい気分になった。

「もちろん、岡崎さんのところよ」

それを聞くと、直幸はなんだか、無性に祭が楽しみになってきた。ねぶた祭は数日に及ぶ。同じところを何日も回るものだから、熱心な人でなければ、どうしても飽きてくる。祭初日はもの凄いテンションになるが、疲れと共にモチベーションが落ちて、徐々に惰性になってしまう。

でも、敦子が一緒にいてくれるとなれば、ずっと一緒にいられなくとも、カンフル剤としてこれ以上のものはなかった。

「ねえ、どんなねぶたなの？」

「ああ、川中島の合戦。武田信玄と上杉謙信だって」
「地元の人じゃないのね」
「ああ、まあ。でも、みんなそんなものだよ。中国のものもあるしね」
「まぁ、それもそうね。古い神さまのもあるし……」
ねぶたは日本の武将や伝記を扱ったものが多かったが、中国の史実や物語の登場人物も題材にされた。それも、雄々しく猛々しい迫力のありそうな人物や場面が好まれた。

直幸と敦子は青森駅前で待ち合わせた。
ピークになると鉄道が麻痺するほどの混雑になるため、相当早くに待ち合わせの時刻を指定しておいたのだが、敦子は少しばかり遅れてしまった。
駅から溢れてくる人の姿をあちらこちら見て回るが、なかなか定められず、敦子が近くで声を掛けてきてやっとわかった。
敦子は跳人の衣装を纏っていたが、似たような衣装を纏った者はそこら中にいて、咄嗟に見るとわからなかった。
跳人の衣装は、浴衣の下にオコシと呼ばれる布を身に付け、浴衣は普通に着込む。浴衣の裾を挙げて、シゴキで止め、あとはタスキ掛けをして着付けが終わる。それに足袋と花笠が揃えば出来上がりである。
花笠は何かと邪魔なので、敦子はそのまま手に抱えていた。
敦子は花笠を被るために、髪を上げていたが、それがまた可愛らしくて見惚れてしまう。
跳人の衣装というと、直幸にはどうにも農家のおばさん臭い感じがする。地元の祭で見慣れているとはいえ、普段来ていたらあまり格好のいいものでもないと思っていた。
それでも、敦子が身に付けると、不思議といいものに見えた。細身だからなのか、美人だからなのか、それはわからなかったが、直幸は跳人の衣装で初めてドキッとするのだった。男とは、案外と現

金なものなのだろう。
「さ、いこうか」
直幸は敦子を促し、自分たちのねぶたの待機場所へと向かった。
駅前の辺りからすでに出店が並んでいて、せっせと調理に精を出していた。ねぶたが練り始めると観衆の目はそちらに集中するため、始まる前からが勝負なのである。
醤油の焦げた匂いが立ち込めてきて、実に胃に悪かった。
周りを見回すと、どれも美味しそうに見えてくる。我慢しようとすればするほど、お腹の辺りが何かを催促するように疼くのである。それはある意味拷問といえた。
「ちょっと、なんか食べようか？」
直幸は誘惑に負けて、敦子に声を掛けた。
「そうだね。なににする？」
敦子も我慢していたらしく、進んで乗ってきた。
ねぶたは二時間ほど練り歩くことになり、その間食事はできなくなるため、参加者は速めに腹ごしらえを済ませている。少し余裕があるので、二人は食べ歩きをすることにした。
焼きそばに、焼きとうもろこしに、綿菓子。たこ焼きに、イカ焼きに、ホタテ焼きまで。どれも美味しそうに見えてならないが、適当に選んで、食べ歩くことに。
「ほら、ソースついてるよ。」
ついつい食べるのに夢中になっている直幸を見て、敦子は自分の口元を指差した。
「ん？」
「ふふ、逆だよ」
そういうと、敦子は白い指を伸ばして、ふき取った。
敦子の指が頬に触れ、直幸は紅潮した。
目を丸くして顔を赤らめた直幸を見て、敦子もつられて紅くなる。
――しばしの沈黙。
「ははははは」

「ふふふふ」
その後、それが照れ隠しなのか、可笑しかったのか、二人は一緒に笑い声を上げた。
二人は、大きいものは半分ずつにしながら様々な味覚を堪能して、英気を養った。

ねぶたの練り歩きは新町通りの本町辺りからスタートする。
新町通りはすでにずらりとねぶたが並び、出陣の時を待っている。
直幸は、幸三に一言挨拶して、ねぶたの後ろ側に並ぶ。
まだ、ほんのりと明るさが残る空の下、運用員の合図と共に巨大なねぶたが動き始める。一斉に掛け声を掛け、櫓を飛ばす。先頭が進むと、次のねぶたもゆらゆらと動き出し、男衆が気合の入った音頭を取る。
「いよいよだね」
前方が慌しくなり、敦子は直幸に声を掛けた。
「うん。怪我しないようにね」
「うん。岡崎さんも」
ねぶたの隊列と跳人の位置は別の塊を作っていて、二人は別れ別れになる。それでもできるだけ近い位置にいようとするのは人情だろう。隊列の後ろ側になる敦子は、直幸の姿が見えそうな位置に並んだ。
いよいよ動き出そうという時の緊張感は堪らないものがある。ねぶたの周りにいる男たちが声を上げ、気持ちを高めていく。アドレナリンが放出されて、気持ちがたか昂ぶる。その昂ぶりを抑えつつ、爆発させる時を待ちながら、抑えた声を揃えていく。
いよいよ動き出すと、男たちの声は一気に爆発し、周りからは歓声が上がる。
ちょうちん堤燈の明かりに照らされた独特の風情の中を、武勇伝の英雄たちが行列をなしていく。巨大なねぶたはギシギシと音を立てながら、通りを曲がる。

周りにいる男衆は発破を掛け、担ぎ手の男たちは逞しい声を上げながら、体を躍動させた。跳人はその後に続いて、軽やかに愉快に踊り歩く。

浦町駅へと通じる通りはやがて国道四号線に合流する。国道で待ち合わせた観客たちはいっせいに歓声を上げ、手を叩いて喜ぶ者もいた。

国道四号線に出ると、右へと曲がり、青森県庁前まで長い直線が続く。道幅が広がり、ねぶたはさらに活き活きと踊り出す。

青森銀行本店前に出て、青森市役所を抜け、県庁に至る。その長い行列は、少し離れた高所から眺めると、明かりが灯るねぶたの行列がくっきりと浮かび壮観だ。

県庁舎を回りこむんで右折する頃には、体力も消耗して疲労が蓄積してくる。体中汗だらけになり、力を振り絞る。周りからは鼓舞する声が響き、空元気でも気合を入れて男気を見せる。

ねぶたが新町通りに戻ってくると、行列は大渋滞を起こす。通りは国道に比べると狭く、人込みで混雑していてなかなか進まない。

ゴールを目前に、ねぶたはほとんど立ち往生だ。それでも練り連中にはプライドがある。最後まで、気勢を上げ、誰一人としてねぶたから離れようとはしない。この気概こそが、青森にねぶた祭ありと知らしめる原動力なのである。

一週回り終えると、体は草臥れ、ぐったりと倒れこみたい気分になる。練り歩いた男衆は特に全身の力を使い果たしたように体から力が抜ける。跳人も一周踊り続けると、足が張ってフラフラになる。

それでも、皆から笑顔が零れるのは、やりきったという充実感であろう。

「ご苦労さん」

「まだ明日もあるんだ、大丈夫か?」

「もう歳なんじゃねーのか?」

口々に冗談を言い、労いを交わしながら男たちの夜はまだ続く。

一汗掻いた後の酒は格別で、これから夜半まで飲み明かすのだろう。

むしろ、これからが本番の夜だった。
「なんか、すごいね」
まだ、祭の酔いが醒めない高揚した気持ちの中で、敦子は肩で息をしながら感想を漏らした。
「そうだね。すごいね」
どこか閉鎖的な――特に孤独の中にいた直幸にとって強く感じられた――街の印象とは違い、とても温かな温もりのようなものを感じていた。
あるいは、堤燈の橙色の光がそういう印象を持たせたのかもしれない。堤燈の行列が幻想的で、人々の魂が連なっているようにも感じられた。

その後、直幸は三日間通してねぶたの隊列に加わったが、敦子は三日目は観衆に回った。それぞれのねぶたをじっくり見てみたいという。
「それに、もう疲れました」
流石に三日連続続けるのは重労働だ。跳人といえど、訓練していないものでは、流石に体も悲鳴を上げようというものだ。
直幸は、それが本音だな、と思った。
観衆に紛れてしまうと、もう判別不能だった。観衆は暗がりで、人影がぼんやり映る程度である。探してみたところで、どうにも見つかりそうにない。直幸は諦めて、行列に集中することにした。
行進を終えると、流石に疲れが出てくるが、目の前の巨大なねぶたを担いでいる人たちに比べれば大したことはなかった。
直幸は周りの人に挨拶すると、列の隅の方でしばらく時間を明かしていた。
「お疲れさま」
その言葉と同時に、首筋に痺れるような冷たさを感じ、直幸は思わず飛び上がった。
さっと振り返ると、そこには浴衣姿の敦子が立っていた。

「ふはははは」
あまりにも大げさな反応に敦子は笑い声を上げた。
背中の腰の辺りにまだ冷たい何かが当たっている。
直幸は身を捩って、それを放り出した。
カラン
地面に乾いた音がして、そちらの方を見る。
そこには小さな氷が落ちていた。
「もう、何するんだよ！」
眉間に皺を寄せて非難する直幸を見て、「ごめんなさい」と言いつつも、敦子は笑いが止まらなかった。
「それにしても、氷なんて、どこにあったの？」
直幸は、バツが悪そうな顔をしながら、敦子に尋ねた。
「ほら、あそこ」
敦子が指差す先には、ラムネの文字。大きな樽には氷が張られ、無数のラムネが乱雑に浮かんでいた。
二人はラムネを買うと、駅の方へと歩き始めた。
「ふぅ」
直幸はラムネを口にすると、大げさに一息ついた。
「ふふ。疲れた後だと、格別でしょ」
「そうだね」
そういって、再びラムネに口をつけた。
爽やかな刺激と甘さが口の中いっぱいに広がり、直幸はなんともいえない充実感を感じていた。
その味は、敦子を思う直幸の気持ちそのものだったかもしれない。
ラムネのビンが空になると、敦子はビンの中のビー玉をいとおしそうに弄んでいた。
青森駅に着くと、祭の最終日となる明日の約束をしてそれぞれのホームに向かった。
敦子は別れ際に、手を振る代わりに、ラムネのビンを振った。カランカランというビー玉の音と共に、浴衣姿の敦子が思い出された。

青森ねぶた祭もいよいよ最終局に入る。
青森市街を巡遊してきた戦国の猛者たちは青森湾へと歩み出す。ねぶたの海上運航である。
様々な地域、団体によって作られたねぶたの中から選ばれたねぶたのみが許された凱旋パレード。そこには、誇らしげに胸を張る男たちの姿がある。
やがて、紅白の幕に包まれた船の上にねぶたが担ぎ込まれると、いよいよ海上運航の始まりである。船が動き出すと、埠頭に集まった観衆たちからは一斉に大きな声援が湧き上がる。
漆黒の海の上を明かりが灯ったねぶたは、まるで空を浮かぶように幻想的である。わずかに照らされたみなも水面がゆらゆらと揺らめいてはやて疾風のようだ。
列をなし、あるいは重なり合い、海上をはし奔る姿は痛快で、ねぶたならではの風情を楽しむことができる。
直幸たちは人込みの中、その光景を見つめていた。
「残念だったね」
直幸の父、幸三の団体のねぶたが選出されなかったことについて、敦子は残念がった。
「そうだね。でも仕方ないよ。他にもたくさんのあったんだし」
正直言えば、幸三たちのねぶたが選ばれなかったことに特別の感慨はなかった。
もちろん、選ばれればそれは誇らしいことであり、嬉しくないと言えば嘘になる。
さりとて、直幸は幸三を積極的に応援しようという気持ちにはなかったから、特別、感慨も湧かないのだった。
それよりも、敦子とこうして過ごせたことの方に満ち足りていて、その意味では祭に参加していた父に感謝しないでもなかった。
浜町埠頭から出発したねぶたが中央埠頭に入港してこようという頃、いよいよクライマックスになる。

ゆっくりと歩み寄ってくるねぶたの頭上に花火が打ち上げられる。
気圧されそうな衝撃に負けじと、港を囲む埠頭からは一気に歓声が轟く。
「うわぁ」
敦子からも喜声が漏れる。
海の上では、ねぶたの宴が最高潮になり、色とりどりの光の華によって飾られた。
花火を見つめる敦子の目はキラキラと万華鏡のように輝いて、白い肌は闇に浮き上がる。
敦子が、自分を見つめる直幸に気づく。
「来られて良かったね」
見つめ返してくる敦子に、直幸は言った。
「うん」
にこりと笑う敦子。
その可愛らしさに動揺して、花火の方に目を逃す直幸だった。
そんな直幸をみて、敦子も天の華へと目を向ける。
勢いよく弾ける火花の舞を見つめながら、直幸にそっと近づいて、声を掛けた。
「来年も、一緒に見れるといいね」
直幸は、瞳を敦子の方へ少し動かしただけで、すぐに元に戻った。
「うん」
少し間を空けた後、直幸は短く応えると、敦子の手を探り、それを握った。
敦子の手は、小さく、そして柔らかだった。
敦子は、その手の感触に気づいて直幸の顔を見たが、直幸は動かないままだった。
手を握り返すと、二人はそのまま、花火が上がるのを見つめていた。
今はただ、そうしているだけで幸せだった。

青森県出身の作家といえば、太宰治が有名だが、彼の生家は金木町にあり、彼の作品を取って『斜陽館』と呼ばれ、よく知られていた。

斜陽館は、津軽鉄道金木駅から徒歩でいける距離にある。

直幸は、敦子の誘いで二人で行くことになった。意外なことに、敦子も訪れるのは初めてだという。

直幸は、敦子の家の最寄り駅である津軽新城駅で待ち合わせた。

突然、電話を掛けてきた時には驚いたものだ。女生徒からの電話とあって、史乃も怪訝そうにしていたものだ。「清水さんというかたから」と聞いた時、心臓が飛び出すかと思うほど驚いたが、なるべく平静を装って電話に出た。

突然のことで驚いたが、彼女が何かを言い出すのは大抵唐突だったから、だいぶ慣らされた。しかし、一緒に出掛けようという依頼に、胸ときめくものがあり、ついつい声が上ずってしまった。

何とか普通に応対したつもりだったが、実際、自然であったかどうかは怪しいところだった。

事実、電話を切った後、史乃が「どういう関係か」と追究してきて、直幸は動揺した。それでもなんとか、「借りていた本を返して欲しいということだった。」と嘘をついて誤魔化して難を乗り切った。

嘘がばれたらただでは済まないと思ったが、本当のことを話したところで、事態がいい方へ転がるとは到底思えなかった。

正直なところ、あまり気分は乗らなかった。

ここのところ、両親の説教や小言でウンザリしていて、とても明るい気持ちになれなかったからだ。

それでも、敦子に会えば、少しは気持ちが晴れるかもしれない。そう思って受けることにした。

いや、むしろ断る方が難しかった。敦子の声を聞くと、愛おしさ

が沸いてきて合いたくて仕方ない気持ちが止まらなかった。考えるよりも感情が先立って受けてしまったと言ってよかった。

敦子を待っている間、直幸はどうしても両親の言葉が思い浮かんで俯いてしまったまま、顔を上げることができなかった。

「おはよう、岡崎さん」

直幸を見止めた敦子は、小走りに寄って挨拶した。

その声に反応して顔を上げた直幸は、敦子の姿に思わず見惚れてしまった。

制服姿しか見たことのない直幸にとって、敦子の私服姿は鮮烈だった。

白いブラウスに、淡いオレンジ色の、スリーブレスのワンピース。いつも結っている髪は下ろされ、普段より大人びた色気があった。

直幸はしばらく敦子を見つめたまま、棒のように立っていた。

「どうしたの？　ボーっとして」

敦子に声を掛けられ、直幸はあたふたした。

「きれいだね」

直幸は何か気の聞いたことを言おうと思ったが、口から出た言葉はあまりにもストレートだった。

不意を突かれたように、敦子は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「ありがとう」

小声で搾り出すのが精一杯だった。

そんな敦子の様子を見て我に返ったのか、直幸は急に恥ずかしくなって黙り込んでしまった。

その後、二人は気を取り直して電車に乗った。

斜陽館のある金木町へは、五所川原から津軽鉄道に乗って金木駅まで行く。津軽新城からは、奥羽本線を弘前方面へ進み、川部駅から五能線に乗って五所川原まで至る。五所川原まで二時間ほどの行程だった。

そこから津軽鉄道に乗り換え、津軽半島を北上する。車輌はいかにもローカル鉄道といった風情の可愛らしいもので、よく風景に溶

け込んでいた。線は田園風景を横切るように進んでいく。ガタゴトと小気味よく揺れながらリズミカルに進んでゆく。沿線は溜池が多く、夏の強い日差しが幾つもの水鏡を作って、光を取り込んだ。

直幸も津軽鉄道に乗るのは初めてで、その景色には大いに感動を覚えたが、心の重石が利いているのか、つい、考え込んでしまう時間があった。

そんな直幸の様子を見て、敦子は気を止めたが、直幸は特に応えなかった。

敦子はそのことを気にしていたが、それでも時節笑顔を見せる直幸をそのままに、なるべく自然に楽しむことにした。

電車の中での敦子の話は専ら太宰治についてだった。斜陽館に行こうというのだから、その話題もお約束のようなものかもしれない。敦子はいつものように饒舌だったが、自分が話しをすることで、少しでも直幸の気持ちが紛れれば、としたことでもあった。

金木駅は可愛らしい、小さな駅舎で何とも田舎の駅といった風情だった。小さな木造の駅舎は何とも詩的な感じがして、物語の世界のようで敦子はとても気に入った様子だった。

斜陽館は、金木駅から歩いて間もなく着いた。駅から西に進み、道なりに曲がると左手におしゃれなえんじ臙脂色の瓦屋根が臨む。塀は褐色のれんが煉瓦造りで和洋折衷といった印象の立派な建物だった。

斜陽館は旅館として使われていたが、宿泊客以外にも中を覗くことはでき、文学記念館も併設されていた。

二人は記念館も見て回り、特に敦子は堕罪の直筆原稿などを見ると、目を輝かせて喰らい付くように見入ったものだ。直幸からすると、よくわからない文豪の由来品よりも敦子の一挙一動の方が見ていた楽しかった。

斜陽館を出ると、駅舎のベンチに座って、昼食を済ませた。敦子が弁当を用意してくれて、直幸は感激した。

まだ時間に余裕があったので、二人はその後、少し脚を伸ばしてあしの芦野公園を訪れることにした。この地もまた太宰治ゆかりの地であった。

津軽鉄道金木駅から芦野公園駅までは桜並木が続き、深緑のカーテンを覆っていた。春には桜の花で彩られ、来訪者を歓迎してくれる。

目的地の芦野公園も県下で名の知れた桜の名所であり、春には多くの行楽客で賑わった。

芦野公園内には藤枝溜池という大きな溜池があり、桜や松の木がその畔を囲むように並んでいる。

二人は池の畔を歩いて回ると、適当な場所で休憩することにした。春は大勢の人で賑わう公園も、お盆明けとなると空いていた。それでも、何組ものアベックとすれ違った。ぴったりと寄り合う者たち。きゃあきゃあと気勢を上げてじゃれ合う者たち。肩を抱き合い接吻する者たち。

それを見ていると、見ている方が気恥ずかしくなってしまう。

敦子は水筒を取り出して、温くなったお茶を注いで直幸に渡した。

直幸はそのカップの中で揺れる水面を見つめたまま、黙り込んでいた。

目の前には豊かな景勝が広がっている。水面は小波を立てて、ゆらゆらと煌めいて、時節目に入って眩しかった。

眩しすぎる。それが返って、直幸に暗い影を落とした。

燦然と輝く太陽も、無数の宝石のように煌めく湖面も、敦子の存在も。

何もかもが、今の直幸にとっては眩しすぎて、心に痛かった。

抑え続けてきた気持ちを、暖かな光明が無用意に照らし、心が緩んでしまう。

ずっと隠してきた自分の弱さが、噴き出してしまうのを、直幸はもう自制できないでいた。

「盆にね、親戚のところに行ってきたんだ」

長い沈黙の後、直幸はお盆中の出来事を話し始めた。

直幸は、お盆の間、群馬県は北の外れで過ごした。辺りは長閑な田園風景が広がり、俗世の喧騒を忘れるようなゆったりとした時間の中にあるような、そんな場所だった。

直幸の家、岡崎家は元々、中国地方の出身であった。明治初期に関東へと移り、北関東に居を構えたという。激動の時代の最中で、岡崎家は運にも恵まれて事業に成功、資産家となった。だが、一代で財を成した当主は安易な世襲や家族企業化を嫌い、息子たちに新たな挑戦と開拓を求めた。それぞれ東北や信越地方に散り、自らの成功を求めて邁進していった。岡崎家の盛隆はうまく時代の波に乗った結果だった。

毎年、盆には必ず親戚一同、一族の興りともいえる群馬の地に足を運ぶことになっていた。そこに集まり、報告するのはほとんど岡崎姓を名乗るものとして義務といってよかった。さらに、嫁いだ者や、婿養子に出た縁者も参って、それは大変な大所帯となった。

それほどの人が集まる場所があるのか、ということになるのだが、その岡崎家の本家屋敷というのがまた凄かった。長閑な農村に似つかわしくない立派な構えの屋敷で、地元では岡崎屋敷などと呼ばれている。

後ろに構える山一つ二つが岡崎家の資産だといい、これでも減ったのだというからまた驚く他ない。

この辺りは利根川へ流れ込む水源となる地域でもあり、南の平野部と越後へと続く北の山岳地帯を結ぶ地域でもある。地図上で言えば、関東平野を見下ろすような位置でもある。それは、あるいは不遜で傲慢な岡崎家をよく象徴しているともみることができた。

親戚一同が会する席では、自分たちの自慢話が幅を利かせた。まず、手始めに先祖の偉業を称え、岡崎家の興りを隆々と語り出す。その後は、儲けたの、成功したの、合格したのと、各人、自画自賛的な話題で持ち切りになるのが定番だった。

身内に気を使う必要がないということなのか、醜い見栄の張り合

いか、そうした会話は聞いていてもあまり楽しいものではない。
そんな中、成績不振の直幸は嘲笑の的ともなった。地元の名門とはいっても、青森という本州の端にある田舎の学校など嘲けるのだった。直幸は、両親共々、非常に肩身の狭い思いをしたのだった。
憤懣やるかたない父も母も、直幸に苦言を呈し、厳しく当たり、檄を飛ばした。
空襲で多くのものを失った両親が一人息子へ懸ける希望は、直幸の背に大きく圧し掛かっていたのである。
希望が期待に変わり、期待が責務に変っていった。
「岡崎家の人間として恥ずかしくないようにしなさい！　立派な人間になりなさい！　そんなこと言われたって好きで岡崎に生まれたわけじゃない！」
直幸は自分なりに努力してきたつもりだった。だが、どうにも両親の期待するようなことにはならない。そんな自分に鞭打つ両親が嫌いだった。そして、両親の期待に応えられない情けない自分が嫌いだった。
「僕はあの家が嫌いだ。あの家から出たい」
直幸はずっと堪えていた思いを吐露した。
いつの間にか、涙が溢れ、頬を伝っていた。
声を殺して歯を食いしばる直幸を、敦子は頭を抱えるようにして抱いた。
空が黄味掛かる頃、二人は無言のまま帰路についた。
朱に染まる車窓の風景。灰色に染まっていく、人気のない車内で、二人はじっと座ったまま動かなかった。
奥羽本線に乗り換え、津軽新城駅もまもなくといった時のことだった。
「それじゃあ」
小声で声を掛け、立ち上がろうとする敦子を制止するかのように、直幸は敦子の手を握ってきた。
敦子がふと顔を上げたが、直幸はじっと俯いて床を眺めている。

ずっと変わらない姿勢のままだった。敦子はどうすることもできず、そのまま座っていた。

「敦子さん。好きです。……ずっと好きでした」

敦子は再び、直幸の顔を見た。

直幸は変わらぬまま、ただじっと、じっとしている。

ただ、敦子の手を握る手には力が込められていた。

電車はブレーキが掛かり、やがて制止した。ドアが開け放たれ、人が流れる。一時の後に、アナウンスが響き渡り、ドアを閉めると再び走り始めた。

その間、敦子は動くことができなかった。ただ、自分の手を握り続ける大きな手をそっと握り返した。

奥羽本線終点の青森駅に着くと、二人は分かれた。

「付き合わせてしまって、ごめん」

「んーん」

月並みの挨拶を交わしただけで、二人はそれ以上話さなかった。他に何を話せばいいのか、どう接すればいいのか、わからず、表層的な会話にとどまってしまったのだった。

敦子は、ただ、直幸の去っていく後ろ姿を眺めているしかできなかった。

第二章

学校が再開すると、すぐに試験が待っていた。
直幸も試験に備えて、復習しておかなければならなかったが、図書館に勉強しに行く気にはなれなかった。
あの小旅行以来、敦子とは会っていなかった。醜態を晒した挙句、さらには勢い告白までしてしまったのだ。どんな顔をして会えばいいのだろうか。
それを思うと仕方がなく、教室で時間を潰すことにした。
試験前ということもあり、同じように試験勉強に打ち込む生徒もいるようだった。それ以外にも、固まって駄弁る生徒などがいて、教室内は案外とざわついていた。普段、図書館で過ごしていた直幸にとっては、そんな雑音が気になって集中できなかった。
そんな状態で二日ばかり過ごした後の放課後のことだった。
「岡崎、いるー？」
教室の入り口の方にいた男子生徒が呼びかけた。
直幸はふと顔を上げ、教室の入り口の方を見ると、男子生徒の向こう側に敦子が立っていた。
反射的に嫌な感覚を覚えたが、ここで無視するわけにも、逃げ出すわけにもいかなかった。
「ねぇ、話があるんだけど……、外でいいかな？」
敦子に言われて、直幸は一度机に戻り、帰り支度を済ませて教室を出た。
「ねぇ、勉強進んでる？」
校舎を出る頃になって、敦子が言った。
「うん、まぁ」
直幸は曖昧な答えを返した。
「そうなんだ」
敦子はそんな直幸を一瞥すると、校舎に沿って歩いてゆく。それ

に続く直幸。
校舎の角を曲がり、あまり人気のない場所まで来ると、敦子は振り返った。
「ねぇ、私のこと、避けてる?」
「そんなことはないけど」
「じゃあ、私の顔を見て」
そういう敦子にちらりと目をやるだけで、直幸は再び顔を逸らした。
「ねぇ、好きだって言ったこと、気にしてるの?」
直幸はそれに応えなかったが、図星だった。気にしない方がどうかしているかもしれない。
泣き言を言って、縋り付いて、甘えて。そんな愚考をすれば普通、失望するだろう。軽蔑されてもおかしくない。好きな女の子に侮蔑されるようなことがあったらそれこそ耐えられない。直幸には、敦子の顔を、瞳を見ることなど到底できなかった。
「自信なくさせないでよ」
敦子は深くため息をつくと、ぼそりと呟いた。
敦子は、直幸の両手を握ると、直幸の顔にぐっと近づけた。
鼻息もわかりそうな距離に、直幸は後退りしそうになったが、敦子が手を握ったまま逃がさなかった。
「独りで抱えないで。独りで苦しまないで。私は知ってるから。直幸さんが頑張ってるの、知ってるから。私はそんなあなたが好きだから」
敦子の瞳には涙が浮かんでいた。
直幸はハッとした。込み上げてくるものがあり、抑えることはできなかった。
「こんな、こんな僕でいいんですか?」
直行はほとんど声にならない声で言った。
「こんななんていわないで。私が選んだの。“こんな人”であるわけないじゃない」

敦子は、両手で直幸の顔を掴むと、笑みを浮かべて言った。
直幸は両手を敦子の後ろにまわすと、強く抱きしめた。
腕には、柔らかく温かい感触が確かな存在として感じられた。

締め切られた部屋は息苦しく、窒息しそうな雰囲気だった。
直幸は、畳の上に正座していた。過度に緊張していて、肩にも拳にも余分に力がこもった。
目の前では、史乃が試験の結果に目を通していた。
それはわずかな時間ではあったが、異常なほど長く感じられた。
喉が渇き、唾を飲み込んだ。
「ふぅー」
史乃は深々と溜め息をついた。
その音は、静まり返る部屋中に響き渡るかのようにはっきりと聞き取れた。
「直幸さん。勉強の成果はあまり上がっていないようですね」
史乃の声は落ち着いていたが、そこには有無を言わせぬ威圧感があった。
「はい」
直幸は、史乃の下に敷かれた座蒲団を見詰めたまま応えた。
「このことはお父様に報告させてもらいます」
「はい」
直幸は反論の余地もなく、ただ受け入れるしかなかった。
「直幸さん。わかっていますね？」
史乃は少し間をおいてから言った。
「はい」
直幸は目を瞑ったまま応えた。
「では、お下がりなさい」
史乃に促されると、直幸は項垂れながら「失礼します。」と一言

挨拶して退室した。
史乃はもう一度、試験結果に目を通すと、再度深い溜め息をつくのだった。
史乃の直幸へ対する思い入れは非常に強いものがあった。
縁戚を頼って東北の“田舎町”まで足を運んだにもかかわらず、空襲によって親兄弟、親戚縁者を失うことになった。
史乃は当時、女学校を卒業したばかりであった。疎開した青森市で工場に勤めるようになってまもなく空襲に遭った。鳴り響くサイレン。逃げ惑う人々の悲鳴と怒号。そして、甲高い投下音と耳を貫くような爆音。辺りは夕焼け空のように紅く染まり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だった。史乃は防空壕の中でずっと耳を塞いでいた。
空襲が収まった時そこに残っていたのは、黒い燃え屑と瓦礫と死体の山、そして、深い悲しみだった。
史乃は、勤めていた工場の管理者であった岡崎幸三によって保護され、養われることとなった。親戚の家を訪れてみたが、あたりは炭と化していて、場所を判別するにも苦労した。暇あれば病院や避難所を当たって回り、家族を探した。しかし、結局、家族と再会することはなかった。史乃の無念は如何ばかりであっただろうか。
史乃は今でも、七月二十七日には欠かさず青森市役所前の慰霊碑に参って手を合わせるのだった。

空襲被災後、史乃はしばらく岡崎家で奉公することになったのだが、幸三の熱心な説得もあり、まもなく婚姻が認められた。史乃は美人で聡明であり、歳は離れていたが幸三は妻に選んだのだった。幸三は両親と史乃を熱心に口説いたものだ。史乃は天涯孤独となった傷心でもあり、岡崎家に世話になっている恩もあり、懇願されて断る理由はなかった。
数年後、直幸は誕生した。
家族を失った史乃にとって、直幸はまさに宝だった。
直幸を立派に育てようという史乃の決意は並々ならぬものがあっ

た。

戦後の焼け野原で、史乃は思った。

強くなければいけない。逞しく生きなければならない。でなければ、無情な力によって簡単に握りつぶされてしまう。

戦争という無情な暴力への憎悪と、すべてを失った悲哀と絶望、そういった様々な感情が史乃の強い意志を生み出していた。それは希望や願望といった生温いものではなく、もっと生々しくドロドロとした怨念めいたものだった。

史乃はまさに地獄から這い上がった鬼のように、直幸を厳しく躾けたのである。

幸三が帰宅すると、史乃は直幸の試験結果について報告した。

「こんなものか」

幸三は、鼻から息を飛ばし、独り言のように言った。幸三の顔からは落胆の色がありありと見て取られた。

史乃はただ黙ったまま、傍らに座していた。

「史乃。お前の躾が甘いのではないか」

幸三は史乃を信頼していた。何より愛していた。求婚を迫ったのも幸三の方であったし、結婚後も、史乃は幸三をよく支えていた。仕事で忙しい幸三は子育てをすべて史乃に任せ切りになってしまったし、そうした中でよくやっていると評価していた。

それでも、史乃に対して苦言の一つも言いたくなる。それほど、今の結果には落胆していたのだ。

幸三も史乃と同じく、直幸に期待を掛けていた。空襲によって財を失い、父を頼らなければならなかった幸三を兄たちは軽んじたものだった。再起に掛ける幸三の思いは強かったのである。

そんな、新たな出発を期して間もない頃に誕生したのが、直幸だった。待望の男児と会って、幸三は大いに喜び、史乃を称えたものだ。

日本全体が再興に向けて歩み始めたばかりの頃、人々の心は未だ

傷を抱え、沈んでいた。そんな困窮した時代に産まれた直幸は未来の光であり、日本を背負って立つ存在であった。幸三は大いに期待し、自身の母校、青森高校に通わせたのも、それゆえであった。

史乃も、幸三が恨み言の一つも言いたくなる気持ちをよく理解していたから、幸三の言葉に反論しなかった。

「直幸には、家庭教師をつけることにします。直幸もすでに納得しています」

「うむ」

幸三が短い言葉を発して、この話題は終わった。

直幸に家庭教師をつけるという話は以前からあった話だったが、直幸が自分の力で何とかすると言って頑なに拒んだのだった。史乃も直幸の以降を踏んで、試験結果次第ということで様子を見ることにした。

しかし、今回の結果によって、直幸に家庭教師が就くことになった。

速やかに手配された家庭教師は、数日後には挨拶にくることになった。

その素早い対応を見て、直幸はそれがずっと以前から決められていた規定路線であったのだと理解した。

(所詮、信用などされていないんだ)

直幸はそれを改めて痛感するのだった。

家庭教師が訪れるのは月、水、金、日の週四日間と決まった。何も言わなければ毎日来ることにもなりかねなかったが、それは何とか阻止した。様子を見るということで納得してもらった。

直幸が家庭教師を頑なに拒んだのは、勉強に拘束されることを嫌ったからでもあるが、何より家に拘束されることが嫌で堪らなかった。

それも、自室に一人で篭っているだけならばまだしも、赤の他人がやってきて、その監視下に置かれることは鎖に繋がれたも同然だ

った。

さらに言えば、毎日拘束されれば、敦子と会う機会を失ってしまう。

敦子の存在は直幸にとっての救いであった。だから、それが失われるというのは、身を抉られるほどの苦痛だった。

直幸は学校で敦子にこのことを告げた。

敦子は寂しそうにそれを聞いていた。そして、「完全に会えないわけじゃない。」と励ましてもくれた。

そんな敦子を見ていると、直幸は絶対に敦子を失いたくないと強く思うのだった。

家庭教師となったのは、佐々木という青年だった。

佐々木は弘前大学教育学部に通う学生だった。中肉中背で、丸い顔に一重の細い目。黒縁の眼鏡を架けた、いかにもがり勉といった印象だった。

挨拶も丁寧で、時節相好を崩すなど、好青年と思われた。

彼が選ばれたのは、交通の利便性と父、幸三の知人の息子であることだった。頻繁に通ってもらうためには、どうしても地元であることが重要である。せっかく雇うにも、遠隔地では月に何度も頼めるものではない。その点で、東北大学などの他県の大学生には頼めかった。

そこで近場の弘前大学の学生でもある佐々木に白羽の矢が降りた。交通の便も、学生の数も、首都圏のようにはいかない。本州の北端である青森県ではそれほど望めたものではないのだ。

しかし、それでも、直幸の学力からすれば、充分と思われた。

「直幸君。それじゃあ、明日からよろしくね」

そういって、佐々木は帰っていった。

直幸は、佐々木に特に魅力を感じなかった。素朴といえば素朴な

感じの、つまらない人間と映った。それでも、丁寧で親切そうな感じではあり、それほど嫌な人物とも思わなかった。

そして、翌日から佐々木とのマンツーマンでの勉強が始まった。

まず、先の試験の答案に目を通し、もう一度復習してみるところから始まったが、程なく一年の範囲から学習しなおすことになった。

一方で、次の試験にも備えなければならず、現在進んでいる範囲についても並行して行うことになった。

「君のお母さんから、厳しく指導するように言われているから、そのつもりで頑張って」

佐々木はその言葉の通り、厳しく指導した。

問題を解くのに時間が掛かると、「遅い。」と容赦なく指摘した。

佐々木と接してみて、直幸は佐々木という人間を誤解していたことに気づいた。

佐々木は史乃の前ではいたって丁寧な応対で、史乃も彼を信頼していた。兄弟のいない直幸にとって、兄のような良き模範となればよいとも思っていた。

だが、直幸と接する時、佐々木は温厚で誠実、とはいかなかった。

「そこはこの前やったばかりだろう！」

「まだ終わらないのか！」

「こんなものもできないのか！」

佐々木は容赦なく乱暴な言葉を応酬した。その一言一言に神経を磨り減らされ、直幸は過剰なストレスの中で勉強に打ち込まされたのだった。

そんなある日のこと。

直幸が帰宅する頃、すでに佐々木が訪れていて史乃と話をしていた。

「直幸さんの調子はどうですか？」

「ええ。直幸君も頑張っているのですけど、なかなかうまくいかなくて……。僕も家庭教師は初めてだし、僕の力不足で」

「いいえ、そんな。佐々木さんはよくやってくれていますよ。直幸

も最近は夜遅くまで机に向かっているようですし、佐々木さんの頑張りのおかげですよ」

「いえ、そんな。僕なんてまだまだ」

そんな二人の談笑は、直幸にとっておぞましい光景にすら思えた。自分の背中に、真っ黒な闇が広がっていて、自分はそこから脱することができないような気がして恐ろしかった。

「ただいま帰りました」

直幸はタイミングを見計らって挨拶をした。

「あら。直幸さん、おかえりなさい」

「直幸君。おかえり」

直幸は、軽く会釈をして部屋へと入っていった。佐々木に対して、挨拶などしたくはなかったが、史乃の手前、無視するわけにもいかず、頭を下げたのだった。

そんな直幸を見て、史乃は、無愛想な子ですいません、と釈明した。

「いえいえ、学校で疲れているんでしょう」

佐々木はそういって笑みを浮かべた。

その後、しばらくしてから佐々木は直幸の部屋へとやってきた。機嫌が良かったのか、佐々木は直幸にいくつか声を掛けたが、直幸は取り合わず、早く始めましょう、と促した。

その様子を見て、佐々木は「やる気満々だね」と苦笑いを浮かべながら言った。

ここのところ、確かに直幸は勉強に対して熱意を持ってやっていた。夜遅くまで勉強に励んだ。それも偏に、佐々木を追い出すためだった。そのためには必死で成績を上げるしかなかった。

それとて、佐々木の功績になるだろうと思われたが、それでも成績が上がらなければ、家庭教師から解放される可能性はゼロといってよかった。

「おまえ、そこ違うだろ！」

佐々木はいつの間にか、直幸を「おまえ」と呼ぶようになってい

た。

そうした佐々木の言動は直幸の苛立ちをさらに増幅させたが、直幸は何とか耐え、その悔しさを勉強へと向けていたのである。

しかし、そうした無理には反動があるものである。夜更かしを続ける直幸は、学校で集中力を欠くようになり、授業では居眠りしてしまうことが多くなった。それを取り戻すためにまた必死に夜更かしをし、学校では瞼が重く、声も聞き取ることができなかった。

そんな直幸の様子を見て敦子は心配したが、家庭教師について口出しできるわけもなく、ただ直幸の体を気遣うことしかできなかった。

敦子は、無理して勉強することをしなかった。

直幸は時間をできるだけ勉強に費やそうとしたが、敦子は直幸の希望を聞きつつ、できるだけ直幸を休めることを心掛けた。

ベンチや木陰に座ったり、校舎に寄りかかったり、楽な姿勢で直幸に朗読して聞かせた。敦子の声は子守唄のようで、真綿に包まれているように快く、ウトウトとつい寝てしまうこともあった。

敦子と接している時、直幸は心底安堵感を覚えるのだった。それが一時的であれ、直幸の心にとってバランスを保つためには必要なものだった。

直幸は、この幸せな時間が永遠に続いて欲しいと願わずに入られなかった。

「おまえさぁ、才能ねぇよ。やるだけ無駄。おまえらみたいのはさっさと働いて、安月給貰っときゃいーんだよ」

問題の答え合わせをしながら、佐々木は独り言のように感想を漏らした。

「あーあ、金が良くなきゃ、おまえの家庭教師なんて……」

「……まれよ」

佐々木の言葉を遮るように、直幸は肩を震わせ、呻くように声を漏らした。
「あ？」
よく聞き取れず、佐々木は顔を上げ、直幸の方を見ようとした。
「だまれっていってんだ！」
いうなり、直幸は佐々木に飛び掛っていた。
直幸に押し倒され、佐々木はドスンと勢いよく体を打った。
佐々木は何事かわからず、頭が真っ白になった。
「僕だって、好きでやってるわけじゃない！」
直幸は激昂し、言い様、拳を振り下ろした。
殴られるが先か、我に返った佐々木は、直幸を思い切り押しのけた。
「んだ、このやろう！」
今度は佐々木が直幸に殴りかかる。
直幸はたまらず、床に倒れこんだ。
「ちくしょー！」
直幸は立ち上がると、必死の形相で佐々木目がけて突撃した。
佐々木は後ろの襖に強く打ち付けられ、襖は佐々木諸共押し飛ばされた。
「うおっ」
べたんと大きな音が響く。
「なんなんだ、おめーは！」
佐々木も激怒し、直幸に襲い掛かった。
「だったら、やめちまえよ。八つ当たりしてんじゃねーぞ、ガキが！　どうせ、親に言う度胸もないんだろ！」
「おまえなんか嫌いだぁー！」
「俺もおまえのこと、嫌いだね！」
佐々木は、再び突撃する直幸を胸で捉えると、力任せに横に投げ倒した。
直幸は起き上がり様に佐々木の足を掴んで引き倒す。

佐々木は体勢を崩して倒れる。
「おあっ！」
ドスンと勢いよく倒れ、佐々木は頭を抑えた。
その隙に、直幸は佐々木の上に跨り、叫び声と共に、左右の拳を振るった。
顔を殴られ視界の定まらない状態で、佐々木は思い切り、直幸のわき腹の辺りを殴りつけた。
激しい衝撃に悶絶し、直幸は倒れこんだ。
佐々木は立ち上がり、咳き込む直幸に殴りかかろうとする。
その時だった。
「何事ですか！」
史乃と奉公人が駆けつけたのだった。
「まぁ！」
二人の若者の姿を見て、史乃と奉公人は悲鳴を上げた。
息を整え、なお襲いかかろうとする直幸と、それに応戦しようという佐々木。
「おやめなさい！」
史乃は家中に響くかというような大きな声を上げ、二人を制止した。
その声で初めて我に返ったのか、直幸は戦意を喪失して項垂れた。
直幸も佐々木も顔中紅くして、口や鼻から血が流れていた。
奉公人は、これは大変だ、と奥へと走っていった。
部屋の中は、苦い空気が充満し、沈黙していた。
「いったい、何事ですか」
落ち着いていたが、否応ない、覇気の篭った口調で沈黙を破った。
二人の若者は、目を逸らすように畳敷きの床を睨んでいる。
その様子を見て、史乃は大きく溜め息をつくのだった。
「奥様！」
そういって、奉公人は救急箱を持って駆けてきた。
相変わらず、無言のまま動かない男たちのいる部屋へと、史乃は

二人に声を掛けた。
「まずは、手当をしましょう。話はそれからです」
項垂れるように、しかし逆らうわけでもなく、史乃に促され、二人は部屋を出た。
応接用の洋室のソファに腰掛けると、二人の手当を始めた。
史乃は佐々木の手当を施すと、ほぼ終わったという頃合いを見計らって、事情を尋ねた。
佐々木が言うには、練習問題の回答をしている時に、出来が悪く、それを注意したのだが、言い方が悪かったらしく、直幸が暴れだしたというものだった。
「いったい、何で俺がこんな目に」
佐々木は何度となく、悪態を付き、直幸の方を睨みつけたものだ。
史乃は佐々木に釈明して宥めながら、話を聞いていた。
少し離れた場所で二人のやり取りを聞きながら、直幸は何も応えなかった。
手当が終わると、佐々木はさっさと荷物をまとめて出て行った。
車で送ろうという史乃の言葉を拒むと、佐々木はズカズカと玄関を出て行った。
「もう、ぜってーこねぇからな！」
佐々木はそういうと、舌打ちして門を出て行った。
史乃は佐々木がいなくなるまで、玄関先で深々と頭を下げるのだった。

幸三が帰宅すると、すぐさま先方へ謝罪に向かわされた。
史乃は、購入しておいた高級菓子をきれいに包装して幸三に持たせた。
佐々木家では玄関を上げてもらうことはできず、その場で謝罪した。
幸三は何度も頭を下げ、直幸の頭を抑えて例をさせたものだ。
直幸は、「すいません」と一言口にするだけで、幸三の叱責を受

けた。

佐々木の主人は話のわかる人らしく、暴言を浴びせることなかったうえ、痛み分けということで佐々木に謝罪までさせてくれた。佐々木は渋り、形だけのものであったが、主人の応対は充分好意的なものだった。

「それがせめてもの救いだ」

幸三は帰りの車の中でそう漏らしたが、実際、それほど甘いものでもなかった。

人情の厚い土地柄は、一方で根強い確執の元となり、一度疎隔が生まれると、それは個人的な関係に留まらず、家族や職場、企業間の関係にまで波及することが珍しくなかった。

また、噂が広まるのは想像以上に早く、何かと気を使わなければならないのも実情だった。

直幸と幸三が帰宅すると、早速、長い説教が始まった。幸三と史乃に再三に渡って理由を聞かれたが、直幸は決して話そうとはせず、ただ「すみませんでした」と繰り返すばかりだった。

結局、幸三も史乃も呆れ返ってしまい、散々に苦言を述べて直幸を解放した。

秋に入ると、街中でオリンピックの話題が目立って持ち上がるようになった。

そして、いよいよ開幕迫る十月に入ると、それまで興味を示さなかったものまでがオリンピックの語に反応するようになっていた。

青森高校の生徒たちも例外なく、話題に上るだけは上っていた。

多くの人たちにとって、オリンピックという言葉は聞き慣れないものだった。西洋臭い言葉に、いったい何をするのか知らない人も多かったのだが、国を挙げての宣伝によって、それが世界中の国々から選手が集まる大きなスポーツの祭典である、という程度には知

れ渡ることになった。
それでも、東京での開催とあって、遠隔地の人々にとっては遠い話のようにも思われていた。
だが、文明の発展目覚しく、テレビさえあれば、オリンピックの様子を見ることができるという。プロ野球や大相撲など、スポーツの中継放送は認知を広げ、人々の娯楽となっていた。
テレビでは、オリンピック開幕前に、出場予定選手の特集を組むなど、大いに盛り上げようと様々な番組を企画した。
その影響を特に受けたのは若い世代で、その敏感な感受性でもってオリンピックは一躍注目の話題となった。
そのおかげもあってか、顔に大きな痣を作って、頬の辺りにガーゼを貼り付けた直幸を見ても、周りの生徒はそれほど関心を示さなかった。物静かな直幸が顔に痣を作るなど、普通では考えられない状況でもあったが、余分な追究をされずに済んだことは幸いだった。
それでも、気にかけてもらえなければ、それはそれで寂しいものもあった。
「どうしたの？」
驚いて声を掛けた敦子に、少し安堵したものだった。
それでも、直幸は結局事情を話すことなく、「ちょっとね。」と濁した。
敦子が引き下がらずにどうにか尋ねると、家庭教師の佐々木と殴りあったということだけはわかったが、その理由については答えてもらえなかった。
敦子は仕方なく、話題を変えた。
今の時期、話題となるといえば東京オリンピックの話題だった。
オリンピックは今までヨーロッパで主に開催されてきて、それ以外ではアメリカとオーストラリアのみであった。日本はもちろん、アジア初となる東京オリンピックは日本にとっても、アジア諸国にとっても価値のあるものだった。
特に、敗戦国として冷たい目に晒されることの多かった日本にと

って、世界との協調と、日本という国のアピール、それに国民の士気昂揚の意味があり、政治的にも、社会的にも重要なイベントと位置づけられていた。

遥か遠い東京の地では、現地に足を運べるものなど一握りの例外で、学生である直幸たちにとってはまったく掠りもしない話だ。そのため、オリンピックに触れるといえば、テレビ中継ということになる。

事実、東京オリンピックはテレビオリンピックといわれるようにオリンピック見たさにテレビを購入する家庭も少なくなかった。

「えっ、岡崎さんの家、カラーテレビなの！」

その声は、図書館の中で一際大きく響き渡った。

敦子は辺りを見回すと、肩を竦めるようにして丸くなった。

「ほんとなの？」

敦子は再確認してきた。

直幸はコクリと頷く。

「へぇ～。岡崎さんち、お金持ちだと思ってたけど、凄いお金持ちなんだぁ」

大げさに感心している敦子に、直幸は「それほどでもない」と否定した。

「そんなことないよ。カラーテレビなんて、普通じゃないよ」

敦子の興奮は収まらない。

そんな様子に直幸は大げさだと感じていたが、住み慣れてしまうとわからないこともあるのだろう。直幸の感覚はかなり現実離れしているものだった。

この当時、テレビといえば白黒テレビが主流で、カラーテレビなど庶民の手の届く代物ではなかった。それどころか、「オリンピックを自宅で」の謳い文句でもなければ、テレビは相変わらず贅沢品で、普及も覚束なかった可能性大であった。

「いいなぁ」

敦子は素直に羨ましがったものだ。

絶対に手の届きそうにない雲の上の存在が、今正面にいる少年の家にあるかと思うと、目の前の人物が妙に尊敬できる存在のように思えてくる。

直幸は、同級生の家に出掛けたこともなく、他家庭の実情に疎かったから、それがどれほどの衝撃なのか、まったく理解できなかった。

だから、敦子の心理もよくわからなかったが、あまりに敦子が興奮気味に話すので、つい誘いの言葉が出た。

「もしよかったら、うちに見に来る？」

「えっ！　いいの！」

それを聞いた敦子は、指を組んで喜びのポーズをとった。

敦子の瞳は、まるで夜空の星をぜんぶ集めたかのように、燦然と輝いていた。

直幸は、その目に圧倒され、体が少し後退りしてしまった。

「う、うん、たぶん。近所の人も大勢見に来ることになると思うから、増えても構わないと思う。それで構わなければ……」

「うん、ありがと！」

言い終わる前に、敦子は感激して直幸の手を取ってブンブンと振った。

そんな喜びも、二人を包む、どこからともない冷たい視線を感じて身を縮ませるのだった。

帰宅すると、史乃が直幸を呼びつけた。

直幸は鞄を置くと、史乃の部屋へと入っていった。

「直幸さん。傷の方はどうですか」

それには、直幸は答えなかった。

「直幸さん。あなたもここのところ、無理をして疲れていたのでしょう。次の家庭教師は今探しているところですが」

「家庭教師」という言葉に、直幸は見て取れるほどに顔をしかめた。

「まだ、しばらく掛かると思います。あなたも少し休む時間が必要でしょう」

そこで一息ついた。

「だからといって、怠けていては駄目ですよ。しっかりとやるべきことはやるようにしてくださいね」

直幸は無言のままだった。

史乃はそんな直幸の様子をじっくりと見つめた。

あのあと、史乃は幸三と共に話し合った。そして出した結論は、しばらく様子を見る、というものだった。

「ところで、近々オリンピックが開催されることはご存知ですね」

直幸にとってその話題は意外なもので、史乃が何を言わんとしているのか、推し量ろうと史乃の顔を見た。

「オリンピックの間、お父様のお知り合いや近所の方々がお見えになる予定です。大勢押しかける可能性もありますので、こちらも相応の準備をしておかなければなりません。それに、当日粗相のないようにしてくださいね」

史乃や幸三にとっての懸案の一つがこれだった。

カラーテレビを持っている家庭はほとんどなく、白黒テレビでさえない家庭もあった。そんな時世にあって、カラーテレビを所有しているということはステイタスであると同時に、知人連中を招いて観戦するぐらいの器量が求められた。そうした器量が人の評価に直結するのが人の情というものなのかもしれない。

そんな中で、もしものことがあってはいけないと懸念するのは当然の世間体といえた。

つまり、直幸が暴れ出すようなことがあってはいけない、とそういうことである。

史乃たちのそうした意図は、直幸の窺い知るところではなかったが、直幸はその話を受けて、一つの提案をした。

「そのことで、一つお願いがあるのですが」

大事なところでは話にまったく乗ってこないにも拘らず、こうい

う話には乗ってくる直幸に、史乃は少しばかり呆れたが、直幸の言葉に耳を傾けた。

「高校の知人がオリンピックに興味を持っているようで、もし差し支えなければ、誘いたいのですが」

それは史乃にとって意外な言葉であった。

直幸は友人と呼べるような知人もなく、友達を誘ってくるなどということはこれまで一度としてなかったことである。

史乃はどんな人を連れてくるのか、興味が湧いた。

「いいでしょう」

「ありがとうございます」

直幸は、史乃がすんなりと受けたことを意外に思ったが、敦子を誘える喜びが勝って、特に深く考えはしなかった。

「そのかわり、周りの方々にはくれぐれも粗相のないようにしてくださいね」

「はい」

気持ちが昂ぶった直幸には、史乃の忠告など瑣末なことだった。

一九六四年十月十日、東京オリンピックの開会式が行われた。

台風接近に伴い天候が心配されたが、国立霞ヶ丘陸上競技場は素晴らしい秋晴れだった。

その開会式の模様を伝えた北出清五郎アナウンサーの冒頭、「世界中の青空をぜんぶ東京に持ってきてしまったような、素晴らしい秋日和でございます」という台詞と共に放送が始まり、当日は何度となくニュースで伝えられることとなった。

大会宣誓は、日本が誇る体操選手、小野喬によって高らかに宣言された。

オリンピックの模様はテレビ、ラジオで放送され、家庭や職場だけでなく、電気店の前にも人だかりができるほどだった。

十日は開会式のみで、各競技は翌日から行われた。メダルの期待が掛かる体操競技や正式種目となった柔道への期待は大きく、競技

前から注目を集めていた。
直幸が敦子を伴って帰宅すると、庭先からすでに声が漏れてきていた。地元の漁師らは早々と仕事を切り上げるものもいたようだ。もっとも、彼らの仕事の山場は早朝から午前中に掛けてであるから、それほどの影響もないようで平然としたものだ。
「ただいま帰りました」
直幸は史乃に挨拶した。
「おかえりなさい」
「こんにちは。お邪魔します」
凛とした史乃の姿を見て、敦子は緊張した面持ちで挨拶した。
敦子の挨拶を受け、史乃は「貴方が……」と小声で漏らした。
史乃は、直幸が連れてくる相手がまさか女性であるとは思っていなかったため、正直驚いた。
それでも、同様をあまり顔に出さないのは史乃らしかった。
「はい、こんにちは。あなたが直幸さんのお友達？」
毅然とした態度で応対した。
「はい。高校ではお世話になっています」
史乃の態度に、敦子は冷や汗を欠くほど緊張して堅くなった。
「直幸さん、この方を紹介してくださる？」
できれば無視してさっさと立ち去りたいところだったが、声を掛けられては致し方がない。直幸は敦子を紹介した。
「こちらは、清水敦子さん。同じ青森高校の二年です」
「清水さん。こちらが、僕の母です」
直幸は、双方に向かってそれぞれ紹介した。
「そう、清水さんというのね。直幸さんとはどういうご関係なの？」
「母さん。もう、いくから」
じっとしていたら、史乃が敦子のことを根掘り葉掘り聞いてきそうで、また敦子もそれに答えてしまいそうで、直幸はとにかくこの場を打ち切ることにした。
呼び止めようとする史乃を振り切って、直幸は家の奥へと進んで

いった。
敦子は「失礼します」といって軽く会釈すると、直幸の後に従った。
廊下を通ると、隣から人々の声が漏れてきた。時節、笑い声や興奮した声が聞こえてくる。その声の様子からすると、部屋はどうやら人で一杯になっているようだった。
「大勢、いるみたいだね」
その声を聞いて敦子は感想を漏らした。
直幸の家の前から、敦子は驚くことばかりだった。
門構えも立派で、入り口も広く、綺麗に手入れされている。家も大きく、部屋も広い。造りからして違うのだ。何か、場違いのようなところにいるようで、夢のような気分で落ち着かなかった。
部屋に入ると、直幸は鞄を下ろして寛いだ。
「ふーん。ここが岡崎さんの部屋かぁ」
男子の部屋に入ることは初めてで、敦子は興味津々といった感じだった。
「あんまり、じろじろ見られると、はずかしいな」
そう漏らす直幸にお構いなしといった感じで敦子は部屋を巡った。
障子を開けると、縁側に出る。
「うわぁ」
立派な庭には、松や椿といった樹木が生い茂っていた。
敦子は、こんな庭の家に住めたらいいと素直に思った。
縁側は先ほど通ったと思しき部屋に通じていて、縁側から中を覗き込む人の姿が見えた。
その部屋の中にはいくつもの頭が一つの方向へと並んでいる。おそらく、テレビに見入っているのだろう。
その様子を見ると、敦子は何だか胸が小躍りしている気分になった。
敦子は障子を閉めると、直幸の方に向き直って、適当な場所に腰を下ろした。

「岡崎さんのお母様って、綺麗な人ね」
敦子は史乃のことを思い出し、感想を漏らした。
「ああ。見た目はね」
直幸は興味なさそうにしている。
「何か、凄い迫力で緊張しちゃった」
「厳しい人だからね」
「確かに、ちょっと厳しそうな感じね」
「口煩い人だから、あんまり話しないでね。あとで何言われるか、わからないから」
「もう、母さんのことはいいでしょ。テレビを見に来たんだから」
直幸はそういって、この話題を拒んだ。
「さ、いこうか。人が大勢来てるみたいだから、ちょっと窮屈だろうけど」
直幸に促され、敦子は部屋を出た。
廊下を先ほど来た方に戻り、部屋の襖の前で腰を下ろす。
「失礼します」
直幸はそういって襖を開けた。
敦子はその光景を見て、感心した。
「お、直幸君か」
部屋の人たちの視線が開けた襖の方に注がれる。
「ほら、幸三さんとこの息子だよ」
そういって、周りに説明する声が聞こえた。
「こんにちは」
直幸は頭を下げてから、部屋の中に入った。
部屋の中は大所帯で、どうにも居心地が悪かった。
「誰だって？」
部屋の中にいる者たちが、口々に直幸について話をする。
「幸三さんの……」
直幸を知る者が、そういって直幸の正体を明かす。
「凄いんだよぉ。なんてったって、青森高校だからねぇ」

「あんたとは頭の出来が違うよ」
「はあ、そうかい」
様々な人の言葉が聞こえてくる。
その中には、耳の痛い言葉もあって、直幸はやるせない気分になった。
直幸は所在無く、部屋の隅に座り込み、敦子もそれに並んで座った。
「直幸君。ほら、直幸君、こっち来なよ」
落ち着く間もなく声を掛けられる。
初老の男性が手招きしながら直幸を呼んだ。
「自分の家なんだから、そんなとこ座ってないで、もっとこっち来なよ」
「ほら、遠慮しない、しない」
「へへ、おまえのいかつい顔じゃ、遠慮したくもなるわな。」
「何だと、このやろー」
そういって男たちは笑いあった。
直幸はどうにも、こういう賑やかなのは苦手だった。どう接していいのかわからず、非常に緊張を強いられるのだ。
「あんたたちが言ったって、返って逆効果だよ。ほんと、男衆は役に立たないんだから」
そういって、年配のおばさんがテーブルの前に座るよう、促した。
直幸は敦子を伴って、テーブルの前につく。
「おっ、隣の娘はえらいべっぴんやね。ガールフレンドかい？」
隣に座る年配の男が小指を立てる。
「い、いえ」
直幸はもう、オリンピックを見るという目的さえなければ、即刻立ち去り部屋に閉じこもりたい気分だった。
「よしなよぉ。みっともない」
女性が窘めるが、あながち興味がないわけではないといった風で、
「で、ほんとのとこ、どうなんだい？」と、冗談めかして訊いてく

る。
直幸は目が回ったように、頭がクラクラしてくるのだった。
先ほどのおばさんが二人のためにお茶を注ぐ。
「あっ、いいです。私やりますから」
敦子はそういって、手を出そうとするが、おばさんは「いーの、いーの」と制止した。
それでも気が引ける敦子は、きゅうす急須の。
「いい子だねぇ。うちのなんか、ぜんぜん手伝やしない」
おばさんはそういって敦子を褒めた。
「おう、おねぇちゃん。俺にもついでくれや」
縁側に近い、離れたところで初老の男性が手を伸ばして要求した。
「はい」
そういって、人を避けつつ、その男のところまで向かう。
「あんた、さっきいらないって言ったじゃないよ」
おばさんが茶々を入れる。
「若い娘に入れてもらった方がいいもんよ」
そういうと、なぁ、と周りに同意を求める。
それに反応して、男衆が「そうだ、そうだ。」と相槌を打った。
「ババアが淹れたんじゃ、不味くてかなわん」
「ちげーねぇ」
周囲にドッと笑いが起こる。
「なんだって！　男ってのは、ほんとにどうしようもないもんだね。わたしゃ、あんたより十も若いよ」
おばさんが口を尖らせて非難した。
再び、部屋は笑いの渦で包まれた。
その光景は何だか、ガマ蛙が漫才でもしているようである。その中にいる敦子は、差し詰め蓮の花だろう。人々の間を伝ってお茶を注いで回った。
笑いが収まった頃、人々の関心は直幸からテレビへと移っていった。

寸暇置いて、史乃が部屋に入ってきた。
笑い声が部屋の外まで聞こえていたのだろう、何かあったのですか、と伺いを立てた。
史乃はお菓子を準備してきていて、テーブルの上におくと、「ご自由に召し上がってください」といって、皆に促した。
そして、テレビに近い、脇の開いている場所に腰を下ろした。
敦子は、それを見てとると、お茶を注いだ茶碗を史乃に手渡した。
「ありがとうございます」
史乃はほんのりと笑顔を浮かべ、礼を言った。
直幸にしてみれば、史乃と同じ部屋にいることはとても苦痛だったが、さりとて今から退出するのも気が引け、敦子を一人残すなど到底できなかったから、渋々にもその場にい続けることになった。
そんな時間を乗り切るには、テレビ画面に集中するのが一番だった。
敦子も席に戻ると、カラー映像の動きに神経を注いだ。
初めての映像でもあり、集中して見入っていた所為か、思った以上に時間の経過は早かった。
直幸は敦子を駅まで送っていく。
道中、敦子は興奮気味に中継の様子を振り返ると、「ありがとう。」と礼を言った。
駅で別れた後、直幸は敦子の存在の余韻に耽りながら道程を漂ったのだった。
家では相変わらずの状況だろうと考えると、煩わしく、気が重かった。直幸は帰るなり、勉強があるので、と断って部屋に閉じこもった。

オリンピックは二週間ほどの日程で開催された。
流石に、毎日テレビ観戦とはいかない。敦子の喜ぶ顔は見たかったが、家の中では相変わらず人でごった返すことになるだろう。連日、そんな中にいるのは苦痛に思われた。

夜になれば、酒も入る。それこそ性質が悪く、直幸はとても一緒にいる気になれなかった。

敦子も、流石に毎日押しかけるわけにもいかないと遠慮して、数日予定を立てることにした。

大変だったのは日曜日だった。周りの大人たちも仕事が休みとなるものが多く、家の庭までいっぱいの人たちで観戦したものだ。

日数が経つにつれて、周りも直幸と敦子を知るようになり、また、オリンピックも佳境に入って直幸たちのプライベートを詮索する余裕はなくなっていった。

日本は東京オリンピックでその後の歴史に残るほどの好成績を収めていった。最終的には、金メダル十六個、銀メダル五個、銅メダル八個と、受賞数では、アメリカ、ソ連という大国についでの第三位であった。

柔道、レスリングなど、各階級でメダルを獲得すると、視聴者は大いに勇気付けられ、感動し、涙を流す者もいた。

さらに、大きな期待の掛かっていた体操が始まると、人々の目は期待と緊張感で画面を見守ったものだ。子どもたちの中には、小野や遠藤といった体操選手の名を冠した技名を物真似してみたり、着地のポーズをとったりして遊ぶ者までいた。

その体操は、優秀な成績を収め、団体など四つの金メダルを獲得した。

敦子が最も興奮したのは女子バレーだった。女性ということも共感があったのかもしれないが、熊のように大きな外国選手を相手に小さな日本人が必死にボールに飛びつき、跳ね返していく様は、多くの人たちに感動を与えたものだった。

「ねぇねぇ、こうやって」

帰りの道中、敦子は直幸に腰を屈め、馬になるように求めてきた。

直幸が姿勢を取ると、敦子は距離をとると、「いくよぉ」と声を上げて助走を始めた。

ポンッ

背中に軽い衝撃が伝わる。
「パシッ。一〇・〇、清水選手金メダルです！」
両手を高々と上げて、着地のポーズをとった。
直幸は、背中に残る衝撃のざんし残滓を感じながら、敦子が意外に軽いのだと思った。女性の体重など知らない直幸だから仕方ないが、そんなことを口にしたら敦子に怒られてしまっただろう。
敦子は満足気な表情で振り返った。
直幸は周りに見られていないかと少し気になったが、お構いなしといった感じで無邪気にはしゃぐ敦子を可愛いと思った。
「ありがとう。送ってくれて」
敦子は駅に着くと、感謝の意を示し、「じゃあね」と手を振って別れた。
直幸は、敦子と一緒に感動を分かち合えたことに満足していた。敦子と一緒にいれば、なんでもとても貴重で、幸せな時間になるような気さえしたのだった。
もっともっと、そうした時間が増えればいい。
それは、直幸の純粋な願いだった。
そんな直幸は、テレビを見ている間にある考えが浮かんでいた。帰路の間、直幸はもう一度、そのことを思い出していた。

オリンピックの興奮冷めやらぬ、閉幕間もない頃、直幸は敦子を誘って出掛けた。
青森駅から津軽線に乗って津軽半島を北上する。
津軽線は蟹田駅まで陸奥湾に沿うように海岸線を北上する。午前中の日差しが海を照らし、青々とした海原の向こうには下北半島が見えた。
蟹田駅からその先、終点三厩駅までの区間は数年前に開通したばかりの新しい路線だった。

蟹田駅付近からは半島の内陸に入り、清水般岳、品岳といった山々の間へと入っていく。景色はがらりと変わり、山の景色が広がる。木々はすでに紅葉も終わりを迎えつつある。時期、山の上の方は白化粧に染まることだろう。

列車は山の谷間を縫うように走り、今別川に沿うようにしてみんまや三厩湾へと出る。再び海岸線の開けた景色が広がり、終点三厩駅まで海を臨みながらのは一時間半ほどで至る。

三厩駅を出ると、潮風が吹き抜けていた。

ここから半島の先へは、青森市営バスたっぴ竜飛線を利用してさらに北上していく。

二人はまっすぐに竜飛崎を目指すつもりだったが、源義経由来の寺があるということでよってみることにした。

「源義経って、あの義経だよね」

直幸も、源義経については歴史で学んでいたから興味を持つことができた。

「たぶん、そうだと思う。それ以外に知らないし」

“あの義経”以外の義経がいるのかどうかはともかく、源平合戦の英雄となるとその境遇もあってか、人気の高い武将だった。

龍馬山ぎけいじ義経寺は、三厩港のすぐ近くにあった。バスを利用して、三厩村役場前で下車してしばらく歩くと、『義経寺』の文字が見えた。

「ギキョウジ？　ギケイジ？　これ、なんて読むのかしら」

「うーん、ヨシツネジ、じゃ、ないか」

二人はわからぬまま、結局考えるのを止めた。

「龍馬山」と書かれた山門を潜り、階段を上っていく。

「義経といえば、牛若丸」

「女装して笛を吹いたって、本当かな？」

「美男子だったっていうけど、どんな感じだったのかな？　格好いい感じかな？」

「さあ、昔の人だし、今の感覚と違うかもよ」

「えー、そうかなぁ」
直幸は、敦子が義経の風貌に想いを馳せることに、無自覚に嫉妬した。
二人は、歴史の復習でもするように、義経の生涯や源平合戦について話をした。これには直幸もついていける話題で、会話は意外な盛り上がりを見せた。
仁王門、寺院共にそれほど大きな造りではなかったが、仁王門のしめなわ注連縄は意外に太く立派なもので、「太いねぇ。」と敦子が感想を漏らしていた。
義経寺のすぐ近くにまやいし厩石と呼ばれる岩が安置されている。地元に残された義経に纏わる伝説では、兄、源頼朝の計によって、藤原泰衡の襲撃を受け、この地に追い詰められた。追い詰められた義経は館に火をつけ、自刃したというのが通説となっている。
しかし、これは偽装であり、実は義経は蝦夷の地、つまり今の北海道に渡ったという伝説が残されている。
眼前に臨むことができても、津軽海峡の荒い海流がそれを阻む。義経は奇岩に登り、観世音を供えて三日三晩祈祷した。すると、三頭の馬が現れ、海は鏡のように静まったという。
そうして無事に蝦夷の地に渡ることができ、さらに大陸に渡ったというおひれ尾鰭までついている。
その伝説の、三頭のうまや厩となったことから三厩の地名が付いたと謂われている。
「龍馬って、どんな馬かしら?」
「さぁ、龍みたいな顔? 尾が長いとか?」
「そんなのが突然現れたら、吃驚するよね?」
「たしかに」
二人は、その伝説に登場する“龍馬”なる馬に思いを馳せた。
伝説であるので、天狗や河童と同じような不可思議な生き物が登場してくるのだろう。
「でも、面白いね。もし、本当に義経がここを渡って行ったんだと

すると、その後どうなったのか、気になるよね」
「うん。そうだね」
歴史で学んでいるから、伝説はもちろん作り話だろうと思っている。
それでも、そうしたことに想像を巡らしてみると、とても楽しいものだ。
特に、小説に触れる機会の多い敦子にとって、その“もしも”はとても想像力を掻き立てる効果的なスパイスとなった。
敦子はいろいろ想像を巡らして、ああだろうか、こうだろうかと話してみるのだった。
（新たな土地での生活、か。もし、本当に義経が海を越えたのなら、そこでどんな生活を送ることになったのだろうか？）
直幸は、敦子の話題に頷いたり、笑い返したりしながら、義経のその後の人生を思うのだった。
二人は、義経ゆかりの地を離れ、三厩港から再びバスに乗って、津軽半島の先端、竜飛崎を目指した。
三厩から竜飛崎までの道は細く、決して具合の良いものではなかったが、海岸線を直走り、景色はよかった。日本経済は高度成長の真っ只中にあったが、都市部を離れると、昔ながらの風情がそのまま残っていた。
途中、十三洞門と呼ばれる手掘りのトンネルをいくつも潜り抜けていく。洞門は手掘りで掘削し、道を作ったものである。かつて、十三あったことからその名がついたと思われた。当時の人々の苦労が偲ばれるところだろう。
その洞門は実に生々しい土肌を顕にし、実に頼りない風情だ。初めて通る者は不安を抱きたくなるだろう。
「なんか、怖いなぁ」
敦子はそう言って、崩れやしないものか、と心配を口にした。
直幸もそれに同意して、二人してバスの中から天井を気にしたものだった。

この地方の道の起源は定かではないが、この道路は半世紀ほど前に整備されたといわれ、それまでは道がなかったとも言われる。それだけに、本州北端のこの地は、まさに現代に残る秘境のようで、昔ながらの風情が残されていた。

太宰治もその著書である『津軽』において、竜飛へと向かう道中について触れている。太宰は実に多くの作品で地元青森に触れていて、ファンには堪らない旅行の楽しみとなること請け合いだった。

かつて太宰もこの道を通ったのかと思うと、敦子の感慨もひとしお一入だった。

太宰や『津軽』のエピソードに触れると、敦子は嬉しそうに話をしたものだ。

直幸はそんな敦子の様子を見ていると嬉しくて、敦子の話に耳を傾けていた。

一時間足らずで終点の竜飛郵便局前まで行き着く。バスはゆらゆらとあまり快適でない運転で半島の先端まで行き着いた。

「きゃう」

バスを降りると、あたりは強い風が吹いていて髪も服も激しく棚引いた。

ビュウビュウと風は音を立てて舞い、人を軽々と細枝のように揺さぶるのだった。

「うわ、本当に強いな」

風に押し流されそうで気を抜けない。

「これが本場のヤマセってやつか」

そんなことを漏らして、激しく体当たりしてくる風を納得しようとする。

敦子は乱れる髪を押さえていた。

バスの中で落ち着いていただけに、慣れるまでしばらくかかった。

風に気を取られなく頃、やっと辺りの景色に気を回せるようになった。

周囲にはわずかに建物があるだけで、人気も少なくとても寂しい

感じのところであった。
海岸線に沿って道が続き、目の前には小さな島と、港が見えた。帯島である。
帯島は小さな島で、何があるというわけでもない。島は橋で津軽半島と地続きになっていて簡単に渡ることができた。
地元の漁師たちが干しているのだろう。蛸や海藻類などが家の軒下に吊るされたり、波止場の辺りに敷かれていた。強風で飛ばされないように、一つ一つが紐で結んである。
帯島の港の隅にはひっそりと佇むように鳥居が設けられていた。おそらく、地元の漁師たちが海の安全を願って設けたのだろう。
帯島は特に何もないところであったが、それが返ってこの地に住む人たちの暮らしを偲ばせた。
どこからともなく、醤油の匂いが漂ってきて直幸は唾液が染み出た。
風を避けるように、建物の壁際で幾人かの老人たちが集まっていた。
どうやら、あちらの方で何かを焼いているようだった。
二人は、匂いに誘われてそちらの方へと引かれていった。
「こんにちは」
「何を焼いているんですか？」
駄弁っていた老人たちは声を聞いて、赤黒く焼けた顔を向けてきた。往年の厳しい生活を物語るように、年輪のように皺が幾重にも連なっていた。
「あっ、蛸ですね」
七輪のので炙られてえんじ臙脂に染まる物体を見つけ、敦子が言った。
「おお。これかい」
「いい匂いですね」
直幸がそういうと、そうだろうというように笑みを浮かべた。
お手製のたれに付けられた蛸足は炙られると生きているかのよう

に身を縮め、ジュッという音と共に香ばしく焦げた。
「ここは風が強いですね」
直幸がそういうと老人たちは頷き、子どもの頃からだからもう慣れたこと、風が強いときはいろんなものが吹き飛んで大変だことなど、様々なことを口々に教えてくれた。
生粋の津軽弁なのだろう、同じ青森県人とはいえ、ところどころ言葉がわからず、愛想笑いで誤魔化しながら会話した。
老人たちはそんな直幸たちを気にすることもなく、嬉しそうに話しをするのだった。
夏場は花も咲き、人も来るというが、もう冬も間近の今頃ではほとんど来るものもいないという。この辺りは人も少なく、たまに若い者と話す機会があると嬉しいようだった。
蛸が頃合いになると、老人たちは直幸たちにも一本ずつ分けてくれた。
一応遠慮したが、いい匂いに篭絡されてしまい、お腹は欲しいとせがんだ。ただでは悪いので、お金を払おうとしたが、老人たちはえーえー、と言って断った。
二人は頭を下げると、本州本土へと引き返す。
串に刺された焼き蛸はずんとした重みがあり、ゆらゆらと湯気を立てていて実に美味そうだった。蛸足を口に入れると、醤油の香ばしい香りが口中に広がった。適度な甘さに、唐辛子のちょっとした辛味がアクセントとなって、癖になりそうな味だった。蛸の肉はこりこりと歯応えがあり、なかなか食いでがあった。
蛸はまだ熱く、二人は口をはふはふとさせながら、美味しいねと言葉を交わした。
半島の海岸線に沿って遊歩道をしばらく進むと、竜飛崎の海岸に出る。周囲は岩がごつごつしていて、ところどころ海面に頭を出している暗礁地帯だった。
そこから北を臨めば、地平線の先には北海道である。
「北海道だよ」

「うん。北海道だね」
「義経はここを渡ったんだねぇ」
「そうだねぇ」
二人はもう一度、あの義経伝説を思い起こした。
津軽海峡は風が強く、荒い波が白い飛沫を上げていた。時節霧立ったような飛沫が舞い、海岸線にいる直幸たちの肌に触れた。
蛸を食べたことで、むしろ本格的にお腹がすいてきたようだ。二人は適当な場所を探すことにした。風が強いため、外ではとても落ち着いていられそうにない。遊歩道を戻って港付近まで引き返すと、小さな食堂を見つけてテーブルを借りることにした。店の女性は快く承諾し、温かいお茶まで出してくれた。
「ありがとうございます」
「ごゆっくりどうぞ」
敦子は一息ついたついでに、髪を結っている。風が強く乱れるのが煩わしい。食後の散策のためにも、楽な状態にしておきたかった。
店はこぢんまりとしたもので、お客もなく閑散としていた。
店の女性の話では、やはり夏頃の観光シーズンでもなければ、それほど混むこともないらしい。あとの客は地元の漁師たちで、早朝に朝食を摂るとか、夜に集まって酒を飲むとか、そういった具合なのだそうだ。
港の目の前ということもあり、観光客用であろう、土産物と思しき海産物が店の片隅に置かれている。少しでも収入を増やすための知恵だろう。
女性は人の少ない時期など、港の手伝いをすることもあるそうである。僻地で働くのも大変なものなのだ、と二人は思うのだった。
食事を終えると、二人は岬の高台に向かうことにした。
店を出る時、女性が、丘を少し奥へ進むと花畑が広がっていると教えてくれた。もっとも、もう花の季節は終わっているのだが。
高台へ通じる急な階段を上るとまず見えてくるのが群生する紫陽花だった。紫陽花の見頃は七月頃で、今は枯れて寂しい姿になって

いる。紫陽花の数は相当なもので、海岸までの斜面に広く繁っていて咲いた時には見事なものだと、先ほどの食堂の女性が教えてくれた。

高台へ通じる道は狭く、傾斜がきつく、なかなかの重労働だった。その階段を抜けると少ししっかりとした道に出た。今登ってきた、三厩湾の方を見ると、いくらかの家々が肩を寄せ合うように集落を作っていた。眺めもよくなり、東に下北半島をはっきりと臨むことができた。

道を右へと入ると竜飛崎灯台へと通じるが、二人はそちらには向かわず、まずは道なりに進むことにした。

二人は並んで歩いていたが、直幸が敦子の少し後ろになると、ちょうど服の合間からうなじ項が見え隠れして悩ましかった。

直幸としては、見ていたいような、見てはいけないような、実に目のやり場に困るところだった。

道はやがて狭くなり、木々に囲まれるようになった。

その林を抜けると、少し風は穏やかになってきた。林の木々が暴風壁の役割を果たしてくれているのだろう。

林をそのまま進むと、やがて広大な原っぱに出た。

「ここが、おばさんが言っていた場所か」

今は葉枯れの季節で、セピア色のくさむら草叢と化していたが、花の季節にはここは素敵な光景となるのだろう。

風も穏やかになり、土の匂いが漂ってきそうな場所だった。二人は適当に腰掛けて、高台を登ってきた疲れを癒した。

「きっと、花が咲くと素敵なんだろうね」

「そうだね」

「見てみたいなぁ」

「そうだね」

「今度は、花のいっぱい咲いた季節に来れるといいね」

「……そうだね」

敦子は、少し体を起こして、直幸の方を見た。

「ん？　なに？」
「そうだね、ばっかり」
「ん？　そうだね」
「ほら、また」
敦子はそういって笑った。
直幸も釣られて笑う。
「ねぇ、敦子さん」
「なあに？」
「敦子さんは、何かなりたいものってあるかい？」
「ん？　んー？」
空を見上げて、しばし思案する。
「まだ、わからないなぁ。でも、図書館司書なんか、いいかなって思う」
「はは、本、好きだしね」
「でも、本当のところはわからないなぁ。大学に行けるかどうかもわからないし」
「太宰に倣って、東京大学とか」
「あはは、それはちょっと無理だよぉ、私の頭じゃ」
「ねぇ、敦子さんは、この街を出たいと思わない？」
直幸は「ははは」と笑うと、一息入れて敦子に尋ねた。
敦子は、そういう直幸を見つめ、やがて、また正面を向いた。
「そうねぇ。確かに、東京とか、都会には憧れる気持ちはあるかな。オリンピックで見たけど、東京ってなんかものすごく発展してるみたいだし、見てみたいとは思うわね」
「東京と大阪の間を、新幹線っていうのができたよね。」
「うん、なんか、すごく速いんでしょ」
「うん。すごいみたいだね」
「見てみたいね」
「うん。関東や南の太平洋側はここよりずっと発展してるんだろうな」

「うん」
「ここよりもっと発展していて、色々なものがあって、人もたくさんいるんだろうなぁ。敦子さんは見てみたいと思わない？」
「そうだね、いつか行けるといいね」
そこで会話が途切れると、しばらく二人はその場に佇んでいた。
「そろそろ、行こうか」
「うん」
直幸が促す。
二人は先ほど来た道を戻り、今度は竜飛崎灯台を目指して左へと曲がって行く。
灯台へは更に坂道を登る。風もだいぶ強くなってくる。
坂道をしばらく登ると、視界は大きく開けてくる。帯島や竜飛港、そこから先ほど登ってきた道。さらに、西側には日本海の大海原が広がる。
その北側に見える白い円筒状の建物が竜飛崎灯台だ。竜飛崎灯台は今から半世紀ほど前、昭和初期に完成した灯台で、日本海側の津軽海峡の入り口に当たるこの地の船舶交通にとって重要な役割を果たしていた。それは、戦時中も同様で、津軽海峡は軍事的に大きな意味を持っていた。
灯台の横を抜けた先に展望スペースが設けられている。その先には、大日本帝国海軍の望楼として使われていた建物の頭が見える。
ここが本州末端の竜飛崎。旅の終着点だった。
竜飛崎展望台は海面より一〇〇メートルほど高い位置にあり、眺望は素晴らしい。西から東までが海で囲まれ、北には函館の山々を臨むこともできる。少し風が強いことを覗けば、遠くまで出掛けてきた甲斐があったというものだ。
「うわぁ、すごーい」
敦子は嬉々として声を上げた。
後ろで結った髪が棚引く。
直幸はその後ろ姿を見つめていた。

風がボウボウと音を立ててしきりに髪を揺さぶる。
「すごいきれいだね、岡崎さん」
敦子が振り返ると、直幸は真剣な眼差しで自分を見詰めていることに気が付いた。直幸の表情は堅く、怖いくらいの異様な空気が漂っていた。
「……岡崎さん？」
その様子に、敦子は緊張した。
「敦子さん」
「はい」
敦子は反射的に返事をした。
いったい、直幸からどんな言葉が投げかけられるのか、考える余裕もなかった。
「僕は……、僕は、この街を出ようと思う」
「えっ？」
「それで、敦子さんにも、君にも付いてきて欲しいんだ！」
「……」
「僕と結婚して欲しい。結婚してください！」
青天の霹靂とはまさにこのことだろう。
敦子はいったい何が起こったのか、直幸が何を言っているのか、にわかには判断が付かなかった。
強風が音を殺ぐ中で、直幸の声は確かに、明確に聞き取れるものだった。
だが、敦子は思考停止した。
瞳を見開いたまま、呆然と立ち尽くす敦子。
「今すぐに答えを出さなくてもいい。いや、できるだけ早いに越したことはないけど……。突然で驚くのも無理ないよね。でも、僕は本気だ。ずっと、考えてたんだ」
時間が止まったように身動きしない敦子の様子を見て、直幸は気を使いつつ、しかし、さらに自分の意思をぶつけた。
「あ、ありがとう」

敦子は、焦点を合わせるように俯き、目の前を見つめながら言った。

その言葉に反応し、笑みを浮かべかける直幸を見ることなく、敦子は言葉を続けた。

「でも……、でも、あまりにも、突然過ぎて……」

――わからない。

敦子はそこまでは言葉にできなかった。

敦子はまだ困惑していた。

「うん。答えは今すぐでなくていい。でも、僕は真剣だから、しっかり考えて欲しいんだ」

直幸はそういって、まだ混乱の中の敦子をベンチに座らせ、自分も隣に座る。

「街を出るって……」

どれくらいの時間が経過したのだろうか。長い沈黙を打ち破って、敦子が口を開いた。

敦子はやっと少し冷静さを取り戻して、話しができるようになった。

「街を出るって、当てはあるの？」

「いや、ない」

直幸は頭を横に振った。

敦子は反射的に直幸の方を見た。

敦子は今にも泣き出しそうなのを必死で我慢していた。

それほど、心は動揺していた。

「ないけど、でも、このままいても、どうにもならない」

「嫌なんだ、もう。あの親も、あの家も、学校も……。僕はもう、嫌なんだ」

直幸は自分の想いを吐露した。

その言葉一つ一つが鋭利な刃物のように敦子に鋭く突き刺さった。

――それは、「逃げ」だ。

その言葉は、どうしても声に出せなかった。

逃げだから、だから直幸はこのままの状態でいろ、というのか。
直幸の痛みを、敦子には量り知ることができない。
だから、安易にそれが「甘え」であると批判することはできない。
そうすることは簡単だった。
「逃げるな、甘えるな」
言うのは簡単だった。
でも、それで直幸はどうなる。
何かが良くなるのか。
問題が解決するのか。
敦子の頭の中で、同じ言葉が何度も繰り返された。
そして、もう一つの問題。直幸は自分と結婚したいといった。それに対する答えは何だ。自分はどうしたい。
それはほとんど自明だった。そもそも、その気がないのであれば、悩むことなど何もないのだから。
それは敦子にとっても重要な判断だった。
――学校はどうするの？
敦子は、訊くにも訊けなかった。それは、自明に思えたからだ。
直幸は学校も嫌っているのだ。つまり、学校を辞めることは直幸にとって結論がでていることなのだ。
午後の太陽は、ゆっくりと、しかし確実に西の地平へと下っていた。風も冷たくなり、肌寒くなってきた。
「そろそろ帰ろうか」
そういう直幸に敦子は頷いたが、顔を上げることはなかった。
二人はバスに乗ると、来た道を引き返して行く。
人気の少ないバスの中はガランとして寂しかった。
「気にし過ぎないで」
直幸は敦子を気遣ったが、敦子は黙ったままだった。
直幸も急なことだと自覚していたが、沈黙は痛かった。答えを急がないように心に呼びかけたが、敦子の反応に落胆の気持ちが湧いてきてしまうのだった。

二つ返事で承諾されるというのもあまりできた想像ではないが、これほど重苦しい空気が漂うとも予想していなかった。

重苦しい雰囲気の中で、直幸も敦子に声を掛けることができなかった。

半島の東側を走る市営バスは、半島の陰に隠れて、一足早く夕暮れを迎えていた。

バスは、連なる洞門を抜け、時節大きく左右に揺れながら、一路三厩駅を目指すのだった。

直幸たちが津軽線に乗り換えた頃、津軽半島の東側は日が沈み、完全に影の世界となっていた。車内には明かりが点され、車窓から外の世界を臨むことはできなかった。列車は一路、青森を目指して暗闇の世界を走るのだった。

列車は明かりを頼りに線路という水先案内人に従って、順調に運行する。駅には列車を迎えるかのように明かりが点され、迷って過ぎることもない。多くの導に支えられ、列車は滞りなく青森へと向かうことができた。

二人はただ、座席に背を預け、ゆらゆらと揺られながら終着の青森を待つのだった。

不意に、敦子の脳裏に真っ黒な大海原が広がる。

完全な闇の世界。右も左もわからない。そんな中を一隻の船が走る。

それはまさに、直幸の未来を暗示しているようだった。

直幸は気が弱いところがあるが、真面目で心優しい性格でもあった。学業や運動は別にしても、性格的には優等生といっていいだろう。

しかし、そんな当たり障りのなさそうな直幸だが、手放しではおけない何かがあった。危ういのだ。

敦子には、直幸はどこか頼りなく、儚く、破滅的ともいえる何かが潜んでいるように感じられてならないのだった。

家庭教師の件、然りである。

直幸は普通にしている分には、特に何という問題なさそうなのだが、一人でいると何を仕出かすかわからない。立派に見える樹も風に煽られ倒れることもある。線が細く感じられる直幸はそれこそ簡単に破綻してしまいそうな危うさがあるのだ。

何のツテもなく、高校も中退。そんな直幸を待つ未来はいったいどんなものなのだろうか。

それはまさに、闇夜の海を漂うのと同じ。永遠に彷徨い続けることになるのかもしれない。

敦子の脳裏に広がる闇に、一つの光明がかすかに見えた。

そう、日本海から津軽海峡を抜ける者たちの命綱の光。明かりを点した竜飛崎灯台の風景だった。

(そうだ。誰かが、直幸を支える光明にならなければ)

それは天啓のように、敦子の頭の中に煌めくのだった。

誰かが、直幸の孤独を癒し、支える存在になれば、直幸が道に惑うこともないかもしれない。そして、今、それができるのは自分しかいない。

それが敦子の答えだった。

敦子の瞳には再び力が戻ってきた。

敦子は決意した。直幸と共に生きよう、と。

無論、問題がないわけではない。むしろ、この決意はいばら荊の道の選択である。この選択は、むしろ敦子の未来をより過酷なものにするであろうことは誰が見ても明らかだった。

だが、心が決まった敦子には、そうした問題は瑣末なことのように思えたのだった。

列車は定時通りの運行で青森駅に到着した。

扉が開き、ホームに出ると、光が眩しく感じられた。

会社帰りの人々だろう。駅の中はザワザワと騒々しかった。ホームには大勢の人々が列車を待っている。皆、それぞれの家へ帰って

行くのだろう。
直幸と敦子もまた、それぞれの家へと帰るのだ。
その別れ際、敦子は直幸に声を掛けた。
「岡崎さん。その、さっきの話なんだけど……」
「ああ、そのことなら、あまり気にしないで、答えは急がないから。でも、後でちゃんと答えを聞かせて欲しい」
敦子が答えを言いよどんだのは、その後巡ってくるであろう、困難への不安だろう。
敦子は、気持ちを奮い立たせるように、唇をきゅっと締めた。
「嬉しかった」
「え？」
「結婚しようって言ってくれて、嬉しかった」
それは、敦子の素直な気持ちだった。
竜飛崎の展望台で言われた時は突然で混乱してしまったが、第一声の「ありがとう」はその気持ちが形を変えたものだった。
敦子も直幸を好いていたから、その申し出は女性としてとても喜ばしいものであった。
「私は……、私は、清水敦子は、岡崎さんと……、直幸さんと結婚します」
「無理しなくていい」と手を振る直幸の言葉を制して、敦子は自分の意思を表明した。
「え？　いいの？」
心の準備ができていないとばかりに驚く直幸に、敦子は頷き返した。
「やったぁ！」
直幸は思わず、場所も忘れて歓声を上げた。
「直幸さん、今後ともよろしくお願いします」
笑顔で答えた敦子の瞳は涙で濡れていた。
「こちらこそ！」
直幸は有頂天になり、公衆の面前ということも忘れて敦子をしっ

かりと抱きしめた。
「ありがとう」
敦子は、直幸の締め付けてくる体の圧力を感じながら、それを沁みるように感じた。
「幸せにしてくださいね」
「うん」
敦子は、直幸の背中に手を回して抱き締め返した。
お互いの存在を充分に味わった後、二人は我に返った。
駅の構内には人が往来し、じっと抱き合ったままの若い二人を横目に見る者もいる。
二人は急に気恥ずかしさが出てきて、スッと離れた。
「じゃあね」
二人は名残惜しそうに見詰め合ったが、やがて、どちらからともなく声を発した。
それでも名残惜しく、いつまでも一緒にいたいという気持ちが先立って、体を振り返させるだけでもエネルギーを使うのだった。二人は後ろ髪を引かれつつ、お互いのホームへと消えて行くのだった。
二人は、別れた後も、せめてこの温かい気持ちをいつまでも感じていたいと、心の手で大事に包み込むのだった。

直幸は、敦子の実家を訪れた。
敦子の両親の都合も考え、休日にお邪魔することにした。
目的は、もちろん敦子との結婚を認めてもらうことである。
敦子には、それは到底叶わないと思えた。しかし、両親に黙っているのも気が引け、自分の意思を伝えなければならないという想いもあった。
清水家は、新城の住宅街に居を構えていた。
灰色のブロック塀に囲まれた、こぢんまりとした佇まいだった。

「ただいま」
敦子は玄関を開けるといつものように声を掛けた。
いざ、敦子の家に入るとなると、直幸は緊張した。
「上がって」
敦子にそう促され、直幸は「お邪魔します。」と挨拶して、上がらせてもらった。
靴を脱いで一歩目の、板張りの床の感触は直幸の緊張をさらに高めた。何か別世界にいるような異様な空気に囲まれ、立ち振る舞いも覚束ない。
「こっちよ」
敦子はそういって、直幸を客間に案内した。
初対面の相手を、しかも結婚の話を持ち出すのに居間というわけにもいかないだろうと、客間に通すことにしたのだった。
客間といっても、普段さほど使う機会もないため、敦子の父の書斎代わりに使われていた。客間は和室でこぢんまりしていたが、綺麗に整理されていて落ち着いた雰囲気だった。窓からは狭い庭先が見えた。物干し竿が世俗的な風情で、なんだかホッとさせる光景だった。
部屋の中央には濃い赤褐色の和卓が重厚な存在感を示していた。敦子はその和卓に座蒲団を用意し、どうぞ、といってその一つに直幸を座らせた。
直幸は、体を落ち着けると少しだけ緊張が解けたようだった。
「お母さん。お父さんは？」
敦子は家の奥の方に声を掛けながら、部屋を出た。
「散歩にいってくるって出掛けたわよ」
奥から女性の声が返ってきた。敦子の母、雅子だ。
「もう！家にいるって言ってたのに」
「じき、帰って来るわよ」
「もぉ、しょうがないなぁ」
そういって、敦子は口を尖らせた。

「それより、敦子。話って何なの？」
「お父さんが帰って来たら話すから」
「そーお。ねぇ、勿体ぶらずに言いなさいよぉ」
「だから、後でって」
敦子は雅子の追及を逃れたが、これから明かされる事態に直面する母のことを思うと、少し悪い気がして複雑な気持ちだった。母の追及を受けながら、敦子は胸にモヤモヤするものを感じていたが、それでもしっかりと会話できるのは日頃の親子関係に培われたものだろう。
敦子はポットのお湯の量を確認すると、一杯お茶を淹れた。
「あら、お客さん」
「うん、ちょっと」
「あら、敦子にお客さん？」
「え？　ううん、私のお客さんじゃない。私と同じ高校の人よ。」
「あら、お友達？」
「うん、まあ」
「ねぇ、どんな子なの？」
「あとで、お父さんが来たら話すから」
「んー、またそれ？　この子はぁ。どうせわかるんだから、少しくらい教えてくれたっていいじゃない」
母親はそう非難したが、敦子は、お茶が冷めちゃうから、と言ってその場を立ち去った。
客間に入ると、直幸は正座で座っていた。緊張している所為か、敦子が入った時もドキッとしたように反応し、敦子と見定めるとホッとした様子だ。
「はい、お茶」
「ありがとう」
「緊張する？」
「うん。まあ……」
「あんまり硬くならないで」

そうは言うものの、それは酷だろうと敦子は思った。
直幸はうん、と返事をしたが、相変わらず肩に力が入った様子で、腿の上に拳を作っていた。
「お父さんが散歩に出掛けちゃって……、もう少ししたら帰って来るって言うんだけど……」
「ごめんね。ちょっと待っててね」
そういうと、敦子は再び部屋を出て行った。
直幸は頷いただけで、言葉を発しなかった。座っているだけでもエネルギーを費やしているのだろう。普段から口数の少ない直幸が、さらに無口になっている。
直幸は緊張を少しでも振り払うように、手で腿の上を擦った。
敦子が台所へ行くと、母親が急須と茶碗を乗せるお盆を用意していた。
「ああ、私がやるから」
「どうせ、持って行くんでしょ」
敦子は制止したが、雅子はお構いなしに準備を整える。
「ほら、ポットを持っていって」
敦子が、お母さん、と制止しようとするも、まったく動じることなく背中を向けて客間へ向かう。敦子は渋々、ポットを運ぶのだった。
雅子の好奇心が生んだ強攻策だった。
客間の戸が開かれ雅子が入ってくると、直幸はギョッとして畏まった。
(あら、男の子だわ!)
それは雅子にとって衝撃だった。
(あらあら)
雅子は内心怪しい笑みを浮かべるのだった。
「こんにちは」
「はいっ、こんにちは。あ、あの、岡崎と言います」
「まぁ、岡崎さんというのね。私は、敦子の母の雅子と申します。

娘がお世話になっています」
「いえいえ、こちらこそ」
直幸はそういって、正座のまま深々と礼をし、危うく座卓に頭をぶつけそうになった。
雅子はそんな直幸の様子をニコニコと朗らかに見ていたが、それが返って直幸を狼狽させた。
「ところで……、岡崎さんは敦子とはどういう関係なんです？」
雅子の質問は、まさに直球だった。
（ほらきた！）
後ろに控えていた敦子は、予想通りの母の反応に内心焦ったものだ。
「お母さん。早く入ってよ。手が疲れちゃう」
「ああ、ごめんごめん。つい、驚いちゃって」
敦子がポットを持ち上げて見せると、雅子は部屋の隅へと寄ってお盆を置いた。
敦子はお盆の隣にポットを置くと、そのままその場に座った。
「それにしても、まさか、男の子とは思わなかったもんですから」
雅子はそういうと、敦子に「あんたも隠さなくたっていいのに」と手で口元を隠して小声で言った。
目の前でありありと、しかも筒抜けの状態でいわれても、どうしていいものかと直幸は困った。直幸は、雅子の一挙手一投足に動じてしまうのだった。
「あ、そういえば、もしかして、岡崎さんて、前に一緒に勉強してるっていってた、あの岡崎さん？」
雅子は敦子と直幸を交互に見ながら確認をしてきた。
「え、ええ、そうよ」
これ以上、雅子と直幸が一緒にいると大変なことになりそうな予感がして、敦子は引き釣り気味に笑った。
「はい、敦子さんには、いつもお世話になってます」
直幸は、雅子の言葉を聞いて敦子に目線を送ったが、敦子が答え

ると、それに続くように答えた。
「あら、敦子さんだって」
雅子はそういうと、敦子の方を見て、「名前で呼ばれてるの？」と訊いてきた。
敦子はそれには答えなかったが、直幸の言葉が何もかも物語っているのだ。
「それにしても、うちの子が一緒じゃ迷惑じゃありません？」
「いえ、そんなことは。とてもありがたいです」
「そうですか？　敦子ったら、話し始めると、止まらないでしょ？　勉強の邪魔にならないかしら」
「いえいえ、そんなことは。いつも楽しい話をしてくれて、いい気分転換になります」
直幸は大きくかぶり頭を振って答えた。
「そうですかぁ。この子ったら、本の虫で、そんな話ばっかりだから、退屈じゃないかと」
「そんなことはないですよ。いろいろ知ってて、ためになります」
そんなことは、が三度続いた。語彙の少ない直幸らしいが、これで会話が途切れないのは雅子の食い付きの強さだろう。
「ためになります、だって。よかったわね」
雅子は、敦子の方を向いて、ふふふと笑った。
「もう、お母さん、いいでしょ」
「いやぁ、ごめんなさい。まさか、敦子がボーイフレンドを連れてくるなんて思わなかったものだから」
その言葉に、直幸も敦子もどう応えていいものか、一瞬固まった。
結婚を申し込みに来て、ボーイフレンドを否定するのも変な話に思えた。雅子の言葉に敦子までが反論することができなかった。それは、そういう嘘がつけないほど、二人の認識が確信的なものだということを物語っていた。
「あら、やだ。本当なの？」
雅子は大きな口をあけて驚いた。黙ったままの二人を見て、雅子

はそれが事実であると察してしまったようだ。雅子は、若い二人を交互に見て冗談が真実であると認識した。
「冗談のつもりだったのに」
「もう、お母さんたら」
冗談だという雅子に敦子は笑って返したが、もはや繕えてはいなかった。
「この子ったら、本が好きでしょ。だから、男の人の話となると、本の中の人ばっかりで」
雅子はそういって、手招きするように手を縦に振った。
「探偵と結婚するとか、侍はすごいとか、冒険家って素敵とか。そんな話ばっかりして。そんな人、現実にはいやしないんですけどねぇ」
「もう、お母さん」
「あら、いいじゃないの。減るもんじゃないんだし。本当のことなんだから」
そう言うなり、
「それにねぇ、パリに行ってみたいとか、モンゴルがいいとか、南極に行ってみたいなんて。南極なんて、氷だけで何がいいのかしらねぇ」
雅子の話は湧き水のように次々と止め処なく出てくるのだった。
敦子は、止め処なく続く雅子の話題に戦々恐々としていた。
（お父さん、早く帰って来てー）
敦子は心の中で願うのだった。
これから両親に話そうという内容はこんなものではないのだが、そういうことを冷静に考えられないほど、浮き足立っていた。
雅子は饒舌で、朗らかな笑顔で話をするのだった。
直幸はそんな雅子のペースにすっかり乗せられてしまっていたが、明るくて優しそうな人だと思った。
そんなこんな話し込んでいる間に結構時間が経過したのだろう。
「帰ったぞー」

と、部屋の壁の向こう側から声が聞こえてきた。
「あっ、お父さんだ」
敦子は部屋を出ていった。
「主人が帰って来たようですよ」
雅子は、敦子が席を外したのを取り持つように説明した。
敦子に促されるように中年の男が部屋へと入ってきた。
敦子の父、清太郎は背が低く、中太りのずんぐりとした体型で、顔は丸く、頭は少し薄くなっていた。渋柿を噛んだような口元から、直幸には癖のありそうな人物に思えた。
「おお、母さん。ただいま」
「おかえりなさい」
「何なんだ、一体?」
「敦子が紹介したい人がいるそうよ」
雅子がそういうと、清太郎は直幸を一瞥して、再び雅子に尋ねた。
「誰だい?」
「敦子のボーイフレンドですって。敦子と同じ二年生だそうよ」
雅子はそういって笑ったが、それを聞いた清太郎は干し柿のように眉間に皺を寄せた。
「岡崎、直幸を言います」
清太郎がもう一度直幸に目をやると、直幸は挨拶した。
「ふーん、それで何のようなんだい?」
その言葉は、直幸に向けられたというより、雅子に向けられているように発せられた。
「まぁまぁ、立ったままもなんだし、お父さんも座って、座って」
敦子はそういって、清太郎を部屋の奥へと促すと、全員分のお茶を淹れ始めた。
敦子がお茶を淹れる間、それを待つかのように沈黙が続いた。
各人の前にお茶が用意されると、敦子は直幸の隣に少し離れた位置で、清太郎の斜め向かいに座った。
しばらく、沈黙が続く。

その異様な空気はどうしたことか、と雅子は敦子に目配せする。敦子も答えようがなく、対峙する二人の男たちを見つめるだけだった。

「ああ、そうそう、お菓子も出さなくっちゃ」

雅子は手を叩く。

「あっ、いいよ、そんなに気を使わなくて。そんなに長居するわけじゃないし」

沈黙に耐えられないといった風に立ち上がろうとする雅子を、敦子は制止した。

「そ、そう」

そういって雅子は座ったが、釈然としない様子だった。目の前の光景は明らかに尋常ではない。先ほどまでの賑やかさが嘘のように張り詰めた空気に戸惑うのだった。

敦子としては、雅子にこの場にいて欲しかった。直幸の言葉をしっかりと“二人”に聞いて欲しかったからだ。

この異様な雰囲気に、清太郎が気づいていないわけではないだろう。それでも清太郎は黙って直幸を見ている。見定めているのかもしれない。

そんな清太郎の姿に敦子は、大人の男性としての、そして、父親としての強さを見るようだった。

直幸は、初陣に出る若武者のように、正座したまま強く拳を握り、緊張した面持ちで黙り込んでいる。

敦子はそんな直幸を黙って見守るのだった。敦子は、直幸がしっかりと自分の力で両親に結婚のことを話して欲しいと思うのだ。

それは、彼女にとって重要なことだった。許可されるか否かではなく、直幸の覚悟を知りたいのだ。これから起こるであろう苦難を考えれば、その程度のことを乗り越えられなければ、あまりにも悲しいと思うのだ。

しばしの沈黙の後、制止した時間を打ち破って直幸が動きを見せた。

「敦子さんと結婚させてください」
直幸は、座ったまま、数歩ばかり後ろに下がると、平伏しながら言った。
敦子は胸がジンと響いて、胸が一杯で泣き出しそうになった。
清太郎と雅子は、ポカンと口を開けたまま、何が起こったのか、と直幸の方を見ていたが、その目に直幸は映っていなかったに違いない。
再び沈黙。今度は、まるで瓢箪のような、中味のない空気感が広がる。さっきまでの濃密な空気がどこかへ吹き飛んでしまったようだった。
それは、嵐の前の静けさだった。
何の反応も返って来ず、怪訝に思った直幸は頭だけを上げて様子を見た。敦子の両親は呆けたように動かなかったので、直幸はもう一声上げた。
「敦子さんを僕にください」
その一言が、清太郎を現実に推し戻した。
「ああ！　何いってんだ、おまえは！　敦子をくれだぁ！　ふざけるな！」
清太郎は言うなり、目の前の茶碗を直幸に向かって投げつけた。
茶碗は幸いにも頭を外れたが、肩に当たりまだ冷めないお茶が直幸を濡らした。
「お父さん！」
敦子は父の所業を非難すると、急いでお茶を拭き取った。
雅子はまだ呆然としていた。
「おまえ、何様だと思ってんだ！　高校生風情が何をぬかす！　馬鹿にするのも大概にしろ！」
「敦子、おまえもおまえだ。何なんだこいつは。まだ高校生で結婚もあるか！　そんなことのために学校通わせてるわけじゃないんだぞ！」
清太郎は、沈黙の間溜め込んだエネルギーを一気に放出させるか

のように怒りを爆発させた。
敦子は清太郎の暴挙に怒りを覚え、清太郎の方を睨んだが、何もいう言葉もなく直幸の介抱に気を戻した。
「出ていけ！」
直幸は動かった。俯いたまま、拳をグッと握り締めて何かに耐えているようだった。
敦子は、震える拳を見て取ると、そっと手を合わせるのだった。
「早く出ていけ！」
清太郎はさらに割れんばかりの大声を張り上げて怒鳴りつけた。
直幸は力なく立ち上がると、出口の方へとヨタヨタと歩き始めた。
「直幸さん！」
「敦子！」
清太郎は、直幸に呼びかける敦子を咎めた。
敦子は直幸を案じたが、直幸は「一人で大丈夫」と制して部屋を出て行った。
「放っとけ！」
敦子は直幸を追おうとしたが、清太郎は吐き捨てるようにそれを制止した。
その後、親の敦子は説教を受けることになった。
清太郎は怒りが収まらないといった風で、不満をぶちまけてばかりだった。
「ねぇ、敦子、あんたわかってるの？」
清太郎がやっと沈静化してきた頃に、雅子が口を開いた。
「学校はどうする気なの？」
「辞めるつもり」
敦子は俯いたまま答えた。
「そんなこと、絶対許さんぞ！」
雅子は、口を挟む清太郎を一瞥してから、言葉を続けた。
「辞めてどうするの？」
「働く」

「世の中そんなに甘くないぞ。第一、高校中退したやつを誰が雇う」
「どこか、ツテでもあるの？」
敦子は首を横に振る。
「はぁ～」
雅子は大きな溜め息をついた。
「ねぇ、敦子。悪いことは言わないから、考え直しなさい。先方の親御さんだって、きっと反対するわよ。働いて、生活するってことはそんなに簡単じゃないのよ」
雅子はゆっくりとした口調で諭した。
敦子は俯いて黙ったままだった。雅子に言われることは、言われなくてもわかっているつもりだった。それでも、直幸はきっと飛び出すだろう。そう考えると、無茶だから、と簡単にやめる気にはなれない。
しばらく沈黙が続いた後、雅子は「よ～く、考えなさい」と反省を促した。
敦子は一言、「ごめんなさい」と言ってその場を離れた。

「あいつは、どうしてる」
清太郎は敦子のことを尋ねた。
「まだ、部屋ですよ」
「まったく、何を考えてるんだか……」
清太郎は大きく溜め息をついて漏らした。
「学校を代えるか？　あるいは辞めさせるか？」
「え？」
「敦子だよ。このまま通わせるわけにもいかんだろ」
「いくらなんでも、そこまで……」
「あいつと同じ学校になんか、行かせられるか」
「でも、今更……。他の友達だっているんですし、せっかく二年間やってきたんですから」
「ふん。あーあ、こんなつもりで高校まで通わせたんじゃないんだ

がなぁ」
「あの子だって、反省してますよ」
清太郎は、雅子を一瞥すると、「あいつはどうしてる？」と尋ねた。
「あれからずっと、部屋に篭りきりですよ」
「まったく、あの馬鹿は逆上せ上がりおって」
「まぁ、若いんですから、夢中になるのも仕方ないですよ。」
清太郎はその言葉に呆れかえった。
「そうは言っても、まだ高校生だぞ。いくらなんでも、結婚てのはないだろ」
「あの子だって、そんなに馬鹿じゃないですよ。今はただ、気持ちが昂ぶって勢い余っただけですよ」
雅子は内心、そうでなければ、と思った。
「まったく、困った馬鹿娘だ」
まさか、こんな馬鹿なことをする娘ではないだろう、と思っていたから、清太郎は呆れ返るやら、情けないやらで遣る瀬無い気分だった。
「とにかく、辞める、辞めないはともかく、しばらくは学校には行かせないようにしないとだろ」
雅子はそれには答えなかったが、その程度は仕方ないだろうとの気持ちがあった。

数日後、敦子は登校を許された。
敦子は親に登校を禁止された時も、決して反論しなかった。両親の反応は至極当然で、それに対して憤りを感じることはなかった。父親が直幸に茶碗をぶつけたことに怒りを感じはしたが、それ以外で親を責める気には到底なれなかった。
ただ、とても悲しい気持ちにはなった。結婚が反対されることは

予測できたことだし、それは親として当たり前の反応であると思えた。けれど、心のどこかに期待するものがあったのかもしれない。だから、親の態度に落胆してしまったのだ。

敦子の家庭は円満だった。敦子も雅子も明るい性格だったから、家庭内はいつも笑顔が絶えないというほど穏和な関係だった。

敦子は両親を好きだったし、直幸のことも愛していた。だからこそ、両者を失うことが辛かったのだ。

けれど、それが実現不可能な願望であると知らされた。敦子が清太郎たちに反抗しなかったのは、そうした現実に失望していたからでもあった。

あの日以来、清水家は日が沈んだように暗い雰囲気に包まれていた。

登校を禁止したものの、落ち込んだまま元気のない敦子に見兼ね、清太郎は根負けした形で敦子の登校を許したのだった。

清太郎は「あいつのことなど忘れてしまえ」と発言するなど、直幸を非難する言葉を浴びせることもあったが、愛娘の異変に心傷める部分もあった。

「元気そうで良かった」

久しぶりに敦子に会った直幸はそういったが、明らかに元気がないことは一目見てすぐにわかった。

そんな敦子の姿を見て、直幸は諦めの気持ちを強めた。

「辞めよう」

「えっ？」

「街を出るのは、僕だけでいい」

敦子は、直幸を凝視した。

「やっぱり、君を連れてはいけない」

「どうして？」

「君のご両親も、反対してる」

直幸は一息ついて、言葉を続けた。

「君の家は、僕のところとは違う。君は親とも仲がいいんだろ。君

の親も君の事を大事に思ってる。それを無理やり連れ出すようなことはできない」

直幸の顔には苦渋の表情が滲み出ていた。

「……して。どうして、一緒に来いって言ってくれないの？」

「どうして、無理やりにでも連れて行くって言ってくれないの？」

敦子は悲しかった。直幸の言葉が悲しくて仕方なかった。

「あの岬での言葉は嘘だったの？　お父さんに打ち明けた時の勢いはどこへいったの？　どうして、どうして……」

敦子は直幸の胸を叩いた。敦子の目からは涙が流れ落ちていた。

「私は、行くって決めたのよ。あなたと一緒になるって決めたのよ。あなたと一緒に生きようって。どうして言ってくれないの？　どうして腕を掴んででも、攫ってでも、私を一緒に連れて行こうとしてくれないの？　私のこと好きだって言ってくれたよね？　結婚したいって言ってくれたよね？　あれは嘘だったの？　……答えてよ。ねぇ、答えてよ」

敦子は直幸の顔をまっすぐと見つめ、そして何度も直幸を揺さぶった。

敦子の真っ直ぐな想いに、直幸もまた、いつの間にか涙を流していた。

「ごめん、ごめん」

直幸は、敦子の頭を胸で抱くと、嗚咽気味の声で搾り出すように言った。

二人は抱き合ったまま、涙を流すのだった。

（失いたくはない。この温もりは失いたくはない）

直幸はそう強く思うのだった。そして、何よりも、彼女を何としても幸せにしなければならないという想いを抱くのだった。

いよいよ、旅立ちの日がやってきた。

敦子は手で持てる程度に荷物をまとめ、家を出た。
「どこか出掛けるの？　まさか、あの人のところじゃないでしょうね？」
身支度をする敦子を見て雅子は見事に的中させたが、敦子は友達のところ、と言って誤魔化した。
「気分転換よ、気分転換。ここのところ、落ち込んでたから、気を使ってくれてるんでしょ」
そう言い訳したが、胸は痛んだ。
雅子は「そお」ととりあえず納得した様子だったが、玄関先まで敦子を見送ってきた。
「本当に、大丈夫かねぇ。あんまりご迷惑になるんじゃないよ」
雅子はそういって心配そうに送り出した。
敦子は、大丈夫だから、といって母親を家の中へ引き返させた。
その後、敦子は家を少し離れてから、じっと家の方を見詰めた。
それが今生の別れなのかわからない。けれど、もうこの先当分のこと、会うことはないのだろう。そう思うと、このような別れ方をしなければならないことはとても辛いもので、胸が締め付けられるようだった。
（お母さん、お父さん、ごめんなさい……）
敦子は、目頭が熱くなるのを感じて、グッと歯を食いしばって我慢すると、駅に向かって歩き始めた。
風は、敦子の後ろ髪を引くように吹き荒ぶのだった。

直幸は、敦子が両親と会うことを拒んだが、敦子は強く希望した。
敦子は、直幸が自分の両親に挨拶をしたように、自分にもその義務と責任があると強く感じていた。
そして、それは敦子の覚悟と決意の表れでもあった。
直幸はしぶとく渋ったが、玄関口で挨拶するくらいならいいだろうと了承した。
敦子が直幸の家に到着したのは日沈を迎え、空がわずかに赤みを

帯びている頃だった。
「ごめんください」
敦子が声を掛けると、奉公人がやってきた。
「ああ、えーと、直幸坊ちゃんのお友達の方ですね」
奉公人の女性は敦子を覚えていたらしく、そういって直幸を呼びにいってくれた。
次いで現れたのは史乃だった。
史乃は、奉公人の女性から来客を聞き、玄関まで足を運んだのだった。
「あら、あなたは清水さんといいましたか」
「はい、清水敦子です」
敦子は荷物を持ったまま一礼した。
「こんな時分に何かようですか？」
史乃は疑問をそのまま言葉にして表した。
「直幸さんと、約束しているので」
敦子はなるべく本題を出さないように努めようとした。一応、直幸と相談して、直幸が自分で紹介するということになっていたからだった。
「そうですか。ずいぶん、大きな荷物を持っているのですね。どちらかにお出掛けだったのですか」
史乃は敦子を見定めようと鋭く視線を巡らせ、しっかりと観察しているようだった。
「ええ」
程なくして、直幸が駆けてきた。
「なんですか、ドタバタと」
史乃はそう言って直幸を見ると、直幸もまた大きな荷物を持ち出してきた。
「直幸さん、どこかへ出掛けるんですか？」
靴を履いている直幸に向かって、史乃は声を掛けた。
「ええ」

直幸は、靴を履き終え、荷物を持ってから答えた。
「この家を出ることにしました」
「？」
史乃は直幸が一体何を言っているのか、すぐには理解できなかった。
直幸はそんな史乃を放ったまま、さらに矢継ぎ早に言葉を繰り出した。
「それと、僕はこのひと女性と結婚します」
「？　直幸さん、何を言っているのですか？」
史乃はやっと直幸の口から発せられた言葉を理解したかのように、今度はその真意を尋ねてきた。
「直幸さん。どういうことなのですか？」
直幸は史乃に構わず、敦子を促した。敦子が一礼して玄関を出ると、直幸もそのまま玄関を出て行った。
「直幸さん！　どういうことなのか、説明しなさい」
「直幸さん！」
「今からどこに行こうというのですか？」
「一体、何がどうなっているのですかっ！」
「直幸さん、お待ちなさい」
史乃は何度も声を上げたが、直幸は振り向くどころか、足を止めることさえしなかった。
史乃は我も忘れ、白足袋のまま冷たくなった地面に踏み出していた。
駆け出せば、歩いている直幸に追いつくことはできただろう。しかし、混乱していた史乃にはそれができなかった。
それは、史乃が事態の重大さをまったく理解できないでいたからだった。常識的な史乃にとって、直幸の突然の奇行は瞬時に理解できないほど史乃の常識の枠を飛び越えたものだった。
史乃は、直幸たちが家の門を出て姿が見えなくなるまで見詰めていたが、途方に暮れ、何もできなかった。

「お父様は？」
直幸たちが門を離れた頃、敦子は訊いた。
「まだ帰ってない。仕方ないさ、仕事に忙しい人だからね」
直幸はそういうと、それ以上話さなかった。
敦子も、それ以上触れることはしなかった。
正直なところ、直幸も幸三にも伝えておきたい気持ちはあった。親子の袂を分かつ意味でも、必要なことだっただろうと思った。だが、しなかったからといって、それほど問題とも思わなかった。むしろ、そういう都合をつけている間に時間が過ぎることの方がよほど嫌だった。
すっかり冷えてきた寒風に、直幸も敦子もグッと身を縮こませるのだった。

夜中のホームはほとんど人気のない状態だった。
隣のホームのずっと先の方で歩いている人の足音が響いてくるほど、静かだった。
直幸と敦子は、人気のないホームのベンチに身を寄せるように座っていた。
夕食は駅近くで簡単に済ませ、それからずっと、列車の訪れを待っていた。
駅の待合室で体を休めることもできた。だが、二人はそれをしなかった。二人とも、声に出して伝えたわけではなかったが、なんとなくこの場に足が進んだ。
夜も更けてくると、流石に屋外にいるのは辛かった。吐く息は白く、風は身を刺すように冷たかった。
それでも立ち去ることなく二人、体を寄せ合っているのは、お互いの温もりだけが、二人を温めることができるからなのかもしれない。そんな二人を、ホームの明かりが照らし、ささやかばかりの熱を与えた。
二人はいくつかの言葉を重ねては、また口を閉じた。そんな時間

がどれほど過ぎたのだろうか。ホームの傘の合間から、なにやら白いものが待っているように見える。それは駅の光に照らされて、淡く煌めいているようだった。

「雪……かしら」

直幸は、敦子の声に、空の方を見上げた。

ホームの屋根で空を見通すことはできなかったが、それは確かに空から降ってきているようだった。

それは、雪なのか、雪でないのか。

その答えは、二人にとってさほど重要ではない。ただ、こうして何かに捉われている間は少し、寒さを忘れられそうな気がした。

二人はしばらくその様子を見ていた。直幸も敦子も覚悟はできていたはずだった。それでも、不安が湧いてくるのは二人の未熟な考えゆえだろうか。それとも、寒さに凍えているため弱気になっているのだろうか。

ただ、不安に心を支配されないためには、考えてはいけない。考えてしまうと、不安に思えてくるから。

今はただ、ぼんやりと列車が訪れること待っていた。そして、明日が来ることを。

白い綿毛はヒラヒラと風に舞い、屋根をも抜けて漂っている。

そのほわほわとした塊は敦子の外套に舞い降りた。

よく見れば、白い斑紋は幾つもできていた。

「あっ、雪虫」

その声に、直幸は目を凝らした。

「ああ、ほんとだ」

雪虫は、アブラムシの一種で、まるで綿のような白い毛のようなものが何本も生えている。これは綿ではなく、蝋だという。地元では、この虫が飛ぶと初雪が近々降ると言い伝えられていた。

直幸と敦子は空を見上げて、ほうっと白い息を吹いた。

やがてここには雪が降るだろう。そして、青森は本格的な冬を迎える。

――僕たちは、
私たちは、
氷と雪に閉ざされる前に、
未来へと旅立ちます。

そこにはきっと、新しい何かが待っている――

今は、未来を信じるしかない。二人は不安を振り払うように、そう胸に誓うのだった。

直幸は敦子の頭に手を置くと、胸に引き寄せた。

敦子は直幸を見上げると、心地良さそうに直幸の胸に体を預けた。

やがて、ホームに光の玉が滑り込んできた。

闇に包まれた車輌は、ホームの明かりに照らされ、深い藍色に光る。

寝台特急「はくつる」。青森―上野間を結ぶ、夜行列車である。

先月に「北上」が格上げされる形で運転開始されたばかりの、東北交通の新しい顔だった。

駅のアナウンスが聞こえる頃には、どこから湧いてきたのだろうか、ぽつぽつと人影が見えた。皆、夜汽車を待っていたのだろう。

二人は長い間じっとしていて、随分と眠気に包まれてしまった。

重い瞼をこじ開けるように力を込めると、凍えた体を起こした。

荷物のずっしりとした重みが二人を現実に引き戻す。

「ふあああ」

寝台列車の青い扉の前で直幸は欠伸をした。敦子と体を寄せ合っていてすっかり気が緩んでしまったのかもしれない。

「ふあああ」

敦子は、直幸の眠そうな顔を見ると、同じように口を開けて真似た。

「ふふふふ」

敦子は冗談めかして笑った。
「ははははは」
直幸もつられて笑った。
二人一緒になんだが元気が湧いてきたようで、意識もはっきりとしてきた。
シュー、ガガガコンッ
扉が開くと、そこは新世界。
直幸は緊張するのがわかった。
（これが、新しいスタートラインだ）
ホームと車輌のわずかな隙間が強く意識された。何か、とても大きな隔たりがあるような錯覚を覚える。
直幸は、深呼吸すると少し大きくその一歩を踏んだ。
敦子も同じ気持ちなのだろう。その歩みには、いつになく確かな手応えがあった。
寝台車輌は、淡いクリーム色の光に照らされていて、真新しい感覚だった。
直幸も敦子も寝台特急は初めての経験で、胸が小躍りするような興奮を覚えた。
「ベッドがある」
当たり前のことだが、口にせずにはいられない。
二階建てのベッドを見ると、子どもに戻ったように目を輝かせるのだった。
二人は乗車券を見ながら、席の番号を確認して回った。
席探しも何だか宝探しのような気もしてくる。二人はどれどれ、と番号のプレートを覗き込むのだった。
「あった」
二人は、自分たちの席を見つけても落ち着かなかった。
梯子を組んでみたり、二階に登ってみたり、ベッドの具合を確かめたり、短い間によく動くものだった。
「二十三時四十分発、寝台特急『はくつる』号、上野行。まもなく

発車いたします」
駅のホームに流されたアナウンスが聞こえると、二人は急に静まり返った。
いよいよだという気持ちが、緊張を高めた。
ガガガゴトンッ
遠くの方で音が聞こえた。
二人は、それが列車の扉が閉まる音だと解した。
ガトンッという小さな揺れと共に、いよいよ列車が走り始めたことを知る。
車窓はゆったりとした動きで流れていく。それは徐々に速度を上げ、やがて、ホームの光を通り抜け、真っ暗な青森の街へと飛び出していった。
敦子は感極まったのだろう。いつの間にか、涙を流していた。それは惜別の涙だった。大好きだった父と母、そして、自分を育んでくれた多くの者、街。
（悲しいわけではない。辛いわけでもない。じゃあ、何で私は泣いているの？）
敦子は、涙に気づいて思うのだった。
直幸は、敦子の手を握った。
「ごめんなさい」
敦子は、直幸に謝ると涙を拭った。
直幸は、そんな敦子の肩を抱き、手を握り締めた。
直幸にも敦子の気持ちがわからないでもなかった。
これが故郷を離れるということなのだろう。直幸はジワジワと湧き立つ、言い知れぬ愁いを感じるのだった。
幸はこの街を嫌っていた。家族も、学校も、自分の周りのものがとても嫌なものだと思っていた。
それなのに、何故なのだろう。直幸は、心の一部がなくなったような喪失感を感じるのだった。
と、直幸の瞳から一筋の涙が流れ落ちた。

「あれ？」
その声に、敦子は直幸の顔を見た。
直幸も同じ気持ちなのだろう。そう思うと、切ない気持ちが込み上げてきて、敦子は直幸の手を握り返した。
直幸は決して戻りたいと思っているわけではなかった。未練があるわけでもなかった。それでも、生まれ育った地を離れるということは、人に言い知れぬ想いを抱かせるものなのだろう。
蒼き列車は、真夜中の街を走り抜けていく。見えないレールを踏みしめながら。
誰にも明日は見えないかもしれない。けれど、そこには確かな道がある。
二十三時四十分。
まもなく明日を迎えようという深夜、――明日を夢見る者。昨日を愁える者。多くの人たちと、その想いを乗せて――、寝台特急「はくつる」は一路、上野を目指すのだった。

幸三は、史乃の話を聞いて激怒した。
その怒りはやり場を失い、結局史乃に矛先が向けられた。
史乃は幸三の叱責をただ、「すみませんでした」と言って受けるのだった。
幸三の怒りは頂点に達し、「勘当だ！」と叫び上げたものだ。
それでも、当の怒りの対象がいないのであれば、やり場に困るしかない。史乃に当たったところで埒が明かなく、結局、不完全燃焼ということになった。
その後、史乃も幸三も口数が減った。
幸三は苛立ち、常に不機嫌であった。それを紛らわすかのように幸三は仕事に没頭した。家にいても、直幸のことを思い出してしまい、苛立つばかりなのだ。それでも、岡崎家の人間として、我を張

っている部分はあり、できるだけ外には見せなかった。
史乃もまた、人前では決して弱気なところを見せようとはしなかった。
だが、日にちが経てば経つほど、現実が重く圧し掛かって来るのだった。史乃は頭の中がグワングワンと音を立てて揺れるような感覚でふらつくようになった。
天涯孤独となった史乃は、この地で再び家族の血を残そうと必死で努力してきたつもりだった。夫、幸三の好意もあり、生活は安定し、直幸を育てることに腐心できた。
そうして心血を注いだ直幸は、まさに史乃の希望であり、生きがいであったのだ。
それが泡と消えたのである。史乃の心持ちは想像に余りあるものだった。
史乃の覇気は目に見えて衰えていた。それでも平静を保とうとする史乃を、奉公人たちは痛々しそうに見ていた。
岡崎家はまるで、明かりが消えたように活力を失ってしまったのである。

清水家が変事に気づいたのは、数日後のことだった。
敦子は帰らず、連絡すらなかった。その事態に違和感を覚えた清太郎たちは、学校に確認したが、敦子を泊めている学生はいないという回答だった。
清太郎も雅子も顔を真っ青にして警察に捜索願を出したものだ。
清太郎は、直幸と駆け落ちした可能性を懸念したが、雅子は事故や事件の可能性も疑った。そこには、敦子がそんな馬鹿なことはしない、親を放り出すようなことはない、という想いがあった。
事故や事件も充分に危険なものだが、それよりも、どうしても敦子の“裏切り”が信じられなかったのだ。雅子も敦子と仲がいいと

思っていたし、良い親子関係が築けていると勝手に思っていた。

清太郎と共に敦子を叱った時も、敦子は「ごめんなさい。」と謝っていた。それが駆け落ちしたなどと、雅子は信じたくなかったのだ。

清太郎はむしろ逆で、直幸にすべての責任を押し付けることで怒りの照準を固定していた。

とはいえ、まだ駆け落ちと断定できるわけでもなく、とりあえず市内の捜索から始められた。

清太郎も雅子も気の休まる時がなかった。

愛娘の失踪は、穏やかだった清水家の日々を打ち砕いた。

電話が鳴るたびに飛びつくように出て、物音がするたびに家の中を確認して回った。静かな時はもっと悲惨で、静かであればあるほど心はおかしくなりそうだった。

捜索が県内全般に広げられるようになっても、敦子を見つけ出すことはかなわなかった。

警察から「自殺の可能性」という不用意な言葉を聞かされた時には、雅子は危うく卒倒するところだった。

時はすでに、数週間を経過していた。

そんなある日、雅子は敦子の部屋に入っていた。

最初のうちはほぼ毎日入っていた敦子の部屋もここ数日入っていなかった。敦子の思い出が沁み込んだこの部屋にいると、敦子が思い出されて辛かった。

冬の訪れと共に、山は白化粧していた。

もしも、山中に入ったとなれば、捜索は極めて困難で、生存の可能性は薄いと考えられた。自殺の根拠もなく、市街を中心に捜索が進んでいたが、一向に進展はなかったのだ。

失踪からかなりの時間が経過し、雅子はある程度落ち着きを取り戻していた。もちろん平静とはいかなかったが、落ち込んだり、眩暈を起こすようなことは少なくなっていた。

それは、母の強さゆえかもしれない。気持ちの動揺は軽減してい

て、忍耐力がついたようだった。
とにかく敦子を見つけ出すのだ、という強い想いが雅子の支えであった。
雅子は部屋を見回した。
そして、ふと、引き出しに手を掛けた。
「絶対、開けちゃ駄目だからね」
不用意に開けた雅子に敦子は叱ったことがあった。
(そうだったわね……)
雅子は、敦子の言葉を思い出すと、それとは逆に引き出しを引いた。
そう、引き出しとは、心の中と同じ。その人の隠れた想いが形となって現れていることもある。だから、敦子は怒ったのだろう。
(女の子なら、秘密の一つや二つ、あるものね)
雅子は、敦子が怒った時、どことなく嬉しさも湧いたものだった。
雅子はその時の想いを思い出して、わずかに口元の緩ませた。
引き出しの中には、封筒が入っていた。
「お父さん、お母さんへ」と書かれていたから、それが手紙だろうとすぐにわかった。
雅子はすぐに清太郎を呼ぶと、封筒のことを教えた。
「遺書じゃ……なかろな」
雅子は、清太郎の思わず上げた声に、馬鹿いいなさんな、と窘めたが、不安にならないわけがなかった。
雅子は隣の引き出しからはさみ鋏を取り出すと、一気に封を切った。
「おお、手紙だ」
清太郎は改めて、当然とも思えることを口にした。

『 お父さん、お母さんへ

私は、お父さんが大好きでした。
私は、お母さんも大好きでした。
私は、この家が大好きでした。
大好きだったけど、別れなければならなくなりました。
それは、大好きな人が現れたからです。大好きな人と旅立つからです。
私が大好きな人の名前は、お父さんも、お母さんも知ってますよね。
そう、岡崎直幸さん。
私は、直幸さんのことが好きです。大好きです。愛しています。
だから、あの人の苦しみを一緒に分かち合いたい。支えになりたい。
そして、あの人と一緒に嬉しさを分かち合い、楽しさを分かち合いたい。
直幸さんは少し頼りないところがあるけれど、とても真面目で、そして優しい人です。
私は、そんな直幸さんが大好きです。
未熟かもしれない。甘えてるかもしれない。愚かかもしれない。
それでも、私は直幸さんと一緒の人生を歩みたいのです。
本当は、お父さんのことも、お母さんのことも大好きだったから、二人に認めてもらえたらいいなって思ってました。
でも、それは虫が良過ぎですよね。
だから、お父さんとお母さんとは、さようならです。
私は、直幸さんと生きていきます。そして、幸せになります。
こんな親不孝な娘でごめんなさい。愚かな娘でごめんなさい。
許して欲しいなんていいません。でも、直幸さんを責めないであげてください。
そして、信じてください。私たちは幸せであると。
　もし、もしも許してもらえるなら、いつか、遠い未来に孫の顔を見て欲しいです。
本当に勝手だけれど、私たちは旅立ちます。
決して追わないでください。

大好きなお父さん。
そして、大好きなお母さん。
私は幸せでした。
私は二人の子どもで良かったです。
今まで育ててくれて、本当にありがとう。
もうじき冬です。
お父さんもお母さんも、体に気をつけて長生きしてください。
さようなら

敦子　より』

清太郎も雅子も、敦子の名を呼びながら咽び泣いていた。
手紙を読み終わると、二人は肩で抱き合って泣いた。

その後、敦子の捜索は打ち切られたのだった。

第三章

寝台特急「はくつる」号は午前一一時〇五分、定刻どおりに上野駅に到着した。

直幸と敦子は、ガラス戸に引っ付くようにして、到着までの時間を過ごした。

外の光景は二人にとって大きな衝撃であった。テレビでオリンピック放送の合間に東京や日本の近代化についても目にすることができたが、ブラウン管の向こう側のわずかな映像では量りかねない現実を今二人は目の当たりにしていた。

密集した建物の群れが、一体どこまで続くのかというように広大な土地を埋め尽くしているのである。しかも、上野に近づけば近づくほど、それはさらに重厚な装いを強くした。

まったく、とても一日で来てしまうような距離にある、同じ世界とは思いがたい気持ちにさえなる。それが東京という街の姿だった。

ホームに下り、改札へと向かう途中も衝撃を受けることばかりであったが、その人の多さにはさらにびっくりせざるをえなかった。一体どこから溢れてくるのか、と思うほどの人、人、人、なのである。

二人は呆けたようにフラフラと駅構内を歩き、明るい光が差す方へと向かっていった。

二人が出てきたのは上野駅の公園口であり、すぐ目の前に並ぶ樹木は上野恩賜公園を囲む並木だった。

あれほどのコンクリートと金属の塊のような車窓からの風景からすると、何とも不自然な感じのする、外の光景だった。

上野恩賜公園といえば、国立博物館などが敷地内に整備され、恩賜上野動物園もある公園施設である。上野動物園といえば知らない人はいないというほどの有名な動物園だった。動物たちが戦時処分された話は、人々の涙と戦争に対する忌避意識を誘うのに充分で、

その後、象がやってきた時には大きな盛り上がりを見せた。
その上野公園の隣には、東京大学がある。東京大学といえば、かつての東京帝国大学、すなわち太宰治の通った母校でもあり、日本最高峰の学び舎である。
上野公園を眼前に、二人は興奮せずにはいられなかった。できることなら、今にもここを飛び出して、公園を散策し、博物館を見て回り、動物園を巡遊したいものだった。
そんな感動が、本当に東京にやってきたのだという実感を強めるのだった。こうしたあたり、二人のまだまだ幼い部分だった。
そんな興奮で忘れてはならない。
駅に着いたはいいが、右も左も当然わからなかった。さて、これからどうしたものか。
まずは、働き口を探さなければならなかった。しかも、住み込みか、寮を完備するような場所である。
今は、この興奮を一時忘れなければならない。
「いつか、来ようね」
目の前に広がる楽園を前に少しばかり惜しい気もするが、それでも今は、それどころではない、のだ。そう言い聞かせて、これからのことを考える。
それでも、この地に足を踏み入れ、これから暮らしていこうというのである。
無論、まだ東京と確実に決まったわけではない。けれど、果ての青森に比べればいくらでも機会は巡ってくる可能性があった。
その気持ちがあったればこそ、しっかりと前を向く気にもなれた。
「ちょっと待ってて」
直幸は駅員に何か尋ねるつもりのようだった。
それでもなかなか手が開かない。
青森のように、簡単には駅員の手は止まらなかった。
こうして見ていると、本当に別の場所に来たのだという気になる。
建物は小ぎれいで、しっかりとした鉄筋コンクリートの柱が何本

も立っている。その柱を縫うように人々は湧いて出てくるのだ。

電車の音も、寸暇もすれば聞こえてきて、また去っていく。青森では考えられないことだった。

青森ならば、一本の電車が過ぎれば、しばらく改札は寂しいものだ。改札に座り込んでちらほらとやってくる乗客を待つのだ。朝と夕方の時間だけが、駅の活気のある時間といえた。

無論、それは東京とて基本的には変わらない。だが、その規模が違うのだ。田舎の人間からすれば、休みなく動き続けているように思う。不夜城という言葉があるが、よく言ったものだと思う。

敦子は、これから新しく暮らす街が一体どんなところなのか、胸の中が疼くのを感じるのだった。

改札の方へ目を戻すと、直幸がこちらに歩いてくるのが見えた。

「出口はあっちだって」

直幸は駅の内部の方を指差した。どうやら、逆側の出口に来ているらしい。

直幸たちは、駅構内を今来たのとは逆方向へと歩いていった。

「東口、東口、と」

直幸は案内表示を見落とすまいと頭を上げた状態でキョロキョロと辺りを見回す。敦子も倣うように天井の下あたりに視線を巡らす。

二人共、上にばかり意識がいっていて、どうにも前方が疎かになってしまう。前から歩いてくるビジネスマン風の男にぶつかりそうになり、直幸は「すいません」と謝った。

大きな荷物を抱え、右往左往するような挙動の二人は、周囲の通行人から見て、明らかに遠方からやってきた上京者であるとわかる。そんな二人の足取りはどこか不安げで、頼りないものだった。

やがて、目標とする東上野口に出た。

直幸たちが目指す職業安定所は浅草通りを東へ数分も歩いた辺りにあるという。実際には上野警察署より少し先の区画になる。

上野駅の東側は、西側とは全く違う様相を呈していた。むしろ、西側の樹木が立ち並ぶ光景こそが例外であり、東側の方が東京らし

い光景といえた。

駅出口のすぐ前には地下鉄銀座線、日比谷線の入り口が顔を出している。構内案内にもあったが、地下鉄という響きは直幸たちには現実味のないものだった。

地下鉄とはすなわち、地下をくり貫いたトンネル内を走る鉄道のことだが、まず、この地面の下にトンネルを掘り、そこを走るなど想像できない現実だった。

炭鉱のトロッコ電車でも想像すればいいのだろうか。

直幸らにとって、それは大いに興味深いものだった。

敦子は地下鉄への通路口を指差して、興奮の声を上げたものだ。直幸としても、同様に衝撃的なものであった。それが、第一歩の地、上野で目にしたことは、彼らの東京の印象に大きな影響を与えるものだった。

浅草通りは、東に抜けると下町の情緒を残す浅草界隈にまで通じる。有名な雷門もこの浅草通りに面した通りを北へ進めばすぐのところだった。

浅草通りの名から、まず連想されるのはやはり浅草であり、その雷門であった。まるで、テレビの中に出てくるような言葉と連想されるイメージに二人の心は否応なく興奮してしまうのだった。

浅草通りも、上の周辺は浅草界隈のような情緒はない。大きな道路には無数の自動車が引っ切り無しに走り、道路を囲む建造物は、まるで巨大な城壁のように聳え立ち、道路の先まで延々と続いている。

その建物は、白や灰色といった人工的な色合いが多く、その上に派手で賑やかい原色の看板が立ち並び、色彩を加えていた。

直幸も敦子も、その光景を見るだけでお腹一杯になりそうな、そんな異境の景色に驚かされ、歩くのに飽きなかった。むしろ、真っ直ぐ歩いていればそれほどでもないところに、随分と時間を掛けたものだ。

上野職業安定所は意外に混雑していた。直幸たちが受け付けてか

ら呼び出されるまではしばらく待たされることになった。それでも、高校生であった直幸と敦子は職業安定所など初めての経験で、色々とキョロキョロと周りを見回して様子を観察したものだ。

直幸たちが呼ばれ、カウンターへと足を運んだ。

直幸たちを担当したのは、中年の小柄な男性だった。広くなった額が脂汗でテカテカと光る赤ら顔で、眼鏡を掛けていた。ワイシャツにネクタイ、腕には真っ黒いアームカバーを嵌めた風体は、役場の事務職員といった印象だった。名札には鈴木とある。実に覚えやすい名前だ。

その職員、鈴木はカウンターの前に立つ直幸たちを上目遣いに見た。

目の前には若い男性。その後方に控えるのは連れだろう。これまた若い女性だった。大きな荷物を抱えていることから、遠方から出てきたものだとわかる。

若い男女の二人連れが大きな荷物を持ってやってきた。それはつまり、ワケアリということなのだろう。

それにしても若い。一〇代半ばか、その少し上か。どちらにしても、若い二人である。鈴木は心の中で駆け落ちでもしてきたか、などと囁いた。若い連中が珍しいわけでもない。東京に憧れる若者たちは多いものだ。鈴木はほとんど冗談のつもりで、少しばかり大げさに捉えた上での話だったが、実際、その鈴木の予想は的中していた。

「どうぞ、腰掛けて」

鈴木は、座ったまま手を差し伸べて、席に座るよう促した。

直幸と敦子は荷物を席の隣に置くと、並んで座った。

「まず、こちらの方に記入をお願いします」

そう言って用紙を手渡した。

二人が書類に記している間、鈴木はいつものように、職業案内所のしおりや冊子類をまとめ、片付くと、手元の仕事を処理して時間を割いた。

「できましたか？」
鈴木は、二人がペンを置くのを確認して声を掛けた。
鈴木が書類に目を通している間、直幸も敦子も黙ったままじっと鈴木の方を見ていた。その時間はとても緊張するものだった。
「えー、岡崎直幸さんと、清水敦子さんですね？」
鈴木は記載事項の確認のため、二人に尋ねた。
「ほう、二人とも青森から」
「はい」
「これはまた、遠いところから来ましたね」
そういわれると、直幸も敦子もなんとなく気持ちが緩むものがあった。
こうして少しばかり話を逸らしたり、感想を言ったりすることで相談者が心を許しやすくすることを鈴木は経験的に知っていた。業務の性質上、嘘をつかれると苦情が来て色々と面倒なのだ。
労働局の出先機関であるし、労働省の管轄でもある職業安定所が潰れる心配はないが、それでもクレーム処理というのは気持ちのいいものではない。特に、出稼ぎや若い連中というのは何かしらの事情を抱えている者もいて、それを隠す者もいるから一応の注意をしておいて悪いことはない。
同郷の男女二人連れとなれば、いわくありげに見てしまうのも職業柄致し方ことだろうと鈴木は思うのだった。誰も、好き好んで詮索などしたくないものだ。
「ん、電話番号は？」
その指摘に直幸たちは焦った。
「あっ、それはその、メモを無くしてしまって……」
「あ、あの、私のうちは貧乏で、電話もなくて……」
鈴木は少しばかり二人の顔色を窺った。思わず苦笑してしまいそうなのを何とか抑えるのだった。
敦子の身なりを見る限り、それほど酷い出で立ちではなさそうだ。いくらなんでも、電話がないほどとは、と思わずにはいられないが、

ことは青森のこと、東京と比べればずっと田舎の街のことである。あるいは、青森では本当に電話がそれほど普及していないのかもしれない。

鈴木の脳裏をそんな想いが立ち込めたが、その追及は詮無いように思えた。一方で、二人の態度から“訳アリ確定”であることを実感するのだった。

「青森高校。高卒ね」

「就労経験なし……と」

鈴木は少しの間黙って、再び直幸たちに尋ねた。

「卒業後は、何をしてました？」

「え、あー」

直幸も敦子もそこまでは考えていなかった。

高校中退では就職に響くだろうということで、仕事を探す上では高校卒ということにしようということになった。

だが、そうすると確かに卒業した四月以降、空白ができてしまう。

「その、就職できなくて……、家の手伝いを……」

「えー、清水さんの方は？」

「同じです」

二人は項垂れるようにして答えた。

鈴木は、少なくとも、直幸の家事手伝いというのは違うかな、などと推量したが、それはさして問題とはしなかった。

「希望職種は無し。時間、給料も特に希望無し」

もっとも、二人の状況を考えれば、それらの希望をどうこう言えるような状態ではないのだ。

「希望が、住み込みか、寮ねぇ」

鈴木は二人を一瞥してから再び質問してきた。

「近くに親戚とかはいないです？」

「いえ」

直幸も敦子も、首を横に振って答えた。

鈴木は、心の中で、だろうな、と思うのだった。遠隔地から訪れ

る出稼ぎ労働者の中には往々にしてそういう者がいた。少しでも余裕のあるものはアパートを借りることもできたが、縁者の当てもない状況では住み込みや寮完備といった環境は非常にありがたいものだった。

　まして、直幸たちのような未青年ではアパートを借りるのも困難である。大家は、実質的に親たちと契約するのであって、親の経済力を信用してのものである。そう安易には住まわせてくれないだろう。

「ここに来たのは、何か当てがあって？」

「いえ」

　直幸がそう答えると、鈴木はしばらく頭を巡らせた。

　鈴木としては、ほとんど予測できる質問の答えだった。遠隔地から来るとなると、まず東京を目標にするというのは素人考えで当然のものだった。

　一方で、東京の各職業安定所としては、そういった者たちが増えることは業務を煩雑にしていい迷惑でもあった。せめて、もう少し明確な指針を持ってやってきてくれれば、対応のしようもあるのだが、いかんせん相手が右も左もわからない、今日泊まるところにすら困る、というのでは、じっくり濃い話を進めるに進められない。

　もちろん、そんなことを相談者に当たってみたところで詮無いことなのだ。そもそも、困っているから相談に訪れるのだろうから。それでも、もう少し何とかならんものか、と思ってしまうのが職員の心情だろう。

「えー、そうですねぇ……」

　鈴木は後頭部をぽりぽりと掻いた。

「就職希望は、東京なんです？」

「東京近郊とか、あるいは関東全般では、だめですか？」

　鈴木は、直幸と敦子の顔色と窺いつつ、間を取ってゆっくりと話した。

「それは別に……」

直幸は敦子に目配せし、敦子も首を縦に振ったが、決めかねているという様子だった。

東京だけでも相当広いのである。それが関東近縁まで広がれば、地理に疎い遠方者でなくてもどこをどうあたればいいか困ってしまうだろう。湖の中から特定の石を見つけ出せ、というのは大変なことだが、それに近い心境にもなるだろう。

決めかねている、という直幸たちに、鈴木はさらに話を切り出した。

「実はですね。最近の有効求人倍率、えー、つまりね、有効求人数、これは、どれだけ求人があるか。それを、有効求職者数、つまり働きたい人ね。それで割った数字なんですけど。ようは、求人一人当たりにどれくらいの求人があるかって話なんだけど……。まあ、このあたりは難しいね」

そこで一息ついた。専門用語を素人に使う場合はなかなか気を使うものだ。鈴木は区切り区切りになりながら、説明をした。

「その、有効求人倍率ですけど、ここのところね、東京の求人倍率は一・〇を下回ってる。つまり、一人当たりの求人数が、一件ない状態が続いてるんですよ」

直幸と敦子は、聞き慣れない用語に戸惑いつつも、鈴木の言っている意味は理解できた。

鈴木は、二人の様子から、およそ理解されたかと判断すると、話を進める。

ここ一、二年を見ても、東京都の有効求人倍率は低い時では〇・五近く、つまり二人に一件程度になる月まであるほど低迷していた。

一方で、東京周辺の県では一・〇を上回り、求人倍率だけでいうと、経済の発展がドーナツ状に拡大傾向にあった。もっとも伸び盛りの地方は名古屋を中心とした東海地域であった。北陸や長野辺りからの流動が多かったが、東北地方の人間にとっていささか遠隔地過ぎるところがあった。

それでも出て行こうとするものはいたにはいたが、直幸や敦子に

とって推せる話でもないだろうと鈴木は判断し、世間話程度に流した。

当時、東京近縁でいえば、南の神奈川、東の茨城、そして、北の埼玉、群馬、栃木の三県がおおむね求人倍率が一・〇を超えていた。鈴木の推薦では、その中でも最も発展著しい埼玉県と、東北へのアクセルの利便性から栃木県や茨城県を上げた。

埼玉県は東京都の隣に位置し、交通の利便性もよく、ここから最も近い場所だった。直幸も敦子も、そうした環境に惹かれるものがあった。しかし、地理に疎かったことと、東北本線で、今朝通ってきたばかりの宇都宮の名前はなんとなく親近感が湧くものがあった。

家を飛び出したのだから、東北とのアクセスが良いこと自体はそれほど意識されなかったが、無意識的に近い場所を選択してしまう心理は働いたかもしれない

ともあれ、直幸たちは再び宇都宮へと逆戻りして仕事を探してみることにした。

鈴木は、先ほど提出した書類を封筒に入れて、宇都宮の職業安定所に提出すればいいと手渡してくれた。

また鈴木は、まずはどんなところでも仕事を決めることが先決で、その後落ち着いてからよりよい仕事に帰るのがよい、とアドバイスまでして寄越した。

直幸は宇都宮の職業安定所の位置を記したメモを受け取ると、敦子と共に「ありがとうございました」と礼をして立ち去った。

「気をつけていってください」

鈴木は、整った口調で直幸たちを送った。

鈴木は四〇代半ばを過ぎて、もうすぐ五〇の大台になる年頃だ。そんな鈴木にとって、直幸たちは、孫と言っては行き過ぎだが、息子よりずっと年が若い。そんな二人を見て、老婆心でも湧いてきたのか、必要以上に親切なことをしたと思うのだった。

経済好調とはいえ、東京都の求人状況はそれほどよい状況ではなかった。さらには、就労経験のない高校生の中途採用など、実情と

しては実に厳しいものがあった。
それならば、少しでも可能性のある方を選択させるのがよいだろう。
日本が目覚しい経済発展の最中にあることが事実だったが、その先の未来、戦後生まれの若人たちが日本を支えていかなければならない。そんな、国の礎となる若者たちがつまらないことで頓挫し、自立できないのは社会全体にとっても損失なのだ。
本来、そこまでしなくても職務怠慢にはならないし、そこまでする義務もない。それでも、気を掛けるのは鈴木の好意であった。
鈴木はサッと身を正すと、次の求職者の相談に乗るのだった。求職者は直幸たちだけではなく、止め処なく湧く湯水のように続くのである。
かくして、職安職員たちの落ち着く暇はなかった。それから後も、東京オリンピックの影響からか、東京への流入は止め処なく続き、結果として求職者が増大し、求人不足が続くことになった。

上野の職業安定所を後にした直幸たちは、駅の方へと浅草通りを西進していった。
「宇都宮かぁ」
「うん」
二人は何を思うのか、そう、「宇都宮」という言葉を噛み締めるようにした。
一度通過してきた道である。もう一度戻るというのも、二の足を踏んだようで損したような気にもなる。
はたまた、宇都宮という知らない街が一体どんな街なのか、そのことに興味が湧いてもくる。
何はともあれ、一つの手がかりを手に入れたのだから、収穫だった。
初めての体験を終えて、緊張していたものが抜けると同時にドッと疲れが出るようだった。急にお腹も減ってきたような気がする。

朝も簡単なものを口にしただけで、まともなものは食べていない。
お腹がゴロゴロとどうにも落ち着かなくなってくる。
「どこかでお昼にしよう」
「うん、もう、お腹ぺこぺこ」
敦子は気の緩んだ笑みを浮かべた。よほど空腹なのかもしれない。
直幸は、そんな敦子の笑顔を見ると、何だか妙に安心するのだった。
お腹は空いていたが、お金に余裕があるわけでもなく、適当に安そうなところを探した。一三時を過ぎればお昼の混雑も落ち着いてくる。ピーク時はそれこそ戦争だが、二人がそれに巻き込まれなかったのは幸いだったろう。店の中にはまだ何人かいたけれど、それほどのものではなかった。店の者としても、やっと客足が一段落して、これからはむしろ片付けに本腰を入れようという時間帯だった。
二人は適当に席に着く。コンクリートずくめの外の景色から入ると、木製の褐色の空間は気持ちをホッと和ませてくれる。二人はやっと腰を落ち着けられたというように腰に体重を預けた。大荷物を抱えての移動がなお疲労を高めた。その分、出されたお茶が喉に沁みるようで美味しかった。
二人は献立に目を通したが、結局、安い掛け蕎麦で済ませることにした。働き口が決まり、お金が入ればいくらでも食べたいものは食べられるようになるだろう。そう言い合って、お互いに控えることにした。まだまだ先は長いのである。そう思うと、迂闊にお金いたくないという心理が働いた。上野から宇都宮までの電車賃とて、馬鹿にならないのだ。
二人はお蕎麦が早く来ないものかと待ち遠しい気持ちがあった。蕎麦を待ちながら、二人は先ほどまで見ていた街の様子に花を咲かせた。青森を出てきてから、まだ丸一日経過していないのだ。その間、さまざまな“初めて”を経験して、世の中の広さ――自分たちのいた世界の狭さ――を実感するのだった。
店の者が蕎麦を持ってくると、二人は「いただきます」といって

割り箸を割った。蕎麦を一口啜ると、口の中一杯に暖かい麺の食感と芳香が広がった。これは溜まらず、というように口の中からは唾液が溢れ、もっとくれとせがんでいるようだった。

想像以上に疲れていたのだろう。二人は美味しい、美味しいと口にしながら、素早く平らげてしまった。

食事が終わると、今度は体が寛ぎたくなる。食後のお茶を飲みながら、二人はしばらくのんびりと体を休めていた。これから宇都宮まで出掛けなければならないから、あまりゆっくりもしていられないのだが、少しでもゆったりとお腹を落ち着かせたい気分だった。

上野駅から宇都宮駅までは東北本線を北上し、急行で約二時間の旅路となる。直幸も敦子も食後、眠気に誘われ、電車の中で一時の休息を取るのだった。

宇都宮駅からは関東バスに乗り換えて鶴田駅方面へ十数分もすれば職業安定所近くのバス停に辿り着いた。

宇都宮の職業安定所には、中には若干の人がいた。直幸は、上野でそうしたように受付けを済ませると、合わせて上野で手渡された封筒を職員に渡した。

こちらは上野とは違い、それほど待たされることなく呼び出された。

今度の職員は細身で色白、一重の細い目が特徴的な男性で、年の頃は三〇代前半といった感じだろう。ワイシャツにネクタイ、黒のアームカバーはトレードマークなのだろうか。上野の鈴木とほとんど同じ格好をしていた。

名札には「五月女」とあるが、直幸たちには何と読むのかわからなかった。出で立ちは似ていても、こちらは極めて稀な姓で、上野の鈴木とは大違いだ。

五月に女と書いて「そうとめ」と読む。地元の人間でないことを知ってか、この辺りに多い苗字だとわざわざ教えてくれた。

早速本題に入ったが、そうとめ五月女は鈴木と同じように書類の

内容を確認してきた。一通り確認を終えた後、五月女は少し考え込んだ様子だった。

相手に黙られると、直幸も敦子も所在無く、かえって緊張してしまう。高校卒業と嘘をついてしまっている後ろめたさも手伝って、精神的に結構疲れるものだった。

「えーと、そちらの方に求人情報を集めたファイルが置いてありますので、ご覧になっていてください。お望みのものがあれば、後で声を掛けてくださって構いません。またお呼びしますので、そちらでお待ちください」

五月女はカウンターに乗り出すようにして右手を伸ばすと、直幸たちを促し、自分は業務に移った。

直幸たちは言われるままに従った。

さて、放り出されたはいいが、勝手がわからず少し途方にくれた。しかし、仕事を探さねばならないのだから、とりあえず求人情報のファイルと手に取った。それにしても、ちまちまと小さい辞が並び立てられている。初めて見ると、一体何が書かれているのかよくわからなかった。よく見ればその内容は見当が付くことだが、求人情報が具体的にどんなもので、何を基準に仕事を探せばいいのか全くわかっていない状態では、小さな文字を読み漁る気も失せそうになる。

実際、そうは言っていられない。とりあえず、直幸も敦子もそれぞれ眼を通すことにした。だが、効果的な探し方がわからない以上、瞑想してしまうのだった。

土木設計、一般事務、機会オペレーター。運転手に看護職員に会計士。職種だけを見てもさまざまである。

「ねぇねぇ、面接調査ってどんなことするのかな？」

ついつい、真新しいものに眼がいってしまう。

「おっ、月給２０万だって。すごいよ」

「えっ、どれ？　んー、研究室？　大学卒、大学院卒……、これはないよ」

敦子は、首を傾ける。
「やっぱり、頭のいい人は給料もいいんだねぇ」
当たり前のことだけど、としみじみと口にしてみる。
「まぁ、しかたないよ。そればっかりは」
直幸は諦めたように言った。
どうせ、陽の目を見るような人たちとは違うんだろう、と思うのだった。
徐々に慣れてくると、なんとなく見方もわかってきた。そうすると、希望職種が特にない直幸たちにとっては、寮などの設備が整っている場所を選ぼうと絞り込みができるようになって来た。
そうしてみていくと、徐々に集中力も増してきて、だんだんと無口になっていった。
それからどれほど経過しただろうか。カウンターの方から直幸たちを呼ぶ声が聞こえてきた。集中していて、すぐには気づかなかったようだ。
呼ばれて、直幸たちはファイルと片付けてカウンターへと向かった。
「何か、希望のものはありましたか?」
「ええ、まぁ」
直幸たちは曖昧な答え方をした。やっとなんとなく求人情報の精査の仕方がわかってきたか、といった状態で、しっくり来るものがあるかといわれても、実感が湧かなかった。それでも、いくつか寮施設を所有しているところもあり、意識させられるものはあった。無論、大学卒など、高学歴を要求するような企業は手が届かないのだが。
ただ、地理に疎いこともあってか、不慣れなためか、求人情報から立体的なイメージを思い浮かべるのは難しそうだった。
「もし希望のものがあれば、持ってきてもらって構いませんよ。」
五月女はそう断わると本題に入った。
「実はですね……」

五月女はそう言って話し始めた。

それはどことなく聞き覚えのある節なのだが、五月女がどんな話しをするために呼ばれたのか気になった二人は彼の話に耳を傾けた。

五月女の話によると、宇都宮よりだいぶ南になるが、テレビ受像機メーカーの工場で短期契約社員の増募があったそうだ。時期的にも中途半端な時期で珍しいことだが、工場職員の寮も完備していて、短期職員ということもあり、学歴も特に不問で、採用も面接試験のみとなっていた。

これはメーカー側として、よほど急いで人手が欲しいということなのだろう。詳しい事情はわからなかったが、オリンピックによるテレビ受像機へ対する認知の広がりが影響していると考えられた。

そうした世の中の事情は直幸たちには量りかねたが、テレビとオリンピックには確かに思い入れがあるのだった。あの祭典を契機に人々がテレビに憧れるという心理は大いに頷ける部分だった。

寮が独身寮であるため既婚者には進められないが、どうしても職を探すのであれば、寮完備で住む場所に困らないこういった場所を利用するのもいい、と勧めてくれた。

短期雇用ではあるが、勤務状況や景気動向によって再契約や社員への格上げもあり、決して馬鹿にできたものではないのだという。特に、直幸たちのような学歴によって除外されてしまう可能性が高いものにとってこうした機会は重要だった。

職を探すといっても右往左往してしまう直幸たちにとって、五月女の勧めは喜んで乗れるものだった。

具体的に、採用面接を受ける日取りを決めなければならないが、二人はできるだけ早くと願い出た。

五月女は先方に連絡し、交渉の結果、どうにか明日の午後に、ということで受諾された。

先方が希望を受けてくれたことを聞くと、直幸たちは喜んで、五月女にありがとうございましたと例を言った。

五月女は通常の業務手続に沿って招待状を作成し、メーカーから

出された従業員募集のチラシと所在地の書かれた用紙と合わせて直幸たちにそれぞれ手渡した。
直幸と敦子は、とりあえず一つの目処ができたことに安堵し、笑顔を見せた。
「まだ、採用されたわけではないですからね。頑張ってください」
五月女は釘を刺すと、直幸たちを送り出した。
「ありがとうございました」
直幸と敦子は元気な声で例をいうと、深々と頭を下げた。

職業安定所の外へ出ると、外はすでに夕闇の中に包まれていた。西の空が焼けるようなオレンジ色で染まり、街の黒い影を浮き立たせていた。
とりあえず、面接試験を受ける予定は立ったが、仕事が決まったわけではない。それを思うと、明日うまくいくことを願うばかりだった。
二人はとりあえず宇都宮駅に戻ることにした。駅前の広場で時間が経つのを待っていたが、冷えてきたので喫茶店に入ることにした。
二人にとっての当面の懸案は宿だった。
宿に泊まるとお金のそこが見えてくる。今後、どうなるかわからない状態で、それは大いに問題だった。
だが、敦子のことを考えると、直幸は気にせずにはいられなかった。
「敦子さんだけ、どこかの宿に泊まった方が……」
直幸はそう提案したが、敦子は即座に断った。
二人一緒に行くと決めた時から、敦子は常に直幸と同じように耐えるべきは耐えなければならないと自覚していた。
直幸が敦子を大事に思う気持ちはよく理解していたが、それは時として敦子の意思を無視することになると自覚して欲しかった。
大切に思われることと、甘やかされることは別だと。
なにより、自分だけ宿に泊まったのでは夢見が悪い。それで寝付

けなかったなど、どんな顔して言えるだろう。今何より大切なことは、直幸と一緒にいる、その温もりが感じられることだった。

それこそが、今自分がいる意義であり、エネルギーでもあった。

そうして、いつまでも時間が過ぎるのをじっと待っていた。

「明日、うまくいくといいね」

その言葉は、今日、何回口にしただろうか。

それほど多くの言葉を交わすこともなく、静かに時間の過ぎるのを待っていた。

そんな二人の光景は周囲の人間からは奇異とも映った。

大きな荷物を抱えた男女がカップ一杯で粘るのだ。中にはそういう客もいるが、大抵、新聞や本を読む、何かをメモしているなど、何かしらしているように見えるのだ。

だが、窓際の二人は何をするわけでもない様子なのだ。

駆け落ちかしら、と店員の間でコソコソ話が出るほどだった。

やがて、二人は食事を摂ることにした。ウェイトレスに声を掛けると、二人はそれぞれ適当なものを頼んだ。

やがて、料理が届くと、テーブルに彩りを添えた。

直幸はカレーライス。敦子はナポリタン。店の内装も調度品も洋風で、見た目そんなに違和感のあるものでもないが、二人はなんとなく可笑しかった。とても日本という感じではないのだ。

というのも、二人とも畳敷きの家に過ごしてきて、食事も座卓に正座もしくは胡坐でする環境だった。

洋風というだけでリッチ感が漂ってしまうのは、田舎人の習性なのだろうか。

カレーライスにナポリタンというのがまた国際色豊かに思える。

実際には、どちらも日本で発展した得意な料理ではあったが、そんなこと知る由もない。そんな指摘は茶を濁すだけである。

二人は、その国際色豊かな食卓を楽しみ、お互いに少しずつ味見をしてお互いの好奇心を満たした。

食事が終わった後、しばらくするとウェイトレスがやってきて食

器を片付けた。
敦子は、食後の団欒に『注文の多い料理店』の話をして聞かせた。それは単に「料理店」に共通するというだけの話題だった。
だが、敦子の話し方がうまかったのか、直幸は「注文の多い」の意味を理解するまで結構話が進んだものだった。
ちょっとした言葉の違いだったが、面白い発想の転換だった。なぞなぞのような、怪談のような短編童話の話は食後の変わった趣向となった。
食事を終えた後、のんびりとした惰性の時間を過ごしていると、やがて閉店の時間となった。直幸たちは店員に促されて、仕方ないと諦めて店を出た。
青森に比べればそれほどでもないが、それでも夜となると冷えてくる。
直幸たちは駅構内へと非難して、今度は待合室で時間を過ごした。二人とも眠気が襲ってきて、ついには待合室でうとうとと寝てしまったが、終電を過ぎると駅員に起こされてしまった。
直幸たちは、始発の電車を待つからと言って、納得してもらった。駅員はいぶか訝しむような顔を見せたが、やがて諦めて去っていった。

翌日、周りが少しざわめき立つと、直幸たちは目を覚ました。まだ、相当に早い時間なのだろう。ひんやりとした空気が漂っている。
ぼんやりとまどろみの中にいると、駅は徐々に人気が増え、騒がしさを増していった。
「ん」
敦子が目を覚ましたようだった。
「起きた」

目を擦る敦子に、直幸は小さな声で声を掛けた。
二人はその後、駅を出て、静かで落ち着けそうなところを探した。街は目覚め、駅にも人がどんどん増えていく。
結局、駅を少し離れた小さな神社を見つけ、敷地内の樹に寄りかかってまた一休みした。
その後、二人は遅い朝食を済ませると、その足で工場へと向かった。
テレビ工場は県境に程近い辺りにあった。宇都宮から電車で三十分ほど南下し、そこからは徒歩で行くことにした。案内にはバスに乗って最寄りのバス停で下車後、徒歩三分ほどと書いてある。
工場がわりと近い場所であることがわかると、二人は駅から続く道を歩くことにした。街並みを見ながら、昼食の摂れそうなお店も探しておきたかった。周囲にはまだちらほらと田畑が残るような風景だった。そこにまばらに家が連なっている。まだまだこれから人が増えていくのかもしれない。
二人が工場を訪れたのは、予定より三十分ほど早い時間だった。それでもかなり時間を潰したつもりだった。軽い食事で済ませ、周囲をゆっくりと歩いてきたのだ。
よく眠れなかったのか、体は疲れが取れていないようで軽い痛みもあった。顔色を見ても、旅立った時と比べてだいぶ疲れている様子だ。
それでも、隈ができていなくてよかった、と敦子は言っていた。やはりそういうところは女の子なのだろう。
直幸はそれほど気にしない方だった。直幸は深夜遅くまで勉強していたなど、隈ができるような生活をしてもいたから、さして気に留めなくなっていた。それでも、敦子が言うのを聞くと、安心した。面接で初対面の人間に隈の付いた顔で会うというのもあまり印象がよくないと思えたからだ。
工場の正面口に受付があった。受付は事務員が兼任しているようで呼び掛けると席を立って応対してくれた。

「岡崎です。昨日、面接の予約をしていただいた者です」
直幸はそう言って、敦子の分も合わせて紹介状を手渡した。
受付はロビーの席を指差して、担当を呼びますので待っていてください、といって中に入っていった。
工場のロビーには大きなテレビが据え付けられていた。それは今まで見たこともないような巨大な黒い物体だった。台も合わせれば冷蔵庫ぐらいの高さになるだろうか。直幸の家のテレビよりもさらに二回り、三回りは大きいだろうと思われた。開けたロビーのスペースのため、割合に小さく見えるだろう。八畳一間に置いたらばその驚きはさらに上回るだろう。
直幸も敦子も重厚感のあるテレビに舌を巻いた。この工場でそれが作られているのかと思うと、工場がやたらと輝いて見えた。ハイテクノロジーを駆使し、科学技術の最先端をいく。未来の技術を目にしているようで、信じられない気分だった。その驚きはやがて高揚感に変わり、この工場で働けたらいいと感じるようになっていた。
早く来てしまい、もう少し待たされるのかと思ったが、案外と早く担当者はやってきた。
担当は「おのぐち小野口です。」と挨拶した。
直幸と敦子はそれに倣って名乗った。
小野口は中年で、お腹の辺りが見事に出ている卵顔の男性だった。工場内の指定の作業着なのだろう。緑がかった淡いグレーのユニホームに身を包んでいる。
小野口は話し好きなのか、工場内の一室に案内するまでの間、直幸たちに色々と質問しながら話し続けていた。
「予定より早いので、今準備しているところで、ちょっと待ってください」と説明し、小野口は出て行った。
その後、工場長の渡辺と、主任の阿久津が部屋に入ってきて面談は始まった。
直幸たちは一人ずつ面接するものだと思っていたが、出身が同じで紹介も同時、顔見知りということで同時にすることになった。「

失礼ですが、一緒にさせていただきますがよろしいですか？」と阿久津が断りを入れた。

工場としては急遽予定を組んだこともあり、できるだけ時間を割きたくないのが本音だった。一方、短期契約や中途採用など、職業安定所からの紹介で採用されている従業員も多かった。そのため、安定所経由となると、なかなか無碍にもできない情が働いた。

二人は簡単な質問をした上で、工場の簡単な案内と、業務内容について話した。直幸も敦子も、高卒以外には特に嘘をつくことなく、できるだけ正直に話した。

嘘をつくこと自体、採用側からすれば問題である。しかし、二人の心理としてはそこまで到底考えの及ぶところではなかったし、中退であると知れば、やはり心象はよくないのである。

直幸は、隣に敦子がいることで必要以上に緊張せずに住んだ。海千山千といったような中年の男二人に直幸一人では気圧されてしまうところだったかもしれない。流石に、職場の男たちの風格というものは高校生の甘ちゃんには及びも付かない威圧感のようなものがある。直幸も敦子も、二人一緒であったことはむしろ幸いした。

渡辺も阿久津も忙しいと顔に書いてあるようで、せかせかと面談を簡単に済ませると、結果は後日お知らせします、と面談を切ろうとした。

「すいません。こんなこと申し上げるのは何なんですが……」

直幸はそういって、実情を話、明日からでも働かせて欲しいと食い下がった。

泊まる場所もないと聞くと、渡辺も阿久津も困ったように顔を見合わせた。

渡辺は、採用について本日中に結論を出すと言って、どうにかその場を収めた。

直幸と敦子はロビーに戻されたが、程なく受付であった女性がやってきて、業務が終わる十七時にまた来てくれ、と伝えられた。

いくところもなく、途方にくれた様子の二人を見て、ロビーにい

る許可と、荷物を置いておく許可もしてくれた。
その後、しばらくロビーに留まったものの、やがて工場の外に出た。
外の風はとても気持ちいいものだった。
工場内ではずっと緊張していなければならなかったし、その上採用されるかどうか不安で針のむしろ筵だった。
二人は一時的にではあるが、解放感に浸ることができた。
空が薄くなってくると直幸たちは工場のロビーで待った。
小野口の口から採用が言い渡されると、直幸と敦子は手を取り合って喜んだものだ。
とはいえ、これは特例で、一応試用期間ということで働いてもらい、それによって本契約を結ぶ、という経緯を小野口は説明した。
直幸たちが採用されたのは、その真面目そうな人柄を買ってのものだった。工場業務にインテリは別に要らない。単調な業務を根気よく繰り返せる忍耐力や仕事に対する姿勢が重要で、真面目に取り組まなければミスが増えるのも必然だった。
どうしても仕事を決めなければならない直幸たちの必死さはこの場合プラスに働いてくれた。景気状況も後押しし、労働力を欲しい工場としてもやる気のあるものは願ったりであった。
就労経験がないということもあり、試用期間を設けて様子を見ることは工場側としても決して悪い話ではなかった。
さらに、工場長の渡辺は新潟出身者であった。実家は農家であったが、戦後兵役が解かれると一時帰郷したものの、関東に出稼ぎに出て定着したのだった。そんな苦労人である渡辺は遠方から出てきて当てがない状況がどれほど辛いかもよくわかっていた。そんな彼の温情も働いて、とりあえず雇ってみることになったのだ。
直幸たちはまさに運がよかったのだ。
採用が決まったはいいが、次の心配は住居だったが、それについても手配してくれた。
二人は中川という職員に連れられて車で寮まで移動した。

寮は独身寮で、男子寮と女子寮はそれぞれ別の場所にあった。男子寮はいくつかあるそうだが、短期契約者は短期契約者でほぼ固まっているという。それぞれの寮は独身寮のため、女子禁制、男子禁制となっていた。例外的に、男子寮には寮母たちが出入りしているという。

また、寮には食堂などはないため、従業員は外で食べるか、工場の食堂を利用していた。給湯室はあり、お茶やコーヒーを入れることはできたが、トイレは共用で、風呂にいたっては近くの銭湯に出掛けるのだそうだ。それぞれの寮は少し離れていたが、おおむね住宅の多い地域で、周囲に銭湯もいくつかあるという。

寮はほとんど寝るための場所であったが、それでも寝床があるだけましだった。

直幸も敦子も食事をするためもう一度工場に引き返すことになった。中川も仕事も残った仕事を片付け、夕食を済ませると、再び直幸と敦子を寮へと送り届けた。今度は、道順をわかるように説明してくれたが、暗い中では目標物もわかりづらく、結局翌日寮の人と一緒に来てくれ、ということになった。

中川はまず女子寮へと向かい、直幸と敦子はそこで離れ離れになる。

長いたびをしてきてから初めてのことで、それはかなり不安と寂しさを伴うものだった。

「ありがとうございました」

敦子は中川に礼を言ってドアを閉めると、車が見えなくなるまで目で追っていた。

「ありがとうございました」

直幸もまた、敦子と同じように礼を言って別れ、中川は工場へと引き返していった。

寮までは連れてこられた二人は、ほとんど放置状態だった。どうしていいものかと途方に暮れたものの、意を決して声を掛けると寮母がやってきて部屋に案内してくれた。

直幸も敦子も相部屋だったが、その趣きはだいぶ違っていた。

直幸の方は四人相部屋で二段ベッドが二つ並んで幅を利かせ、ベッドの上だけが自分の領分といった状況だった。短期契約者は入れ替わることもあるので、時々四人部屋に三人ということがあるようで、直幸はそこの開いた部屋に埋められることになった。

中には三人の先客がすでにいて、煙草の煙が目に沁みるほどだった。

どんな部屋であろうと贅沢は言っていられないが、直幸はその部屋を見て驚き、呆れるのだった。

敦子の部屋は畳敷きの部屋で六畳の二人部屋。女子社員は少ないため、結果的に一人当たりに割り当てられるスペースは広かった。

畳敷きということもあって火気厳禁。もちろん喫煙も不可だったが、女性人にとっては特に気にするようなことではなかった。また、押入れもしっかりしていて、女性が家主らしく、綺麗に整っていて清潔な印象だった。その点、直幸たち男子寮に比べればかなり住める環境だろう。

翌日から仕事は始まった。とはいっても、試用期間というのはようは研修だった。直幸は工場内作業、敦子は受付や事務処理などを教え込まれた。

作業着は適当なものが支給された。正社員、準社員となると名前入りのものが支給されるようだが、短期契約では適当にサイズの合うものを貸し与えているのだった。

事務員の女性のユニホームはブラウスにベストとスカートになる。だが、突然のことで準備も整っていないといい、加えて、試用期間中は工場の基本的な仕事を覚えるために工場作業を習うことになった。服装も作業服が支給され、研修を受けることになった。私服の持ち合わせはほとんどない敦子にとってはそれでも助かるのだった。

初日の午前中は二人揃って工場内を案内させられた。工場の敷地はかなり広く、まわるのに相当の時間を要した。

事務所の入る中央棟、ブラウン管製造の第一工場、テレビ受像機

を組み立てる第二工場、そして、完成品を梱包する出荷工程を経て、倉庫兼出荷場となる出荷棟。さらに、工場用水や排水を扱う貯水場、工場電力を支える電力棟など工場の維持に必要な施設が点在する。また、事務所のある中央棟内には会議室などの他、食堂も含まれていた。

直幸たちは一回りするだけで驚きの連続だった。なかなか歩くだけでも大変なのだ。

試用期間中は二人とも第二工場でカラーテレビの組立てからすることになった。工場内は綺麗にフローリングされていてピカピカと光沢があり、清潔感があった。工場とことはなく、人とつるむこともなかった。何より、少しでも敦子の傍にいたい直幸は腰巾着のようなものだった。

仕事においても、直幸は物覚えの早い方ではなかった。同じミスを繰り返してしまうこともあり、何度も注意を受けたものだ。また、当初、昼食後などは眠気に襲われるなど、集中力散漫なところがあり、態度を叱られる場面もあった。それでも、今では徐々に体力が付き、仕事にも慣れてきた方だった。

初めての給料日を迎えた時、二人はそれぞれ中央棟に呼び出された。給料を手渡され、さらに三ヶ月の短期契約として雇われることとなった。その際、敦子が先に呼ばれたが、敦子は契約に関して、ことさら直幸のことを気にして工場長に尋ねたものだ。それに対し渡辺は、直幸とも三ヶ月の短期契約を結ぶと応答し、敦子は安堵するのだった。

確かにミスの目立つ直幸の取り扱いについては少々問題視する向きもあったが、勤務態度は全般的に良好で、注意に対して反発するようなこともなかった。遅刻やすぐに体調を崩すなどの問題もなく、せっかく仕事を覚え始めたところで切るというのも考えどころだった。工場としては、少しでも戦力になる方が好ましく、未経験者を雇うよりは生産性が見込まれるからだ。

かくして、直幸も敦子も晴れて本契約を結ぶことができた。その

上、初の給料日である。二人はどこかで祝杯を挙げたい気分だったが、それに乗ってきたのは敦子に気のありそうな男たちと、騒ぎが好きそうな直幸の同室の連中だった。

同室の男たちは騒がしく、大人しい直幸にとってはなかなか馴染むものでもなかったが、同室のよしみ誼とはいえ、こうして積極的に祝おうとしてくれるのは嬉しかった。

正式に契約することになり、寮への入居手続きなども含めて改めて正式な書類を作成する必要があり、直幸と敦子にはそれぞれ提出するようにと手渡された。当然、未成年であることから、正式に保護者の署名や所在地などが必要になってくる。

それには直幸も敦子も困ったものだが、結局、約束の提出期限間近になって渡辺に打ち明けた。

渡辺としては当然渋い顔をした。

まず、会社に嘘をつくということは何よりあってはならない。まして、未成年となると、社員といっても、保護者から預かる身となるのだ。大きな声こそ出さなかったものの、そのことについては厳しく叱責した。

事情を聴いた上で、仕事を辞めて帰郷するか、あるいは保護者の承諾を得るように説得した。しかし、どう諭しても二人の反応は頑なだった。

これについては渡辺もほとほと参ってしまった。工場の管理者であっても、保護者ではない。子どもの世話を焼くのが仕事ではないのだ。

とはいえ、正直に話し出たこととといい、酌量の余地も感じた。同じく遠方から出てきた上京者の誼か、人情か。同情する部分はあった。

直幸と敦子は、自分たちが駆け落ちしたことについては話さなかったが、二人の様子と話の内容からして、まずそれは間違いないと渡辺は思った。ここで帰すことのなれば、おそらく二人は別れることになるだろう。

まだ若い二人である。渡辺ほど年齢を重ねれば、直幸たちなどまだまだ多くの出会いや経験があると思うものだ。たとえ、一時的に辛い想いをしても、いくらでも取り戻せる。

渡辺もできるだけ穏便に子とを済ませたかった。二人をどうにか諭そうとしたが、二人の意志は固いようで、首を縦には振らなかった。

しまいには渡辺も根負けし、どうにか契約を成立させるように努めると約束した。二人の様子からすれば、もし帰したとしても、きっと同じことをするのではないかと思えてきたのだ。採用権は工場長にあるため、上から突付かれても誤魔化しようもあるだろうと、溜め息混じりに言った。

気が細いが真面目な性格の直幸と、明るく人気のある敦子。大きな孫のような世代である。甘いといわれればその通りだが、渡辺にはどうしても、二人を無理やり帰郷させるほど強引にはなれなかった。

「ただし、ここは社内恋愛禁止だから、そのつもりで」

渡辺は、そう釘を刺した。

禁止といっても、外のことまで関知しはしない。社内と寮でのルールに従っている以上、問題はないのだ。それは、直幸と敦子が残ることを認めた証明でもあった。

「ありがとうございます」

「仕事で帰してもらわにゃあな。高くつくぞ」

二人はもう一度、ありがとうございました、と礼を言って退室した。

直幸たちが正式に契約してから三年目を迎えていた。

二度の短期契約更新を行い、さらに一年後の四月一日より一年契約を結ぶことができるようになった。

正式に短期契約を結んだばかりの頃、夜間勤務に不慣れだった直幸は体調を崩し、敦子は心配したものだ。それでも休むほどではなく、徐々に慣れるようになっていった。

寮仲間ともだいぶ親しくなることができた。周りはやかましいが賑やかで人馴れしているものだから、どちらかというと巻き込まれていったという方が適当だろう。

直幸と敦子の関係はほとんど公認といっていいほどだった。たまに敦子にちょっかいを出そうとする者はいたが、そうしたことで二人の関係が揺らぐこともなかった。

そんな二人が粛々と仕事に勤めるものだから、むしろ周りが囃し立てたり、冗談のネタにしていたものだ。

器量よく明朗快活な敦子は常に人気者で、「あっちゃん」などと呼ばれて周りから愛されていた。一緒にいる直幸もまた、温かい目で見守られていた。

二人はできるだけ真面目に渡辺の言葉を守っていた。それは、二人の気持ちが熟し、安定してきていたからかもしれない。

そんな二人も二〇歳を迎えた。

敦子の誕生日は四月で、直幸は五月だった。敦子の誕生日に工場の従業員で祝おうという話になった。直幸とは一月違いだが、一緒にして欲しいと敦子が希望して後日ということになっていた。

シフトによって都合が付かなかった者たちの中には、敦子と酒が飲めないと落ち込んでいる者もいた。

誕生会は居酒屋の一角を大きく借り受けて行われた。工場の人たちにとっては顔馴染みの店である。

忘年会や、三月の慰労会以外では居酒屋を大きく借りて宴会をすることなど、まずない。さらに、今回は工場の経費ではない。みんなの自腹なのである。そうしたことからも敦子の人望が窺えた。

さて盛大にパーティーは開かれた。工場長も仕事を終えると顔を出した。何でも口実が欲しい酒飲みは何でもいいから盛り上がりたい様子だ。

直幸と敦子は最初に挨拶をした。その後、直幸はジョッキを持たされ、音頭と共に一気飲みをすることになった。立たされ、拍手と掛け声で音頭を取られ、逃げ場なしの状態で直幸は已む無く一気に飲み干した。

実際のところ、直幸は北原らの強引な勧めによって、寮内で煙草も酒も経験済みだった。それがわかると、敦子は彼らに苦情を言ったが、馬の耳に念仏だったようだ。とりあえず掌を立てて謝るのだが、全く反省の色がない様子だ。

実のところ北原たちは、寮母から「直幸はまだ未成年だから部屋で煙草や酒をしないように」、と注意を受けていた。

腹を立てる敦子に、直幸も自分から断るようにしろと窘められたこともある。

直幸も決して酒と煙草を好んでいたわけでもなく、自分から進んで手を出すことはしなかった。

女性である敦子に無理やり飲ませるわけにもいかない。そうした心理が働いたのか、直幸へ対する攻撃は度を越して激しいもので、流石に敦子も止めに入るほどだった。

かくして、パーティーの主役であるはずの直幸は早々に潰され、結局何が何だかわからないうちに幕を引くことになってしまった。

敦子は、酔い潰れた直幸を介抱したが、それが次なる標的を固定させた。

二人が恋仲だということは工場内では結構知れているところだったが、それにしても、二人はあまりそういう素振りを見せなかった。

同じ銭湯に通う、休日を一緒に過ごすといった目撃証言は幾つもあったが、目の前でそれだとわかるようなことは特になかったのだ。

その二人の目前の姿――酔い潰れた直幸を労わる敦子――は酔いが回り始めた男たちにとって格好の餌となった。

敦子は、直幸のどこが好きなのか、どちらから告白したのか、といった質問から、キスはしたか、どこまで進んだか、アレの大きさはどうか、など徐々にエスカレートしていった。

最初は濁しながらも答えていた敦子も、下ネタには絶句するしかない。敦子も軽く酒を飲んでいたこともあり、酔いが回ったのか、頭もクラクラしてくるようだった。

そうなってくると、今度は同席した女性陣たちから総スカンを喰らうこととなった。まだ二〇歳に成り立ての若いアベックを温かく見守ろうという女性陣の母性本能に火がついたのか、単なるやっかみか、男性陣への攻撃が始まった。

数では圧倒する男性陣も、口では分が悪い。徐々に戦況は思わしくなくなり、戦線離脱していく。

騒ぎは徐々に収束し、隣近所でよろしく井戸端会議が始まった。

そして、宴会も惰性になってきた頃、お開きとなった。

とりあえず、二人とも明日オフであったことが幸いした。もっとも、それを見込んでの設定であったのは確かだった。

若い二人は年輩者の手洗い歓迎によって成人を祝うことになった。

寮生活の直幸にとって、お盆は何もすることなく過ごさなければならなかった。

出稼ぎや単身赴任の寮生活者たちは実家へと帰省していて、あれほど騒がしいと思っていた寮内も、盆と正月だけは寂寥感を漂わせる。

同室の北原は毎年残っていたが、いつになく寂しそうだった。

「二人じゃ、麻雀もできないしな」

そんな風に言い訳していたが、やはり何か物足りないのは同じだった。

仕事でもあれば寂しさなど感じずに済むのかもしれないが、休業では致し方ない。

工場は食堂も閉鎖され、食べることで紛らわすこともできない。

それでも、正月には寮母たちが気を利かせて、雑煮や餅を振舞っ

てくれる。そうした好意はとても温かいものだった。そんな寮母たちも、盆には先祖参りに出掛ける者が多い。

敦子も似たような想いを抱いていた。

寮にいても暇なので、直幸は敦子と二人で出掛けることにする。こういう機会でなければできないので、少しばかり遠出して東京や神奈川など近県を訪れた。思い出の地である上野にも訪れたことがある。それはとても楽しい体験でもあったが、どこかに空虚さが残った。

時間が過ぎるのを待たなければならない。そうして工場が再開し、寮にもいつもの活気が戻ることを無意識に願ってしまう。

その願いはどこか歪んでいるように思えた。

仕事を生きがいにすることが悪いことではない。けれど、心の空白を埋めるように仕事場を求めるのは何か違う気がした。

寮にいると否応なく寂しさを感じてしまうが、二人一緒であれば、直幸も敦子も寂しさを感じることはなかった。

こういう時は特に、繋いだ手の温もりを温かいと思う。

二人は今日もまた小旅行に出掛けてきたが、お互いに別れる時は寂しさが募ってくる。寂しげな寮の様子を思い浮かべると、それは一層強く感じられるのだった。

お互いに、その寂しい気持ちを理解していた。

こういう時は部屋に帰っても、時間を弄んでしまう。

できるだけ長く一緒にいたいと思う。

「来年の正月は、こういう気持ちではいたくないね」

直幸はポツリと言った。

「うん」

敦子もしみじみ思うのだった。

寮の門限もあり、女性をあまり夜遅くまで出歩かせるわけにもいかない。

「おやすみ」

「おやすみ」

直幸は敦子を寮まで送り届けると、きびす踵を返した。
直幸の生真面目なところは紳士的ともいえたが、そんな優等生で冒険心に欠けるところは女性としては物足りなさがあるかもしれない。それでも、これまで問題が起きなかったのは、こうした直幸の性格のおかげでもあった。

直幸が部屋に戻ると、北原が煙草を燻らせながら、ポルノ雑誌に目を通していた。
「おぅ、おかえり」
北原は煙草を加えたまま、白い歯を見せた。
「はぁ、ただいまです」
「嬢ちゃんと出掛けたのかい？」
敦子のことである。
「ええ」
直幸は敦子と一緒に訪れた場所の話を少ししたが、北原はあまり興味がなさそうだった。
「嬢ちゃんはこれよりおおきいか？」
北原は見ていた雑誌を広げて直幸に見せた。
「え？」
「これだよ、これ」
北原は自分の胸の前で山を作ってみせた。
「ああ」
（何を訊いてくるんだ、この人は……）
直幸は合点したが、北原の質問に呆れた。
「見たことないので」
「はぁ？　マジか？」
「ええ」
「おまえ、それ……」
直幸は、北原が何故そんなに驚いているのか、理解できなかった。
北原からすれば、直幸が情けないやら何やらで呆れかえるのだっ

た。

「だいたい、せっかく休みなんだから、どっか泊まって来りゃいいじゃんか」

北原は、そうすりゃ拝むチャンスもある、と少し声を落として繋げた。

「そういう北原さんはどっか出掛けないんですか？」

直幸は、大きなお世話だと言いたい。

「どこにいくっつーの？」

北原はそういうと、ベッドに横になった。

北原は休日中、おおむね部屋で過ごしていた。食事で出掛ける以外には近くの雀荘に出向くなどしているが、直幸は知らなかった。

北原も人がいる時には機嫌が良さそうにしているが、あまり自分のことについては語らない方だった。

そんな北原が語るのはこういうお盆や正月の寮が寂しくなった時だった。そんな時に、たまに身の上話をしてきた。話の流れからか、つい直幸も人にしないような話をしたことがある。北原はそういう話は誰にも話さないようだった。自分が話したことも、聞いたことも、その時限りで忘れるのか、あるいは胸の中にしまっているのか、それはわからなかったが。

直幸は、そんな北原を見ていると、寂しいのだろうと思う。

少しばかり、お互いの話をした後、沈黙が続いた。

「行くとこなんて、俺にはねぇよ」

北原は、ぼそりと独り言のように言うと、寝るぞ、といって体を横にした。

直幸は、電気を消した後も少しの間、考えていた。

寮は所詮、仮初の住まいでしかないのだろう。もちろん、そのおかげで助かることはある。けれど、長く居つく場所ではないのかもしれない。

何度となく寂しい寮の風景を見てきて、直幸にはそう思えてきた。

その想いは、直幸の中に芽生えた、新しいステージへの萌芽だっ

た。

第四章

直幸と敦子は工場に程近い安アパートを借りて、二人暮しをはじめることになった。

「えっ、アパート？」

「そう。どこか、近くのアパート借りて、敦子と一緒に暮らしたいんだ。」

直幸の言葉に、敦子は体の底から湧き上がる何かを感じた。

「もう二〇にもなったし、貯金だってある。未成年じゃないから、契約なんかも自分たちだけで決められるよ」

そうして、二人のアパート探しが始まった。

同時に、工場長の渡辺に相談を持ちかけた。直幸たちは、未成年だった二人を雇ってくれた彼に、恩を感じていた。そのため、直幸たちは何かしら相談を持ちかけることがあったのだ。渡辺は、直幸たちの保護者的存在でもあった。

「ああ、アパートねぇ。別に構わないが。おまえら、二人とも出てくのか。」

「はい、二人で一緒に暮らそうと思って」

「ぁあ？　一緒にって、一緒の部屋でか？」

一瞬の間の後、渡辺は改めて確認した。

「はい。」

「ってことは、結婚するってことだな？」

「えっ？　いや……、その……」

二人はうろたえ、顔を合わせるなど、動揺している様子だ。

「えって、そりゃ、そうだろう。一緒に住むって言ったら。」

「あ～、まだそこまでは……」

直幸は力なく答え、敦子も恥ずかしいやらで首をすぼ窄めた。

「まだって。結婚して、一緒に暮らす。それが当たり前の順序ってもんだぜ」

興奮したのか、渡辺は手振りを交えて言った。
「はい……」
二人は項垂れて沈黙した。
「まぁ、別にいいけどよ。若い奴らのすることはわからん。あんまりいいとは思わんがなあ」
二人の様子を見て、渡辺は言った。
元々、二人が恋仲であることはほとんどわかりきっていたことだった。それでも若かったから、何かの節に関係が壊れるか、あるいは羽目を外して問題を起こすか、そういう可能性もあったのだ。だが、二人の関係は変わらずに三年やってきた。
これには渡辺も少し感心した。
駆け落ち――だと渡辺は断定している――するほど好き、とは言っても、働いて、お金を手に入れ、世界が広がってくると、案外と気持ちに変化があることもあるだろう。街に出てくる若者は皆、街に夢を抱いてくる。
だが、それが夢であると気付いた時、同時に色々な気持ちが冷めてしまうことがある。
生きることは生臭いものだ。華麗に生きる人間など、ほんの一握りの人間に許されたもので、大部分の人間は地道に苦労を重ねていく。
そうした苦労の連続に挫折して、道を見失ってしまう者もいる。
渡辺はそう感じていた。
そこからすると、直幸も敦子も地道に頑張ってきたと評価している。無論、ほんの数年の話でしかない。人生の道程はその一〇倍は続くのである。
直幸も敦子も、まだまだ幼く、未熟だ。だが、それでも、この二人がなんとか不器用なりに歩んでいけるのではないか、と渡辺は思った。
二人が帰った後、渡辺は出会ったばかりの二人のことを思い起こした。

「住む場所がないんです」
そう言って懇願してきた、あの時の直幸の必死な顔は忘れない。
それからすると、寮を離れて独り立ちしようという直幸たちに、若者の成長を見るのだった。
（ま、何事も経験だな）
渡辺は、二人の決断を好意的に受け止めた。
二人はアパートを探し始めたが、何より工場に通いやすい立地を最優先に物件を探し回った。時期的なものもあり、あまりよい物件はなかったが、贅沢を言うつもりもなかった。何より、仕事に支障をきたさないことが雇ってくれた会社や渡辺に対する感謝の想いがそうさせた。
ようやく見つけた物件は、木造の安アパートだった。六畳一間に少し広めの台所、トイレはあるが、浴室はない。収納に押入れが一つ。
風呂に関しては寮での生活と同じように銭湯を利用し、食事も工場の食堂で済ませれば、寮生活と大して変わらない。それでも、二人で生活できるということは直幸たちにとって大きな意味があった。
アパート契約に際して、色々と書類を揃えなければならなかったが、その際に青森へ一度帰郷しなければならなかった。仕事を終えると、素早く宇都宮を目指し、思い出の夜行列車「はくつる」号に乗って青森へと向かった。
翌日、二人はそれぞれの役所を訪れ、戸籍謄本を受け取った。
その際、敦子は少し寂しげに立ち止まることがあった。
「両親に会いたい？」
直幸はそう尋ねたが、敦子は首を横に振った。
だが、その胸の内はきっと会いたいに違いない。直幸は敦子の背中を見ながら、複雑な思いだった。自分とは違い、両親との仲は悪くなかったのだ。それが離れ離れにならなければならなかったことは、とても辛いことだっただろう。直幸は、敦子の見詰める方向を向くと、軽く一礼した。

直幸たちは、栃木へ戻ると早速入居手続きを済ませたが、同時に転籍届を提出して本籍変更を済ませた。これは、戸籍の上でも両親との決別を意味するし、直幸たちが独立するという意思の表れだった。

直幸たちが役所での手続きを終えて帰ろうとする時、直幸がそれに気付き、手に取った。

「これ」

直幸はそう言って、婚姻届を敦子の前に掲げて見せた。

「直幸さん」

思わぬ不意打ちに、敦子は思わず赤くなった。

意気揚々と用紙を持って帰るはいいが、記載内容を見て少し頭を悩ませた。婚姻届には、証人二名の署名が必要なのだった。

考えた末に、やはり工場長の渡辺に相談した。

「はぁ～、若い奴ははえーなあ」

渡辺は呆れ声を上げた。

つい最近、アパートに二人で暮らすと言い出し、先日も青森に戸籍を取りに帰ったばかりである。昨日の今日でこれである。渡辺は驚いた。

確かに、結婚という話を最初に持ち出したのは渡辺だった。それでも、早速婚姻届を持ってくるとは予想していなかったのだ。

呆れはしたものの、渡辺は証人となることを了解してくれた。

「もう一人はどうするんだ?」

「私のところの寮母さんに頼もうかと」

敦子が答えた。

「ほう。まぁ、いいんじゃないかぁ」

工場から二人よりは少し離れた人間の方がいいだろう、とそれについても渡辺は承認してくれた。

「ところで、敦子は仕事をどうするんだ?」

「あっ」

直幸と敦子の顔には考えてなかった、書いてある。

「なんだぇ、そっちの方が大事だろがぁ」
「あ、いえ。結婚してからどうするかはこれから考えようと……」
「そりゃ、順番が逆だぜ。どうするか決めてから、最後に手続きするもんだぜ」
そういわれて直幸たちは肩を縮ませた。
「ま、大方、書類見て興奮して先走っちまったってところだろ」
二人は返す言葉もない。
「まぁ、わからんでもないけどよ。その調子で結婚して大丈夫なんかえ？」
渡辺は軽く説教したが、結婚を反対する気はなかった。それを認めるからこその忠告である。渡辺には、二人のやることがどうにもズレてる気がして、心配になるのだ。
「敦子が付いててそれじゃあなぁ？」
「はぁ」
（それは、俺が頼りないってことか……？）
渡辺には頭が上がらないが、堂々と言われるとやはり気が滅入る。
一方で直幸たちは、そういうことをはっきり言ってしまう性分を含めて、渡辺を信頼していた。しっかりと年長者として指摘すべきところをしてもらえるおかげで気付かされることもある。小うるさいところがあっても、自分たちの話を聞いてくれていると安心するのだ。
結局、引越しが一段落した後に、しっかりと仕事のことを決め、その上でもう一度渡辺に話をすることになった。
引越しといっても、寮生活で大した荷物はない。
むしろ、何もないために色々揃えなければならなかった。
とりあえず大家に挨拶だけは済ませたものの、住むにはまだ色々と準備しなければならないものがあった。
街の電気屋を回り、日用雑貨を揃え、休日も忙しい日々となった。
生活用具を揃えるだけでもなかなかの出費となったが、今まで寮生活の缶詰状態で貯金に余裕はあった。

食事に関して、敦子は自分で作ると言ったが、当面は食堂を利用すれば負担が少ないと直幸は説得し、納得させた。

直幸と敦子がアパート暮らしを始めるのに際して、最もお金を掛けたのが洗濯機だった。寝具や衣類は安価で済ませられるが、選択をする上で場所もなく、簡単にできるということで最新の二層式洗濯機を購入することになった。

電気屋でこれを見つけた時、敦子は目を丸くして覗き込んだものだった。その興奮ぶりに、ついつい電気屋につられるまま最新式の洗濯機を買ってしまった。それはとても身の丈に合わないような気がしたが、敦子が喜んでいるので直幸も良しとした。

その洗濯機も当然室内には置けないため、入り口のスペースに置くことになり、玄関口の脇に堂々と居座った。食事も入浴も外で済ませ、部屋はほとんど寝るためにあるようなものだった。画して、洗濯機ばかりが目立つ異様な空間での生活が始まったのだった。

退寮には簡単な書類に署名するだけで済んだ。ほとんど形式的なものだ。

引越しといっても、元々荷物が少なかったし、寮には充分な置き場もなかった。そのため、引越しといえば、ほとんど人が動くだけで済んだ。

北原はじめ、寮の連中が、退寮と新居を記念して飲み会を開いてくれた。ほとんど口実だが、それでも気持ちは嬉しいものがあった。

その飲み会の前に、まずはアパートのお披露目をすることになり、男たちがぞろぞろと家についてきた。

まず目に留まったのはやはり洗濯機だ。古ぼけた佇まいにぽつんと真新しい洗濯機が置いてある。いや、正確には四角い箱状の何か、である。寮生活で洗濯を寮母にまかせっきりだった男たちにはそれが洗濯機だとすぐにわからないものさえいたのだ。まだまだ洗濯機の黎明期であり、普及率が低かった頃のいい思い出だろう。

来訪者たちは皆、最新鋭洗濯機に夢中になった。

大多数を占める男たちにとっては触れることのほとんどない家電

である。男たちは蓋を取ってみたり、裏を覗き込んだり、面白半分に観察して回る。

少数の女性陣は見る目が違う。実際に洗濯するであろう立場の人間の切実さだろうか。

「私も欲しいわ」

「こんなのあったらいいわ」

と口々にいい、扱い方にまで質問が飛ぶ。

敦子も初めてなのだから、電気屋の受け売り程度にしか答えられず苦笑した。

「洗濯屋でも始める気か？」

中にはそんな冗談を言う者もいて、ドッと笑いが起こった。

そうした人々の光景は、まるで先日の誰かを見ているようで、妙に滑稽で、直幸は苦笑した。

洗濯機でいきなり度肝を抜かれた男たちの中には、部屋の中が一体どうなっているのか期待を持ったものも少なくなかったようだ。実際に入ってみると、男たちの口からは、小さいだの、狭いだの、汚いだの、好き勝手な言葉が出た。

同僚たちは言いたい放題だったが、それでも部屋の隅々を見て回るのだ。自分の家を覗かれるのはいい気分がしないが、他人の家には大いに興味が湧くといった心理だろう。皆々思い思いにうろうろするのだった。

それはなんとも迷惑な話だが、しかし、やめてくれとも言えない。年少者の弱いところだろう。

しかし、なんにしても物がない。

「何もないじゃんかよ」

「ほんとに何もないわねぇ」

部屋を見て回ると、口々に感想を漏らし、「これで生活できるのか？」などと冗談を言う者までいた。

何せ、冷蔵庫すらないのである。

とりあえず、寝られること優先で考えていて、後は追々揃えてい

くつもりだった。
結局、洗濯機以外特に見るものもなく、お披露目は竜頭蛇尾に終わった。
その後、居酒屋で一騒ぎすると、解散し、それぞれ帰宅していった。
直幸たちもアパートに戻ると、気が抜けたとばかりに体を伸ばして休めた。
本当に何もなく、水を飲む程度しかできない。
それでも、こうして二人一緒に夜を過ごせることにしみじみと幸福感を感じるのだった。
人は、あれも必要だね、これも必要だね、とこれからの夢の住まいについて語りあった。
夜が更けてくると、二人は何だか落ち着かなくなり、徐々に言葉少なくなっていった。
「寝ようか」
何か、ジリジリと緊張感が高まってくるのに耐えられず、二人は蒲団を敷き始めた。
蒲団を敷き終わり、電気を消す。
並んで寝た二人は、横の方に意識がいってしまってなかなか寝付けなかった。
「ねぇ、起きてる?」
「あ、ああ」
「なんか、不思議な感じだね」
よくよく考えてみると、直幸と敦子が並んで寝るのはこれが初めてだった。
夜行では一夜を共にしていたが、二段ベッドで、何より趣きが違う。
同じ家の中にいる。それはとても新鮮なものでもあり、とても安らぐものでもあった。
「これから、ここが私たちの家になるんだね」

「ああ、そうだね」
私たちの家。改めて言葉にすると、それは不思議な力があった。
青森を離れてから、ずっと夢見てきたものでもあった。まだ、色々なものが足りないけれど、それでも確かに自分たちの家なのだ。
二人は感慨に浸った。
「ねぇ」
「ん」
「手」
敦子は蒲団を揺らして、腕を出すように促した。
直幸が腕を伸ばし、二人は手を繋いだ。
相手の感触と体温、そして脈動までが伝わってくる。
「これから始まるんだ。俺たちの新しい生活が」
「うん。ちゃんと、幸せにしてね」
「ああ、もちろん。絶対、幸せにするよ」
それは、二度目のプロポーズだったのかもしれない。
二人は、天井を向いたまま目を閉じた。
その目の先には、どんな未来が映っていたのだろうか。それを知るのは二人だけだろう。
だが、きっと、お互いに幸せに笑う未来が見えていたに違いない。
直幸たちは、夢に誘われるようにして眠りに就いた。

二人のアパート暮らしが始まって数週間後、やっと家財道具が揃い、生活空間らしくなってきた。
実際に生活してみると、アパートの安い理由も窺えた。壁や天井が薄く、音が響いてくるのはもちろんだが、隙間風が入ってくるのは冬には堪えた。
もちろん、青森の冬に比べればずっと温暖である。しかし、寒い青森の方がずっとしっかりした建て構えで問題はなかった。

それでも、カーテンをしたり、毛布を増やすことで寒さは抑えられた。

食器や調理器具が揃ってくると、敦子は料理を始めた。

母の手伝いですることはあったが、それほど得意というわけではなかった。なにより、調理できる献立が少ないのだ。

敦子はレシピを見ながら試行錯誤し、直幸はその実験台になっていた。

「美味いよ」

直幸は素直に感想を述べた。

不得意という割にはちゃんとしたものができる。

直幸は、よくよく思い出してみると、敦子の手料理を何度か食べている。食堂の生活が長く、久しく食べていなかったから忘れてしまっていただけだった。

努力家らしく、敦子は一生懸命料理を覚えたものだった。

「今年のお正月は期待しててね」

敦子はそう言って張り切るのだった。

料理のレパートリーが増えてくると、何だが食堂で済ませるのが勿体無くなってくる。

直幸は、敦子の負担にならないように気を使うものの、好意に甘えてしまうのだった。

その間に、役所に婚姻届を提出して、正式に夫婦となった。証人は、工場長の渡辺と、敦子の入居していた女子寮の寮母、庸子に頼み、快諾してくれた。

その報告をした翌日、工場長が食堂に集まっている従業員を前に、二人の結婚を発表した。食堂は、歓声と共に好意的なブーイングが巻き起こり、直幸たちは女性職員から花束が贈られた。

その後、結婚祝賀会と称して飲み会が催された。

直幸も敦子も結婚式は予定していなかったから、ごく簡単ではあったがセレモニーまで実施してくれた。

その際、みんなのコールによって直幸と敦子は口付けを交わすこ

とになったが、この提案に直幸はたじろいだ。敦子も恥ずかしそうだったが、掛け声に乗せられ、目を閉じて待つ始末。動揺しながらも何とか口付けを終え、直幸はどうにか男を保った。

工場長の話が長くなると、周りからブーイングが起こり、そこからは無礼講となった。

直幸に先を越された若い男たちは嘆きの声を上げ、「次は俺が！」と決意を新たに叫び、女性陣がそれに茶々を入れる。すかさず若い女子職員に、本気とも冗談ともとれないプロポーズをして断られる珍事まで飛び出した。

さらに、年輩の男たちは新婚夫婦に向かって、夫婦生活とは何ぞや、ととうとう滔々と持論を説いた。

宴は盛大に盛り上がり、直幸と敦子は多くの人々の祝福を得て、正式な夫婦となった。

その帰り道、敦子はしみじみと宴の模様を思い起こした。その様子はとても嬉しそうだ。

「ふふふふ」

敦子が急に思い出したように笑い声が漏れた。

「なに？　どうかした？」

「あ、いえ……、ふふふふ」

敦子は直幸の顔を見ると、また笑ってしまった。

「なんだよ？」

直幸は怪訝そうに尋ねた。

「かっこよかったなぁ、と思ってさ」

敦子はそういうと、飛び跳ねるようにして直幸の前を歩いた。

「何が？」

直幸が敦子の後ろ姿に向かって訊くと、敦子は身を翻し、指で唇を幾度となく押した。

敦子の言わんとすることを察して、直幸は激しく赤面した。

それを見て取ると、敦子は嬉しそうに笑って、跳ぶように陽気に歩いていった。

今年も年越しシーズンを迎えていた。
しかし、今年は例年とは違う。敦子と一緒に過ごせるのだから。
寮では、いつも年末年始の夜は寂しいものだった。だが、今は心のそこから温かさを感じられる状況だった。
隙間風漂うおんぼろアパートは寮よりも冷えるけれど、それを差し引いて余りある温かさがここにはあった。
工場が休業し、寮からも人が減ると、やはりどことなく寂しい感じにはなったが、一方で、それは二人だけの濃密な時間となった。
指を絡め合い、吐息に触れ、体温を分け合い、鼓動をシンクロさせる。
二人だけの世界は、二人がより一つにまとまろうとする心の波となって美しい音楽を奏でた。
二人は新しい年を迎えた。
二人は昨年と同じように初詣に出掛ける。しかし、それは今までとは明らかに趣きの違うものだった。
今年は、二人が夫婦となって初めての新年である。まだ闇に包まれた道も、二人にとっては苦にならなかった。
手を清め、神前に上がり、鐘を鳴らす。かぶり頭を下ろし、冷えた手を合わせ、祈りを捧げる。その一つ一つに身の引き締まるものがあった。
「何をお願いしたの？」
「それは……。いつまでも二人一緒に幸せでありますようにってな」
直幸は言い淀んだが、敦子の眼差しに屈して白状すると、照れて空を見上げた。
「ふふふふ。嬉し」
敦子は笑って、直幸の腕にしがみ付いた。
「そういうおまえはどうなんだよ」

「ふふふ、内緒」
「なんだよ」
「うっそ。早く子どもができますようにって」
直幸は敦子の顔を見た。
敦子は恥ずかしそうに頬を染め、脇に目をやっている。
直幸も照れて、また空を見る。
「ふふ、がんばってね、おとーさん」
敦子は直幸をしたから覗き込むと、そういって笑った。
初詣を終え、新年の暁光を浴びると一度帰宅してから、それぞれの寮を廻って挨拶をした。
「明けましておめでとうございます」
「あらあら。明けましておめでとう。新年早々早いのね」
「今、初詣に行って来たところなんです」
寮にいた頃は、こんなに早く初詣に出掛けることはなかった。どこか、暇つぶしに行っているようなところがあったからだった。
「そうなの、こんなに早くに。若い人は元気よねぇ」
年明け前から新年を待つ初詣客に比べたらのんびりしたものなのだが、それでも、ゆっくりしている人たちからすると早いのだろう。
「あの、これ、お節のおかずなんですけど、良かったら」
「あら、わざわざ」
そういうと庸子は器の中身を覗き込んだ。
「あら、黒豆と、しめじの煮しめね。これ、あっちゃんが作ったの？」
「ええ」
「すごいじゃない」
「お口に合うかどうかわかりませんが」
「あっ、ちょっと待っててね。」
庸子は何かに気付いたように寮の中へと入っていった。
「はい、これ。持ってって」
「あっ、すいません、わざわざ」

「いーのよ」
庸子は朗らかに言うと、敦子の耳元で何か囁いた。
それを不思議そうに見ていた直幸は、後で敦子に聞いてみた。
「寮母さん、何だって？」
「うん。数の子多めに入れといたからって」
「ふーん」
直幸は、庸子が何故敦子に耳打ちしたのか、よくわからなかったが、すぐに忘れた。

「んだぁ？　こんな朝っぱらから起こしやがってよぉ」
直幸たちは次に、直幸の使っていた男子寮を訪れた。
寮母に声を掛け、北原を呼んでもらったのだが、新年早々の第一声がそれである。
寝起きで非常に機嫌が悪そうだ。
「あ、あの、新年の挨拶に」
「あぁ？　んーなん、どーせ工場でいずれ会うんだからいーじゃねーかよ。そんなことで起こしたのかよ？」
北原は片目を瞑り、首を摩っている。いかにも面倒臭そうだ。
「明けましておめでとうございます」
敦子が改めて挨拶をした。
「ん～」
もう、挨拶になっていない。
「そんだけ？　まったく、この朝っぱらから……」
「おい、こちとら寝てたんだぞ。安眠妨害とはいい度胸じゃねーかよ。」
北原は、直幸の首を抱え込むようにして言った。
「あ、あの、これ」
敦子が慌てて容器を取り出した。
「なにこれ？」
「お節のおかずです。黒豆ときのこの煮しめ。良かったらと思って」

「ふ〜ん」
北原はまじまじと受け取った器を見た。
「朝っぱらから何かと思えば、黒豆ときのこだけ喰えってか？」
直幸と敦子は苦笑した。
「まったく、新年早々新婚夫婦が押しかけやがって、嫌味か？　惚気やがって」
「あ、あの、お口に合うかどうかわからないですけど、良かったら食べてください」
敦子は改めて言った。
「ふぅん。これ、嬢ちゃんが作ったの？」
「はい。あんまり上手じゃないかもしれませんけど」
敦子はそう断ったが、それでも一応美味くできたものを持ってきたつもりだった。さすがに、失敗作をお裾分けはできない。
「ほら、用が済んだら、帰った、帰った。俺はまた寝るんだ」
北原は少しの間、物思いに耽った様子だったが、不安そうに見つめる二人の様子を見て、手を振って追い返した。
「それじゃあ、また」
「失礼します。
直幸と敦子は一言置いてその場を去った。
「おう、おまえら」
二人が振り返ると、北原は後ろ姿のまま、ありがとよ、と礼を言って手を振った。
直幸と敦子は、そんな北原の背中に向かって軽く会釈して寮の門を出た。
「ああいう人なんだ。根はいい人なんだけどね」
直幸は、その帰り道で北原のことをこう説明した。

「もう食べないのか？」

「うん、最近ちょっと食欲湧かなくって」
「どうした？」
「最近、なんか気持ち悪くて……、吐き気がすることが多いの。それに……この頃よく眠くなるのよ。よく眠れてないのかなぁ」
「疲れてるんじゃないのか？　ずっと家事も頑張ってきたから、無理が出てきたんじゃないか？」
「う～ん、そうかな。そうかもね」
ここのところ、敦子は時々元気がなくなり、あまり食欲も湧かなくなっているようなのだ。
直幸は、仕事を休んだ方がいいだろう、と勧めたが、それほどのことじゃないと敦子はそれを拒んだ。
敦子は会社でも、吐き気に悩まされることがあり、仕事に集中できないでいた。
「敦子ちゃん、調子が悪そうね」
「ええ、ちょっと」
「大丈夫？」
「大丈夫です。たぶんちょっと疲れてるだけですから」
「そう」
周囲は心配したが、敦子は大丈夫だといって、仕事を続けた。それでも、心配を掛けていると思うと気分が重くなって落ち込んでしまい、なかなか自分を奮い立たせることができなかった。
そんな日が数日続いたある日、吐き気を催してトイレに駆け込んだ。
「ちょっと、大丈夫」
ちょうどトイレに居合わせた増渕が声を掛けた。
「え、ええ。ちょっと吐き気がしただけですから」
「そう。でも、ここのところずっと体調悪いでしょ。一回、お医者に診てもらったら？」
「はぁ……」
気落ち気味の敦子に、増渕は突然思いついたように訊いた。

「ねぇ、ところで敦子ちゃん。アレはちゃんと来てるの？」
「アレ？」
「そう、アレ？」
「アレって？」
「やだ、アレって言ったらアレよ。生理よ、生理。」
「ええ？　……」
「どうなの？」
「ん、そういえば、来てないかも」
ここのところ、体調不良にばかり目が行っていてよくは覚えてはいなかったが、いわれてみればそうだ、と敦子は思った。
「やったじゃない」
確信なく戸惑う敦子を見て、増渕は敦子を抱きしめた。
「ねぇ、聞いて。敦子ちゃん、おめでたみたいよ」
敦子を伴って事務所に戻ると、増渕は大声を上げた。
事務所内からは、おおっと歓声が上がり、各人からおめでとう、と賛辞が送られた。
「まだ、ちゃんと検査してみないとわからないですけど……」
「そうね。でも、たぶんそうよ」
初めての体験で自信のない敦子に、増渕は肩を抱いて言った。
その翌日、会社を休むと、敦子は産婦人科を訪れた。直幸が伴おうとしたが、敦子は一人で大丈夫だと遠慮した。まだ、本当に妊娠かどうかもわからない状態で、周りに期待をもたれるのも不安だった。
「どうだった？」
直幸は帰ってくるなり、敦子に結果を訊いてきた。よほど気になっていたのだろう、荒く息を切らしていた。おそらく、走って帰ってきたのだ。
敦子は、直幸がそんな風に自分のことを気にしてくれることが嬉しかった。
「うん、妊娠二ヶ月だって」

「ほんとに？　ほんとに？」
敦子は無言で頷いた。何だか、気恥ずかしかった。
「やったぁ。すごいぞ。敦子、最高だよ、おまえ」
直幸はそういって敦子に抱きつくと、頬に何度も接吻をした。
「んもう、直幸さんたら」
「うおっと、ごめん。そうだ、お腹にはもう赤ん坊がいるんだ」
敦子の照れ隠しの声を聞くと、直幸は我に帰り、お腹の辺りを触れないようにして見た。
その後、直幸はしばらくソワソワとしていた。
いきなり父親となったのである。子供が生まれてくると思うと興奮して気が落ち着かなかった。
翌日、早速工場長の渡辺に報告し、今後のことについて話し合った。
つい昨年の暮れに誕生したばかりの夫婦が、やっと正月気分が抜けた頃になっておめでた報告である。渡辺にしてみれば、この半年ほど、たった二人のために実にさまざまな出来事を体験させられることになった。
渡辺はまず、第一声に祝福してくれた。
その後は工場長の顔に戻り、敦子の今後について話し合った。
とはいっても、それほど複雑なことはなかった。
敦子は、契約期間である年度末までは産休扱いして、年度末に退職という方向で決まった。結婚退職という話もあったのだが、本人の希望もあり、渡辺も契約期間中は働いてもらうつもりでいた。
実質的に契約が満期を迎える前に自分の都合で辞めることに、敦子は謝ったが、渡辺はさほど気にしていなかった。
正直なところをいえば、敦子は仕事をよく覚えたし、新たに雇うよりずっと戦力になっていたから、惜しいことは惜しい人材だった。
まして、ここのところ、カラーテレビの需要がどんどん伸び始めていて、仕事が次から次へとやってきそうな雰囲気だったのだ。それを思えば、できるだけ多くの人材を確保しておきたいのが心情だ

った。

だが、なによりも家庭を守るのが妻の務めであり、子を産むことが女性の務めである。

敦子には、裏側から直幸を支えてもらえばいい。

渡辺は快く応じるのだった。

その後、敦子は事務所や食堂を廻って、「ご迷惑をおかけします。ありがとうございました」と声を掛けて廻った。

「今まで、ご苦労さま」

「岡崎さん（あっちゃん）がいなくなると寂しくなるよ」

「がんばってね」

周囲は好意的で、一言二言声を掛けてくれた。敦子は本当に大勢の人たちに祝福され、涙ぐむ場面も見られた。

そんな様子を見ると、敦子は本当に工場の人々に愛されているのだと実感するのだった。

敦子が会社を休むようになると、直幸はなんとなく寂しいような気がした。

シフトの関係から毎日とはいかなかったが、それでも昼食を共にする機会がなくなると、ぽっかりと穴が開いたような満ち足りなさを感じるのだった。

もちろん、家に帰れば敦子に会えるのだが、工場は敦子と一緒に頑張ってきた場所でもあった。そんな直幸にとって、この変化は少し寂しいものでもあった。

そんな直幸を察してか、声を掛けてくれる者もいたし、顔見知りも多く、食事を共にする相手なら、充分にいた。

（敦子は家で待っていてくれる。敦子が待っていてくれるから頑張れる。敦子と子供のためにも、俺が頑張らないといけないんだ）

まるで、独身寮の生活のような男臭い職場で、直幸は男の在り様とでもいうものを感じるのだった。

アパートには多くの同僚たちが見舞いに来てくれた。

寮母の庸子や事務員の増渕ら女子社員たちが顔を出し、色々と自

分の経験などを語って聞かせてくれた。
　また、甘いものが欲しくなるだろう、酸っぱいものが欲しくなるだろうと果物やドロップなどを見舞い品に持ってきてくれる者もいた。
　女性は心配りがいいのか、一緒に住んでいる直幸も驚くようなさまざまなことをしたり、教えてくれた。
　一方、北原や松本ら寮の連中も顔を出してくれた。
　だが、男共はほとんど物見遊山にでも来たようなものだった。見舞い品も、浅漬けや乾物など、ほとんど自分の好みで選んでいるようなものばかりで、中には、日本酒一升を差し入れに持ってくるつわもの強者までいた。直幸も敦子も、それにはさすがに引き攣って苦笑するしかなかった。好意は非常に嬉しいのだが、物は選んで欲しいと思うのだった。
「元気になれよ。大きくなれよ」
　直幸は、敦子のお腹を摩りながら、お腹に向かって声を掛けた。
　敦子はそんな直幸の姿を微笑ましく見ていた。
「だいじょうぶ。男の子でも、女の子でも、きっと芯が強くて、優しい子よ。直幸さんみたいに」
「俺みたいに、かい？　それはちょっと、どうなんだ？　それより、敦子みたいに元気な子であればいいよ。健康でさえあれば、どんな子だって」
「そうね。体が丈夫なのが一番よね。じゃあ、一杯食べなくっちゃ。」
「はは、そうだな。でも、無理して食べ過ぎるなよ」
　直幸も敦子も笑い合った。
　敦子のお腹も大きくなり、お腹の胎児は少しずつ動くことが増えてきた。
　それと共に、新たな家族の誕生を待ち望みにする二人の想いも膨らんでいった。

残暑が緩やかになり始めた、九月の終わり、工場の電話のベルが鳴った。

それは、市立病院から直幸宛てに掛かってきた電話だった。

「えっ、産まれた！」

直幸は慌てて受話器を取り、病院職員の言葉に大きく反応した。

その言葉に、周囲が一気にざわめく。

「はい――、はい――、ありがとうございます。」

直幸が電話を切るまで、職員は直幸の挙動を注意深く観察していた。入り口の方でも別の階から駆けつけたのか、様子を窺う者がいる。

「病院は何だって？」

直幸の様子からほとんど状況はもうほとんどわかりきっていたが、それでも直幸の口からはっきりと聞きたいのだろう。

「産まれたそうです」

直幸は目をキラキラと輝かせて答えた。

「おお、おめでとう」

「これでほんとにお父さんね」

「大変なのはこれからだぞ」

職員たちは口々に祝辞と激励を送ってくれた。

渡辺も様子を見に来ていて、満足げな顔をしている。

「産まれたんだって？」

「はい、ありがとうございます」

「……それじゃあ、仕事に戻ります」

直幸はしばらく間を置いてからそういった。

「おいおいおいおい、そりゃないだろ？」

呼び止められて、直幸が何かと振り返る。

「何か言うことあるだろ？」

「ああ、ご心配おかけしました」

直幸は少し言葉を探して、渡辺に向かって一礼した。
「いや、そうじゃなくて」
「？？」
「あるだろー、もっとだいじなことがぁ」
「！　……」
「行ってやらんのか？」
「でも、仕事がありますし……。」
「なあに言ってんだ、こんな時に。病院、行きたいんだろ。そう顔にも書いてあるじゃねーか」
「でも、他の皆さんに迷惑も掛かりますし……。」
「なあに言ってんだ。おまえ一人いなくたって、どうにかならぁ。若いモンがくだらねー気ぃ使ってんじゃねーよ。こういう時は、無理してでも『病院行かせてください』て頼み込むもんだろがっ！」
「そうよっ、行ってあげなさい。敦子ちゃんも喜ぶわよ。」
二人の様子を心配そうに見ていた増渕も、直幸を促した。
「今日の分はまた後でたっぷり返して貰やあいい」
「おい、福田ぁ、車出してやれっ！」
渡辺は事務所の奥に目をやると、福田に声を掛けた。
「はいっ！」
サボれる口実ができたからか、福田は喜んで支度を始めた。
「ほれ、行って来い！」
渡辺は直幸の尻を叩いて追い出した。
「はいっ！　ありがとうございます」
直幸は礼を言うと、元気よく走り去っていった。
「ふっ、嬉しそうな顔しやがって」
渡辺は直幸の後ろ姿を見詰めた。
「よし、仕事だ、仕事。戻った、戻った。詰まらんことで時間潰したからな、その分休憩無しだ。精出して働けよ」
渡辺の言葉に、周囲からはえーっとブーイングが起きた。
各々の職員はそれぞれの持ち場に戻ったが、彼らの心の中にはま

だ、さっきまでの余韻が残っていた。

走ってはいけないと思いながら、体が大人しくしていられない。直幸は声を張り上げたいような衝動を抑えつつ、病室へと向かった。

直幸に心配を掛けまいと、敦子は市立病院に入院することを選択したのだった。直幸も、敦子が安全に出産できる環境を考えると、入院する方が良いと思った。

会いに行ける時は毎日会っていたが、それでも敦子が家にいないと直幸は少し寂しさを覚えた。仕事に集中することでその気を紛らわし、ずっと待っていたのだ。

今、その夢の日が訪れたのだ。直幸は興奮せずにはいられなかった。

病室を開けると、ベッドが横たわっているのが見えた。

直幸はベッドの先を早く見たいと、部屋の中へと踏み込んだ。

「！　敦子！」

「直幸さん！」

直幸は敦子の隣へ近づくと、グッと胸で抱いた。

「よく、頑張った」

直幸の胸は小刻みに揺れ、弾む息が髪に触れた。

急いで駆けつけてくれたのだ。そう感じると、敦子はとても嬉しかった。

「ふふ、がんばりましたよ」

敦子は笑顔で答えた。直幸の胸は心地よく、敦子は目を細めてそれを感じた。

「ええ、奥さまはよくがんばりましたよ」

直幸はその声にふと顔を上げた。

敦子のベッドの周りには医師と看護婦が立っていた。

「あっ」

二人の存在にやっと気が付いて、直幸は立ち上がり、姿勢を正し

た。
　完全に敦子しか目に入っていなかったのだ。
「奥さまはよくがんばられましたよ。術後の経過も順調です。母子共に大丈夫でしょう」
　医師は落ち着いた口調で説明した。
「ありがとうございました」
「岡崎さんも、おめでとうございます。元気な男の子でしたよ」
　看護婦の言葉に気が付いたように、子供を捜して、周囲に目を配った。
「そういえば、子供は？」
「ええ、今、お連れしますよ」
　看護婦がそう言ってまもなく、別の看護婦が子供を抱えて入ってきた。
「岡崎さんですね。ほら、赤ちゃんですよ」
「直幸さんが来るのを待っていたのよ」
　直幸は、看護婦から赤ん坊を受け取ると、恐々と抱えた。
　ほんの少し力を入れるだけで、壊れてしまうのではないかと思うような僅かな質量感。
　直幸の手の中にはしかめっ面の小さな生命が確かに存在するのだ。
　その腕の中は、不思議な浮遊感に包まれていた。
「小さいなぁ」
　直幸は感想を漏らして、敦子と顔を合わせる。
　見詰め合って、互いに笑い合う。
　直幸はさらに周りの医師や看護婦にも目をやり、医師たちは頷いて答えた。
　それはとても不思議な感覚だった。
　それはずっと敦子のお腹の中にいて、それが今、手の中にある。
　その小さく、か弱い存在の中には、確実に生命が宿っていて、今も活発に活動している。
（これが俺の子供。敦子と俺の……）

直幸は全身から震えが来て、鳥肌が立つのを覚えた。
「直幸さん」
敦子が手を伸ばし、赤ん坊を求める。
敦子は赤ん坊を抱くと、慈しむように顔を覗き込んだ。
敦子の笑顔がとても輝いて見える。これが母というものなのだろうか。直幸はとても美しいと感じた。
「あっ、そういえば、名前。名前はなんて……」
「あっ、うん。そうね、男の子だから、ともや朋也。いいでしょ」
名前は、敦子に任せていた。
最初、敦子は直幸の名前から一文字取ろうと考えたが、直幸はそれを拒んだ。
結局、友情の「友」の字から「朋」に変わり、男児であれ、女児であれ、「朋」の字を用いるつもりでいた。
しかし、敦子は最後まで決めなかった。産まれてくる赤ん坊の顔を見てから決めようと思っていたのだ。
「朋也、かあ。おし、朋也。おまえは今日から朋也だぞぉ」
直幸は、敦子から朋也を受け取ると、高々と手を掲げた。
「あ、直幸さん、あんまり乱暴にしちゃ……」
「んぎゃー」
「ほらあ」
「あああああ」
直幸は、突然泣き出した朋也をどうしていいのかわからず、慌てた。
そんな直幸の様子を見て、周りからは笑い声が漏れた。

敦子はすぐに退院した。
敦子は久しぶりの我が家に戻ると、懐かしそうに柱を撫でた。
敦子がいない間、部屋は少し散らかってしまったようで、敦子は

もう、と鼻息を荒くした。
「やっぱり、家が一番安心するー」
敦子は脚を伸ばして開放感に浸った。
朋也は、事前に買い揃えておいたベビーベッドに横たえた。
直幸と敦子は、新しい家族の誕生に微笑み合った。
朋也を交えての新しい生活はなかなかに大変なものだった。
乳児との生活はなかなか気持ちの休まる時がない。庸子たち、年輩の女性陣がたまに様子を見に来てくれるのだが、聞くのとやるのとでは大違いである。それこそ戸惑いの連続だった。
部屋には風呂がなく、大きな洗面器を買って、それを風呂代わりにして入れた。
直幸は、敦子と交代で銭湯に通ったが、敦子がいない時に朋也がぐずると対応にあたふたしてしまい、どっと疲れるのだった。
さらに厄介なのが夜泣きである。一部屋に纏まっているのだから、逃げ場がない。交代勤務でしっかりと体を休めたいところだが、ゆっくり眠っていられないのは特に堪えた。
さらに悪いことに、アパートの薄壁で朋也の泣き声は筒抜けだったようだ。毎夜続けば、さすがに苦情も出た。夜中に怒鳴り散らしたり、壁を叩かれることもあった。
直幸が夜勤の時は、少しの間でも、と敦子が朋也を連れて外出してくれる気遣いもあって、直幸は敦子の苦労も充分に理解していた。
それでも、睡眠を邪魔されると不機嫌になり、つい敦子に当たってしまうこともあった。
この数ヶ月間は本当に戦争のようだった。
夜泣きが減ってくるにしたがって、直幸も睡眠が取りやすくなり、精神的にも肉体的にも落ち着いてきた。
朋也が「アー」、「ウー」などとなんご喃語を使い始め、手足を活発に動かすようになってくると可愛らしさも増した。
表情も豊かに作るようになり、やっと人間らしくなってきたように思う。

朋也は、玩具を買い与えたり、体を支えて動かしてやると喜んだ。
オムツの取替えも手馴れてきて、素早く交換することができるようになった。
抱き上げると朋也の方から能動的に顔を触ってくるようになり、物を取ろうと手を伸ばすようにもなってきた。
そうした日々の成長は、直幸と敦子にとって身近な喜びとなった。
梅雨が明けた頃には、朋也は物に掴まって立ち上がることもできるようになった。
そうなると、少しずつ歩行練習をするようになり、家族で近くの公園に出掛けることも多くなった。
「ほーら、朋也くーん。おいで、こっちおいで」
「ほーら、朋ちゃーん。ママのはここよぉ」
手を叩いて朋也の意識を向けさせるが、朋也はすぐに他のことに気を取られてしまう。
体勢を崩して倒れそうになると、素早く手を伸ばして頭を守った。
二度目の春を迎える頃になると、朋也は敦子たちの言葉によく反応するようになり、言葉数も増えた。
家の出入りの多い直幸の方が朋也に覚えられるのが遅く、どうにか覚えさせようと、必死に朋也に声を掛ける場面もあった。
「ぱーぱ」
朋也が片言でそう発した時には、直幸は大喜びで涙ぐみさえいたほどだった。
世の中が大阪万博で盛り上がりを見せている頃、岡崎家では別の意味で盛り上がりを見せ、瑞々しい果実のような日々を送っていた。
二歳になる頃には、朋也の性格がはっきりとしてきた。
人見知りが強いということはなかったが、どちらかというと自分の興味に没頭するタイプだった。好奇心は旺盛な方で、何にでも手を出そうとする子だった。集中力はある方で、じーっと何かに向かっている時は、声を掛けてもなかなか気付かないほどだった。
敦子は添い寝して、よく朋也に子守唄や話をして聞かせた。

昔からある定番のものもあったが、自作のものもあったようだ。妙な歌を聞かせたりしていた。

その辺りは多くの物語に触れていた故だろうか、独特の感性があった。

敦子の話は妙な設定だったり、変な登場人物が現れたり、現実的とは言えなかったが、本人は「子供にするんだからいいの。」と言っていた。

そんな敦子の語りを、直幸も一緒になって聞いた。

その年の晩秋。

直幸と敦子は朋也を伴って神社を訪れた。数え三歳の祝いだ。

記念ということで、直幸と敦子は朋也に紋付、袴を着せたが、朋也は変な格好をさせられたと言わんばかりに袖や裾をヒラヒラとさせて見回すのだった。

さらに、下駄を履かせてみたが、慣れないものですぐに脱げてしまった。

それでも音が鳴るのが面白かったらしく、不必要にカタカタと足を鳴らした。

直幸は朋也を抱っこして、ひも鈴まき紐を持たせてすずつぼ坪鈴を鳴らした。

それは朋也にとって初めての鈴鳴らしだった。朋也は何だかわからないまま、ゆさゆさと何度も揺すったものだ。

お参りの帰りに千歳飴を買ったが、袋が大きくて、朋也は引き摺って歩いた。帰り道、中味が気になるらしく、朋也は何度も袋の中を覗き、「これ、なに?」と二人に質問していた。

家に戻ると、早速千歳飴を出した。

縁起物なので割っていいものか、頭を悩ませたが、そのままではとても処理しきれないと小さく割ることにした。

「朋ちゃん、あーんして、あ~ん」

敦子が飴を朋也の小さな口に指で軽く押し込んだ。

何だかわからないものが口に入り、味が広がり出す。

「美味しい？」
敦子が尋ねると、朋也はコクリと頷いた。口一杯に甘味が広がって、嬉しそうに笑顔が漏れる。
この後、朋也が千歳飴をせがんで駄々をこね、しばらくの間苦労させられることになった。
それからしばらくしてのことだった。
「どこかに引っ越そうと思うんだが？」
直幸はそう提案してきたのだった。
「えっ？　引っ越すってどこへ？」
「うん、それはまだわからないけど、どこか、家を買おうと思うんだ。」
「えっ？」
敦子は二度驚いた。
「家を買うって……」
「朋也も大きくなってきたし、育児も一段落した頃だと思うんだ。」
敦子はそのまま直幸の言葉に耳を傾けた。
「朋也もこれからもっと成長していくし、一部屋だけでお風呂もないんじゃ、やっぱり何かと大変だよ」
「でも、それなら広いアパートでも……」
直幸は首を横に振った。
「朋也が大きくなれば、やっぱり同じことだよ。数年後には小学校に上がる。その後、中学、高校と上がっていくだろう。そしたら、やっぱり、ちゃんと落ち着いて生活できる方がいいだろ」
「でも、仕事は？」
「まぁ、変わることになるかな」
「えっ？」
「いや、変わらないかもしれないけど、そういうことも考えてってことだよ。通える場所ならいいし、通えそうになかったら、変える」
「もちろん、すぐにって訳じゃない。ちゃんと探して、それで、決めるさ。でも、朋也の将来のことを考えると、いつまでもこのボロ

アパートって訳にはいかないだろ」

「うん、それはそうだけど……、お金は……」

「お金なら、何とかなるさ。今だって結構貯金はあるんだ」

家賃も安く、直幸も無趣味で散財しなかったから、蓄えは充分なほどに増えてはいたのだ。その後、敦子が仕事を辞めてからも直幸の給料で余りあるほどだったから、生活環境の割りにはお金に困るようなことはなかった。出稼ぎ労働者のように仕送りをする必要がなかったことも経済状態をよくしていた。

それでも、家を購入するとなるとローンは避けられない。けれど、現在の日本の経済状況であれば、ローンを組むこともそれほど難しいものではないと思われた。

事実、工場の業績はここのところずっと好調だった。

十九七〇年を迎える頃にやっとカラーテレビの普及率が白黒テレビを上回り、将来を見越して展開してきた工場の方向性がやっと結実したのだ。

カラーテレビが白黒テレビを上回ったことは工場内では大ニュースとなった。その時のボーナスは特別に多く支給され、短期契約者にまで金一封を出す大盤振る舞いだった。

工場はさらに、今後の展開を見越して、サイズをワンランク上げていこうという声まで現実的に話されるようになっていた。

かくして、直幸と敦子の新たな生活の場を求めての旅が始まった。同時に、直幸はこのことを渡辺に話し、仕事についても相談しておいた。

二人は県内に拘らなかった。

もちろん、県内で現在の職場にそのまま働き続けることを理想とはしていた。それでも、二人にとって最も大切にしたかったのは住環境だった。朋也にとってよい環境。そして、家族揃ってゆっくりできる環境だった。

まだ幼い朋也を連れ立ったまま動き回るわけにもいかず、直幸が不動産屋を回った。しかし、不動産の数は膨大で、なかなか探し通

せるものではなかった。そのため、逆に、周囲の環境から住む場所を絞り込むことにした。

当初、工場に通うことを念頭において探し回ったために、直幸たちがこれだと思うようなところには行き当たらなかった。

しかし、方針転換したことでその範囲は大きく広がった。

それを探すのは用意ではないと思われたが、環境のよい場所をピックアップするとなると、それほど多くはなかった。

土地を絞り込んだら、次はその場所を見に行くことになり、休日を利用して出掛けることになった。

半ばハイキングのつもりで、出掛けることで、意識的な負担を軽減させた。朋也も電車に乗れると喜んで、真新しい環境に目を躍らせた。

仕事に支障をきたさないように、じっくりと時間を掛けて熟考した。そのため、住む場所を決めるまでにおおよそ一年が経過していた。

候補はいくつか上がっていたが、最終的には群馬県光坂市に決まった。

光坂市は群馬県南西部に位置する街である。ベッドタウンとしての期待が高まり、近年人口増加が見込まれて経済が発展しつつあった。東西に鉄道が走り、市の南側と北側ではだいぶ趣を変えていた。南東部は特に発展著しく、新興住宅が並び、北部には長閑な田園風景がまだまだ広がっていた。光坂市は北西部には山地が広がり、市内を利根川の支流が流れる自然豊かな土地だった。

そんな北側市街も徐々にではあるが田畑が減り、新しい住宅が建つなど、新旧混在の不思議な構成となっている。街はまだまだ変化する多くの可能性を秘めていた。

住む場所として、豊かな自然を間近に接することのできるのは嬉しいものだったし、交通も目立って不便ということはなかった。

また、この光坂市は一九六〇年代後半に市制施行によって光坂町が周辺町村を吸収して出来上がったばかりの市であり、朋也とほぼ

同じ年に誕生したのだった。こうした縁も感じ、直幸と敦子は光坂市に決めたのだった。

コンコン

アパートの戸が叩かれた。

「おう、なお直」

直幸が戸を開けると、松本が立っていた。

「手伝いに来たぞ」

「はい」

「準備はできてるか？」

「ええ、大体は」

荷物整理は粗方済ませておいた。

大きな荷物といえば、冷蔵庫と洗濯機ぐらいのもので、あとはそれほど大きな物はなかった。

生活しながら、というのはなかなか片付けにくいものだった。

よく使うものは後で纏めてしまうようにして、極力他のところから手をつけるようにしたが、あれもこれも使うような、しまってもいいような、と迷ってしまって能率が上がらないのだった。

「これは何だ？」

直幸は黒い箱を見つけて独り言のように言った。

見たところ、立派そうな入れ物だが、直幸には覚えがなかった。

「あっ、それはダメ！」

直幸が中味を確認しようと蓋に手を掛けると、敦子がそれを制止した。

「これは、私のだから」

「それは、何なんだ？」

「秘密よ、秘密」

直幸は顔を軽く顰めた。

「女の子には色々秘密があるのよ」

「……」

（もう、女の子という歳でもあるまいに……）

直幸はちょっと失礼なことを思ったが、話が脇に逸れたため、意識が箱から移された。

朋也の玩具もいくつか残してしまいこんだ。

古くなった玩具はもう捨ててしまっても構わないかと思ったが、朋也は懐かしい玩具に興味津々といった感じで覗き込んだりしていた。

おそらく、使っていた頃の記憶は残っていないだろう。新たな興味を湧かせているようだった。

引越しには、松本が車を出してくれた。北原や大塚も手伝ってくれたおかげで、荷物を運び込むのは順調にいった。

ワゴン車一台と、乗用車が一台。荷物は乗用車の後部座席にも少し乗せてもらった。

栃木県から群馬県までは高速道路もなく、利根川と併走するように高崎まで西進した。

到着した後、北原たちが「遠い」と苦言を吐いていた。松本も、随分と遠いところに買ったものだと残念がる様子だった。

北原たちのおかげで引越しは手早く済ませることができた。長い道程を走り疲れていただろうが、北原たちは精力的に体を動かしてくれたのだった。

さらに、ちょっとしたプレゼントまで用意してくれていた。

工場で作られたカラーテレビだ。しかも、一七型である。

工場のみんなのカンパで購入したそうだ。松本は「ご祝儀の代わりだ」と言っていた。

順調にことが進んだおかげで、引越しは一段落突いたが、逆に、直幸の仕事の方が纏まらなかった。

結局、直幸は栃木のアパートに残りることになった。契約期間中は工場で働き、その間に仕事を決めようということで話が纏まったのだ。

別々に暮らすと言うことに、敦子は強くは反対しなかったが、寂

しそうな顔をした。
お互い、男子寮と女子寮に別れて生活した時も寂しさを覚えたが、今回はその時の比ではなかった。
アパートで一緒に暮らし始めてから、初めての体験である。それも、決して近い距離ではない。なかなか簡単には会えない。
「体に気をつけてね」
「無理しないでね」
「ちゃんと、ご飯食べてね」
別れ際、敦子は何度も声を掛けてきた。
その敦子の瞳は潤んでいて、今にも泣き出しそうな顔だった。
「ほんの数ヶ月のことじゃないか。そうしたら、また一緒に暮らせるよ。ここは、俺たちの家なんだから」
直幸は敦子の頬を摩って元気付けた。
直幸は、アパートを引き払うことも考えたのだが、結局それは止したのだった。近くに寮があるのだから、それでもよかったのだ。しかし、小さな部屋にはたくさんの思い出が凝縮されていて、離れるのが勿体無いように思えた。
また、寮は独身寮である。敦子が「様子を見に行くから」と言っていたし、敦子も朋也も落ち着ける場所の方がよいと考えたからでもあった。
直幸もできるだけ休日は自宅へ帰ろうと思った。せっかくの我が家であるのに、そこで暮らせないことは残念なことだった。それでも短い間だと奮い立たせるのだった。
「パパー」
「ああ、朋也ー、よく来たなぁ～」
朋也はたどたどしいながらに走り寄ると、直幸の足に抱きついたのだった。
「あなたに会えるのが、ほんとに楽しみみたい」
敦子が説明した。
朋也はよく、直幸はいつ来るのか、次はいつ行くのか、と敦子に

聞いてくるのだそうだ。直幸は、そうやって求められることはすごく幸せだと感じた。いつも一緒にいたのでは、それは感じられないことだったかもしれない。

直幸は、電車賃も馬鹿にならないから、と頻繁にやってくる敦子に控えるように言いはしたものの、出会えることはとても嬉しいもので、力が湧いてくるのだった。

直幸も仕事の疲れもあって、変える機会は減っていったが、その分、敦子が会いに来てくれた。直幸の元に訪れる時は、盛大に手料理を振るってくれて、いつもご馳走になった。

一人暮らしにもなれ、冷静になってくると、直幸の考えも変わりつつあった。

当初はすぐにでも光坂の自宅から通える仕事に転職することを決定事項として捉えていたが、今ではもう少し粘ってもいいだろうと思えた。

これは、渡辺と相談するうちに変化したことでもあった。

渡辺は、直幸が県外に家を購入したことに複雑な想いを抱いていた。

直幸は出稼ぎ労働者ではない。いつ帰郷するかわからない、あるいは農閑期にのみ働く場所を求めてくるような者たちとも違うのだ。家庭も築いて、しっかりと定着した暮らしを望んでいる。

それは、会社側としても、長期的に働いてくれる可能性を見出せるものだった。

また、直幸はまだ二〇代半ばと若く、伸びる可能性を持っていた。契約した当初はミスも多く、危なっかしいところが目立ったが、勤務態度は真面目で、仕事も丁寧だった。それは性分なのだろう。

そうした直幸の性格は、確かに営業などには苦労しそうだったが、一生懸命集中力を持って取り組む姿勢は充分に好感が持てた。そう

した気質は、何より会社に対する貢献が期待できたからだ。
それゆえ、渡辺は将来的に、直幸が正社員として社を支える存在になってくれることも期待していたのだ。
しかし、家を他県に購入したとなると、状況は変わってくる。生活の場が変われば、仕事への影響は避けられない。しかも、借家であれば転居も容易だろうが、家を持つとなれば無闇に手放すこともできなくなる。
その点について、渡辺自身の考え方はあったが、直幸の家へ対する思い入れは非常に強いものがあるのがわかり、口を挟まなかった。
直幸は、子供を育てる上で、しっかりとした家が必要だと考えていたのだった。そして、家族円満の——清水家のような——暮らしに憧れを持っていたのだった。
渡辺は、直幸の意思を尊重したが、家を持つということは簡単ではないと忠告もした。
実際、転職といっても、簡単ではなかった。家のローン返済はもちろん、三人の生活費や学費などもある。
直幸は、子どもの頃、経済的な理由で苦労をした覚えがなかった。それは父、幸三の認めるところでもあった。
だからでもあろう、直幸は朋也の将来について経済的に苦労をさせるようなことはないように、と思っていた。
それゆえ、仕事を帰ることに躊躇いを持つようになってきていたのだ。
工場勤務は経験も買われ、夜勤手当もあって給料としてはかなりよい条件だった。その上、正社員となれば更に上乗せされる。それは魅力的なものでもあった。
ただ、準社員の今の方が身動きは自由だという点で、少しばかり悩むところもあった。
つまり、このまま敦子と別れて暮らすことになるのか、早々転職して一緒に暮らせる環境を模索するか、に悩んでいた。
結局、直幸は結論が出ないまま契約満期が迫り、行く当ても定ま

らないために契約を更新したのだった。
これについて、直幸は敦子に、早くローンを返済するため、と言っておいた。
その後も、直幸と敦子がお互いに行き来する生活が続いた。それは、直幸の理想としているものではなかったし、酷く歪な家族関係に思えるのだった。
直幸は、いずれは必ず一緒に暮らせるようになる、と心に言い聞かせるのだった。
そんなある日のことである。
「生命保険？」
「うん」
「べつに、いいんじゃないか？」
それは唐突な提案だった。
敦子が直幸に生命保険に入るように勧めてきたのだった。
敦子は、直幸と一緒に暮らせないことに寂しさを感じていた。それでも、春になれば一緒に暮らせるだろうと期待していたのだ。
だが、結果は契約更新。まだこれからも、この生活が続くことになるのだ。
敦子はそれこそ、想いっきり直幸を非難してやりたい気持ちにもなった。
けれど、一生懸命自分たちのために働いている直幸をどうして責められよう。
頑張って働いている直幸の苦労に比べたら、自分のわがままなど――取るに足らないもの――。
敦子はそう自分に言い聞かせようとしたが、不安になるのだった。
もし、この次も更新したら、また来年も一年、続くというのか。
それを思うと、心は揺らいだ。
直幸は、保険の必要性を感じてはいなかった。
たいだい、少しでもローンの返済に充てたいのにその他の出費にまで頭が回らない。

そんな状態だったから、敦子の話を特に取り合おうとはしなかった。

「もし、何かあったら……」

その言葉に、直幸は敦子の方を見た。

敦子の瞳はゆらゆらと揺れている。

「もしものためにでも、ね。」

「それなら、敦子だってそうじゃないか。敦子に何かあったら、それこそ大変だ。朋也の面倒を見る人がいなくなる。」

「……うん」

敦子も、それが気休めだということはわかっていた。直幸と一緒に暮らせないということと、直幸に何かあるということはまったく別の問題である。

だが、たとえ気休めであっても、何かに縋り付きたい気持ちだった。限られた時間しか触れ合うことができないと、相手のことが恋しくて仕方なくなる。

理由などどうでもいい。ただ、確かに繋がっているという何かが欲しいのだった。

それが仮初のものであっても、ただの紙切れであっても、ないよりはまだましだと思えるのだった。

「そんなの気にしてたら、何もできないよ」

直幸はそういったが、結局、敦子の納得のいくように、形だけでも保険に加入することにした。

後日、渡辺に話しを持ち込むと、会社で取引のある保険会社を紹介してくれた。長年の付き合いもあり、そこの保険会社と契約することになった。

「ま、保険も一応大事だわな。家庭を持つと……」

渡辺もそう言っていた。

「保育園？　そうか、いいんじゃないか」
お互いに、今の暮らしに慣れてきた頃だった。
朋也ももうそんな頃合いに成長していた。今では活発に動き回り、公園で一緒にボール遊びをすることもあった。
朋也にも同じ年頃の友達が必要だろう。
直幸は素直に賛成した。
「それでね……」
敦子はさらに話を進めた。
「朋也を預けている間、私も働きに出ようかと思うの。」
「？　なんで？」
「朋也を保育園に入れれば、その間、私も手が空くし……。」
「でも、大変だろ。朋也の面倒見て、食事とかもしなくちゃならない。こうして俺の面倒だって見てるんだし」
「うん、でも、それほど大変じゃないわ。朋也だってだいぶ手が掛からなくなったのよ。放っておくと、結構自分で遊んでいるもの。あの子、好奇心が強いみたいで、放っておくと、勝手にどこかに言っちゃったりするけど、そういうところに気をつけていれば、手は掛からない方よ。没頭しちゃうと、時間を忘れるくらい。自分の世界に入っちゃうみたい」
「おまえみたいに？」
「んもう、わたしはそんなじゃありません」
敦子は直幸の腕を軽く叩いた。
「少しでも、お金の足しになればいいし、直幸さんにばっかり頼ってもいられないわよ」
「そんなこと、気にする必要ないよ」
「んーん、やっぱりダメ。朋也にもちゃんとお父さんが必要だもの。少しでも早くみんな一緒に暮らせるように、わたしだって頑張らなきゃ」
そうして、朋也が保育園に通うようになってしばらく後、敦子は開店したばかりのスーパーで働き始めたのだった。

朋也が保育園に通うようになったのは、朋也にとってとても良かったようだ。

「このまえ、ゆうくんがね――」

「ほいくえんのみんなと、えんそくに行ったんだよ。さくらがすっごくきれいだったんだよ」

「このあいだ、バッタを捕まえたよ」

「うみをはじめて見たよ。パパは見たことある？」

「このまえね、ママとパパのえをかいたんだよ。せんせーにじょうずだってほめられたんだよ」

朋也は、直幸に会うと、たくさんのことを教えてくれた。

色々な人や物に出会い、たくさんの刺激を受けたようだ。

敦子の話では、特別親しくなった友達というのはいないらしいが、楽しそうにしているという。どちらかというと、人そのものより、何かをしていることに興味があるのかもしれない。

（あまり、人付き合いが下手なのは似ないで欲しいな……）

直幸はそう思った。

直幸は敦子のことを心配したが、敦子は大丈夫だと言っていた。

敦子の性格からすれば、家でじっとしているより、外に出ていた方が適しているのだろう。職場の人の話が出るなど、話題が広がったのも働き始めた効果だろう。

敦子も、人と接することで寂しさを紛らわすこともできたし、色々な人と接することができる環境は楽しかった。

直幸は、敦子が調子良さそうにしているのを見ると、働きに出て良かったんだな、と納得した。

ここのところ、ずっと寂しい想いばかりをさせていて、直幸自身も敦子に悪いと思っていたが、敦子の元気そうな顔を見ると勇気付けられるのだった。

寝る頃になると、敦子は相変わらず、朋也に話をして聞かせた。

朋也が言葉を良く覚えたのは、敦子の語りのおかげなのかもしれない。そう思うと、直幸は、敦子と朋也が強く結ばれているような

気がして嬉しいと同時に、ちょっとだけ妬けた。
「ねぇ？　パパがお話してよ」
朋也は円らな瞳で要求してきた。
直幸としても断れる状況ではない。ここは父としての威厳を見せておかなければ、と挑戦するのだった。
悪戦苦闘しつつ、物語を話して聞かせたが、子供に話を聞かせるというのは存外難しい。
難しい言葉を使うとわからないし、すぐに質問が飛んでくる。
平易は言葉を使って話さねばならず、しかも、子どもが興味を持つように話さないといけない。大人の事情とかは入らないのだ。
常識的でありつつ、常識的でない。
子どもにする話しなのだから、難しく考える必要はない。しかし、話の続きを考えると、ついつい言葉が止まってしまう。
「ねぇ、それでどうなったの？」
子どもはなかなか鋭いし、侮れないとつくづく感じるのだった。
同時に、朋也のそうした鋭い感性や知性はすごいんじゃないか、などと親馬鹿なことを思うのだった。
こうして三人で寝ていると、本当に家族揃うことはいいものだな、と直幸は改めてその大切さを実感するのだった。

秋の休日を利用して、保育園の運動会が開催された。
直幸は、前日を昼のシフトにしてもらい、仕事を終えると素早く電車に乗って光坂の自宅に帰った。翌朝の集合時間に合わせるためだった。
直幸が保育園を訪れるのは初めてだった。
保育園は、住宅街の中にポツリと建っていた。住宅街を走る通りから路地に入ったところにあり、外からは見通しの悪い場所で、そこに保育園があるといわれなければ、きっと知らない人は気付かな

いに違いない。それは、住宅に溶け込むような佇まいだった。
だが、保育園が近づくと、それはすぐにわかった。あちこちから人が流れ込んでいくからだ。
入り口には、「運動会」と墨で書かれた看板が立て掛けられている。
「ここだな？」
「うん、そうよ」
周りにも家族連れがたくさんいる。
「おはようございます」
「おはようございます」
「祐子ちゃんもおはよう」
「大介くんもおはよう」
敦子と朋也の姿を見て取ると、周囲からは声が掛かり、敦子たちも挨拶している。
朋也も敦子に倣って挨拶し、友達と笑い合ったり、じゃれ合ったりしている。
直幸もまた、敦子に倣って挨拶するのだが、どう対応していいのか、正直苦慮するところだった。
「こちら、夫です」
敦子がそう紹介する度に頭を下げるのだが、誰が誰やらわからない。
談笑する敦子や誰か理解している様子の朋也を見ていると、自分と周りの空間とのの疎隔感が寂しい。
だが、そういう気持ちなのは直幸だけではないようだ。
辺りを見回すと、同じように父親らしき者たちはぎこちなく、所在投げに愛想笑いを浮かべているではないか。
直幸は仲間を見つけたような心境で、妙な安心感が湧いた。
そんな父親たちの憂き目も構わず、運動会は粛々と進行するのだった。
開幕の合図の花火がなると、周囲の父兄たちからは拍手が起こっ

た。

園児たちが行進し、園庭を一周する。

我が子を見るや声を上げる大人たちに囲まれ、子どもたちも嬉しそうに手を振ってくる。中には、親の元に走ってしまう子どももいた。

突然、シャッと光が走った。

（写真かぁ……）

光の元の方向を見ると、男がカメラを構えていた。おそらく誰かの父親なのだろう。子供の晴れ姿を撮ろうと、カメラを片手に目を光らせるようだ。

直幸はカメラなんて金持ちの持つ者だと思っていたから、身近に接して少し驚いた。

かけっこやお遊戯、玉入れに綱引き。運動会の定番競技も行われた。

自分の膝丈の子どもたちが一生懸命動き回る姿は微笑ましかった。

「いいぞぉ！」

「がんばれー！」

徒競走では親たちの声援は過熱した。

朝はあれほど元気のなかった父親たちは、我が子にしか目が入っていないというように熱の篭った応援をしたものだ。

子どもたちも、親の前とあってか、張り切って駆けるのだった。

中には、転んでしまう子どもや、靴が脱げてしまう子、さらにはコースを外れて親の元に突進する子までいて、会場からは笑い声や励ましの声が起こった。

そんな中で、朋也は競争で見事に一位を獲った。

「朋也ぁ、おまえ、凄いなあ」

直幸は応援席に戻ってきた朋也を抱き上げると、頭をワシワシと撫で回した。

朋也は誇らしげに笑った。

お遊戯では音楽に合わせて、大勢の子どもたちがリズミカルに踊

りを披露し、拍手を誘った。
父兄参加の競技もあり、直幸も参加した。
おんぶ競争では、朋也を背負い走った。後ろからは朋也の声が聞こえてきて、直幸を奮い立たせたが、必死の努力虚しく、三着に終わった。
「ごめんな」
がっかりしたような朋也の頭を撫でながら直幸は不甲斐なさを詫びた。
競争に勝った父親に誇らしげに笑う子どもたちを見ると、朋也は悔しかったが、それでも、自分を背負って走ってくれたことが嬉しかった。
それが嬉しかっただけに、なお悔しさが増して、朋也は少し涙ぐんだ。
「ごめんな、朋也」
直幸は、涙をにじませ、口を尖らせる朋也を見ると悪い気がして謝った。
朋也は無言で首を大きく横に振った。
お昼ご飯はお弁当を広げた。
三人、ビニールシートに座って、ピクニックのような感覚だった。
敦子が、元気が出るようにとハンバーグやカレーコロッケを作ってくれ、朋也は目を輝かせた。三人一緒に食べるお弁当は最高で、まわりも一家団欒といった雰囲気で幸せな昼食となった。
お昼ご飯を終えると、少しばかり休憩があり、その間父兄参加のアトラクションが催され、お腹を休める時間となった。
中には、お腹一杯になって眠り出す子どももいたから、保育園もそうしたことを見越しているのだろう。
まるバツクイズやバランス競争などゆったりと遊び感覚のゲームが続いた。
その後、直幸はバケツリレーならぬ子ども担ぎリレーに参加した。
父兄が列をなして、バケツリレーの要領で子どもたちを運ぶのだ

が、子どもたちを落とさないように気をつけて運ばなければならない。

大人たちに抱えられた子どもたちはさまざまな反応を見せた。担がれるのが楽しいのか、キャッキャと声を上げる子もいれば、知らない大人に担がれて泣き出す子もいる。

中には、自分の子どもが来ると、大きく担いで喜ばせる親もいたが、レースにとってはロスでしかない。

直幸も朋也を担いだ時、特別な感情を抱くものだった。担がれる子どもたちは、軽い子も重い子も、大きい子も小さい子もいて、子どもも実にさまざまだと直幸は感じた。

父兄と職員を合わせたリレーも行われたが、こちらは事前に申し込まれた人たちで、遠隔地で働く直幸は出場しなかった。

もともと運動は得意でもなかったから、直幸は安堵した。また、朋也をがっかりさせてしまうのも気が引けるものがある。

それにしても、職員と父兄のレースはなかなか気合の入ったレースだった。

家族や日頃世話になっている保育士に対して熱い声援が送られ、大の大人たちも、大人気ないほど気合を入れて激走するのだった。

運動会もすべての種目を終えると、場内は一気にトーンダウンした。

最後に閉会式を終えて解散されると、子どもたちは、水鳥が飛び立つように親の元へと跳んで散った。

運営を手伝った保護者や町内の人たちが片づけを始める。

他の保護者たちは園内でしばらく親通しの世間話に耽る者もいる。

最初は肩身の狭そうだった父親たちも、今はだいぶ馴染んでいる様子だ。

子どもたちは疲れ切ったのか、眠ってしまう子も多いようで、親に背負われたり、抱っこされたりしている。

朋也も疲れたのだろう、しばらく歩いていたが、やがて両腕を掲げてせがんできた。

直幸は朋也を背中に背負った。
今日一日、朋也は両親といる時、ほとんど直幸と離れなかった。敦子に抱きかかえられたりすることはなかった。
直幸がそれに気付くと、敦子は朋也の想いを代弁した。
「あなたといられて、嬉しかったのよ」
「そうかな？」
「そうよ」
直幸は、朋也がそんな風に自分を求めてくれることがとても嬉しかった。
「ふふ。でも、あんまりカッコいいところは見せられなかったな」
「そんなことないわよ。充分カッコよかったわよ」
「そうか？」
「そうよ。朋也だってよーくわかってるわよ」
敦子は直幸の背中で眠る朋也の顔を見た。
直幸もそれに倣って首を傾けた。
腕にはずっしりと確かな重みが伝わってくる。
直幸は、朋也の確かな成長を感じて嬉しかった。そして、育ててくれた敦子への感謝の気持ちが湧いた。
「今日一日ご苦労様でした」
「ああ」
「頑張ったじゃない。ね、パ・パ」
直幸は、敦子がそう認めてくれることが嬉しく、充実した気持ちになった。
「わたしも、惚れ直しちゃった」
直幸は、敦子の――はっきりと聞き取れたような、聞き取れなかったような――小声に反応して目を見開いた。
「ふふふ」
直幸を見て敦子が笑うと、直幸は照れて顔を背けた。
今日は一日、朋也の様子を見ることができ、保育園の様子も知ることができた。

離れて暮らす直幸にとって、敦子と朋也の暮らしが見える体験はとても貴重なものだった。
直幸は自宅に戻り朋也を寝かせると、そのまま栃木のアパートへと帰る。
「またね」
そういう敦子に、直幸は口付けをした。
離れることはやはり辛さもあった。
けれど、いつでも新鮮に家族がいることの幸福感を感じられることは幸せだった。
だからこそ、自分は頑張れるし、頑張らなければならないのだ、と直幸は思うのだった。

木枯らしが吹き、頬がツンと痛みを感じる冬の頃、直幸は家族を連れ立って出掛けた。
バスを乗り換え、市の南部市街を訪れていた。
市の南部は北側と違い、多くの住宅で密集し、主要な通りにはビルや飲食店など様々な建物が並んでいて賑やかだった。
普段、北側を生活圏としている敦子としても、駅より南側はあまり訪れることがない。
「ねぇ、どこにいくの？」
「ふふ。着いてからのお楽しみだよ」
敦子は口を窄めた。
通りを曲がると商店街を思しきアーチ上の看板が見えた。
商店街には人通りができていて、懐かしい雰囲気に包まれていた。
商店街は衣料品店に日用雑貨店、酒屋に床屋とさまざまな店が軒を連ねていた。
敦子は直幸がどこに連れて行こうというのか、わからなかった。
何かを見に行くか、あるいは食べ物か、そんなところだろうと思っ

ていたが、それがさっぱりわからない。この辺りで何か催しがあるとすれば、何らかの情報は北部の街にも伝わってくるだろう。そう考えると、全く見当がつかなかった。

朋也も始めて訪れる場所に興味津々のようだった。北部にも商店街はあるが、また趣が違っている。

直幸と敦子は、たどたどしく歩いて辺りを見回す朋也に意識を向けながら、商店街の様子も見て回った。

どこからか、甘い匂いが立ち込めてくのがわかった。ほうほうと湯気を立ち込めている店舗があった。

その甘い香りと蒸気の立ち込める通りをさらに進んだ十字路で直幸は指差した。

直幸の指し示す先には写真館があった。

(写真屋？　つれてきた居場所ってここ？)

何か面白いものでもあるというのだろうか。敦子にはさっぱりだった。

「こんにちはぁ」

洒落たドアを引くと、シャラシャラと鐘が鳴った。

「はい」

中から、白髪の初老が現れた。眼鏡を掛けた、いかにも機械弄りが好きそうな風貌だった。

「岡崎です。頼んでおいたものは届いてますか？」

「ええ、ええ。今、娘に用意させましょう」

「おーい、あれ持ってきてくれ」

初老のカメラマン、おにがた鬼形は再び店の奥へ入っていくと、声を上げた。

(？？　なにかしら？)

敦子は直幸が写真でも頼んでいたのかと考えたが、カメラもないし何を撮影したのかも想像がつかなかった。

「こちらが奥さんですかな」

鬼形は再び現れると、カウンターを抜けて歩み寄ってきた。

「はい」
直幸がそう答えると、鬼形は仏のような笑顔を見せて、敦子を見た。
「よく、お似合いになるでしょう」
（??）
「さ、こちらへ」
敦子は鬼形の促されるようにして店の奥の方へと誘われた。
直幸は、朋也が敦子の方へ歩いていかないように方を抑えた。
朋也も何が起こっているのかわからず、不思議そうに見詰めていた。
しばらくすると、鬼形が戻ってきた。
「あなたはこちらですね」
「ああ、なんか緊張するなぁ」
直幸は独り言のように言った。
「はっはっは。大丈夫。きっと似合いますよ。あちらの方をお使いください」
鬼形は店の棚の裏側を示した。
「あっと。この子はどうしますかな?」
「んー、少しそちらに待たせてもらっていいですか。」
「朋也ぁ、ちょっとそこで待っててくれ」
直幸はそういって姿を消した。
「僕。ちょっと待っててね。今、お父さんとお母さんが準備してるから。」
鬼形は朋也に椅子を用意し、適当に写真集を探してきて、開いて見せた。
写真館の奥へと連れられた敦子は、鏡の前にいた。
「あらあら、きれいなお嬢さんね」
鬼形の娘、三千代が現れた。
三千代は大きな紙の箱を抱えていて、それを置くと、「ちょっと待っていてくださいね」と言って再び奥へと姿を消した。

敦子は一体何なのかわからず、緊張感が高まった。
敦子は、大きな姿見に映る自分を見た。この状況は、どう見ても写真を受け取りに来たという様子ではない。むしろ、この状況は今から写真を撮るのではないか。
そう思うと、急に自分の姿形や化粧の具合が気になりだす。
やはり、写真に残るとなると、女性として恥ずかしいものがある。まだ、写真を撮ると確定したわけではなかったが、もっときれいにしてくればよかったと、少しばかり後悔が湧いた。
「はいはい、おまたせ」
三千代は大きめのケースを提げてやってきた。
「あ、あの、これは？」
「あら、もしかしてご存じない？」
「え？　ええ」
「あら、そうなの」
三千代がふふふ、と含み笑いを漏らすものだから、敦子は怪訝に思った。
「そうね。秘密にしてた方がびっくりするでしょうしね」
三千代は先ほど持って来ていた箱を敦子の前に持ち出すと、これよ、と言って蓋を開けた。
中には白い服らしいものが入っていたが、折り畳まれて全容がわからない。
三千代は箱を安定した場所に置いてから、服を持ち上げて広げた。
「！！」
それは純白のウェディングドレスだった。
「これ？」
「そうよ。今からあなたが着るの？」
「えっ？　でも……」
敦子はウェディングドレスを目にするのは初めてだった。
真っ白い布地に綺麗なレースのフリル。細かいところまでしっかりと飾りがあしらわれている。まるで、おとぎばなし伽噺に出てく

るお姫様が着るような衣装だった。
しかし、こんな高そうなものを一体なぜ自分が着なければならないのだろう。
その美しさには感動を覚えたが、一体どういういきさつ経緯で今に至ったのか、皆目見当がつかない。
戸惑う敦子に、三千代が説明してくれた。
「旦那さんが頼まれたのですよ」
「えっ？」
「ここはご存知の通り、写真屋でしょ。色々な写真を撮ったりするんだけど、店に飾ってあるの、ご覧になりました？」
「いえ」
確かに写真が額に収められていた気がするが、しっかりと見ていたわけではなく、写真の内容までは頭に入っていなかった。
「ご夫婦の、和服の写真とか、七五三や成人式とか、色々あるでしょ？　そういう記念の写真を撮ったりするんだけど、店に展示してあるのはその見本みたいなものね。こんな風にできますよって。それで、ウェディングドレスのモデルもいくつか依頼してあったんですけど、旦那さんがそれを知ってね、来られたのよ」
敦子は、店の入り口の方を見た。
「もちろん、モデルだからある程度、見栄えが良くないといけないんだけど。それでね、相手の方がどんな方なのかわからないと希望があってもモデルは受けないのね。結局写真だから、映りが良ければいいわけだけど、やっぱりモデルさんがいいと見栄えもするでしょ」
「それでね。旦那さんなんだけど、そのこと話したら、絶対うちは大丈夫だからって」
敦子は顔が徐々に熱くなっていくのを感じた。
「何度も頼み込まれて、あんまり真剣なもんだから、つい根負けしちゃってね。でも、ほらあるでしょ。身内びいき贔屓って。だから、あんまり期待してなかったのよ。あら、こんなこと言っちゃ失礼ね。

」

「でも、安心したわ。言ってた通り、綺麗な方で良かったわ」

御杖はそう言って笑った。

「私たち、結婚式、挙げられなかったです。だから……」

敦子は言葉を詰まらせた。

「いい旦那さんね」

敦子は頷いた。胸の中がジンときて、涙が零れそうだった。

「ふふふ。まだ、泣いちゃダメよ。撮影が終わるまでは我慢してね」

「は、はい」

三千代に声を掛けられ、返って泣きそうになってしまった。それを敦子は鼻を押さえて、何とか堪えた。

三千代はまず、敦子の髪を梳いて、シニョンを結った。

ドレスを纏うと、別人のようだった。

『馬子にも衣装』とは言うが、敦子は本当に自分が自分でないような気がしてきた。まるで、夢の中にいるようで、気持ちも体も浮ついてふわふわするような感覚を感じていた。

「ライトを当てるから、あんまり気にしなくていいわ。どうせ誤魔化しちゃうんだから」

三千代はさらっと恐ろしいことを言ってのけた。

敦子は、その言葉をどう捉えていいか迷うところだったが、自分の肌がそんなに老けてきているのか、と気になってしまった。

「紅は少し濃い目にしましょうね」

三千代はそう言って、敦子の唇に筆を当てた。

白い肌にくっきりとした朱が艶やかに光った。

手袋とヴェールを身に付け、靴を履けば大方完成した。

敦子は、パンプスのようなヒールの高い靴に慣れていなかったため、三千代に伴われて恐々と歩いた。

直幸は一足先に着替えを終えていた。

タキシードなど、一生縁がないと思っていたが、思わぬところで着る機会ができた。

しかし、見るのと着るのとでは大違いだった。首周りも窮屈で、どうにも動きにくい。工場の作業服に慣れた直幸にとっては、少し荷が重かったようだ。

朋也が直幸に気がつくと、見違える姿に、「かっこいい。」と褒めてくれた。

あとは、鬼形が少しばかり髪を整えてくれた。元々短髪なので細工のしようもない。

「朋也、これは何だ？」

「お花」

「そうだね。こっちは」

「鳥」

「うん、朋也は物知りだねぇ」

直幸は朋也を膝に乗せ、写真集を一緒に見ていた。

「さぁ、花嫁さんのご登場よ」

三千代が呼び掛けると男たちは一斉に三千代の方を見た。

「さ、こっちに。」

「おお！」

「ママ、きれい」

「おお、これはまた美しい。羨ましい限りですな」

敦子は直幸の方を上目遣いに見詰めた。

直幸はまるで時間が止まったように凝固していた。

「どう、かな？」

敦子に訊かれて、直幸はハッと我に返った。

「と、とっても綺麗だよ」

直幸は口にして、その歯の浮くような台詞に赤くなった。

敦子もまた頬を染めた。

直幸の言葉は嬉しかった。胸の中に炎が灯ったように温かく響いて、敦子は一杯になった胸を押さえた。

鬼形と三千代は若い夫婦の初々しい姿を見て微笑みを浮かべている。

「はい、笑って」
「もうちょっと、柔らかく」
「ああ、あまり顔を崩し過ぎないように」
「あくまでも、凛々しく、ですよ」
何度も修正されながら、二人は写真を撮った。
慣れない体勢で緊張し、やたらと体が疲れるように感じた。
「はい、いいでしょう」
鬼形はカメラからフィルムを取り出して何か、作業に移った。
「あっ」
写真を撮り終えて椅子から立ち上がろうとした敦子が体勢を崩し、直幸の方へ倒れた。
「ご、ごめんなさい」
直幸は敦子の手をとって姿勢を直させた。
「靴が、慣れてなくて……」
そういって体勢を立て直した敦子は、まともに直幸の顔が見えなかった。
おそらく、自分の顔は茹で蛸のように真っ赤になっているに違いない。とても顔を上げられる状態ではなかった。
敦子の心臓は、それこそ息をするのも不可能かと思うほど高鳴っていて周りの音など聞こえないほどだった。
直幸もまた、敦子の美しい姿にたじろいでいた。
倒れこむ敦子に触れた瞬間、まるで涼風が吹き抜けたように体に何かが走ったのだった。
二人が着替えを終えると、記念に家族写真を撮ることにした。まだ、しっかりと写真を撮ったことがなかったのだ。
先ほどの写真と合わせて、後日受け取りに来ることになった。
「ありがとうございました」
「いえいえ、こちらこそ、良い写真が撮れました」
「また、お越しくださいね」
鬼形と三千代は朗らかに直幸たちを見送った。

写真館を出ると、すぐに先ほど通過してきたお菓子屋らしき店の前を通りかかった。

何かを蒸しているようだった。二人は興味深そうに巨大な蒸し器を覗き、朋也も同じくそれを見上げていた。

「へい、らっしゃい。よかったらどうです。温まりますよ」

蒸し器の中はあんまんだった。

朋也が興味深そうに見ている。

写真館では緊張していたし、小腹も空いてきたようなところなので、三つ買うことにした。

その後、来た道を引き返すのだが、商店街の途中で玩具屋を見つけると、直幸は朋也におもちゃを買ってやった。

今日のメインは敦子だったから、朋也にも何かあげようと思ったのだ。朋也も写真館では大人しくしていてくれたので、そのご褒美でもあった。

帰り道、直幸と敦子は、今始まったばかりの恋人たちのように新鮮な気持ちでお互いの存在を感じていた。

二人の心の中は、あんまんに頼らなくても充分なほど温かな、初夏の陽気のようだった。

直幸と敦子はどちらからともなく手を握り合った。

お互いの体温と感触がとても快いものだった。

手を繋ぐ二人を見て、朋也が自分も繋ぐのだとせがんできた。

三人は手を取り合って帰り道を歩いていった。

冬の午後の日は傾くのが早く、長い影の尾を作っていた。

三つの影はゆらゆらと揺れながら、地平の彼方へと消えていった。

第五章

再び、春を迎えていた。

四月に入ると、桜が淡い色の花びらがひらひらと舞い、人々の目を楽しませた。

直幸は格上げされ、正社員として働くことになった。

それは、ローン返済の大きな力になると思われた。

敦子も、もう以前のように不機嫌になることはなかった。直幸が家族のために一生懸命働いていることを知っているからだった。

敦子は、少しでも早く、返済の目処が立ち、家族一緒に暮らせる日が来ることを願っていた。

遠い向こうの空の下、直幸は自分たちのために汗を流している。

心細いのは、敦子や朋也だけではない。敦子には朋也がいたが、直幸はいつも一人で戦っているのだ。

敦子はただ、温かく見守って、その日が来るのを待つことにした。

そして、直幸が帰って来たら、その時こそ、温かく迎え、それまでの苦労に報いてやろう。

今は、信じて待とう。そして、やれることをやろう。敦子はそう決めたのだ。

敦子も朋也を育てながら、パートタイムで働き、少しでも足しになるように努めた。

敦子は直幸が誇らしかった。だからこそ、自分も直幸に誇られるような女性であり、妻でありたいと強く思うのだった。

日々はあっという間に過ぎていった。

正社員になると、研修など、何かと出張の機会があり、仕事の今までのようにはいかなかった。有給休暇があるとはいえ、ほとんど形骸化していて利用する暇などまずなかった。

渡辺も、正社員として直幸を厳しく指導した。

渡辺の人間性はよく理解していたから、直幸はそれも教育と受け

止め、認められるように努力した。
長く勤務していることから後輩も増えていたが、正社員となって、年輩の契約社員に対しても指導しなければならない場面が増え、人と接するのが苦手な直幸は苦労していた。
そんな慌しい日々の疲れを癒してくれたのが、敦子と朋也の存在だった。
疲れから、光坂の自宅に帰ることが以前ほど無くなったが、それでも直幸にとって有意義な休日の過ごし方だった。
すでに、北原も松本も工場を去っていた。
契約社員たちの顔ぶれも少しずつ変わっていたが、寮での共同生活などがないと、なかなか親しい関係には発展しなかった。
「直幸ぃ。おまえ、結婚指輪って知ってるか？」
「結婚指輪？」
「そうだよ。何でも、最近はそういうのをするらしいぜ。ま、西洋かぶれだけどな。それにしても、おまえ、結婚してて知らなかったのかよ？」
大塚と酒を飲みに行った時のことだった。大塚は近々結婚するかもしれない、とその話題を持ち出してきたのだった。既婚者である直幸に少しばかり相場など聞いてみようと思ったのだが、アテが外れたようだった。
大塚も近いうちに工場を辞めることになるだろう、と言っていた。
「そうか。寂しくなるな……」
大塚は、そういう直幸の肩を叩いた。
直幸は後日、宇都宮まで出て宝石店を見て回ったものだ。
「えっ、指のサイズ？」
直幸はそんなことまったく知らなかったから、慌てた。
店員はそんな直幸を見て、小馬鹿にするような表情を浮かべたのだった。甲斐性が無さそうな直幸をこれから結婚を申し込む若者とでも思ったのだろう。
直幸は、敦子に会う度に指を眺めてどうしたの、と変な顔をされ

た。

直幸は指輪のことを敦子に内緒にしていたから、指のおおよその太さを知るまでかなり日数を費やすことになってしまった。

（今度会ったら渡そうか。やっぱり、群馬に帰ってからの方がいいかな。きっと、驚くぞ）

敦子の誕生日プレゼントとしては随分と時期がずれてしまったが、直幸なりに納得のいくものを手に入れられたのはよかった。直幸は次に出会える日を楽しみにしていたのだった。そんな気持ちを胸にしまいながら、忙しい毎日が目まぐるしく過ぎていった。

やがて向かえた、梅雨も明けた蒸し暑い日のことだった。直幸宛てに一通の電話が届いたのだった。

「！」

電話を受けたものに、「市立病院から」と言われ、怪訝そうに受話器を取った直幸は、目を見開いた。

受話器の向こう側から聞こえてくる声が何を言っているのか、瞬時には理解できなかった。いや、むしろ理解したからこそ、混乱したといえるかもしれない。

電話が切れた後、直幸はしばらく受話器を持ったまま呆然と立ち尽くした。

「すいません」

我に返った直幸は大声で主任を呼び止めた。

「妻が事故にあったそうで……、病院に運ばれたそうです」

主任の田中は、すぐに病院にいってやれ、と告げ、車を手配してくれた。直幸はそのまま駅に直行し、電車に飛び乗った。

電車の走行中、居ても立ってもいられない直幸はマイペースに走る電車にイライラを募らせ、手足の震えが止まらなかった。

どうか、無事で。

直幸は、手を固く握り締め、敦子の無事を願うのだった。

光坂駅に到着すると、直幸はタクシーを拾って市立病院に駆けつけた。

直幸は、病院職員の注意も聞かず、病棟を一目散で駆けた。
部屋番号を一つ一つ確認しつつ、まだか、まだか、と焦るのだった。
病室を見つけると、今度は体が硬直して動かなくなった。
ゆっくりと病室のドアに手を掛け、部屋の中へと進んだ。
ベッドの周りをいくつかの人影が囲み、直幸はその人影を避けるようにしてベッドを見た。
その瞬間、直幸は世界が真っ暗になったような錯覚を覚えた。モノトーンの世界が廻って見えたような気がすると、眩暈がしてふらついた。
（なんだ？　あれは……、なんだ？）
直幸は目の前にあるものが一体なんであるのか理解しようとしたが、心は答えを拒絶して思考を凍り付かせた。
「あの、岡崎さんですか？」
後ろに人を感じて、看護婦が声を掛けてきた。
直幸は何と答えたか覚えていない。
看護婦たちは「一応、確認をお願いします」と言ってきたが、直幸にはわからなかった。
顔は鼻と口以外は包帯で巻かれ、口も呼吸器の上から透けて見える程度である。僅かに見える鼻先と口元もいくつかの傷が見え、痛々しかった。
これで、どう確認しろというのだ。
直幸には判別できなかった。
いや、わかりたくもなかった。
スッと蒲団から伸びた手が見える。
直幸はベッドの前に跪くと、その手を取って、両手で握り締めた。
頭では何度も否定しようとしたが、なぜか涙が溢れて止まらなかった。
「敦子。敦子ぉ」
直幸は、知らずに最愛のひと女性の名を呼んでいた。

それが引き金となったのか、涙の堤防は決壊し、悲しみの海へと怒涛のように注ぎ込まれた。

「岡崎さん。我々もできる限りの処置はいたしましたが、大変厳しい状態です。念のため、ご家族、ご親族の方々にご連絡をお願いいたします」

「お気を確かに」

直幸が少し落ち着きを取り戻した頃、医師や看護婦たちが声を掛けた。

直幸は、「お願いします。」と医師たちに任せ、病室を後にした。

直幸には色々とやらなければならないことがあった。

まず、朋也の保育園へと向かった。

保育士に事情を説明し、朋也を引き取った。

朋也は、直幸の突然の来訪に驚いた様子だったが、会えて嬉しかったのだろう、喜んでいた。

朋也は、事情はわからないが帰宅することになり、直幸と手を繋ぎ、バイバイと手を振った。

保育士は「お大事に」と声を掛けてくれた。

直幸は、できるだけ平静を装ったが、違和を感じたのか、朋也は直幸の見えない顔を見上げて歩いた。

直幸は一度自宅に帰ると、朋也の荷物を片付け、それからしばらく探し物をした後に、再び病院へと向かった。

朋也はタクシーが珍しく、不思議に思っていた。

キョロキョロと車内や外の景色に目を向ける朋也に、直幸は頭を撫で、胴に腕を回して抱き寄せた。

「いいか、朋也。ちょっと用事を済ませてくるから、いい子で待ってるんだぞ」

「うん」

病院に着くと、直幸は受付に挨拶した後、朋也を椅子に座らせて、しばらくの間、朋也の元を離れた。

会社にも連絡を入れなければならなかったし、直幸は公衆電話へ

と向かったのだった。
朋也は柔らかい椅子の上で、足をブラブラと振りながら、病院を行き交う人影を見詰めていた。
病院はきれいにフローリングされていた。
天井も高く、大きな建物の様子を朋也は不思議そうに眺めていた。
病院内は、同じような服装の人が幾人も行き交い、また、杖を付いたお年寄りや、子供連れの家族なども出入りし、たくさんの人がいる場所だと感じていた。
「おし。朋也、お待たせ」
直幸はできるだけ元気よく声を掛けた。
直幸は手を伸ばし、朋也はその手に飛びつくようにして握った。
直幸は迷っていた。あの恐ろしい光景をこの子に見せていいのだろうか、と。
それはあまりにも残酷な仕打ちに思えた。しかし、敦子の容態は、未来を期待するにはあまりにも儚い光に思えた。その微かな光にすら縋りたい気持ちは強かった。しかし、それが適わなければ、終わりなのだ。
未来永劫、訪れることのない瞬間。
だからこそ、今、会っておかなければならないのではないか、と直幸は思う。
直幸の心の中に迷いがあるまま、病室に辿り着いた。
「朋也。ここに、ママが居るんだ」
「えっ、ママが？」
朋也は不思議そうにドアを見た。
「うん。これから会いに行くんだ」
朋也は嬉しそうに笑顔を作った。
その無垢な表情を見ると、直幸は我慢していたはずの涙がまた溢れ出た。
直幸は、朋也の肩を抱いて、朋也の前にこうべ頭を垂れた。
「どうしたの、パパ？」

「うん、ああ、すまなかった」
直幸は涙を拭うと、立ち上がってドアを開けた。
大きな白いドアが開くと、中は白っぽい光に包まれていた。
朋也は直幸の大きな手に引かれ、後ろ姿を見ながら歩を進めた。
不思議な臭いが漂う空間だった。
直幸はベッドの前で立ち止まった。
朋也は直幸の手に従って、ベッドの前に立った。
大人たちが何人かいるのが見えた。
何を話しているのか、わからなかったが、とても楽しそうには見えなかった。
朋也は、何かわからない不安感が沸き立つのを覚えた。
ダメだ、ダメだ、ダメだ。
何かが叫んでいるような気がした。
誰かが必死に制止してくるような気がした。
そのわからない呼び声――本当に声だったのだろうか――に従うことなく、朋也はベッドの先を見た。
(なんだろう、あれは?)
朋也は疑問に思ったが、それ以上は何も考えられなかった。
だた、いやだ、いやだ、いやだ、逃げたい、逃げたい、逃げたい、と声ならぬ声が聞こえてくるようだった。
直幸は、朋也の背を押してベッドの横へと進ませた。
「さぁ、握ってあげて」
直幸はベッドの、包帯だらけの人の――ものと思しき――手を取って朋也に促した。
朋也は、そんな直幸をじっと見詰めた。
「さ。朋也」
直幸の顔は、眼鏡のレンズが反射して、よくわからなかった。
朋也は、直幸の促すままに、その――母の――手を握った。
「よし。ありがと、朋也」
しばらく触れていると、直幸が朋也の頭を撫でた。

直幸は朋也の手を引いて、部屋の外へと向かった。
朋也は、ベッドから離れると、「ねぇ、ママは?」と訊いてきた。
直幸はもう、「うん。」としか答えようがなかった。
朋也は、今起こっていたことが一体なんだったのか、全く理解できなかったというように直幸を見上げるのだった。
その後、直幸と朋也は病院に泊まった。
朋也を病室に入れたくなかった直幸は、病院の椅子で夜を明かした。
病院の職員が毛布を貸してくれた。
「ねぇ、どうして家に帰らないの?」
朋也はとても家に帰りたそうだった。
朋也を一人、家に置いておく訳にも行かず、病院に一緒に泊めた。
病院のロビーの椅子は大きく、朋也にはベッドの変わりになった。
クッションがよく効いていたのも朋也にとってよかっただろう。疲れたのか、ぐっすりと眠った。
翌朝、直幸は朋也の声に起こされた。
直幸は朋也をトイレに連れて行った後、病棟の一角にある休憩所に朋也を置いて、敦子の病室へと様子を見に向かった。
病室のドアを開けると、懐かしい人影があった。清太郎と雅子である。看護婦が案内したのだろう、看護婦が一人、傍らにいた。
昨日、直幸は清水家に敦子の事故を伝えたのだった。
電話を取ったのは雅子だった。事情を説明すると、雅子は声を震わせていた。
清太郎たちは、その日のうちに夜行列車に乗って青森を出た。今朝方、高崎に到着して、そこから車で駆けつけたのだった。
清太郎は、直幸の姿を見るや突進した。
「きさまぁ、よくもっ!」
清太郎は直幸の胸倉を抑えると、そのまま壁に激突した。
「きさまが、きさまさえいなければ!」
貴様さえいなければ——こんなことにはならなかった。

清太郎は目を血走らせ、憤怒の形相で直幸を睨みつけた。
雅子はただ嗚咽を漏らすばかりだが、気持ちは清太郎と同じだった。
直幸がどれほど憎いことか。察するに余りあるものがあった。
雅子は悔しさと悲しさと、そして憎らしさに包まれ、泣き崩れるしかなかった。
清太郎は、直幸を掴んだ腕に力を込めると、力一杯に横に投げ飛ばした。
「やめてください！　ここは病院ですよ！」
傍らにいた看護婦が走り寄って清太郎たちを制止した。
「出ていけ！　さっさと出ていけ！」
清太郎は腕を精一杯に振って、直幸に退室を命令した。
直幸には、返す言葉がなかった。
何も言えず、ただゆらりと立ち上がると、「すいませんでした」と小声で言うのが精一杯だった。
「いいから出ていけ！　おまえの顔など、二度と見たくないわ！」
直幸は、先ほど打った腕を押さえながら、静かに病室を後にした。
「パパー、お腹すいたー。」
朋也はお腹を空かせて待っていたようだ。
昨日も碌なものを食べていない。
直幸は、そうだな、と朋也の頭を撫でた。
「どうしたの？」
直幸の顔を見て、朋也が心配そうに見ている。
（そういえば、昨日からこんな顔ばかりさせているな……）
「うん。パパもな、お腹空いちゃって、元気が出ないんだ」
直幸は、屈みこんで朋也の頭をもう一度撫でた。
「お家に帰ろっか」
「うん」
直幸は、朋也の手を取って病院を後にした。

「ただいまー」
家に帰ると、朋也は元気よく声を上げた。
「ただいま」
直幸も朋也に倣った。
（しっかり、挨拶するんだな）
直幸は、よく躾けてあると感心するのだった。
朋也がバタバタと家の中を見て廻り、直幸もやっと緊張から解きほぐされたように力が抜けた。
しばらくして、朋也が直幸の元に戻ってきた。
「どうした？」
「ママがいない。ねぇ、ママはどこ？」
直幸は目の下が熱くなるのを感じ、歯に力を込めた。
「ああ、ママなぁ、どこ行っちゃったんだろうなぁ？　しょうがないから、二人で美味しいもの食べようか」
「うん」
「美味しいもの」と聞いて、朋也は嬉しそうに反応した。
（こんなこと、いつまでも続くわけがないよな……）
直幸の予想は的中した。
朋也はお昼頃になるとぐずり出し、お昼ご飯も碌に食べようとしなかった。
朋也は大きな声を上げて泣きじゃくったが、黄色い西日が差し込むようになる頃には泣き疲れて眠ってしまった。
（こんなに広かったか？）
直幸は自分の家がやたらと寂しく感じられた。
この広い家に敦子と朋也を置いて、直幸は働きに出ていた。
たった二人で、こんな寂しい想いをしていたのだろうか。
直幸は、敦子が離れて暮らすことに反対していたことを思い出した。それに、別れて暮らすようになってからも、たびたび縋るような目をしたこともあった。
（俺は、ずっと、寂しい想いをさせていたのか）

直幸は、自分が家族のために良かれと思ってやってきたことが、本当はただの自己満足でしかなかったのではないかと思えてきた。

（敦子、ごめん、ごめんな……）

朋也を膝で抱く直幸の手に雫が落ちた。直幸の頬には涙が伝っていた。

その直幸の頬を撫でるようにどこからともなく風が吹いて、直幸は辺りを見回した。

その日、太陽が西の地平に沈む頃、敦子は息を引き取った。

直幸は、朋也を連れて青森を目指していた。敦子に会いに行くためだ。

夕刻、病院からの電話を受けて、直幸は急いで病院に駆けつけた。しかし、清太郎が面会を許さなかった。

清太郎はすでに遺体の対応に当たっていて、死亡診断書もすでに受け取り済みだった。

清太郎は、行政手続のために翌日まで滞在した。その間、直幸たちの自宅に押しかけ、敦子の遺品などを見つけて持ち帰った。

直幸は、清太郎たちを強く非難することはできなかった。愛する家族を失った悲しみは同じだったからだ。

朋也は何事が起きたのかとやや混乱した様子だった。

清太郎は、敦子と直幸たちの家族写真を見つけると、こんなもの、と叫んで散り散りに破った。

直幸もそれにはさすがに怒りを露にしたが、清太郎は「おまえに怒る資格があるのか！」と激昂された。

清太郎は荒々しく散らかしていくと、家の中は台風にでも巻き込まれたようになった。

朋也が半泣きしていたので、直幸は、怖がらせて悪かった、と謝り、部屋を整理した。

翌朝、清太郎たちは寝台自動車を手配した。途中、役所に届出を済ませると、寝台車に同乗して青森へと去って行った。

その頃、直幸は工場長の渡辺に連絡を入れていた。

敦子が死亡したことを聞くと、絶句してしばらく言葉を失っていた。

その後、葬式の日程などを尋ねてきたが、葬式は青森でやることになるだろうと事情を説明した。

「なんだそりゃ。お前はそれで良いんか?」

渡辺はそう言って憤慨していた様子だが、それ以上のことは口を出さなかった。

こういうことは、他人が口を挟めることでもない。直幸と敦子の両親の間で決めることなのだ。そういう事情となれば、社員も会葬できるのか、疑問だった。何より、青森では遠すぎて行くに行けない。

渡辺としても、ご愁傷様、と伝えるぐらいしか言葉がない。

さらに、直幸は仕事を辞めることを伝えてきた。

それについては話し合おうと言ったが、幼い子どもを抱えている状態では働くにしても今のままでは無理だった。

渡辺は家を引き払ってアパートに移ることも提案したが、直幸はそれを拒んだ。どちらにしてもローンを支払わなければならなかったし、朋也のこれからを考えると、生活の場としての光坂は良い環境と判断してのものだった。

最終的な決定は後日、ということでとりあえず電話を切ったが、先延ばししたところで、自体がよい方向へ向くとも思えなかった。

渡辺は、やれやれ、と頭を抱えるのだった。

直幸はその外にも、敦子の勤め先と朋也の保育園などに連絡を入れた。

敦子の勤め先さらもお悔やみの言葉をいただいたが、葬式などについて話すと残念そうにしていた。

朋也もしばらく休ませることにした。

できるだけ普通の生活を送らせたいとも思ったが、まずやらねばならないことがあり、休ませることにしたのだった。

それにしても、まるで他人の家のようだった。

直幸は出掛ける準備をしていたが、どこに何があるのか、ほとんどわからなかった。常に生活していたならば、これほど探し回ることもないだろう。直幸は改めて、自分とこの家とが乖離していることを実感した。

準備に手間取り、だいぶ時間も浪費してしまった。喪服も仕立てなければならなかったが、無理を言って急いでもらった。

直幸は準備を整えると、朋也を伴って寝台特急「あけぼの」に乗り込んだ。

初めて乗る寝台付きの列車に驚き興奮する朋也を見ながら、直幸は自分たちが初めて夜行に乗った日のことを思い出していた。

翌朝、直幸は喪服に着替え、朋也も白と黒の衣装に着替えさせた。青森駅へ到着すると、その足でホテルに向かい、荷物を預かってもらった。そして、直幸たちは清水家を目指した。

清水家は昔と変わらない佇まいだった。

直幸は家の前まで来ると、屈みこんで朋也に声を掛けた。

「パパ、ちょっと用事があるから、そこいら辺で遊んでてくれ」

朋也は少しばかり走って離れると、うろうろと辺りを行ったり来たりしていた。

「あんまり遠くに行くなよ」

「うん」

朋也は後ろ向きのまま返事をした。

直幸は朋也から目を移すと、清水家の門を通り抜けた。

「ごめんください」

直幸は玄関を開けた。

中には何足もの黒い靴が並んでいた。おそらく、葬式の打ち合わせをしているのだろう。

「はーい」

雅子の声がして、直幸は緊張した。
雅子は声の主が招かれざる客であることに気付いて絶句した。
「帰ってちょうだい」
直幸は動かなかった。
「お願い、帰ってちょうだい」
「お願いします。敦子に会わせて下さい」
直幸は頭を下げた。
「帰って。お願い、帰って」
雅子は悲鳴のような声を上げた。
「おーい、どうしたあ」
奥から、清太郎が様子を見に来た。
「お、おまえっ！」
清太郎は素足のままたたき三和土へ飛び出し、直幸を追い出そうとした。
「何しに来やがった！　このやろうっ！」
「お願いです。敦子に会わせて下さい、お義父さん！」
直幸は清太郎の腕を振り払うと、強硬に食い下がった。
「ああっ！　てめぇにお義父さん呼ばわりされる覚えはないわ。きさまのおかげで敦子がどんな目にあったか、わかってるのか！」
清太郎は憤慨し、雅子は嘆き泣いた。
「お願いです。人目でいいから会わせて下さい！」
直幸は一歩下がって土下座した。
「なんだぁ、このやろう。頭下げりゃ、何でも許されると思うなよ！」
清太郎は家の中へと走っていった。
「お願いします！　お願いします！」
直幸は再び、頭を地面に擦らせ、平伏したまま何度も声を上げた。
雅子は壁にしがみつくようにして崩れ落ちた。
僅かな後、清太郎は走ってくるなり、直幸に向かってバケツの水を撒き飛ばした。

「どの面下げてそんなことが言える！　この疫病神め！　ここはおまえの来るような場所じゃないんだっ、とっとと出ていけっ！」

清太郎はバケツを直幸に投げつけると、玄関をぴしゃりと閉めた。

「母さん、塩だ、塩。塩巻くぞ！」

打ち合わせに来ていた者たちは、何事かと外の様子を窺っている。

外では、朋也が門の前に立って、その光景を見ていた。

しばらくして、ドタドタと荒い足音が響いてくると、いきなり玄関の戸が開いた。

バササッ

平伏する直幸に容器一杯の塩が巻かれ、服も頭も真っ白い粒で覆われた。

直幸はそれでも動じることなく土下座を続けた。

「パパ」

その異様な光景と、父親の姿に朋也は泣きそうな顔で声を掛けた。

「ああ、朋也。なんだ、泣いてるのか」

「パパ、大丈夫」

「ああ、パパなら大丈夫だ。心配してくれたのか。朋也は優しいな」

直幸は朋也の頭を撫でた。

「パパな、まだ用事が済んでないから、もう少し、外で遊んで待っててくれ。なっ」

朋也は直幸を心配そうに見詰めたが、直幸に背中を押されて、振り向きながらも門の外へと出て行った。

チャンスはここしかない。

直幸はそう思っていた。

青森の風習では火葬を最初に行うのが通例だった。火葬を行った後、菩提寺で通夜を執り行い、翌日に葬式、というのが地元に古くから親しまれた慣習だった。

火葬されてしまえばもう遺体と接する機会は失われる。

直幸は清水家の菩提寺がどこにあるか知らないし、寺に押し入って邪魔をするわけにもいかないだろう。

火葬場を手配するまでの間、その僅かな期間だけが頼みの綱なのだ。

直幸はどうしてもその間に朋也にしっかりとお別れをさせたかった。

直幸は正座のまま、玄関が再び開くことを待ち続けていた。

その間も、清太郎たちは着々と葬式の手配を進めていた。火葬場についても、幸運にもみょうにち明日の午後に予定が入れられた。これによって、あす明日の夜には通夜が執り行えることになる。

夏の暑い最中では、遺体の傷みも心配された。早く執り行うに越したことはない。

「長旅で疲れたろう。もう少しだからね」

雅子は亡骸に向かってそう語りかけた。

清太郎も雅子も、敦子をどれほど愛していたことだろう。

それゆえ、敦子の言葉を信じたのだった。

敦子は手紙で幸せになるとちちはは父母に誓ったのだ。

清太郎も雅子も、敦子が幸せならば、と敦子の捜索を打ち切った。

だが、あの時探し出して、無理やりにでも連れ戻すべきだった。

そうなれば、敦子は一時的にショックを受けただろうが、結果的には敦子の幸せに繋がっただろう。

そう思うとやり切れなかった。

父として、母として、敦子を守ってやれなかったことが悔いられた。

清太郎は、考えが甘かったのだ、と悔いていた。今度こそ、断固として娘を守ってやらなければならない。

その想いから、清太郎は鉄の意志を以って直幸に当たるつもりだった。

どれほどかの時間が過ぎた頃、玄関の戸が開き、中からは黒服の男が二人出てきた。葬儀屋の男たちは、失礼しますと言って直幸の横を通り過ぎた。

開かれた戸からは清太郎と雅子の姿が見えたが、二人は直幸の姿

に見向きもくれなかった。
長い時間の中で、直幸の意思は揺らいだ。
――疫病神め。
その言葉は直幸の胸に突き刺さった。
（確かにそうなのかもしれない）
もしも、駆け落ちなんて馬鹿なことしなければ――
もしも、敦子に求婚しなければ――
もしも、敦子を好きにならなければ――
もしも、敦子に相談なんかしなければ――
もしも、敦子に出会わなければ――
――敦子は、こんなことにはならなかったのではないのか。
（落ちこぼれだった俺なんかに――出会っていなければ――）
悔いても始まらないとわかっていても、悔いずにはいられない自分がいる。
（俺はいつも突っ走って心配かけて、それでも支えてくれて、いつもいつも支えてもらってばかりで、それなのに――何もしてやれなかった）
直幸は自分が情けなかった。
情けないと思えば思うほど、どうしようもなく情けなく感じた。
自分の妻の葬式すら挙げられない。
息子を母親に会わせることすらできない。
一体、そんな親が、夫が、どこにいるだろう。
ただ、土下座することしかできない自分。
いや、それすらも無視される自分。
追い詰められた直幸の心は今にも折れそうだった。
直幸は、何とか惰性で持ち堪えていた。
清水家から、再び物音がして、幾人もの人々が流れていった。
玄関の戸が静かに閉められると、物音がしなくなった。
夏の日差しは容赦なく照りつけ、黒い衣服は熱を篭らせた。水は体温ほどに湯立てられたようで、むわむわと蒸した。黒髪も熱せら

れ、くらくらと頭が重かった。
直幸はゆらりと力なく立ち上がると、髪や肩を払った。疲れきった表情で敦子が眠る家の方をじっと見た。
直幸は、もう一度だけ玄関に向かって一礼すると、清水家の門を出た。
「ん？」
門の先を曲がり掛けたところ、前には朋也がいた。
朋也は門の前で座っていた。きっと、ずっと待っていてくれたに違いない。
「朋也。朋也」
「ん」
朋也は疲れたように力なく直幸の方を向いた。
長い間、暑い中にいて疲れたのだろう。直幸は済まないことをしたと思った。
「すまなかったな。お待たせ。お腹空いただろ。なんか食べに行こう」
「ねぇ、ママは？」
直幸は言葉に詰まった。
「ママに会いに行こう」
直幸はそう言って朋也を連れ出したのだった。
朋也はずっと母に会えることを期待して我慢していた。会えると思うからこそ頑張ることができた。
けれど、列車に乗って遠くまで出掛けて来ても、一向に母の姿を見ることがない。朋也の我慢も限界が近かった。
「うん、ママはここにはいないみたいだ」
朋也は直幸の顔を見た。直幸は、見透かされてしまいそうで怖かった。
「どこにいるの？」
「うん、遠くの方だ」
「遠くの方？」

「そう、遠くの方。だから、今日はちょっと、会いに行くのは無理そうなんだ。だから、明日、行こうな」
「今がいい」
「だから、明日な」
「いまがいい」
朋也は今にも泣き出しそうな顔をしていた。
「ごめんな。パパがもっとしっかりしてれば、ちゃんと会えたのにな。」
直幸は、朋也の頭を撫でて、その後、抱き寄せた。
直幸はそのまま朋也を持ち上げた。
「そんな顔してたら、ママががっかりするぞ。美味しいもの食べて、元気だそうな」
そう言われて、朋也は少し表情を戻した。
清水家は予定通りに火葬を済ませ、葬式も滞りなく行われた。敦子の学生時代の知り合いも多く参列し、当時のことを偲んだ。
その後、陽気だった雅子もすっかり人が変わり、清水家は静まり返った。
庭先の木々は、太陽の光を受けて濃く輝いていた。その根元には蝉の抜け殻がしがみつき、夏を思わせた。

その夜、直幸は朋也に敦子がもういないことを告げた。
朋也は、なんで、どうして、と何度も訊いてきて、最後には泣き出した。
「きっと、パパのこと、嫌いになっちゃったんだな」
「ママは、パパのこと、嫌いになっちゃったの？　どうして？」
「うん、どうしてかな……。パパがいつも一緒にいなかったからかな？」
「でも、ママはいつもボクのことも、パパのことも大好きだってい

ってたよ」
朋也は不思議そうな顔をして言った。
直幸は俯いて下顎に力を入れた。
「そうだな。でも、パパがもっとしっかりしてたら、ママ、いなくならなかったんだよ」
直幸はふと、敦子の物語を思い出した。
「でも、ママに会える場所があるんだ」
「どこ？」
「うん。ずーっと北の方のな、海の上なんだ。そういえば、朋也はまだ海を見たことなかったよな」
「んーん、テレビで見たことある」
「うん。そうじゃなくて、本物だぞ。すっごいでかいんだからな」
直幸は両手を広げて示した。
「海に行けば、ママに会えるの？」
「んー、ママはね、海じゃなくて、お空になったんだよ」
「お空？」
「そう。そこの海のお空からだと一番ママに近いんだ。きっと、俺たちの声も聞こえるぞ」
「ほんと？」
「うん。きっと、朋也の声が聞こえたら、ママにもすぐわかるよ」
「わぁ、早く行きたい」
「ああ、明日行こうな。そのためにも、今日はぐっすり眠るんだぞ」
「うん」
朋也はおそらく、本当のことは理解できないだろうと、直幸は思った。
朋也が本当のことを理解するまでにはまだ時間が掛かるかもしれない。
だが、それは直幸にとっての猶予だった。今の直幸には、本当のことを知った朋也を支えるだけの自信が無かった。

ホテルの朝食を済ませると、朋也の着替えも済ませてホテルを出た。
直幸は、朋也を連れて思い出の地に向かった。
津軽線から見える青森湾の景色は以前とあまり変わらなかった。
朋也も、沿線をずっと続く大きな水溜りに驚きの表情だった。
津軽半島の先端、竜飛崎には昼前に着いた。
それは懐かしい風景だった。小さな竜飛港はいい具合に寂れて哀愁を漂わせた。
朋也は波や漁船を見て、感動を覚えたようだった。
二人は食堂で簡単な食事を済ませた。珍しい景色に機嫌をよくしたのか、食欲があって直幸を安心させた。
昼食を終えると、直幸は高台へと向かった。
斜面には鮮やかに紫陽花が咲き誇っていた。風は相変わらず強く、急な階段を朋也の手をしっかりと握って上がった。
その先の道を進み、木立の間を抜けると、あたり一面黄色一色の花畑に到着した。
朋也は目を輝かせて、わあ、と感嘆の声を上げた。
「すごいなぁ、なあ、朋也」
「うん」
朋也は大きく頷いた。
「ちょっと、遊んでおいで。あんまり遠くへ行っちゃダメだぞ」
「うん」
朋也は頷くと、元気よく花畑へ入っていった。
直幸は、キャッキャと喜声を発して走り回る朋也を眺めた。
ずっと以前、まるで大昔のような数年前に直幸は敦子とこの地を訪れた。
そして、樹に寄り掛かりながら、何か話をして笑い合った。
――今度は、花のいっぱい咲いた季節に来れるといいね。
直幸は不意に敦子の言葉を思い出した。思い出して、目頭が熱くなった。

（敦子、敦子。見えるか。ここがおまえの見たかった風景だぞ。きれいだろ。本当にきれいだろ）

直幸は、鮮やかに輝く黄色い光の海が眩しくて、林の陰に隠れた。夏の日差しは木立に濃い影を落とし、風が音を攫った。その中で、直幸はむせ咽び泣いた。

短い季節の中で、さらに短い命を使って蝉はこの一時を懸命に鳴いていた。

しばらくして、朋也が直幸の元へ戻ってきた。遊び疲れたのだろう。その後しばらく、朋也は直幸の膝の上で眠った。

朋也が目を覚ますと、直幸はこの旅の目的地へと向かった。

「この先に灯台があるんだ」

「ほら、見えてきたぞぉ」

直幸は、朋也を抱き上げ、語り掛けながら坂道を登った。汗ばむ体を、潮風が洗った。

白壁の灯台の横を抜け、先へと進む。展望台の先に見える望楼跡も相変わらずだった。

「ほうら、着いたぞ」

朋也を下ろすと、朋也は走って柵にしがみ付いた。

東から北、北から西に広がる広大な津軽海峡の眺望は海の広さを実感させた。

ここは直幸にとって、敦子との思い出の地だった。

今、朋也がそうしているように、敦子もまた、この場所から日本海から津軽海峡、そして北海道を望んでいた。そして、今、朋也の後ろ姿を見ているように、あの時は敦子の後ろ姿を見ていた。あの日が、この故郷を離れて旅立つ、最初の一歩でもあった。

直幸は胸が熱くなった。目頭が熱くなるのを感じて、青が淡くなり始めた空を見上げた。

この地は直幸と敦子の約束の地。そして、今、新たな誓いの地となる。

（敦子、敦子。今まで、苦労掛けたな。ごめんな。本当に済まなか

った。朋也を育ててくれて、ありがとな。俺のことも支えてくれて、ありがとな。それなのに、俺はおまえのこと、守ってやれなかった。本当に、情けない奴だよな。駄目な男だった。駄目な夫だった。だけど、もう、心配しなくていいからな。朋也はちゃんと育てるからな。俺、ちゃんと、朋也のこと、守るからな。だから、敦子は空の上から見ていてくれ）

敦子の愛と献身に報いること。それが、直幸の、敦子にできるたった一つの恩返しであり、贖罪だった。

直幸は、朋也を立派に育てると、空高くに誓った。

空はただ澄んで、風は潮の匂いを地上に降らせる。群青色の海は、斜陽を受けて銀色に輝いていた。

「朋也」

直幸は朋也の背中に手を当てた。

「どうだ、綺麗だろ」

「うん」

「なぁ、ママな、遠くに行っちゃったって話したよな？」

直幸は、朋也の前に屈み込むと、肩を支えて語り掛けた。

「うん」

「ママな、太陽になったんだ」

「？」

「ほら、見えるだろ。ママはあそこにいるんだ」

朋也は不思議そうに眩しい光の球を見詰めた。

「ママはな、あそこから、朋也のことをずっと見てるんだ。声を聞くことはできなくなっちゃったけど、触れることもできなくなっちゃったけど、でも、ちゃんといるんだぞ。あそこから、朋也がいい子にしてるか、ずーっと見てるんだぞ」

「どうして、ママはたいようになったの？」

「うん、ちょっと疲れちゃったのかな。パパがずっと離れてて、その間、ママは一人で朋也のこと育ててただろ。たぶん、それで疲れちゃったんだ。だから、あそこでゆっくり休んでるんだよ」

「休んだら、いつか戻ってくる？」
「うーん、どうかな？　朋也が立派な大人になったら、ママも帰って来てくれるかもな」
「大人になったら？」
「うん。大人になったらな」
「じゃあ、ボク、早く大人になる」
朋也は目を輝かせて答えた。
「おお、勇ましいな。でも、悪い子じゃ、駄目だぞ」
「うん。ボク、いい子にする」
直幸は頭を撫でた。
「そうか。じゃあ、ママに約束だ」
「やくそく？」
「そう、約束。ちゃんと、約束しないとな。いーか、朋也。太陽に向かって、大きな声で呼び掛けるんだ。大きな声じゃないと、聞こえないからな」
朋也はよくわからないという風にきょとんとしている。
「いいか、こうやるんだ」
直幸は朋也に背を向けると、西の空に向かって大声を張り上げた。
「敦子ー、聞こえるかぁ！！　俺、頑張るからなぁー！　しっかり見ててくれよー！　朋也もなぁ、いい子になるって、言ってるぞぉー。」
「ほら、こんなふうに」
「ママー、ボク、いい子になるからねー！」
朋也は見様見真似で叫んだ。
「俺も、いいパパになるからなー！」
「ボク、保育園のご飯、ちゃんと食べるよー！」
「掃除もしっかりするぞー！」
「お外でいっぱいあそぶよー！」
「料理も頑張って覚えるからなー！」
「ひとりで着替えられるようになるからねー！」

「ローンもしっかり片付けるからなー！」
「お風呂もちゃんと入るからねー！」
「おお、それ、俺もちゃんと入るからなー！」
「歯も磨くからねー！」
「俺も、歯を磨くぞー！」
「パパ、真似ばっかじゃん」
「あははは」
直幸は朋也を肩車した。
「敦子、頑張るからなー！」
「ボクも、がんばるよー！」
「敦子ぉ、大好きだぁー！」
「ボクも、ママのこと大好きだぁー！」
「朋也のことも大好きだぁー！」
「ボクも、パパのことぉ、大好きだよぉー！」
一頻り叫ぶと、何だか気持ちが明るくなって、直幸も朋也も笑顔が漏れた。
二人は橙色に変わり始めた地平線と別れて、帰路に着いた。

直幸は当初、始発の特急に乗って光坂に帰るつもりでいたが、それを取り止めた。
もう一つ、この地でやっておきたいことを思いついたがらだ。
朋也は連日動き回ったことで疲れている様子だった。早く家に帰ってゆっくりさせてやりたい気持ちはあったが、この機会を逃せばおそらくもう無いと思い、直幸は決意した。
それは直幸の生家、岡崎家を訪れることだった。
直幸は朋也を連れて、実家の門の前に立った。
朋也は、直幸に近くで遊んでいるように言われ、直幸から離れた。
直幸は、門の前でしばらくたったままだった。門を潜ることがで

きない。通りたくない気持ちが強かったからだ。
直幸は岡崎家を出たと思っている。自分から縁を切ったのだから、あれから連絡を一度も取らなかった。それが戻ってきたとて、いい顔をされるはずが無かった。
朋也は草むらに座り込んで、何かをしている様子だ。直幸は朋也を一瞥して、決意したように門を踏み越えようとした。
その時、裏手の方から庭先に人が現れた。
「こんにちは」
直幸が声を掛けると、その人物は目を凝らしたような素振りを見せると、驚いたように家の中へ入っていった。岡崎家に奉公している女性だった。どうやら、まだ直幸のことを覚えていたようだ。
（まだ、いたんだな……）
その女性はあまり変わった風ではなかった。不意に昔のことを思い出し、直幸は眉を顰めた。
「奥さま！」
慌てて声を掛けてきた奉公人を史乃は窘めたが、女性は相変わらず動転していた。
「坊ちゃんですよ」
その言葉に、史乃は驚いた。
この家で「坊ちゃん」などと呼ばれていた人物を史乃は一人しか知らない。
だが、まさか、である。
史乃は気持ちを落ち着けようとしたが、体はいそいそと廊下を突き進んだ。
史乃が玄関の引き戸を開くと、門の前に立つ人影が見えた。その姿を見て、史乃は間違いなく直幸であることを確信した。きりっと締まり、あどけなさが消えた顔立ちは歳月を思わせた。
史乃の体は、走り出したい衝動に駆られて、足が妙に震えた。だが、史乃は決して焦ることのない落ち着いた身のこなしで直幸の元へと歩んでいった。

それは、直幸のよく知る史乃そのものであった。
直幸は、逃げ出したいような衝動に駆られるのを何とか抑えた。かつての直幸であれば、寄り付きたくもなかったに違いない。
「こんにちは」
直幸は、他人行儀な挨拶をした。
ご無沙汰しています、との言葉が出掛けて、止まった。それは、過去の――岡崎家の一人息子としての――自分とは別人であるということを暗に示すものだったかもしれない。直幸は、目の前にいる人物と、かつて関わりがあったことを意味する言葉を持ち出すことに抵抗を感じた。
「こんにちは、直幸さん。どうしてこちらに？」
「ええ、近くまで来たものですから」
「そうですか」
「何か御用でもあるのですか？」
史乃は丁寧な口調だったが、そこには冷たさが漂っていた。感情を押し殺し、常に毅然とした立ち振る舞いができることは、史乃の強靭さであった。若い頃の朕もあったが、何より岡崎家の一人として生きる厳しさが彼女を鍛えたのだった。
だが、それは直幸にとって、苦い思い出を蘇らせることしかできなかった。直幸は努めて顔色を変えなかったが、表情に微妙に嫌悪が表れた。
「敦子が亡くなりました。一応、その報告を、と思いまして」
「そうですか。それは残念なことです」
史乃は瞼を少しばかり動かすだけで、特に表情が変わることはなかった。
史乃にとって、敦子は愛着のある存在ではなかった。むしろ、直幸の愚考を後押しすることになったであろう存在を嫌悪してもいた。これは女の醜い情念の部分であったかもしれないが、史乃にとって敦子の存在は特別感慨の湧くものではなかった。
それでも、亡くなったとなれば月並みには心が痛む部分はあった。

だが、それでもなお史乃は凛と立つ巨木のように、風になび靡くことはない。

「それで、これからどうするのです」

史乃とて人間である。直幸に恨み言の一つも言ってやりたい心境になる。それに、助けを求められれば、口では厳しいことを言っても温情の一つ二つ掛けることだってある。史乃も一人の母親である。我が子が苦難に喘いでいるとなれば心も痛むし、手を差し伸べたくもなるものだった。

「ええ。息子を育てていきます」

直幸は、道端で遊ぶ朋也を見た。

朋也が直幸に気がつくと、直幸は手を振って答えた。

朋也はにこりと笑うと、そのまま遊んでいた。

朋也は、何度となく直幸の方に目を向けていた。清水家のことがあり、朋也は直幸のことを子どもながらに心配していたのだ。だが、直幸が普通に話をしている様子を見て取ると、安心したのだった。

「昨日、息子と一緒に竜飛崎まで行って来ました。そして、敦子に誓ってきました。朋也を立派に育てる、と」

直幸は、朋也を見詰めながら言った。

「今日は、それだけを伝えにきました」

直幸は、改めて史乃と向かい合うと、姿勢を正して言った。

それは、直幸の別れの言葉でもあった。逃げるように去ったあの日にはできなかった、自分がこれからどうやって生きていくか、という意思表明である。

今の直幸にとって、この家は、もはや帰る場所ではなくなった。

直幸は、それを史乃に伝えようとしたのだった。

「あの子が、あなたの？」

「ええ。朋也といいます」

直幸と史乃は朋也の方を見詰めた。

「それでは、お元気で。失礼します」

直幸は深く一礼すると、朋也を呼んでそのまま去っていった。

史乃はよほど直幸の腕を掴んででも引き止めたい気持ちがあった。駆けつけて、戻って来いと叫びたい気持ちもあった。だが、そういうことができないのが史乃の不器用なところだった。

外観は平静を保ち、凛々しく立派であろうとも、内心はおおしけ大時化の津軽海峡のようだった。足腰から力が抜けるのを感じ、崩れそうになるのをやっとの思いで食い止めるのが精一杯だった。

史乃は一歩も動けないまま、直幸と朋也の後ろ姿が見えなくなるまで見詰めていた。

それからしばらくしてのこと。史乃は興信所に依頼して、直幸たちの足跡を調べさせたのだった。

実に、数日ぶりの我が家となった自宅は懐かしい気分だったが、早々ゆっくりもしていられなかった。

直幸は、朋也を保育園に預けた。

朋也は、保育士や園児たちと再会を喜んでいた。

保育士たちはすでに事情を知っていて、朋也が離れたのを見計らって、このたびはご愁傷様でした、と礼をした。

直幸は、朋也のことを話し、しばらくはそっとしておいて欲しい、と敦子の死について触れないようにお願いしておいた。

その後、直幸は栃木の工場を訪れた。直幸はまだ、忌引扱いだった。配偶者を失ったため、会社側も規定通りの日数を与えていた。

直幸が訪れると、従業員からは多くのお悔やみの言葉をいただいた。増渕たち女性社員の多くは言葉を詰まらせ、口を塞いだ。敦子は人気があったから、多くの人々が悼んでくれ、中には個人の意思であろう、黒の腕章や布で喪に服する者もいた。

直幸は改めて、ここでの敦子の存在感を痛感した。

直幸は早速渡辺に会った。今後のことを決めなければならなかったからだ。

渡辺は直幸に会うと声を詰まらせ、肩を叩いて慰めた。

直幸は会社を辞めることを進言したが、渡辺がそれを制止した。直幸が休んでいる間、渡辺なりに考えてくれていた。仕事の合間を見て、都合を付けてくれたのだ。

渡辺の話によると、新たに前橋の辺りに工場ができたという。カラーテレビの更なる増産のため、数年前から計画され、操業したばかりだという。

新設の工場で、年輩の経験豊富な即戦力を配置し、体勢を素早く整えようというのが社の狙いであった。短期労働者たちの融通も必要で、実はこの栃木からも何人も移った者もいたのだった。

当然、この話を渡辺は以前から知っていたわけだが、渡辺としては直幸をしっかり育てたい気持ちがあった。新しい環境になれば、直幸の性格からして苦戦するだろうと思われたからだった。正社員としての教育を充分に備えてからでも、構わないと思っていた。

何より、人事異動については、そう自由になるものでもない。だが、今回の件を受け、渡辺は強引に直幸の異動を認めさせた。

もちろん、上はいい顔をしなかった。高校中退である直幸よりも、大学出の“優秀な者”を管理職として育てる狙いがあるからだった。新設工場では経験豊富な者と共に、会社の将来を背負って立つ若者の育成が会社の人事からは読み取れた。

出稼ぎ出身の渡辺は学歴より経験を重視する人物で、それゆえに直幸も充分に戦力となるとしつこく訴えた。その熱意に負ける形で、直幸と大学出を交換させる形で異動となった。その新入社員にとっては迷惑な話だったが、研修後の異動という名目でこじつけた。

渡辺のこうした温情主義は、会社の重鎮たちとしては気に入らなかったが、下の者たちからの信望は厚かった。直幸はその好意に甘えることにした。

しばらくは出向扱いということで、直幸は休暇明けには群馬で働くことができるようになった。

直幸は深く頭を下げ、向上を後にした。その後、寮やアパートの

大家に挨拶回りし、アパートも引き払う準備を整え、荷物を送った。
数日後、再びアパートを訪れて手続きを完了すると、直幸は駅のホームから栃木に別れを告げた。故郷を離れた直幸と敦子を育み、自立させるまでに育ててくれた栃木の地への感謝から、直幸は深々と頭を下げた。

「ただいまー」
直幸と朋也は声を揃えて家に向かって挨拶した。
直幸が会社を終えて朋也を保育園に迎えに行く頃には、空も濃い灰色になっていた。仕事の影響もあり、どうしても他の園児たちと同じ時間には帰れない。保育園に延長して預かってもらい、直幸は仕事を終えると保育園に直行した。
直幸は、前橋の工場に勤めるようになったが、肩身の狭い想いをしていた。
小さい子供がいるということで、昼間の勤務のみとし、残業も極力ないように願い出たが、こちらの工場長、吉田はいい顔をしなかった。工場ができてまもなく、工場労働者も未熟な状態だった。いくら景気がいいとはいえ、真っ当な製品を作らなければ売れるわけがない。商品検査は特に厳しくしなければならなかったし、正社員が手本となって指導しなければならない。
そんな状況で、若い直幸が個人的事情でシフトを要求することは周囲に対して示しが付かないのだ。ただでさえ、いきなり配属されてきたのである。そんな新米がいきなり勤務条件を提示してくるのだから、気に入るわけがなかった。
吉田は渋い顔をしっぱなしだったが、それでも直幸の要求を汲んでくれたのは嬉しい限りだった。
「さぁ、ご飯作るぞぉー」
直幸は元気よく声を上げた。

朋也は手を上げてそれに応じた。

直幸は料理の経験がなく、台所の器具を探すことすら一悶着である。そんな直幸の料理である。最初からうまくいくわけがなかった。案の定、昨夜も朋也の評価は不評だった。

それでも、朋也は台所に立つ直幸の姿に興味津々だった。それまで立ったことがないのだから、物珍しいことは間違いない。

結局、この日もうまくいかなかった。朋也も口をへの字にして口をもごもごさせた。自分で食べても、それが料理か疑問に思ってしまう。同じような材料を使っているにも拘らず、どうしてこうも違ってしまうのか、直幸には甚だ疑問だった。

（どんな魔法を使っているんだ？）

魔法とでも思わなければ納得がいかない。何が違うというのだろう。世の男が台所に立ったら、同じようなことを思うかもしれない。それが料理の奥深さである。間違っても、愛情というスパイスだけで料理が変身することはないのだ。

直幸が落胆したくなるのはそれだけではない。調味料や食器類などの場所を朋也の方がよく知っているのだ。これは親として、結構へこむものだ。

風呂に入るにしてもそうだった。タオルや着替えの場所にいちいちたんす箪笥をほうぼう方々あさ漁って探し回らなければならなかった。風呂の入る手順から何から、いつもどうやっていたか、と朋也に確認しながら試行錯誤するのだ。それはなかなかに重労働だった。それも慣れるまでの辛抱だろう。直幸は一つ一つ覚えていこうと思うのだった。

「どうだ、しっかり磨けたか？　イー、してみろ、イー」

直幸は朋也の口を指で押さえつつ、口の中まで覗き込んだ。

「よし、きれいだ」

「いひぃ」

直幸は白い歯を見せて笑う朋也の頭を撫でた。

朋也はいつも、寝る前にお話を聞くのと楽しみにしていた。生前、

敦子がいつも話を聞かせていたからだった。

直幸は自分で話を作る才能はなかった。直幸は、自分の記憶から、知っている話や敦子のしていた話を引っ張り出して聞かせた。たまには別の話がいい、と言われて適当にアレンジを加えることはあったが、基本的にはそんなものだ。下手な話をすると朋也は返って目を覚ましてしまう。逆に、飽きられて眠られることもあるから、寝かせるためにはいい加減なのもありだった。

子どもの話についていくのは大変だった。保育園の友達から色々なことを聞いてくる。テレビ番組のことだってしっかりと記憶しておかないと、話についていけない。家事で忙しいというのに、そんなことまで気を回さなければならないのは大変だった。

そんな忙しい時はおもちゃで誤魔化して一人で遊ばせておくのがいい。朋也は夢中になると我を忘れて遊ぶから、その点は非常に扱いやすいところがあった。

炊事、洗濯、掃除、とやることだらけである。その上、風呂やトイレの面倒も見なければならないとなると、一日戦争のようだった。昼間は仕事、夜は家事。休日はゆっくりしたいところだったが、洗濯、掃除をしっかりできる時間はそのくらいしかなかった。その上、朋也を遊ばせるのだから、直幸はへこたれそうだった。

パートタイムとはいえ、敦子はよくこなしたものだ、と改めて感心させられるのだった。

家族が死亡すると、実にさまざまな面倒が降りかかってくるものだった。

その一つが生命保険の死亡保険金受け取りだった。

その手続きのためには死亡診断書が必要だったが、診断書は清太郎が受け取ったため、直幸は再発行せねばならなかった。

妻の亡くなった病院を訪れることは、苦痛以外の何者でもなかっ

た。だが、それを嫌がっていても、手続きは進まない。直幸は仕方なく病院の構内へと足を踏み入れた。

手続きは問題なく、順調に進んだ。直幸は、それらについてあまり深く考えるのを辞めていた。保険員の言われるままに手続きを行い、特に問うたりはしなかった。

相手も話がスムーズで楽だったのだろう。手続きは拍子抜けするほど簡単に終えることができた。

死亡保険金が振り込まれたのはそれからしばらく経ってのことだった。

直幸は銀行で通帳記入を済ませて、通帳を受け取った。入金を確認するためだった。

通帳を確認すると、そこには数百万という大きな数字が記載されていた。その数字を見た瞬間、言いようのない不快感を覚えた。

その感覚は、醜悪な臭い立つ、汚泥のようなおぞましいものだった。

通帳を見た直幸の手が震えた。記載された金額、それが敦子の命の値段に思えたのだ。

直幸はただ事務的に手続きを済ませたに過ぎなかった。人が死亡したことで発生した、ただの事務手続き程度にしか考えていなかった。いや、考えてもいなかった。他に考えなければならないこと、やらなければならないことがたくさんあって、保険手続きなどという瑣末なことに意識を向けている暇がなかったのだ。

だが、今こうしてみると、その浅はかさを思い知らされた。

なんとなく契約した生命保険の、なんとなく済ませた手続きの結果が、この目の前にある無味乾燥とした数字なのだ。

それは直幸にとってとてつもなく恐ろしいことのように思えた。

直幸の背には背徳感がずっしりと重石となって圧し掛かってきた。

次の瞬間、直幸は通帳を思い切り、壁際の柱に投げつけていた。

不審に思った警備員が直幸に近づいてきて、何事かを話しかけてきたが、それを聞き取ることはできなかった。

直幸は、すいません、なんでもないですから、と言うと、投げた通帳を拾い、足を引き摺るようにして銀行を出た。

（こんなつもりではなかったんだ、こんなつもりでは……）

直幸はふらふらと力なく歩いた。目の前は真っ暗になっていた。自分という存在が酷く醜い存在に思えてならなかった。直幸には、街の風景も、人々の動向も喧騒も、何も頭に入ってこなかった。

（俺は……、俺は……）

直幸の目は焦点を失い、瞳孔からは光が消えていた。

賑やかな市街に立ちながら、直幸はまるで砂漠にでも立っているようだった。きれいに舗装されたブロック張りの歩道に足を取られそうになり、体が揺れた。まるで、からくり人形のようにぎこちない動きで直幸はまた歩き出すのだった。

その無色無音の世界を鋭く切り裂く音が響いた。

自動車の強烈なブレーキ音と、一瞬後の激突音である。直幸はその音に覚醒し、音の方を振り返った。直幸の遥か後方の交差点で交通事故が起きたようだ。自動車が二台、停まっているのが見えた。

その光景を見た瞬間、直幸は強烈な吐き気に見舞われて路上にうずくま蹲った。周りの通行人が心配そうに声を掛けられたが、それに応じることはできなかった。直幸は再び湧きあがった吐き気に耐えられず、その場で嘔吐した。

救急車を呼ぼうか、と声を掛けてきた通行人に手で拒否の合図を送ると、しばらくして立ち上がり、その場を立ち去った。

直幸は、しばらくの間、この振り込まれた金をないものとして考えた。

しかし、数年後、直幸はローン返済のためにこのお金を使うことにしたのだった。

日々の生活は苦労の連続だったが、その中でも食事は特別だった。

風呂も、洗濯も、掃除も、とりあえずやってさえいれば特に問題はなかった。

だが、料理は適当に何でも食べればいい、というほど簡単ではなかった。毎日摂るだけに、まともに作れないと痛いしっぺ返しを喰らう。それが自分だけならば、直幸もそれほど気にしなかったかもしれない。しかし、朋也の顔を見ると、安直ではいられなかった。

「ママのがいい。ママのが食べたい」

直幸の悪戦苦闘適わず連戦連敗の状況に、ついに朋也が限界に達したのだった。朋也がぐずって食事を摂ろうとせず、ついには泣き出してしまった。

連日、仕事に家事にと汗水流し疲れていた直幸は、泣き止まない朋也に苛立ち当たってしまった。

「勝手にしろ！」

そう言って食事を片付けると、蒲団に入ってしまった。

直幸は蒲団を被って朋也の鳴き声を防いだ。蒲団に潜りながら、苛立つ自分に苛立っていた。疲れから苛立ち、その苛立ちから朋也に当たってしまったことを悔いたが、泣いている朋也に何もできない自分の無力さはさらに苛立ちを募らせることになった。

朋也は泣き疲れると、蒲団に潜って眠ってしまったようだった。

直幸もまた、いつの間にか眠ってしまっていた。

（お腹を空かせていただろうに……）

明け方、直幸は朋也の寝顔を見ながら自分の狭量を恥じるのだった。うまく幼い子どもを宥めることができない不器用さに落胆したが、ただ落ち込んでいるわけにもいかない。直幸は、敦子ならどうやって宥めるのだろう、と考えた。

直幸が朝食の支度をしていると、朋也が起きてきた。

「おっ、朋也、おはよう」

朋也は眠たそうに目を擦っている。

「お腹空いてるだろ。すぐ、ご飯になるからな」

朋也の顔はまだ寝ぼけていてはっきりしないが、複雑な顔をした。

直幸は朋也の前に移動すると、優しく声を掛けた。
「なぁ、朋也。ママの料理は好きか」
朋也は頷いた。
「そうだよな。ママの料理は美味しかったもんな」
直幸は朋也の頭を撫でた。
やっぱり、母親の料理は別格だろう。子どもは素直だと思う。
「ママの料理は世界一だもんな。パパは全然駄目だけど、朋也に美味しいって言われるように頑張るから、朋也も一緒に手伝ってくれ。それで、いつかママに負けないくらい美味しいのを作ろう。ママもきっとびっくりするぞ」
朋也は何かを感じたのだろう。目をキラキラと輝かせていた。
「パパ、おしっこ」
朋也は何かを感じたようだったが、生理現象が勝ったようだ。直幸はトイレに連れて行き、一応様子を見ておく。便器に落ちないように、念のため気を付けておかなければならない。その後、顔を洗い、やっと目も覚めたようだった。
「じゃあ、お箸出しててくれ」
そう言われると、朋也は幼い手付きで箸を出してくれた。
まだまだ複雑なものはできず、つい楽をしてうどんやインスタントラーメンに頼りたくなるところだった。それでも少しずつ覚えていこうと挑戦しては苦闘していた。
だが、朋也が何かを手伝ってくれることで、自分独りでやっているという気持ちが軽減された。
一緒に何かをしているという連帯感は、嬉しい気持ちにさせた。その気持ちは、直幸にとっても、朋也にとってもとても大切なものだった。
朋也がいなければ、直幸はこんな苦労をせずに済んだだろう。だが、朋也がいるからこそ、直幸は新しい苦労にも耐えることができた。直幸は朋也の姿を見て、朋也は紛れもない家族なのだ、と改めて認識させられるのだった。

敦子は交通事故によって死亡した。

警察が簡単な確認と事情説明のために自宅を訪れたことがあった。警察官は詳しい事情は説明しなかったが、居眠り運転による信号無視が原因というくらいには事故の説明をしてくれた。それ以上詳しいことは捜査情報であり、明かせないのだ、と言っていたように記憶している。

直幸も、その時はその情報に興味を持たなかった。いや、知りたくもなかったのだ。敦子が亡くなったことに変わりはなく、とてもそんなことを考える余裕がなかった。朋也のことや仕事のことで一杯一杯だったのだ。

敦子が死亡してから以降、直幸の体調に何ら変調は見られなかった。精神的にも肉体的にも疲れることは多かったが、身体的に何か問題があるということはなかったのだ。

だが、先日市街で交通事故を目の当たりにしてからというもの、直幸の体には明らかな異常が見られるようになった。

突然、自動車が真横を通過したり、いきなり出くわしたりすると、直幸の体が勝手に反応して、震えが出るようになった。眩暈や動悸、息切れが起こり、発熱や吐き気を催すこともあった。離れた場所のクラクションやブレーキ音でも拒絶反応を起こすことがあり、夜間接近するライトにまで怖さを感じるようになった。

それは直幸の生活に大きな支障を来たした。

自動車免許を持たない直幸は普段から自動車に乗ることはなかったし、通勤には電車を利用していて、一件問題なさそうではあった。しかし、体調を崩すと身動きが取りづらく、仕事に遅れてしまうこともしばしばあった。なにより、外出することは精神的に非常に負担になった。

直幸は、車通りの少ない通りを選んだり、歩道のある場所を選ん

で歩くように心掛けた。朋也は敦子が交通事故で亡くなったことを知らず、車を怖がることはなかった。それは幸いだったが、直幸自身、自分の体が変調を来たすなど考えもしなかった。

それでも、直幸は仕事を続けた。続けなければならなかったからだ。

ただでさえ、シフトを融通してもらう特別扱いを受けているのである。その上、休むわけにもいかなかった。朋也を支えられる者が自分しかいないという意識だけが直幸の足を前に進めさせた。

敦子の父、清太郎が現れたのは、そうした思わぬ障害に躓いている頃のことだった。

清太郎が岡崎家を訪れるのは二度目であった。その一度目に清太郎は直幸の自宅に押し入り、散々荒らしていった。そのため、朋也は清太郎の存在に怯えたものだった。

清太郎もまた、渋い顔で直幸と対面した。

清太郎は、直幸にある依頼をしに来たのだった。

それは、敦子の交通事故に対する民事訴訟を起こすという話だった。

遠方に住む清太郎にとって、何度も法廷に足を運ぶことは困難だった。それでも清太郎としては最大限の努力をしたいと思っていたが、物理的に厳しかった。

そこで、原告として直幸が立つように要求してきたのだった。

無論、清太郎としても、直幸にこんなことを頼みたくもなかった。清太郎は今でも敦子の死の、一番の加害者は直幸だと思っていたからだ。

だが、交通事故を起こし、敦子を死に追いやった者を放置しておけるわけがない。それこそ死刑にでもしてやりたいところだが、それは不可能だ。ならば、できる限りの償いをしてもらうまでだ。そうでもしなければ、清太郎の気が治まらない。

その清太郎の姿は、怒りのやり場を探しているようにも見えた。

清太郎の怒りに触れて、直幸は初めて交通事故を起こした運転手

に対して怒りを抱いたのだった。
それまでの直幸は、敦子を失った悲しみと、これから朋也を育てていかなければならない責任感とで埋め尽くされていた。とても、他人のことなど考えている余裕がなかったのだ。
だが、今こうして話を聞かされると、清太郎の怒りは確かに直幸に伝播した。直幸にとってもっとも大切なことは朋也の養育だったが、敦子を殺した者に怒りが湧かないわけはなかった。
裁判を起こすとなると、仕事を休まなければならないこともあるだろう。交通事故について考えることは、今の直幸にとって、どれほどの負担になるか知れない。弁護士を雇う必要だってあるのだ。
それでも、その無法者に報いを与えることは、直幸と清太郎にとって充分に認められた権利だった。直幸は、原告として訴えることを約束した。それは新たなる苦難の幕開けでもあった。
清太郎にとって直幸は敵でもあったが、憎悪を押し殺し、共同戦線を張ることを約束した。費用についても工面するといってくれた。ここに、意外な協力関係が出来上がることになった。

第六章

直幸も清太郎も知らなかったことだが、民事裁判は刑事裁判が終わった後でなければ起こすことができなかった。

交通事故を起こしたのは、横山という男だった。地元で造園業を営む四〇代後半の男で、信号を無視して交差点に突入し、右から来た自動車に激突されて進路が左にそれ、路肩にいた敦子を引いた上、壁に激突したという。

民事裁判について知るうちに、被害者である直幸たちが困難を強いられることがわかってきた。捜査情報が警察側に独占され、取調べの中で情報確認が可能だった加害者側とはその点で大きく異なっていた。

この事故は、二台の自動車が関わった事故であり、横山と共に、横山に激突することになった車の運転手、加部も絡む複雑なものとなっていた。どちらに過失があったのか、その辺りも含めて裁判は争われ、刑事裁判は予想以上に長引くことになった。

現場は近くの小学校に通う小学生たちの通学路になっていて、中学生や地元住民らも利用する交差点で、車通りはそれほどない場所でもあった。事故は、敦子が朋也を保育園に預けてから後のことで、通学する者もなく、通勤時間帯としても遅い時間であったため、事故を確認した目撃者はいなかったことも事故状況を調べることを困難にさせた。裁判は極めて厳しい中で行われることになったのである。

仕事もあり、何より朋也の面倒を見なければならなかった直幸は、ほとんど弁護士に任せきりになった。弁護士の斉藤は中年だが、背筋の伸びた精悍な顔立ちの男だった。法律についても、裁判についても全く無知の直幸は斉藤の指示に従い、彼に全てを委ねる他なかった。

そんな直幸を清太郎は、甘い、手緩いと激しく非難することもあ

ったが、清太郎自身がどれほどのことができるわけでもなく、自身で調べてみても成果は上がらなかった。

直幸にとって、唯一癒される時間は、朋也と二人でいるときだけだった。

遠くに出掛けることもできず、お金の心配もあるため、あまり使うわけにもいかなかった。精々、近くの公園や川原に遊びに行く程度しかできなかった。

それでも、朋也は嬉しそうだった。

先日も、近くの神社の境内に散歩に行った。

「ほら、お手手みたいだなぁ。なあ、朋也」

直幸は、枯れ落ちた褐色の楓の葉を拾い、朋也の掌に当てて見せた。

朋也はその葉を手に取ると、不思議そうに眺めた。

「えへへ」

嬉しそうに直幸に木の葉を掲げてみせる。

「きれいだなあ」

直幸はそう言って、朋也の背中を押した。

背中を押された朋也は、弾かれたように直幸の元を離れると、近くに落ちている落ち葉や木の実、そして、蟻の姿に見入った。

朋也とこうして過ごす時間だけが、心を和ませてくれる時間だった。この時だけは、世の中のさまざまな雑事を忘れることができた。無垢な天使のような笑顔を見せてくれる朋也の存在は、世俗にまみ塗れた直幸の穢れを洗い流してくれるのだった。

やがて、朋也は小学校へ入学した。大きなピカピカのランドセルを背負い、朋也は嬉しそうに笑った。

直幸も背広を新調して、きっちりと身なりを整えて入学式に参列した。

大きな校舎。大きな体育館。大きな教室。大きな黒板。大きな机と椅子。

何もかもが珍しくて、朋也は口を開けたまま辺りを見回していた。

教室に入ると、それぞれの席に座った。名前を呼ばれると、朋也は元気よく返事をしていた。教師が話をしている間、朋也は時々振り返って、直幸の姿を確認したものだ。周りの子どもたちも同じように振り向き、手を振っている子もいた。直幸は、どこの子供も同じなんだ、と感じたのだった。

式が終わると、校門の前で記念の写真撮影をしていた。親子揃っての記念だと思い、直幸も写真屋に一枚頼んだ。

小学生に上がると、保育園のようにはいかない。朋也は自分で登校することになった。近所で町内の上級生と待ち合わせて、手を引かれて登校したものだった。

帰りは同じ一年生と一緒に帰宅し、途中で別れた。保育園のように預かってもらうわけに行かず、家の前に鍵を隠しておいた。

「ここに隠しておくからな。これはパパと朋也だけの秘密だぞ」

直幸が口元で人差し指を立てると、朋也もそれを真似た。

何か、宝の財宝でも隠すかのように、ちょっとしたスリルを感じて、朋也は目を輝かせた。

「迷子になったりしなかったか？」

帰宅した直幸は冗談めかして訊いたが、朋也は自信満々に大丈夫だと答えた。

「ボク、迷ったりしないよ」

直幸には、胸を張る朋也が眩しく見えた。

保育園への送り迎えがなくなったことで、直幸の負担は少しばかり減って楽になった。帰りの時間も以前よりは少しだけ気を使わなくて済む。とはいっても、夕食の支度があるし、遅くなると店が閉じてしまい、食品を買えなくなってしまう。普段から買い溜めをするようにしていたが、それでも少しは補充しなければならない。買い溜めしておくと、悪くしてしまうこともあり、不経済だった。

朋也は帰宅すると、家でテレビを見たり、おもちゃで遊んだり、絵本やお絵描きで時間を潰した。

直幸は、朋也を留守番させなければならないことを不憫に思い、

お菓子やおもちゃを買って帰ることで機嫌をとった。
直幸が帰宅すると、朋也は玄関に飛び出してきて、おかえり、と挨拶してくれた。直幸の足にしがみついて甘えてくることもあり、その日一日の出来事を延々と話してくれた。
テレビアニメの『だんご大家族』の主題歌を歌って聞かせることもあった。だんご大家族は、夕方四時半から十五分枠で放送されている子供向け番組で、一九七〇年代初頭から始まり、八〇年までの間、繰り返し放送されることになった人気番組である。
朋也が保育園に通っている間、朋也はまず見ることができなかった。小学校に上がり、自宅で留守番するようになってゆっくりと楽しめるようになったのだが、子どもたちの間ではかなり人気のある番組で、丸い団子を模したキャラクターグッズも販売されていた。
「おとうさん、おかえり」
「ああ、ただいま」
そこで、直幸は、ん、と気が付いた。
「朋也。今、パパのこと、お父さんって」
直幸は簡単に着替えをしながら朋也に確認した。
「うん。その方が大人なんだって、みんな言ってた。パパって呼ぶのは子どもなんだって。大きくなったらお父さんって呼ぶんだって。」
「ふーん、そうかぁ。みんながそんなことを」
「うん。だから、みんなボクのこと子どもだ、赤ちゃんだって言ったんだ」
直幸が朋也の方に目をやると、朋也は少しむく剥れたような顔をしていた。
「だから、もうパパって呼ばない。お父さんで呼ぶんだもん」
「そうか。そうだな。じゃあ、パパももう自分のことパパって言ってちゃいけないな。よし、今日からはパパは父さんだ」
直幸が朋也の頭を撫でながら言うと、朋也はきょとんとした。
「今、パパって言った」

「ああ、そうか。パパって言っちゃいけないんだったな。なかなか難しいな。パパも注意しないとな。……ああ、今また言っちゃったな」

直幸が笑うと、朋也もつられて笑った。

(朋也もそんなことを気にするようになったんだな。まぁ、男の子だもんな)

直幸は朋也の頭を撫でながら、我が子の成長を微笑ましく思った。

夏休みになると、朋也のお昼ご飯についても気を使わなければならなくなった。夕食を多めに作り、夕飯の残り物を弁当箱に詰めた。足りない時は適当に食材を足した。お昼の食事も考えると、買い物の量も種類も増えた。保育園に通っていた頃は夏期保育を利用すればどうにかすることができたが、学校ではそうはいかなかった。頼れる家もなく、直幸は自力で乗り切らなければならなかった。

それは朋也にとっても寂しい時間であったが、近所の公園で同級生たちと遊んだり、とりあえず宿題でもして時間をやりくりしていた様子だった。

同級生たちが遊びに出掛ける中、結局朋也は一度も光坂を離れることはなかった。それでも、直幸と出掛けることができると喜んでいた。

夏の暑い盛り、直幸たちは数回川原を訪れたことがあった。

「気をつけるんだぞ」

川に入った朋也に直幸は注意を喚起した。

朋也はじっと川の中を覗き込んだりしている。足元を何かが抜ける。朋也は振り向こうとして足を滑らせた。

大きな飛沫が立って、朋也が冷たい水の中に尻餅をついた。

「おーい、大丈夫か」

直幸が駆け寄って、朋也の体を起こした。衣服が見事に濡れてしまった。

「大丈夫か?」

朋也は足や掌を擦っている。強く打ったのだろう。

直幸が掌を見たが、血は出ていなかった。冷えて白い肌に、少しだけ赤みがある。
「ちょっと打ったのかな。でも、大丈夫。血は出てないから」
朋也を川原に上げると、上着だけ脱がした。
「なんかいたよ」
少し落ち着くと、朋也はそう言ってきた。
「足の間をね、すっと透ったんだよ」
朋也は体を使って再現した。
「そうか、お魚かな」
「お魚」
朋也は小さく頷いた。
再び川に入り、川の中を覗く。
「気をつけるんだぞ」
朋也は聞こえたのか、聞こえないのか、わからなかったが、おそらく川の中の様子に集中しているのだろう。
直幸も靴を脱いで、ズボンの裾を上げて川に入った。
川の石は藻が生えている赤褐色に染まっていた。足を踏み入れると、足の裏にぬるりとした感触が感じられた。川の流れは意外に強いもので、しっかりと足を支えていないと足を滑らせそうだった。足に伝わるひんやりとした感覚が気持ちいい。
直幸も朋也と同じように川を覗き込んだ。
水の流れに煽られて、川底はゆらゆらと揺れるように景色を変えた。その中を影が通り過ぎたように見える。確かに何かがいるようだ。
直幸がじっと目を凝らし、川原に集中していると、大きな水音が鳴った。
音の方を見ると、また朋也が転んだようだ。
「朋也、大丈夫か」
直幸は急いで朋也の元へ駆け寄ろうとして慌てた。
「おわっとっと……」

川底がぬるりと滑り、直幸は天を仰いだ。一瞬、何が起きたのか状況がつかめなかったが、手や尻に冷たい流れを感じて転んだことに気が付いた。
「あはははは」
二人とも目をぱちくりさせて、お互いを見合うと一緒になって笑った。
こうなってしまうと、もはや濡れたこともどうでもよくなってくる。
「うわっ、つ冷めて。やったな」
「わっきゃっきゃ」
直幸と朋也は水を掛け合ってずぶ濡れになって遊んだ。
帰り道、ずぶ濡れになった親子二人連れとすれ違い、何事かと振り返る人たちがいる中、二人は手を繋いで帰った。
帰った後、すぐに風呂を沸かして一緒に入った。
お風呂でも今度はお湯を掛け合い、随分とお湯を無駄にしてしまった。
朋也は遊び疲れ、直幸が夕食の準備をしている間にいつの間にか眠ってしまい、直幸が起こすまで起きなかった。
朋也は宿題の絵日記に、川で遊んだことを書いたのだった。
学校が始まると、同級生で話しをする時、夏休みの出来事が話題になる。作文などで発表する場合もある。そうしてさまざまな話を聞くことで、それまで知らなかったことも覚えていくようになる。
夕食時、朋也はそうした話を直幸にしてきた。
「コウくんがね、おボンにおハカに行ったんだって」
「ふーん」
直幸は、あまり嬉しくない話題だと思った。
「エリちゃんも、ヒロシくんも、行ったんだって」
「そうかぁ」
「ねぇ、おボンって何?」
「あ、ああ。なんていうのかな、死んだ人がちょっとだけ帰ってく

る日なんだよ」
「じゃあ、おハカは？」
「死んだ人が入ってる場所かな……」
「ふうん。なんで帰ってくるの？」
「やっぱり、家族に会いたいからじゃないかな？」
「ふうん」
朋也はしばらく考え込んだ様子だった。
「なあ、朋也。友達は他にどんなところに行ったんだって？」
直幸は話題を変えた。
「んー、海とか、山とか……、遊園地にも行ってきたひといるよ」
「そうかぁ、みんな色んなところに行ってるんだね」
「うん、みんないろんなとこ、お泊まりしたんだって」
「そうか、すごいね」
「ボクもリョコウに行ってみたい」
「行きたいか。そうか。もう少し大きくなったら行こうか」
「うん」
周りの色々な家庭のことを聞くと、直幸は朋也が不憫だと感じてしまう。ゆっくりどこかへ連れて行くこともできない。仕事も休むわけには行かず、訴訟も片付かない。金銭的にも、遠出や外泊はできるだけ避けたいところだった。
職場では相変わらず肩身が狭かった。いや、以前よりもまして厳しかった。
「そんなに大変なら、仕事辞めたらどうですか？」
直幸は年下の社員にそういわれたものだ。直幸は愛想笑いでも浮かべるしかなかった。
直幸が高校中退であることも広く知れ渡っていた。年下の大学出たちからすれば、直幸は敬意を払う存在ではなかった。高校中退という点もそうだったが、なにより勤務態度が納得いかなかった。直幸は素行が悪かったわけではないが、常に家のことを優先し、仕事を疎かにしていると見られていた。事実、夜間勤務を行わず、残業

もまずない。あくせく働いている者たちからすると、やりたいようにやって給料を貰っているようにしか見えないのだ。正社員よりも安い給料で働かされる契約社員たちの心象はさらに悪かった。直幸は会社にとってもお荷物になってきていた。

「いい身分ですよねー。夜勤はしなくていい。残業もしなくていい。ちょっと何かあるとすぐ休む。アンタ、ここに何しに来てるんですか？」

若い社員は、トイレで直幸と出くわすと毒突いた。

「いや、みんなには悪いと思ってるよ」

大卒はその言葉に、直幸を横目で睨んだ。

「悪いと思ってるなら、誠意を見せて欲しいもんですねぇ」

大学出の赤木は正直、工場勤務が気に入らなかった。せっかく大学に出たというのに、あくせくと地道に部品を汲み上げるのだ。夜も昼もなく、そんなことを繰り返し繰り返しやらされて不満を募らせていた。

大学を出た者はエリート。赤城は名門大学の出身でもないし、官僚なんかも性に会わない。それでも、大学卒業という勲章は肉体労働をするような人種ではないことを示すものだと赤木は考えていた。

経営に携わり、いずれは経営トップとなる。そうした夢を抱かせるほど、日本経済は好調だった。好調だったのだ。

しかし、オイルショックの影響で経済成長は減衰し、今までのような飛ぶ鳥を落とす勢いはなくなっていた。

だからこそ、尚更赤木には焦りがあった。七六年の暮れ以降、石油価格は高騰したまま高止まり。戦前そうであったように、石油の供給が絶たれると日本は非常に弱い立場にあった。会社からは、教育のためと聞かされている。上の者は会社のさまざまなことを知らなければならないという説明も納得できた。しかし、もし、日本経済が傾くようなことがあったら、このまま工場勤務を続けなければならないのか、と不安になるのだった。そのやり場のない苛立ちが八つ当たりとなって現れた。

工場の業績も今一つだった。より大型のテレビを供給するために作られたが、景気の先行き不安からテレビのような高価な商品に対する意識は低下していた。工場を作ったことで供給量が高まり、返って会社にとっての痛手となってしまったのだった。

「アンタみたいなのがいると、下に示しがつかないんですよね。知ってます。みんな、アンタのこと、給料泥棒だって言ってますよ」

「うん、迷惑掛けてるね。子供がもう少し大きくなったら、頑張るから」

「大きくなったらって、いつのことですか。あと何日ですか」

「そんな急には……」

「そんなに子どもと遊びたいなら、会社辞めればいいじゃないですか？」

「そんなにね、簡単じゃないんだよ。子供を育てるのって」

「こっちだってね、アンタみたいに気楽にやってるわけじゃない。アンタこそ、働くってどういうことかわかってます？」

「別に、気楽にやってるわけじゃ……」

「じゃあ、本気でそんなもんなんですか。アンタの本気ってそんなもんなんですか。中退は気楽でいいや」

赤木は最後、直幸を嘲笑うようにして出て行った。

独身の赤木に子供を一人で育てることの苦労が理解できないのも無理はなかった。まして、直幸には親しい縁者がいなかったから、誰も頼れず、一人で何とかするしかなかったのだ。

直幸にも落ち度がないわけではない。青森に帰ることもできないことではなかったかもしれない。それを拒んだのは直幸のエゴかもしれない。

だが、愛する敦子と暮らした土地を離れることは直幸にはどうしてもできなかった。そして、一度捨てた岡崎家に戻ろうとも思わなかった。

清太郎を頼ることも一つの選択ではあったが、直幸はもちろん、清太郎自身にその気はなかった。

雅子は少しばかり違っていた。女性ゆえであろう、敦子がお腹を痛めて産んだ子となれば、たとえ悪魔の子であろうとも僅かばかりかの仏心も湧いてこようというものだった。そこが父と母の違いなのだろうか。清太郎は直幸と関わった過去そのものを憎んでいた。その所産である朋也に対して特別の感慨が湧くことはなかったし、群馬の岡崎家にもできるだけ近寄らなかった。

清太郎は、度々傍聴席に座った。本心からいえば、原告席に座りたい気分である。だが、頻繁に青森を訪れることは困難であった。それでも、せめて少しだけでも、と傍聴席に通いつめたのだった。

前橋地方裁判所高崎支部は高崎駅から西へ進み、高崎市役所の前を通過した突き当たりの通りの左手に位置していた。少し先には中山道が鳥川沿いに走っている。

もう何度も訪れて、街並みにもだいぶ慣れてしまったが、庁舎の門を潜ることはなかなか慣れるものではなかった。

清太郎は、裁判所で横山と初対面した時はいきなり殴りかかろうとして周囲に取り押さえられた。たとえ憎い相手といえど、暴力を振るえば罪になる。裁判所内では言い訳もできないし、裁判での心象を悪くすること間違いなしだった。

その後も、清太郎は傍聴席で何度もはらわた腸が煮え繰り返っていた。横山や被告弁護人の答弁を聞いていると我慢ならず、傍聴席から横山を罵倒したこともあった。裁判官の制止を受けたが、横山の態度にはよほど腹に据えることもあった。

裁判が長引くに従って、被害者側はどんどん不利な立場に立たされていった。証拠の提示が難しく、横山も事故から時間が経つにつれて開き直り始めたのだった。

事故は二台の自動車が絡んでいたが、そのどちらにどれほどの過失があったかという話になると法廷は混乱した。証人として呼ばれた加部の証言に対して横山側が難癖をつけると、ついには水掛け論となった。

結局のところ、両者とも敦子の存在など気にしていなかったよう

で、加部は確かにいたようだ、という程度でどういう状況かまでは記憶していなかった。長い年月の間に忘れられた部分もあっただろう。人の記憶とは、それほど確かなものではない。

だが、それでもその僅かな記憶に頼らなければ、直幸たちにはどうすることもできなかった。

ついには、被害者であるはずの敦子が信号無視をして路上を平然と歩いていたから事故にあったのだ、などと言い出した。

話が被害者のことに及ぶと、どこで調べたのか、「駆け落ちして高校中退」ということまで浮上してきた。つまり、敦子の人間性を疑うような話が出てきたのだ。

その話が出た時、清太郎は心底直幸を憎く感じたが、それ以上に横山側の死者を冒涜するような言動が許せなかった。清太郎は大いに声を張り上げ横山を非難し、見兼ねた裁判官によって退室を言い渡されたのだった。

直幸とて、我慢のならないことだった。原告席に座りながら、直幸は目を閉じていた。膝に置かれた拳は固く握られ、歯茎から血が出るほど強く噛み締めて耐えていた。

法廷内は、まさに人間の暗黒面そのもののようだった。罪を擦り付け合い、人々を罵倒し、死者を冒涜する。その姿を直幸はじっと見ていた。何度も事故状況の説明が行われ、直幸は言いようのない不快感に襲われた。頭痛や吐き気、腹痛など、さまざまな体調不良を起こして一時休廷となることもあった。

直幸は再び酒を飲むようになったのはこの頃からだった。何とか気持ちを落ち着かせようと、酒に頼って誤魔化そうとした。最初は酒量も少なく抑えていたが、裁判のあった日は抑えることができなかった。悪酔いが過ぎて朋也に当たってしまうこともあった。朋也は次第に直幸の顔色を窺うようになった。

裁判が終わると、直幸も清太郎も精神的にボロボロの状態だった。弁護士は和解という選択もある、と助言したが、清太郎は納得せず、直幸もまた拒んだ。裁判に疲れ切っていた二人にとって、どんな判

決結果になるか、ということよりも判決に行き着き、裁判官より法の裁きが下されることに重点が置かれるようになった。

判決は、当初の要求より随分と加害者側の言い分が聞き届けられ、満足のいくものではなかった。しかし、直幸も清太郎も控訴するような気力は残されていなかった。裁判が終わったことへの解放感が強く、とても上訴してもう一度法廷に立つことなど考えもよらないことだった。

清太郎も、最後は力なく電車に乗って青森へと帰っていった。長年に渡り共に戦うことになり、清太郎の直幸に対する心情は少しばかり軟化したのだった。長い時間を掛けて残ったものといえば、ちっぽけな自己満足に過ぎなかった。意気揚々と訴訟を起こしてみたものの、とても勝利を勝ち取ったという気分ではなかった。

裁判の中で見せられたのは、被害者遺族にとっての厳しい現実と、魑魅魍魎のような人間の本性だった。

直幸も清太郎もほとんど敗残兵のような気分で裁判所を去った。

「おと……、清太郎さん、お疲れさまでした。賠償についてまとまったら、こちらから連絡します」

別れ際、直幸は清太郎に声を掛けた。

「別に、ええわ」

「そういうわけには。弁護士費用もありますし。」

「まあ、好きにしろ」

「お気をつけて」

「おまえもな。簡単にくたばるんじゃねぇぞ。しっかり償ってもらうからな」

清太郎は少しばかり直幸に情が移ったようだった。

直幸は深々と頭を下げて見送った。

裁判の代償は殊の外大きかった。精神的に疲弊したことはもちろん、肉体的にも疲労が蓄積していた。さらに、工場を辞めることになった。正確には、契約社員に格下げされ夜勤も含めて通常通り働くか、退職するか選択が迫られたのだった。実質的には解雇である。

最後のボーナスは形ばかりのもので、ほとんどないのと変わらなかった。

直幸の勤務状況を鑑みればそれも致し方ない部分はあったが、直幸にとってそれはとてつもなく大きな損失だった。

直幸は裁判によって多くのものを失ったが、安堵感もあった。そして、また失われていないものもあったのだ。

直幸は職を失った機会を利用して、朋也と旅行することにしたのだった。

あまり遠出はできなかったため、県内で有名な草津温泉に出掛けた。高崎から吾妻線草津口まで列車を利用し、そこからはバスでの旅となった。

朋也は始めてみる山々の風景に、車窓にかじりつくようにして見入っていた。

草津温泉街はホテルや旅館が所狭しとひしめ犇いてそこ彼処から湯気がのろし狼煙のように立ち上っていた。洒落た木造の建て構えもあり、情緒を醸し出していた。これで雪でも積もっていれば、さらに雰囲気が出るだろう。

朋也と外泊するのは、敦子が亡くなった時以来だろう。朋也も嬉しそうで、直幸も連れてきた甲斐があった。

宿は平日で空いていた。宿に着くと早速風呂に入り、汗を流した。

「朋也。走ると危ないぞ」

朋也は素早く衣服を脱ぎ捨てると、浴場へと走っていった。

「わああ」

大きなお風呂は栃木の銭湯以来だろう。朋也は興奮して大きな声を上げた。

体を流した後、朋也は大浴場を所狭しと泳ぎ回った。

「朋也。ここはお風呂だから泳いじゃ駄目だぞ」

朋也は一時的にじっとしているものの、すぐに動き出すのだった。浴場も貸切状態で、足をバタつかせて湯を飛ばすことが無ければいいか、と直幸も放っておいた。

浴場には露天風呂もあり、外の景色を楽しむこともできた。岩に背を預けながら、直幸はのんびりとした一時を過ごした。それは本当に久しぶりの安らげる時間だった。

風呂を出た後に辺りを散策して廻った。朋也は辺りの風景を楽しそうに見て廻り、幾筋も立ち上る湯気を不思議そうに眺めた。

草津温泉の西側にはにし西の河原と呼ばれる場所がある。すなわち、賽の河原、三途の川のことである。岩や大小の小石が転がる川原である。その西の河原には池のような大露天風呂がある。直幸たちは試しにその露天風呂に入ってみることにした。

露天風呂の大きさはまさに池といった感じだった。その実に巨大な風呂に、直幸も朋也も驚かされた。

「朋也。賽の河原って知ってるか？」

「んーん」

「三途の川っていう川があって、あの世とこの世、そうだな、父さんや朋也のいるこの世界と、死んだ人たちがいる世界の、間にあるところなんだ。ここから先があの世、ここからこっちがこの世って感じで、川を渡ると戻って来れないらしい」

朋也は静かに聞いていた。

「それで、そこの川原。朋也と一緒に川に行ったことがあるだろ。ああいう石のゴロゴロしてるところがあって、それが賽の河原なんだ」

直幸は、少し遠くの空を見上げた。

「親より先に亡くなった子供が、罰として石を積むんだって。でも、それを鬼が邪魔しに来て、壊しちゃう。それでまた、最初から繰り返すんだ。そうして、鬼に邪魔されながら、子供は一生懸命石を積み上げてお墓を完成させると成仏、天国に行けるんだって」

朋也が少し寂しそうな、悲しそうな顔をしている。きっと、暗い話を子供なりに理解したのだろう。

「だから、朋也。父さんより長生きするんだぞ。そうすれば、鬼も邪魔したりしないから」

「ねぇ、お父さん」
「ん」
「ママの……、お母さんのお墓はどこにあるの？」
直幸は目の前が少しぼやけた気がした。眼鏡がない所為ではないだろう。
「あ、うん。ほら、あそこ見てごらんよ。お母さんはあそこにいるんだから、お墓はないんだよ」
「……」
「ん、どうした？」
「いいよ、もう」
朋也は俯いたまま口を開いた。
「僕、知ってるよ。お母さんは死んだんだって」
直幸は目の前が一瞬暗くなった。込み上げてくるものがあって、直幸は必死でそれを堪えた。
「死んだ人はお墓に入るんだって。だから……。ねぇ、お母さんのお墓はどこ？」
「無いんだ」
朋也の顔が曇った。
「お母さんのお墓は無いんだよ……」
直幸は俯いて言葉を搾り出すのがやっとだった。朋也の顔を見てはとても話せなかった。直幸にはそういうしかなかった。
「さぁ、出ようか。あんまり長いと、逆上せてしまう」
朋也は黙ったまま従った。
着替えを終えると、二人は石のゴロゴロする荒原に出た。
「朋也。お母さんのお墓な、本当に無いんだよ。行くことができないんだ」
直幸は朋也の背中を押しながら歩いた。
「なあ、朋也。お墓がない代わりに、ここにお墓を作ろうか」
直幸は屈みこんで、石を置いた。
「ほら、朋也」

朋也も仕方なさそうに石を積み上げる。
だが、なかなかうまく石は積み上げられないものだ。
朋也はだんだん集中力を増して、熱中し始めた。
直幸は、そんな朋也を見ながら、近いうちに本当のことを話さなければならないだろうことを予感した。だが、本当のことを知って納得のできることなのだろうか。直幸は不安だった。
「おっ、すごいな」
直幸が褒めると、朋也は笑顔になった。
「いいか、朋也。こうやって手を合わせて、お祈りするんだ。いいか。じゃあ、手を合わせて」
直幸はしばらく黙祷し、朋也もそれに倣った。
旅館に帰ると、食事の準備をしてくれた。
座卓に所狭しと料理が並んだ。朋也もさまざまなご馳走に目を輝かせた。不器用な持ち方で箸を操り、美味しそうにおかずを頬張った。
その夜、珍しく直幸もぐっすりと眠ることができた。ここしばらくの間、ずっと酒に頼らなければ眠ることができなくなっていたのだった。久しぶりに熟睡する直幸も、朋也と同じように安らかな寝顔だった。

自賠責保険の支払いを受けると、直幸は清太郎に電話した。清太郎の口座に振り込むためだ。
直幸は、清太郎の好意に甘えてローン返済の足しに、と数百万を貰うことにした。清太郎は、おまえにも貰う権利はある、と言ってくれた。元々、お金のために争ったわけではないが、失業してしまった直幸にとっては大きなお金だった。
清太郎自身も葬式代と弁護士代程度があれば充分だと言っていたが、直幸は自分の必要な分だけしか受け取らなかった。清太郎にこ

そ、受け取る権利があると考えていたからだ。同じ親として、子供に先立たれる苦しみは、ある程度想像できたからでもあった。もし、朋也を失ったならば、直幸も道を失うだろう。憎むべき相手がいたならば、地獄の底まで追って行きたい気持ちにもなるだろう。それを思うと、直幸は心が痛んだ。

「一緒に戦ったよしみ誼だが、おまえを許したわけじゃない。図に乗るなよ」

清太郎はそう言って早々に電話を切った。

直幸は、敦子の墓を参りたいと申し出たのだった。しかし、答えは案の定だった。

審理の折に、敦子のこの地での生活についておおよその状況を清太郎も知ることとなった。特段そのことについて直幸を非難することは無かったが、娘が苦労していることを知ってなんとも思わない清太郎でもあるまい。

しかし、朋也のことを思うと、直幸の気持ちは重かった。

直幸は、預金を下ろして小さな仏壇を買った。それは仮初のものでしかなかった。位牌もない仏壇は仮の宿にもならないもぬけの殻である。

それでも、何か象徴するものが欲しかった。いままで、敦子の匂いがしないように気をつけ、目の届かないところに閉まったり、処分したりしてきた。

だが、朋也が敦子の死を認識した以上、何か依代になるものが必要だろうと思ったのだ。

仏壇を備えると、直幸は朋也と手を合わせた。

朋也はなんとなく釈然としない気持ちがあったが、直幸に従った。何がどう、とはいえないが、朋也は何か違和感のようなものを感じ取っていたのだった。ただ、それが何なのか、朋也自身にはわからなかった。

朋也は、基本的に直幸のいうことをよく聞いていた。直幸はまた、朋也の意思を伺い、それに沿うようにしてきた。甘やかしと言われ

ればそれまでだが、仕事で充分に構ってやれない状況で、少しでも朋也に満足してもらうための心遣いでもあった。

ここのところ、酒を飲んで当たることもあり、朋也は直幸に恐ろしさを感じることもあった。それでも、素面の直幸はとても優しく接してくれるため、嫌いではなかった。

朋也は活発で、学校が終わると外で遊ぶようになった。昨夏、虫取り網を買ってやると、そこら中を回って虫や生き物を探し回った。公園や林、さらには川や池の生き物まで、何でも捕まえるようになった。家にはしっかりした容器もなく、飼ってもすぐに死んでしまった。

友達と公園で遊ぶこともあった。夕方、日が沈むまで駆け回っていた。そうした活発さは誰に似たのだろうか。

なんにせよ、活発に動き回ることで、朋也の世界は広がっていった。直幸は、朋也が自分の世界を持ち始めたことに成長を感じていた。直幸は二階の洋間を朋也の部屋として割り当てることにした。

もともと、家族が増えても暮らしていけるように部屋数も増やしておいたのだが、いよいよ朋也が自分の部屋を持ってもいいだろうと思ったのだ。それまで一緒に寝ていたが、これからは朋也は一人でも寝られるようにならなければならない。そして、自分の部屋を持つことで、勉強も含めて、朋也が自分の時間を持てるようにすることが大切だった。

直幸は部屋の中を整理し始めた。

整理といっても大して物はなかったが、長い間放置していて掃除の必要があった。

朋也が幼い頃は、階段が危ないために一階でずっと過ごしていた。二回にはもう一部屋、敦子の生前、共に使っていた寝室があった。その部屋もずっと使っていない。あの日以来、直幸はほとんど部屋には入らなかった。おかげで、岡崎家は階段の暗がりの先にある二回はずっと空洞のままだった。

直幸は手始めに二階の掃除を始めた。

ずっと使っていなかったために、案外と埃が溜まっていた。ほうき箒で掃き、雑巾掛けをし、道具を整理した。朋也の衣類をしまう入れ物も必要だった。

押入れの整理をしていると、黒い漆塗りの立派な器を見つけた。随分と埃を被っていたが、直幸はその箱に見覚えがあった。

（あれは、いつだったかな……？）

そう、直幸と敦子が引越しの準備をしていた時のことだった。

――女の子には色々秘密があるのよ。

敦子はそう言って、箱の中身を見せなかった。もう、その敦子もいない。直幸はもういいだろう、と箱の蓋を開けた。

中には無数の封筒の束と、未使用の便箋や封筒が入っていた。

直幸は、束になった封筒の宛て先を見た。

『青森県青森市新城――――
清水　清太郎　様
雅子』

直幸は、ドクンと鼓動が大きくなるのを感じた。

（実家への、手紙……）

封筒には切手は貼られていなかった。出すつもりはなかったのだろうか。敦子がどういうつもりであったかなど、もはや知る由もない。

直幸は、あの、仲の良さそうな清水家の風景を思い出した。直幸が始めて訪れた日のことだ。仲の良さそうな母と子の笑い合う姿。そして父親。直幸にとって、親は常に威圧的な存在だった。それゆえ、敦子たち親子の姿には驚きと戸惑いを覚えた記憶がある。その親しみのある関係に直幸は、嫉妬の感情を少なからず沸き起こらせたのだった。

そんな家族のことである。敦子は旅立った後も愛していたに違いない。それは清太郎を見ても明らかだった。

（あの家族は、どんなに離れていても強い絆で結ばれていたんだ……）

直幸は不意に恐ろしくなった。封筒の中身が気になったが、それを開けることも怖かった。

（敦子は、俺のことを恨んでいたのではないか？）

直幸はその疑念をすぐさま振り払ったが、心の奥底にまだしこりが残っていた。

直幸は気を取り直して、掃除を再開した。掃除が片付くと、学習机を購入し、組立て式の本棚も買ってきて組み立てた。

数日後、きれいになって朋也の部屋は完成した。

「今日から、ここが朋也の部屋だ」

それまで適当な棚に閉まっておいた教科書やノートを全て机の引き出しにしまい、おもちゃも本棚に飾ったり、入らないものは段ボール箱に入れて部屋の押入れにしまった。

朋也は、引き出しを開け閉めしたり、机の前の蛍光灯を点灯させたりして新しい部屋の感触を楽しんでいた。

「これで、勉強もしっかりできるだろう」

「うん」

これまで、ずっと一階で勉強していた。朋也が直幸に宿題を聞くこともあったが、酒に酔っている時はうるさい、と立ち会わないこともあった。テレビを点けていれば当然気になってしまうし、とても落ち着いて勉強できる環境ではなかった。

直幸も、そうしたことは理解していたし、反省もしていた。だが、悪酔いすると自分を制御することはできなかった。

朋也の部屋ができることは、直幸にとっても安心できることだった。

「いいか、朋也。これからは蒲団も自分で畳むんだぞ。ここにこういう風にしまっておくんだ」

いつも、二人は一緒に蒲団を整え、眠った。起きた後も蒲団を片付けてちゃぶだい卓袱台の用意をした。押入れも下の段であれば朋

也も一人で充分に片付けることができるだろう。
朋也はまだ、嬉しそうに椅子に座り、机の周りを弄くり回している。
「朋也」
「なーにぃ」
「朋也は将来、何になりたい？」
「えっ、んー、わかんない」
「そうか、そうだな。まだ早いかな。いいか、朋也。朋也はやりたいように、なんでもやりなさい。父さんはおまえの味方だからな。だから、どんなことだって応援する。朋也は、おまえの思うように生きればいい。勉強だって、遊ぶことだって、何だって自分が良いと思うことをするんだぞ」
「うん」
朋也にはまだ難しい話だっただろうか、と直幸は思った。
朋也は相変わらず、机に向かっている。直幸は一瞥すると、部屋を出た。
直幸は、まだあの封筒の束をどうしようかと悩んでいた。だが、結局郵便小包で青森に送ることにした。
直幸には中味が不安だった。何か悪いことでも書かれているのではないかと猜疑心が立ち上ってしまうのだ。不意に清太郎の憤怒の形相が浮かんだ。もし、次に会ったら絞め殺されるのではないか、という恐怖に捉われた。
しかし、置いておくわけにもいかなかった。そのままにしていても気になってしまう。敦子がした認めたものを処分してしまうこともできない。手紙とは、その人の心であり、大切なものなのだ。粗末な扱いをしていい物ではない。敦子が両親に宛てた手紙であるなら、両親にしっかり届けることが最善の処置なのだ。
所在を知った両親が押し掛け、青森へ連れ戻されるのではないか、という懸念が、それゆえに、この手紙を出さなかったのだ。それは、自分たちの生活を守るためだった。

両親のことを思いながら、それを留めておかなければならなかったこと。せめても、と手紙という形にすることで自分を納得させていた。たくさん語りたいことがあったのだろう。それが束ほどの封筒となって形に表れた。現実のその形によって、直幸は敦子の想いの強さを知ることになったのだった。

直幸はその後、パン工場に勤め出した。

高校中退という壁は思いの他高く、正社員での就職は難しかった。一方で、パートタイムであれば、残業の心配はほとんどなく、帰宅が遅くならずには済んだ。

パン工場のメリットは、不良品を格安で手に入れられることだった。直幸は、朝食をパン食にすることで負担を軽減させることができた。朋也も喜んでパンを食べたから、その点で大いに岡崎家の助けになってくれた。

この頃から、直幸が帰宅しても、朋也が玄関に出てくることはなくなっていた。テレビを見る以外は、ほとんど自分の部屋に篭るようになり、会話もあまりしなくなった。会話ができるのは食事か、風呂の時間くらいになり、随分と減っていたのだった。

「朋也。今日は何して遊んだんだ？」

「んー、虫取り」

「ふーん、どんな虫を取ったんだ？」

「うん。最初はトンボを追っかけてたんだ。それで、今度は変わったチョウチョがいたから、追っかけたんだ」

「ふーん、そうだったんだ。それで、どうしたんだ？」

「うん、追い掛けてたら、どっか知らない場所に出ちゃって、よくわからなかった」

「ふーん」

「そこで、変な子にあったんだ」

「変な子？」

「知らない家の庭にまたチョウチョが飛んでて、捕まえようと思って庭に入ったんだ。そしたら、楽器の音が聞こえて、何かなって思

ったんだけど、女の子がいたんだ」
「ふーん、どんな子なんだい？」
「んー、背は僕と同じくらいかな。ひらひらした服着てる子で、なんか楽器持ってた」
「ふーん、どんな楽器だい？」
「んー、よくわかんない。見たことない楽器だった」
「そうか。それで、その女の子とはどうなったんだい？」
「んー、ちょっとお話しただけ。あと、お菓子食べた」
「そうなんだ。どこの子なんだい？」
「んー、知らない子」
「名前はなんていうんだい？」
「ことみちゃん。ひらがな三つでことみだって。」
「ふーん。苗字はなんていうのかな？」
「苗字？」
「うん。苗字？」
「知らない」
朋也は首を傾げた後、そう答えた。
その後、朋也は何度かことみに会っていたようだった。難しい本を読んだり、庭でままごとをしたり、花やその他のことについて話をしたと言っていた。
「ことみちゃんはすごく物知りなんだ」
朋也はそう言って感心していた。
近々、ことみの誕生日があるということで、朋也も友達を誘うのだと言っていた。
「そういえば、朋也。今日はことみちゃんの誕生日だったな。どうだった？」
「……うん」
「ことみちゃん、喜んでたろう」
「うん……」
朋也はあまり話したがらなかった。

朋也は落ち込んでいるのか、話題を振ってもほとんど返ってこなかった。元気付けようとしたが効果がなく、直幸はそのままそっとしておくことにした。

夕食後、しばらく経ってから朋也は出掛けていった。

夜遅いから、と自制を促したが、朋也はちょっと行ってくるだけだから、と飛び出していった。

それからどのくらい経っただろうか、朋也は帰ってくると、そのまま部屋に入って寝てしまったようだった。

その後、直幸がことみについて尋ねたが、朋也はことみと会っていないという。学校の友達と遊んでいたようだった。

子どもは興味の移り変わりも早いから、友達の色々変わることがあるのだろう、と直幸は思ったのだった。

直幸にとって、こうして朋也の話を聞くことは一日の楽しみだった。

我が子が何を見て、何を思うのか。その日々の成長を知ることができるようで、また、朋也が元気に周りと触れ合うことができていることに満足していた。

直幸は、職場で特に親しい人間関係を構築することはできなかった。正社員たちからは見下され、パートタイムの中年女性たちとは話もしにくかった。同年代の男性がバリバリと会社で働き、実績を残している中で、パートタイムに甘んじている直幸は立派な男として見られていなかった。痩せ長の体格がいかにも頼りなさそうで、うだつ？が上がらなそうに見えるのだった。

パートタイムとはいえ、時間はしっかり働かなければならない。給料が安い分、できるだけ時間を費やさなければ、お金は入ってこない。休日などのシフトの交代にも応じた。幸いにも、朋也も自分で好きに時間を潰せるようになっていた。

終業時間になると、直幸は急いで帰るのだった。急いで買い出しを終える。夕方以降のスーパーなどの安売りもチェックした。朋也も成長期で、活発に外で遊ぶから、服には何かとお金が掛かった。

汚れだけならともかく、転んだりして破いてしまうからだ。それでも少しでも出費を抑えようと、特売セールを活用した。

朋也自身に手が掛からなくなったとはいえ、それでもやることはたくさんあったのだ。

学校行事への参加やお弁当の準備もその一つだった。

学校では春と秋に遠足があった。今度の秋は市内の山間の川原だそうだ。紅葉も楽しめるようだ。

朋也は嬉しそうに準備をした。お菓子代を握って、近くの駄菓子屋に買いに出掛けたのだった。

直幸はついてはいかなかった。親の目があってはせっかくの楽しい買い物が台無しだろう。それに、買い物の練習にもなる。休日にはお菓子を買うのに自分で払わせてしっかり練習もしていたから、直幸もあまり心配していなかった。

朋也はたくさん並ぶお菓子に目移りした。

「おまえ、どれにする？」

「僕、これとこれ」

学校の友達と出くわし、お互いのお菓子を見せ合う。

小さな掌にあれもこれも取りながら迷う。レジの前で銭を数える子どももいる。どれも楽しい瞬間なのだ。

翌日、清々しい秋晴れに恵まれた。

朋也はリュックサックを背負い、教師に誘導されながら列をなして歩いた。隣の女の子と手を繋いで歩く。時節、汗を拭って、また先生の指示通りに手を繋ぐ。

何台もの自動車とすれ違い、幾つもの横断歩道を渡り、田畑を越えて、坂道を登る。

やがて一向は目的地に到着した。すぐ近くには高台のある公園だった。朋也たちは川原でお昼ご飯を食べることになった。子どもたちにとって一番楽しい時間かもしれない。

みんな、ビニールシートを敷いてそれぞれ座った。

子どもたちはお腹を空かせて、嬉しそうにリュックからお弁当を

取り出した。みんな、まるで宝箱を開けるような気持ちでお弁当箱の蓋を取った。

朋也も同じように、お弁当箱の蓋を取った。

その中味は、八割方真っ黒な海苔で覆われ、申し訳程度におかずが入っている、いかにも地味なお弁当だった。

周りの子どもたちのお弁当はウインナーや玉子焼き、チキンライスやアスパラなど、鮮やかな彩りと形によって飾られていた。

「あー、朋くんのへんなのー」

朋也のお弁当に気がついた誰かが声を上げると、周囲は一斉に朋也の弁当に目を向けた。

随分と真っ黒な弁当に周囲は口々に変だと言って笑った。

中には、馬鹿にする同級生を窘めようとする女の子もいて、同情的に声を掛けてくる。

朋也は馬鹿にされ、とても惨めな想いをしてついには涙が零れた。

騒ぎに気付いた教師が様子を見て、朋也を自分の席に連れ、おかずを分け与えた。

昼食も終わり、しばらくすると朋也の機嫌も直ったようだった。

いつものように、友達と元気に遊んでいる。

川原で水遊びをしたり、高台に登ってみたり、遊んでいるうちに落ち込んでいた朋也の気分も晴れたのだった。

だが、そうした小さな傷の積み重ねはやがて、朋也にとって大きな苦痛へと変わっていくのだった。

四年生になると、朋也は学校のミニバスクラブに所属するようになった。運動神経のいい朋也はスポーツ全般が好きだったが、ミニバスもやってみて、とても楽しいことに気がついた。背よりも遥かに高いリングに向かってボールを入れることは玉入れのようでもあったが、大きなボールを扱うことはとても難しかった。バスケット

ボールはまだ小さい朋也には重く、リングまで届かすのも一苦労だったが、そのボールがリングに入るとなんともいえない感慨が湧いたのだった。

ミニバスは学校対抗で争われる大会に参加するもので、希望者参加のチームだった。上級生も参加しているからレギュラーには難しかったが、朋也は誰かと一緒になってやるチームスポーツが好きだった。連帯感を感じられるからだ。

朋也は学校が終わった後も、そのまま学校に残って練習をした。四年生はほとんど補欠でコート練習もそれほどできなかったが、校庭のリングを使ってシュートやドリブルの練習をしたものだった。

一〇歳を過ぎると、朋也は簡単な料理を作れるようになった。インスタントラーメンやうどん程度のものではあるが、よく覚えたものだった。買い物もできるようになり、直幸としては朋也の食事の心配が減った。

直幸は再び、夜勤のある仕事に移った。三〇歳を過ぎた直幸にとって、正社員職はほとんど手の届かない存在となっていた。経験のないものを雇うのであれば、若くて学歴のいいものを選べば、何も三〇過ぎに頼る必要はない。年齢と学歴から、直幸はどうしようもない現実を突きつけられるのだった。

そうした中でも、夜勤業務は手当がよく、手取りが多かった。ローン返済は片付けたものの、まだこれから朋也の進学費用が必要になる。義務教育の間は何とかなっていても、高校の学費は揃えなければならない。高校中退の苦労を知る直幸からすれば、朋也をなんとしても高校卒業まではさせてやりたいというのが親心だった。その先も、朋也の才能が開花させられるなら経済的負担など惜しむ理由はどこにもない。直幸はできる限りのことをしてやりたかった。

直幸が夜勤になることは、朋也との時間が減ることを意味していた。また、仕事に費やすことで朋也をしっかり育てられない危険性もあった。しかし、朋也は充分しっかりしていると思われた。

直幸は、朋也の更なる未来のため、今は働くことを優先した。

この頃働き始めたのはプラスチック製品工場だった。地元の小さな企業で、主に食器類を取り扱っていた。この会社は一般消費者向けというより、地元の施設などに商品を供給していた会社だった。

食器はお皿やお椀、コップなどさまざまで、お子様ランチなどに使われるプレート食器も製造していた。基本的には一般に流通しているものではなかったが、直幸も購入することができた。

地元の小さな企業で大規模な流通を支える体制がなく、その点で大きなメーカーに劣った。そのかわりに施設や飲食店などのある程度まとまった受注を受けることで会社を営んでいた。

この会社には直幸と同じ年頃の木下という社員がいたが、奇遇にも家が近所だった。そうしたこともあって、同じ時間に帰ることができると木下は一緒になって帰宅した。たまに、直幸の家に上がって軽く酒を飲むこともあった。

「へぇ、一人で子供を。それは大変ですねぇ」

直幸のちょっとしたことから会話が進んでいった。

木下にも子供がいたが、まだ生まれたばかりで間もないと話ていた。

「朋也、ただいま」

「お帰りなさい、お父さん」

「やあ、朋也くん。また、お邪魔するよ」

直幸と木下は卓袱台を囲んで少しばかり談笑した。杯を交わすと何だかお互いに親しみを感じるものだった。

「そういえば、朋也くん。朋也くんはミニバスが好きなんだったかな?」

「うん、やってるよ」

「そうかぁ。じゃあ、バスケットには興味があるのかな?」

朋也はよくわからないという風に首を少し傾げた。

「バスケットっていうのは、ミニバスをちょっと難しくした感じかな? ミニバスっていうのは、ミニのバスケット。簡単なバスケットって意味かな。だから、バスケットの子ども版がミニバスなんだ」

「ふぅん」
木下は見た目は温厚で人当たりのいい性格だったが、意外にスポーツマンで体を動かすのが好きだという。子どもが大きくなったら一緒にスポーツをするのが夢なのだそうだが、残念ながら第一子は女の子だったという。
「女の子でも教えればなんかできるだろ」
木下はそんな風に言っていたが、元気な男の子の朋也を見ていると男の子が恋しいようである。木下はまた、マイホームを持つことにも憧れていたから、つい身近なマイホームの姿に居心地の良さを感じていたのかもしれない。
週間後、再び木下が訪れた時には朋也にプレゼントを持ってきてくれた。
「ほうら、朋也くん。アメリカのプロバスケットの選手だよ」
木下は大きなポスターを広げた。
「朋也。ありがとうは」
「ありがとう。木下のおじさん」
朋也は、紙上の、濃褐色の肌の汗に輝く外国人の姿を不思議そうに見ていた。
それがどれだけすごいのか、小学生の朋也に理解できないのも無理はなかった。日本ではバスケットボールはまだまだマイナーなスポーツで、本場アメリカでさえもその人気はそれほどではなかった。
ＮＢＡが沸騰するのは一九八〇年代に入ってからであり、日本でも騒がれるようになるまでにはマイケル・ジョーダンの登場を待たなければならなかった。
「この選手は、オスカー・ロバートソンというんだ」
「おすかぁ……」
「オスカー・ロバートソン。少し前の選手なんだけど、アメリカの中でも最高の選手の一人なんだよ」
「ふーん」
子どもは「最高」という言葉に弱い。その上、外国といえばまず

アメリカ、というくらいアメリカの知名度は高く、小学生でもアメリカという名前は知っている。なにやら凄そうだ、ということだけは確実に伝わったようだった。

「この選手はとってもうまくてね、点も取れるし、パスもうまい。その上背も高くてジャンプ力もあったんだ」

「ふぅん」

「朋也くん。ロバートソンの身長、どのくらいあると思う」

朋也は首を傾げた。想像もつかないようだ。

「えーと、ほら、ここ。このくらいの高さはあるかな」

木下は部屋を見回して、鴨居に付けられた押入れの取っ手を指差した。

「そんなにっ！」

「そうだよ。外国人は背が高いからねぇ」

朋也は目を真ん丸くして木下の話に耳を傾け、ポスターに熱い眼差しを送った。

「すいませんね、気を使ってもらって」

「いえ、いいんですよ」

「でも、こういうの手に入れるの大変なんでしょ」

「ああ、いえ。大学の知り合いに雑誌記者がいましてね、ちょっといいのないかって頼んだんですよ。そしたら色々手を回してくれたみたいで」

木下は東京の大学に通っていたが、地元の群馬に帰ってきたのだった。多くの若者が東京に憧れる中、木下は珍しく群馬の良さを実感したという。木下であれば他に良い就職口もあっただろうに、木下は地元で働くことに強い意欲を持っていたのだった。

木下は実に営業向きな性格と言ってよかった。

木下のこうした小さな心遣いの積み重ねが情を生んで、木下への信頼となるのだった。気の置けない木下であり、誰にでも積極的に話をする木下であったからこそ、直幸も一緒に酒を飲むことができたのだった。

大学時代からの縁がそのまま続くのも、木下がいかに慕われる性格であったかを物語っている。木下のこうした才能を使えば出世も思いのままだったかもしれないが、逆に人の縁を出世の道具にしないところが木下のよいところでもあった。

朋也もまた、木下の遠慮のいらない気さくさに惹かれ、プレゼントによってさらに好印象を強めるのだった。

その木下は、数年後転居することになった。第二次オイルショックの煽りを受け、さらに大規模な生産力、流通力を誇るプラスチックメーカーに押し退けられる形で倒産したのだった。木下は新たな就職先に通いやすい場所にアパートを移ったのだった。

当然、直幸も新たな仕事に移らなければならず、そのまま縁は切れたのだった。

直幸は、木下が帰った後、朋也の部屋にポスターを貼り付けてやった。朋也は両手を挙げて喜んだのだった。

三〇歳を過ぎると、変則的な勤務シフトは体に堪えた。朝帰宅し、昼間寝て、夕方出掛ける。夕方には朋也の夕食を用意しておき、自分もそれを食べて出掛けた。

夜勤の時はまず朋也と会うことはなかった。一緒に暮らしながら、全く顔を合わせない日もある。昼間蒲団の中に入ってもなかなか寝付けるものではなかった。浅い眠りを繰り返し、夜勤明けには昼食を抜くようになった。少しでも寝易いようにと、酒を飲んで寝に入った。

生活のリズムが崩れてくると、体はだるさが抜けず、いつでも眠気があるような感じだった。そうなると、偶の休日にも朋也とゆっくり接することができなかった。声を掛けられても相手をする気力がなくなっていた。朋也もまた、直幸に声を掛けなくなってきていた。

敦子と結婚して以降、煙草は止めていた。しかし、裁判以降、直幸は気持ちを落ち着かせるために煙草を吸うようになっていた。それでも、朋也の前では煙草を吸わないようにしていて、いない時を

見計らって吸うようにしていた。

この頃になると、直幸の情緒は不安定になってきていた。酒や煙草に頼って誤魔化し、何とか仕事を続けていた。

そんなある日、直幸はいつもと同じように夜勤明けに酒を飲んで眠りに入った。この頃から、しっかり蒲団を敷かずに寝てしまうことも多くなった。

直幸は昼頃に目が覚めた。流しで水を飲むと、もう一眠りしようと今に戻った。そこでよく見ると、卓袱台に用紙が置いてあるようだった。

「なんだぁ？」

直幸は座卓の前によいしょっと重そうに腰を下ろした。

「なになに」

直幸は目を凝らしてプリントを見詰めた。

用紙には「授業参観日のお知らせ」と書いてある。日程を確認すると、今日の午後とある。直幸は頭を掻いた。

光坂市立前倉小学校は一九六〇年代後半に建て替えられた鉄筋コンクリート製の立派な校舎だった。

直幸は朋也の入学以来、何度も学校に訪れていた。建物の構造も、おおよそは把握していた。直幸は昇降口でスリッパに履きかえると、靴を持って朋也の教室へと向かった。

教室ではすでに授業が始まっていた。

きれいに着飾ったご婦人方が教室の後ろ側にひしめ犇いている。教師もいつもと違う雰囲気に緊張気味に授業進行している。いつもはジャージということもあるが、今日はしっかりと背広にネクタイ姿である。

子どもたちもまた、黒板に意識を向けていた。小学五年生ともなると、親を気にして振り返るものはほとんどいない。気恥ずかしさもあるのだろう。授業が始まる前はざわついていたが、今はピシッと静まり返り、いつもより教師の声の通りが良い。

父兄たちも静かに授業に聞き入る子どもたちに気を引き締められ

る想いだ。
　授業参観日は子供の様子を見にくる数少ないチャンスであるが、同時に大人たちの社交の場でもある。どんな親の子どもか、ということも親は気にしてくる。身嗜みも整え、まるで結婚式にでも出席するように化粧を整えてくる。そこは、親の面子が掛かった戦場でもあるのだ。
　その姿を見比べて勝った、負けた、と内心争うのである。そうして親の体面は子どもたちにとって時として苦笑の対象である。はたまた、馬子にも衣装ならぬ、親にも衣装で子どもの株を上げる場合もある。
　中には、まったく気にすることなく、普段着に少し色を付けただけのような者も現れる。そうした者たちは、身嗜みに命を賭ける者たちの失笑の的だが、一方で、彼らにとっては、マネキンのようなり形の貴婦人方こそ失笑の対象だった。
　直幸もまた、背広を羽織るだけで特に衣装に気を使わない性分だった。高級ブランドのスーツなど、手の届くものではない。庶民派は庶民派で良いのだ。そもそも、授業参観とはそういう主旨のものではないのだから。
「じゃあ、次読んでくれる人」
　ハイ、ハイ、ハイっと複数の手が上がる。いつもこうであれば楽なんだが、と担任教師は思う。
　そのうちの一人が指されて、教科書を読み始めた。
　その時だった。教室の扉が開く音がして全員が後ろの扉の方を見た。
「いやぁ、遅れてすいません」
　直幸が声を掛けると、辺りに酒気が漂い、近くの者は眉を顰めてハンカチで押さえた。
「やだ、お酒臭い」
「何なのかしら、あの人」
「ねぇ、誰なの？」

「やーねぇ。不潔だわ」
父兄は小声を撒き散らし、教室内はざわついた。
朋也はその姿を一瞬見ると、すぐに正面を向き直った。
「いやいや、すいません」
直幸は頭を下げて教室に入った。
直幸が進むと、父兄たちはそれを避けるようにして必死に距離をとった。
バタンッ
直幸は躓いて転んでしまった。
「ちょっと！お父さん、大丈夫ですか」
教師は直幸の方へ駆け寄り、腕を取った。
「いやいや。ご迷惑おかけして申し訳ない」
教師は内心やれやれ、と思った。
「みんなぁ、ちょっと自習しててくれ」
教師は直幸を連れて教室を出た。
教室内は緊張が切れたように子どもたちから笑いが起こった。親たちはコソコソと耳打ちし合っている。子どもたちもまた、先ほどのちんにゅうしゃ闖入者が一体誰なのか、噂し合った。
「朋也ー、知ってる？」
朋也は無言のまま、首を激しく横に振った。
「あれ、朋也の父ちゃんじゃね？」
別の誰かが言った。
「違うよ。お父さんは今日仕事だって言ってたもん！」
朋也は嘘をついた。ただただ早く時間が過ぎるのを願うばかりだった。
直幸は教師に連れられて昇降口まで戻され、そのまま授業が終わるのを待った。直幸はうとうととして軽く眠ってしまったが、下駄箱が騒がしくなると目を覚ました。
「あ、朋也」
朋也はその声に気付くと、さっさと靴を履いて走り去っていった。

直幸は謝る間もなく、突っ立ったまま出口を見詰めていた。
この日、直幸と朋也の関係に明らかな亀裂が生じたのだった。
直幸は朋也に禁酒を誓ったが、それも長くは続かなかった。
朋也の心は直幸から離れていった。直幸が家にいる時は、朋也は自分の部屋に篭るか、外出した。
直幸は酒を少しでも減らそうと、睡眠薬に手を出すようになった。しばらくの間は効き目もあり、睡眠を取ることができた。
岡崎家には会話がなくなり、直幸は孤独を埋めることができなかった。それを紛らわすために煙草や酒に頼ってしまうのは相変わらずだった。癒しの場所であったはずのマイホームは、それが嘘のように荒廃し始めていた。
朋也はさらに外に居場所を求めるようになった。クラブに熱中し、夜まで汗を流した。同級生に本を借りて、それを読んだ。友達の家に遅くまで留まり時間を潰すこともあった。朋也は直幸の荒んだ姿を見たくなかった。何かに熱中することで、それを忘れられたのだった。
「父さん。小遣いちょうだい」
朋也は直幸を起こした。直幸は珍しく声を掛けられて少し驚いた。
「えっ、ああ。でも、この前やっただろ」
「もう、とっくに使っちゃったよ。それから、ご飯いらないから」
「えっ、どうするんだ?」
「買って食べるよ」
「でも、それじゃあ……」
「父さん、作るの大変だろ。自分で買って食べるから、いいよ」
「あ、でもな、朋也」
「いいから、早くちょうだいよ」
「あ、ああ。あんまり、無駄遣いするんじゃないぞ」
直幸は財布を取り出して千円札を手渡した。
「わかってるよ」
朋也はお金を受け取ると、外へ出て行った。

この頃から朋也の気性も荒くなり始めていた。特に大きな問題を起こすことはなかったが、以前のような穏やかさはなくなっていた。

やがて訪れた小学校の卒業式。直幸は床屋に行って身嗜みを整えて準備を整えた。式の間何度も眠気に襲われ意識を失ったが、朋也の卒業証書授与は目にすることができた。

式は粛々と進み、長い年月朋也を育み続けた学校とも別れを告げる時がやってきたのだった。

式が終わると、直幸は朋也の元へと進み出たが、朋也は一緒にいることを拒み離れた。

それでも卒業式の記念写真は一緒に写ってくれた。入学した時と同じように、校門の前で立て看板を背にして撮った。あの時はまだ足元だった朋也が今は肩下ほどにまで成長した。子どもの成長は早いものだと直幸は感慨深かった。

あの時、正面を向いてにこやかに微笑んでいた朋也は、結局カメラを見ようとはしなかったのだった。

中学校入学を控えた春休みは忙しかった。学生服を買い、ワイシャツも揃えた。すぐに大きくなるだろうと少し大きめのサイズにしておいた。

サイズ合わせのために試着すると、大きな学生服がすこしぎこちなかった。店員に催促され、姿見を見た。鏡に映る自分の姿を見て、朋也は少し照れているようだった。

その後、直幸は電気屋に立ち寄った。卒業記念にラジカセを買ってやるためだった。

「どれでも好きなの選んでいいぞ」

やはり子どもなのだろう。いつもはふてくされたように直幸を嫌がる朋也も、銀色に輝くカセットレコーダーを見ると興奮して目を丸くした。

朋也は色々迷っていたが、そのうちの一台に目を留めていた。最新式のものは値段が高く、朋也も気が引けたが、直幸は記念だから、とそれを選んだのだった。朋也が一番目にしていたものを、直幸は

しっかりと見逃さなかった。朋也が遠慮して少し安いものを頼もうとした時、直幸が店員を呼び止めたのだった。

「父さん、ありがとな」

朋也は照れくさく、直幸とは目を合わさなかったが、直幸にとっては充分すぎる言葉だった。

直幸は朋也が小学校を卒業するまでに仕事を二度変えていた。どちらも夜間勤務の仕事で、パートタイムだった。直幸はこの頃から、仕事でも集中力が続かないことが多くなっていた。二日酔いで頭痛が酷いこともあったが、なによりしっかりと眠れないことが原因だった。直幸は完全に生活リズムを崩していて、体は異常を来たしていた。

直幸は、昼間と夜間の入れ替わる変則勤務から、夜間のみのものを選ぶようにしていた。体はかなり無理をしていたが、それでも給料の良いものを考えると、夜の仕事は割が良いのだった。

朝、帰宅する頃には太陽はすでに力強い日差しを向けていた。住宅街の路地では主婦たちがなにやら朝の談義に花を咲かせているようだった。

「あら、ちょっと。ちょっと、岡崎さん」

「ああ、これは、おはようございます」

「おはようございます、じゃありませんよ。この前も行ったと思いますけど、ゴミはしっかり日を守って出して下さい。何度も言ってるじゃないですか」

「あ、いや、しかし……。その、仕事が……」

「しっかり守ってもらわないと困ります。カラスや野良猫に漁られて、汚くなるんですからね」

直幸は困り果てたような顔をした。

「いいですね。それから、回覧板はしっかり回すようにして下さい。大事な連絡が回らないとご近所が迷惑するんです」

主婦はえんお厭悪の表情を見せて、そのくらいのことはして欲しいもんだわ、と囁いた。

その主婦の後ろの方で他の二人が耳打ちし合っている。
「はぁ、すいません」
直幸は思い体を引き摺るようにその場を離れた。
「まぁ、あれ、何かしらね？」
「ほんと、汚らしい格好して」
「ねぇ、誰なの？」
「岡崎さんよ。ほら、酒屋さんの角を曲がったとこの」
「ああ、あの」
「なんか、いっつも昼間家にいるらしいじゃない」
「そうなの？　何やってんのかしらねぇ」
「ほんと、だらしない人みたいよ」
「そういえば、岡崎さんって、息子さんがいるんじゃなかったかしら。」
「あら、そうなの？　息子さんも大変ねぇ、お父さんがあれじゃ」
「ねー」
「そういえば、聞いたぁ？　近藤さんのところ、ご主人が転勤するらしいって。何でも、どっかの支店を任されるんですって」
「あら、栄転じゃないっ」
「いいわねぇ、うちなんか……」
電柱に停まる雀たちが朝の合唱を披露している。
直幸は家に着くと、ポストの中を覗き込んだ。鍵を開け、玄関に上がると靴を放ったまま、奥へと進んでいく。
家の中はすっかり静まり返っている。立地の悪かった直幸の家は、台所の僅かな光だけで薄暗かった。部屋の中は雑然としていて、物寂しかった。
直幸は蛇口を捻り、顔を洗った。水を一杯飲むと、やっと畳みの上に体を休めることができた。
家の中は物音一つせず、外からは昼間の喧騒が聞こえてくる。疲れていても、意識は残ってなかなか寝付けない。ほとんど通らない車の音さえも気になってしまう。竿竹屋が辺りを回ると直幸は座蒲

団を頭に巻きつけた。
何もない時間、何もない場所。家の中は静かであるはずなのに、静かに落ち着いて眠ることができない。何かを考えてしまうと、さらに眠れなくなるから考えたくはなかった。
とにかく、ただぼうっとしているしかない。そんな中で、食欲も湧かなかった。何を食べても美味しいと思えなかった。それでも体力のために食べ、日が沈む前には再び仕事に出掛けた。ゴミはその時に出す他ない。
朋也が食事を自分で工面するようになると食事の支度が減り、負担は軽減した。しかし、それは不経済だった。朋也の小遣いは家計を逼迫させていった。それでも、食うなというわけにはいかない。服や文房具などを買うお金も与えなければならなかった。何かと支出が多いのだった。
食事の支度をしなければならない、という気持ちがなくなると、直幸自身が食事をしっかり摂らなくなった。適当に簡単なもので済ませ、インスタント食品やレトルト食品に頼るようになった。米飯もしっかり食べることが無くなり、酒の肴程度で済ませてしまうこともあった。寝溜め食い溜めの生活はさらに体調の悪化を招いて悪循環に陥っていったのだった。
朋也は中学校に入学すると、バスケットボール部に入部して熱心に取り組むようになった。運動神経のよかった朋也は友達も増え、女子生徒からの人気も上々だった。
この頃から、朋也は直幸に対して特に粗暴になってきていた。大人に対して少し突っ張っている方がかっこいい。そうした風潮も手伝って朋也は直幸に対して辛く当たった。同時に、だらしない姿の直幸に失望と怒りを感じていた。朋也は、直幸に親としての尊厳を感じることはできなくなっていた。
――只のだらしない中年男――
それが今の朋也にとっての直幸だった。
朋也は、直幸を生理的に受け付けることができなかった。出会え

ば、全身から苛立ちが沸き起こり、平静を保っていられない。口から出るのは罵倒の言葉。体が示すのは、粗暴な拒否反応だった。

直幸は朋也に対して強く何かを言うことはなかった。朋也の自主性に任せる。そういえば聞こえはいいが、放任主義に過ぎない。無制限の放任は朋也を制御不能にさせたのだ。

朋也は、好きなことを好きなようにやるようになっていた。直幸もまた、朋也の欲求を満たそうと、要求を適えるようにした。

朋也が「熱い」と言えば、エアコンを備え、朋也が「ベッドがいい」と言えば、ベッドを買った。そうして少しでも朋也の気の済むようにさせたのだった。

朋也はバスケットには異常なほど熱心に取り組み、帰宅すればぐったりとしてすぐに眠った。その分、勉強は覚束なかった。酷い、と悲嘆するほど酷くはなかったものの、決して良くはなかった。友人の家に泊り込んだり、家を敬遠するようにもなっていた。

ただ、バスケットに熱中していた分、不必要に遊び歩くようなことはなかった。

それでも、朋也のお小遣いを捻出するのはなかなか苦労の入る話だった。小遣いを与えないと怒声を上げ、直幸を罵った。

バスケットは長身が多いスポーツだった。朋也はその中では決して高い方ではなかった。小学校時代、朋也より小さかった者が朋也の身長を超えていくと、自分だけ取り残されたようで不満を持った。

「おまえがちゃんと食わせてれば、こんな小さいままじゃなかっただろ！」

機嫌が悪い時は些細なことまでも八つ当たりの対象となった。

朋也が小さかったわけでもない。朋也の身長は標準程度で、まだ性徴期の話である。ただ、周りが大きかったに過ぎない。

直幸に会うと、朋也はそんなことでも直幸を罵倒した。朋也は完全に冷静さを失ってしまうのだった。

そうした朋也の在り様は、直幸にとって刀で身を刺されるようなものだった。あの、裁判での横山の汚い罵りの言葉を思い出す。あ

の、醜く皺を作って睨みつけてきた眼を思い出す。あの、欲望渦巻く法廷の空気が、穏やかだったはずの棲家に及んできたのである。直幸の心は砕けそうになるのだった。

直幸は、心を守るために感情と表情を失っていった。直幸からは生気が薄れ、機械的に働くことしかできなくなっていた。

朋也が暴力事件を起こしたのは、そんな頃だった。

最初はちょっとしたからかい合いから始まった。女子に人気のあった朋也にやっかみを感じたのか、朋也を揶揄する言葉を浴びせたのだった。

だが、朋也が暴発したのはそれらの言葉ではなかった。

「聞いたぜ。おまえの親父、イカれてるんだって？　おまえと同じ小学校の奴らが言ってたんだよ。酒に酔っ払って学校に来たらしいじゃねぇーか。いい親父だな、おいっ」

父親を異常者呼ばわりされたことに腹が立ったのか、その父親の子どもだと言われたことに腹が立ったのか、朋也自身にもわからなかったが、とにかく一瞬にして頭に血が上った。気付いた時にはもう手が出ていたのだった。

幸い、朋也も相手も敬称で済み、大事には至らなかった。今回は初めてということもあって注意を受けただけで処分は済んだ。

「朋也。この前中学校の先生から連絡があったんだが……」

直幸は教師からの連絡を受けて、事態を知ることになった。普段は夜間働いているために朋也と顔を合わせる機会もなく、数日が過ぎてしまった。仕事を遅れるわけにもいかず、結局話をするのが大分遅れてしまった。

「なんだよ」

「同級生と、喧嘩したんだって？」

「ああ」

「一体、何があったんだい？」

「いいだろ、別に。ただ、むかついただけだよ」

「そうかぁ……。でも、殴るのはよくないな」

朋也は直幸を睨みつけた。
「相手の子も怪我が軽かったから良かったけど、やっぱり暴力は……」
「何言ってんだよっ！」
「えっ？　だから……」
「何、親父面してんだっつってんだよ！」
「だって、父さんは……」
「ふざけんなよ！　こんな時だけ親父面かよ。そういうのはもっと親らしいことしてから言えよ。酒飲んでダラダラしてる奴が何言ってんだよ！！　アンタに説教する資格あんのかよっ！」
朋也は家を飛び出していった。
朋也は思春期の情緒が不安定な時期にあった。それゆえに過剰に感情を爆発させたが、朋也の根源にあるのは直幸への失望と、その奥底に眠る直幸への欲求があった。変貌していく父親の姿は痛々しかった。
朋也の身体には、間違いなく幼い日の直幸との触れ合いの記憶が刻まれていた。だが、それが適えられなくなると、朋也はいつの間にか直幸を否定するようになっていた。それは寂しさの反動であり、愛情の裏返しだった。求めても得られないものを憎むことでしか、朋也は心の奥底にある強い願望を表すことができなかったのだ。
だが、そうした感情はいつしか本当に忘れ去られてしまった。そこに残ったのは表層に浮かぶ失望や嫌悪、そして激憤だった。
そして、何かに熱中することでしか、枯渇感を埋めることができなかった。
朋也は純粋にバスケットが好きだったが、そこに過剰にのめり込んだのは心の渇きの所為だったかもしれない。
朋也の身長は劇的に伸びることはなかった。しかし、身体能力は高く、技術は最も優れていた。
上級生が引退すると、朋也はキャプテンを務めるようになった。チームのリーダーとなると責任感も生まれ、不安定だった精神面も

安定してきた。下級生を指揮し、チームを引っ張ることで朋也は成長していった。

試合でもそれまで強引なプレイや劣勢での集中力の無さが目立っていたが、粘り強く冷静に指揮を執ることができた。

身長が低めで素早い朋也はコート上の司令塔としてポイントガードを任され、試合毎に更なる飛躍を遂げていった。

一方で、勉強は相変わらずだった。チームを率いてゲームを支配するのが楽しくて、学校に通うのも楽しかった。ほとんどバスケをしに学校に通っているようなものだったが、朋也にとって充実した時間になっていた。

前倉中学校男子バスケ部は夏の県大会でベスト4まで進出した。そのエースプレイヤーとなった朋也は、その秋に光坂高等学校のスポーツ推薦枠に合格したのだった。バスケという武器を得て、朋也の進路は大きく開けていたのだった。

その知らせには、直幸も大いに喜んだ。成績の方は今一ということで、進学の方も心配されていただけに安堵の表情を浮かべた。

高崎や前橋などの都市部には学校も多かったが、通学するとなると時間も費用も負担になった。同じ市内ということで、通学の心配は少なかった。

こうして、大きな飛躍を遂げた朋也に対して、直幸の環境は悪化の一途だった。

「三〇代半ばで高校中退、職も転々で、車もできない。あんた、何ができるの？」

採用面接に行っても、ほとんど門前払いのように不採用となっていた。

特に資格や技能を持たない直幸にとって、職を探すことは極めて困難な状況になってきていた。

せめて、普通自動車免許でもあれば仕事の幅も広がっただろうが、直幸には及びもつかないことだった。自動車に対する恐怖症も以前よりは軽減していたが、とても自分から運転しようなどとは考えた

くないことだった。

仮に考えたとして、おそらく今の直幸では免許を取得することも難しいのではないだろうか。体調面、経済面ともにとてもそんな余裕はなかった。

直幸にとって、朋也が中学校に通った三年間は短くもあり、長くもあった三年間だった。

その三年間は、朋也と今まで暮らした中で、最も朋也と接する時間の少なかった三年間であり、最も空白の時間の多かった三年間だった。

一つ屋根の下に暮らす直幸と朋也の住む世界は、まったく別のものとなっていたのだった。

第七章

私立光坂高等学校は市の北側の高台にあった。屋上からの眺めはよく、辺りを一望できた。校門は坂の上にあり、市街から続く坂道は桜並木が出迎えてくれる。四月になると桜が開花して人々の目を楽しませたのだった。桜並木は高台の南側からみると、淡い桃色の帯がすうっと走り、美しかった。

まだ、桜の蕾が膨らみ始めたばかりの頃、朋也は一般生徒よりも一足早く高校の門を潜っていた。

体育館からはボールが跳ねる音が聞こえてくる。きれいにフローリングされた木目の上とキュッキュと音を鳴らし、大勢の者たちが走り回っていた。男子バスケ部の部活動だった。直幸はスポーツ特待生としてこの春、この光坂高校に入学し、バスケ部に所属することになる。入学していないこの期間、名目上は自由参加だったが、半ば強制的に参加させられた。こういうところから選手のやる気が計られるのである。

朋也の自宅におおがみ大上というバスケ部顧問から入学前の挨拶として電話が掛かってきた。低音の濁声は厳しそうな体育会系の印象を強めたが、実際指導は厳しかった。

大上の根性主義的な指導は、技術力のある朋也には些か鼻についた。高校生ともなると、部員の身長はさらに高くなり、朋也が見上げるような選手もいた。その中で凌ぎを削るのはなかなかに大変なことである。

スポーツ特待生には学費の大幅な免除から奨学金、寮の利用まで優遇されていた。しかし、朋也は市内在住ということもあり、他県や遠方地域の生徒に優先的に割り振られ、入寮はできなかった。もちろん、寮は有料で、それなりの費用が掛かる。朋也は家から抜け出したくて寮を望んでいたが、その希望は敢え無く潰えたのだった。

新しい学校環境は全て朋也の思い通りとはならなかったが、それ

でもバスケに打ち込める環境は嬉しく、休みであろうと構わず参加したのだった。

光坂高校は市内では進学校として有名だった。しかし、元々この辺りの一等高校として勉強もスポーツも盛んに行われ、部活動にも力を入れられていた。さまざまな分野に力を入れ、優秀な人材を育てようという校風はその施設にも現れた。五〇年代に鉄筋コンクリートの新しい校舎となって現在の位置に移転すると、七〇年代に入って新校舎を増設して生徒の増員に備えた。体育館や柔道場などもその時期に新設され、まだ新しかった。全体的に新しく清潔感の漂う校内は朋也が新たな生活を始める上で充分な環境だった。

入学当初、バスケ部の練習は厳しく、先輩たちからのいびりやしごきもあった。それは悪習でもあったが、根性のない後輩部員を篩いに掛ける意味もあった。基礎練習が大部分で、進入部員はほとんどボールを触ることもできず、触れてもシュート練習はまずさせてもらえなかった。その上、コートやボール掃除もしなければならず、嫌はこともたくさんあった。

なかなかボールを触れない下級生たちは、部活時間が終わった後や朝練習の後の僅かな時間を使って個人練習に勤しんだのだった。

朋也はその中でも特別だった。基礎体力についてはまだまだ中学生レベルではあったが、即戦力として見込まれる特待生である。比較的ボールを触る機会も多く、試合形式やコンビネーション練習でも参加する機会があった。

そうしたエリート扱いの朋也は登録メンバー当落線上の上級生たちや、ボール拾いをする同級生たちにとってやっかみの対象でもあり、練習中も露骨な嫌がらせなどが横行していた。

特に強く対抗心を燃やしていたのが二年生の板垣だった。板垣もまた、朋也より少し高い程度の身長で全体からすれば低い方だった。ポジションも重なり、ガードとして第二位の地位を争っていたのだった。

板垣は練習内外で露骨に嫌がらせや嫌味をぶつけてきた相手だっ

た。

それでも負けん気の強い朋也は対抗心を燃やして練習に励んだ。

（俺にはバスケしかない。）

そう思っていた朋也にとって、簡単に根を上げることなどできなかった。

朋也は練習熱心で、よく靴を傷めた。

バスケットシューズは高価な物で、普通の靴に比べると三倍から五倍はしていた。その上、マイナースポーツであったバスケットは専用シューズを手に入れるのも楽ではなかった。扱う店舗が少なかったからだ。

そうして買った高価な靴も、激しい練習の中ですぐに傷んでしまうのだ。靴代だけでも捻出するのが大変だった。

「またかい。大事に使ってくれないと、あんまりお金もないんだけどね。」

「だったら、酒や煙草を止めればいいだろ。大体、もっとまともに働きもしないで、子供のやることにケチつけんなよっ！」

バスケに熱中するあまり、朋也には周りの状況がつかめなかった。朋也はそれほどバスケに入れ込んでいたし、藁にも縋るようにやっと掴んだ自分の道でもあった。

直幸は朋也を抑えることができなかった。朋也の指摘は尤もに思えたからだった。

直幸はこの頃、職を転々としていた。

仕事も夜間ばかりではなく、一ヶ月ほど様子を見た後にクビになることもあった。日雇いアルバイトもいくつも手を出した。

それでもなかなか定職に就けない直幸は、家にいることも多くなった。それは朋也にとって不快この上ない状況だった。今までずっと、夜はほとんど不在で、テレビも自由に見ることができた。

だが、直幸がいる時は、最近できたコンビニエンスストアや、バスケ仲間の家に通って時間を潰した。それほど人懐っこい性格ではなかったが、バスケの実力は確かで一目置かれていたため、付き合

いに気を使うことも無かった。
だが、それでも毎日というわけにもいかない。そういう時は部屋に篭った。朋也は外で食事を済ませ、できるだけ自分の部屋と屋外を往復するだけの生活を送るようにしていた。
朋也はそんな調子だったが、直幸は一緒に過ごせる時間を楽しもうとしていた。
「朋也、朋也。ご飯作ったから、一緒に食べよう。」
直幸は何度も階段の下から声を掛けた。食事以外でも、テレビで面白い番組をやっているとか、そういう話題を振った。
その度に、
「もう食ったから。」
「勉強があるから。」
と言って直幸の誘いを断った。
それでも、少しでもいいから、と直幸がしつこく声を掛けると、朋也はラジカセのボリュームを上げて声を遠ざけたのだった。
そんなことが数日続くと、直幸は苦情を受けることになった。在宅が多かったことも災いして、逃げるに逃げられない。くどくどと厭味を言われたものだった。
弱々しそうな直幸には特に言いやすかったのだろう。居丈高になり、不必要な暴言も吐き捨てていった。
そうしたことが何度か続いたある日のことだった。
直幸は朋也が帰宅すると、注意を喚起しようとした。
「あの、朋也。」
「わりぃ、後にしてくれ。」
朋也はコップに水をつ注ぐと、一気に飲み干した。
「いや、朋也……。」
「何だよ、うるせぇな。疲れてるんだから後にしてくれっ。」
「なあ、聞いてくれ。」
「うっせえな。放せよっ。」
立ち去ろうとする朋也の腕を直幸が掴んだ瞬間、朋也はそれを振

り払った。
「朋也、聞いてくれ。」
「うっせえっつってんだろっ！！」
朋也は思いっきりグラスを投げつけた。
高い衝撃音と共に破片が飛び散った。グラスは今に置いてあった仏壇にぶつかったのだった。
一瞬、場は静まり返り、朋也はその静寂の間に立ち去ろうとした。
「朋也。」
珍しく、直幸の語気には力が入った。
「朋也、待ちなさい。」
朋也は聞く耳持たず、すたすたと階段を上がり部屋に戻った。ラジカセのボリュームを上げ、ベッドの上に座り込んだ。
「朋也。」
「何、入ってきてんだよっ！！」
「いいから聞くんだ、朋也。」
「うるせぇ、出てけよっ！」
朋也は直幸を押し出して戸を締め、さらにボリュームを上げた。不快な直幸の声を一言でも聞きたくなかったのだ。
「朋也ぁぁぁー。」
直幸は激昂して部屋に突入し、ラジカセに手を掛けた。
朋也は再び直幸を追い出そうと突進したが、その瞬間朋也は激しい衝撃を受けて倒れこんだ。咄嗟に立ち上がろうとして右手を突いた時、肩に激痛が走った。朋也は反射的に痺れる右肩を左手で抑えた。目の前にはラジカセが転がっている。
朋也は一瞬、何が起こったのかわからなかった。直幸がラジカセを投げつけ、それが朋也の右の胸から肩の辺りに激突したのだった。
「あ、朋也。どうした。大丈夫か。」
直幸は我に帰り、朋也の前に屈みこんだ。
「大丈夫か。痛むのか。」
そう声を掛ける直幸を朋也は力いっぱい蹴り飛ばした。幸い、屈

んでいた状態で力はそれほど入らなかったが、直幸はつんのめるようにして本棚に頭を軽く打った。
「うるせーなっ。アンタ一体何がしたいんだよっ。出ていけよ。早く出ていってくれよ！　もう、俺のことはほっといてくれよ！！」
我に返った直幸は消沈していた。直幸は何かを言おうとしたが、背を丸めてとぼとぼと歩いていった。
「ちくしょうっ！」
朋也は床に拳を下ろしたが、痛みが走り肩を抑えた。
痛みが続き、朋也は氷で冷やすことにした。
一階に下りると、直幸が声を掛けてきたが、朋也は睨んで一蹴した。
患部は一晩中痛みが続き、腫れが治まるまで時間が掛かった。
翌朝、鏡の前で右肩を見たが、大きな痣ができていた。それを見ると、朋也は表情を険しくさせた。
「朋也……。いや、朋也く……。」
「親父。頼むから、もう声掛けないでくれよ。」
朋也は直幸の言葉を遮ってそれだけ言うと、玄関を出た。
朋也はその日から練習を休むようになった。それでも最初は打撲だろうと思い甘く見ていた。
「岡崎、大丈夫か？」
「ええ、大丈夫です。軽い打撲ですから。」
大上は顧問らしく声を掛けてきた。朋也は左手で鎖骨の辺りを叩いて健在を示した。
練習に参加しないとはいえ、勝手に休むわけにもいかない。部活動は集団行動でもあり、同じチームでもあるのだ。できることはしなければならない。それに、じっとしていることなどできなかった。
いよいよ高校総体の予選大会も迫ってきている。朋也としても初めての大会であり、自分がどれだけできるのか試したい気持ちもあった。そのためには試合に出なければならない。だが、ポジション争いもあり、ライバルたちの調子も気になった。とても暢気になど

していられない。
朋也は部員たちの練習を見ていると体が疼いた。そして、一日ボールを掴めなかったことで苛立ちを感じていた。
「朋也くん。」
直幸は朋也が帰ってくるのを待っていたかのように声を掛けてきた。
朋也は無視して過ぎ去ろうとした。
「病院に行って診てもらった方がいいんじゃないか？」
「いいよ、別に。」
朋也はさっさと部屋に帰っていった。
その後、着替えてから弁当を買ってきて食べた。
箸を持つ手がまだ痛みを発する。肩が少しでも動くような運動をすると軽い痛みが出てくる。痛みはそれほどではなかったが、とても激しい運動ができるような状況ではない。バスケットは腕の感覚がとても大切なスポーツだった。少しでも違和感があると感覚が狂ってしまう。しばらく様子を見なければならないと朋也は溜息をついた。
三日も経つと腫れも引いてきて、痣もだいぶ小さくなってきていた。腕も少し上げる程度なら支障は無さそうだった。それでも、まだ肩の高さまでも上げることはできない。治癒にどのくらい掛かるのか不満のあるところだったが、それでも治っている兆候が見えることは安心できた。朋也はまだ、少し酷く怪我をした程度にしか考えていなかった。
一週間経っても腕の痛みは消えなかった。真横には四五度程度、前後にはほんの軽くしか動かすことができない。それ以上に動かすと肩の辺りがズキンと痛んだ。稼動域は極端に少なかった。
「医者には行ったのか？」
「いえ、それほどのことでは。」
「一度しっかり診てもらっとけ。そんなだと埒が明かん。」
大上としても、大会を控えて、登録メンバーを決めなければなら

なかった。多少の融通は利くとはいえ、腹が決まっているに越したことはない。選手の状態を把握しておくのも大切なことなのだ。

朋也はまだ腕を動かせなかったが、ランニングや筋力トレーニングを始めた。腕を触れないのだから、走ることだってままならない。朋也は腕を庇いながら、ランニングを続けた。

「今日も練習かい。」

家に帰ると、またうるさいのが声を掛けてきた。朋也は苛立った。

「あまり、無理しない方がいい。病院に行った方がいいんじゃないか。なあ、私も一緒に行くから。」

それこそ願い下げだ。朋也は思った。

「なあ、朋也くん。」

直幸の手が右腕に触れ、朋也は咄嗟にそれを振り払った。勢いよく動かし、朋也は痛みでうずくま蹲った。

「ほら。無理しないで。」

「触るなっ。いい加減にしろよっ！　誰の所為でこんなことになったと思ってんだよ。アンタの所為だろうがっ！」

朋也は声を震わせた。

「アンタ何様のつもりだよっ！　子供苦しめて、楽しいのかよっ！」

「私はそんなつもりじゃ……。」

「あっち行けよっ！　頼むから、俺の前に現れないでくれっ！」

朋也は腕を抱えるようにして部屋の中へと入っていった。

「朋也くん……。」

直幸は、力なく朋也の影を眺めた。

朋也はその後も別メニューが続いていた。

「高校バスケは夏だけじゃない。まだ冬もある。」

周りの部員たちは焦るな、と声を掛けてくれた。例の板垣はこれで楽になった、と言っていた。

別メニューが続くと朋也の焦りは募った。大上も最近は特に声を掛けなくなった。今回の予選は見合わせるつもりなのかもしれない。それは、朋也に敗北感のようなものを味わわせた。コートの向こう

側で走り回る連中と自分の中に明らかな隔たりを感じてしまう。朋也は早く状態が良くなることを願っていた。

だが、朋也は決して病院には行こうとしなかった。

今まで特に通院するような怪我や病気は無かったし、極めて健康だった。そのために、体の異常に鈍感になっていたのも事実だろう。

しかし、朋也が何より病院に行きたがらなかったのは、そこが不快な場所だったからだった。それが薬の臭いの所為なのか、白衣の所為なのか、病人がいる所為なのか、雰囲気なのか、朋也にもその理由は明確にはわかっていなかった。ただ、とても不快な場所だと感じるのだった。

子どもの頃、注射が苦手で予防接種の時に泣きべそをかいたことがあったが、学校の保健室が特に苦手ということは無かった。もちろん、行かずに済むならそれに越したことはない。だが、運動を良くした朋也はよく転んで世話になったものだった。開業医についても嫌だったが、それでも病院ほどではなかった。

朋也の怪我は、腱板の断裂も疑われるところだったが、とにかく朋也は頑なに病院に行くことを拒んだ。直幸の言うことも聞かず、他の誰にも強制することはできない。後は朋也自身が決めることでしかなかった。

いよいよ予選大会登録メンバーが発表され、朋也は当然のように選から漏れた。喜ぶ者、安堵する者、当然と思う者、それぞれの表情を見せていた。朋也は自分の周りだけ、冷たい空気が漂っている気がして寒気を感じた。

数日悔しさを募らせた後、朋也は無理やり練習に復帰した。だが、ボールを扱うと朋也はコート上で蹲った。朋也の小さな意地ではどうすることもできない状況だった。

朋也は何かが終わったように光を失った。

「朋也くん、肩の具合はどうだい？」

そう声を掛けられた時、朋也の中で何かが爆発したようだった。

「誰の所為でこんなことになったと思ってる！　みんなアンタの所

為だろ！　アンタ一体何なんだよ！　怪我させといて、何平気な顔してんだよ！　アンタそれでも親か、親なのかよ。認めねぇ、認めねえからな。俺はアンタが親だなんて、ぜってー認めないからな！！」

「何もかも滅茶苦茶にしやがって！　出て行けよっ！　もうこの家から出て行けよっ！　こんなもの、こんなものっ、全部無くなっちまえばいいんだっ！」

朋也は暴れだし、近くにあるものを手当たり次第に投げつけ、倒した。

「ああ、朋也くん、朋也くん。」

直幸は狼狽しながらも制止しようと呼び掛けた。だが、朋也には聞こえていなかった。

朋也が去った後、直幸は物が散乱し雑然とする部屋の中で一人佇んでいた。

直幸は、途方にくれていた。朋也に怪我を負わせた罪悪感で押し潰されそうになった。

あの日、右肩を抑えて痛がる朋也の姿を見て、直幸は我に返った。その後、あの姿が目に焼き付いて離れなくなった。とてつもなく恐ろしいことをしてしまったようで昼も夜も眠れなかった。それでも無理に眠るために睡眠薬を使い、眠ることでしか自分を誤魔化せなかった。

直幸がずっと恐れていた言葉。それが朋也の口から放たれた時、直幸の中にあった最後の砦が壊れた。

――朋也を立派に育てる。

それは朋也に親として認められることでしか証明することができなかった。だが、直幸は「親失格」の烙印を押されてしまった。直幸が過去にそうしたように、朋也もまた、親を拒絶した。直幸が幸三や史乃に感じていたものと同じものを朋也が自分に対して感じている。朋也を傷つけたのだから、それも当然か、と直幸は思う。

社会的に成功していた幸三はまだよほど増しに見えた。青森での

ねぶた祭で、幸三は周りの男たちと仲良くやっていた。周囲の信望があったのだろう。それに比べて、直幸には何もなかった。仕事も、収入も、人脈も何もないのだった。

その後も、朋也の容態はよくならなかった。苛立った朋也は肩を奪ったラジカセを滅茶苦茶に破壊し、直幸の前に転がした。

「朋也くん。これはどうしたんだい？」

「親父、金くれよ。」

「お金って。」

「いいから出せっつってんだよっ！」

「何に使うんだい？」

「壊れたから新しいのを買うだけだ。」

「壊れたって、これ……。」

「いいから早く出せよっ！　出せっつってんだろっ！」

「……。それより、腕の方はどうなんだい？　もう、よくなったのかい？」

不安げに見詰める直幸に見詰めた。

「ふざけんなよっ！　何言ってんだ、アンタっ！　何なんだよ、その態度はっ！　アンタの所為だぞっ！　わかってんのかっ！　アンタの所為で腕が上がらなくなったんだぞ!!　出せよ、早く金出せよっ！」

「でも、朋也くん。」

「いいから早く出せって言ってんだろっ！　アンタのしたことに比べりゃ、このくらい安いもんだろが！」

「……わかったよ。悪かったね。いくら欲しいんだい？」

「くっ。」

朋也は歯を食いしばると、直幸の手から財布を取り上げた。

「なんだよ。もっとないのかよ！」

「朋也くん、そんなにどうするんだい？」

「新しいのを買うっつってんだろっ！　もっとないのかよ！」

「でも、それ以上は……。」

「だったら下ろして来いよっ！　アンタのしたこと考えてみろよっ！　そのくらいのことしたっていいだろ！」
「……朋也くん。家にはそんなにお金はないんだよ。」
直幸は弱り果てたように台所の引き出しを空けると封筒の中からお札を取り出した。
「このくらいあれば足りるかな？」
朋也は直幸の手からお札を殴り取ると、さっさと外へ出掛けていった。
直幸は床に転がった財布を拾うと、寂しそうに溜息をついた。
朋也は新しくラジカセを買いに商店街を歩いたが、憤りで落ち着かずぶらぶらと歩き回っただけで終わった。
朋也はこの日の後、特に荒んでいた。バスケの練習を見学することも無くなり、ただ惰性で学校に通っていた。授業をさぼって中庭や屋上に退避していたこともあった。もう、何もかもどうでもいい、という気持ちになっていた。
それから一ヶ月ほど過ぎた頃、朋也は昼休み、たまたま屋外のバスケットコートの辺りを歩いていた。すると、突然バスケットボールが飛んできた。
「よお、根性無し。」
板垣だった。
朋也は面倒臭い奴に出くわしたと思った。
「おい、一年。ボール取ってくれよ。」
朋也はそれを無視した。
「待てよ。待てっつってんだろっ。」
板垣と――おそらく同じ二年だろう――何人かが朋也の前に立ちはだかった。
「何だよ。」
「何だよ、じゃねーんだよ。先輩に対する口の聞き方には気をつけろっ。」
「すいませんねぇ。で、何ですか。」

朋也は呆れたような顔をして、面倒臭そうに答えた。
「何だこいつ。態度わりーな。」
「まぁ、待て。おまえ、あれからずっと部活さぼってんじゃねえか。怪我とか言って、どうせ練習きつくて、辞める口実が欲しかっただけだろ。特待生だか何だか知らねーが、お前みたいな奴がいると邪魔なんだよっ。お前にバスケする資格ねぇよ。」
朋也は板垣のくだらない言葉を黙って聞いていたが、最後の言葉だけは許せなかった。朋也は板垣に殴り掛かっていた。
「うるせぇ、お前に何がわかる。」
「ああ、わっかんねぇな！」
板垣もまた殴り返す。
「ちょっと怪我したくらいで逃げ出すような軟弱な奴のことなんかわかるわけねぇだろっ！」
朋也は周りの取り巻きたちが抑えようとするのを振り切って殴りかかったが、結局、取り押さえられた。
右腕を負傷している朋也では勝ち目は無かった。
昼休み時間中ということもあり、すぐに騒ぎは大きくなった。教師もすぐに駆けつけて、朋也は板垣ととりあえず保健室へと連れて行かれた。その後、板垣が最初に呼ばれていった。板垣がいなくなると、朋也はやっと緊張を解いた。
板垣は朋也から殴りかかってきたことを説明したが、最初に絡んだのが自分たちであることも認めた。喧嘩両成敗が基本であり、板垣も結局自宅謹慎を受けることになった。
板垣はそれほど素行に問題がある生徒でもなかった。優等生ではなかったが、問題を起こすようなこともなかったのだった。部活にも真面目に参加する生徒で、成績はそれほどでもなかったが、問題児としても見られていなかった。
板垣は一般受験で入学してきた。公立高校の入試に落ちて私立高校に通うことになったのだ。入学はできたものの、あまり勉強熱心な方ではなく成績は下降気味だった。第一志望が不合格になったこ

ともあって、勉強に対する熱意は消沈していた。
そんな中、中学校から続けてきたバスケットが板垣の生き甲斐のようだった。毎年何人かの特待生がやってくる部活の中で凌ぎを削るのは大変なことだった。背も低い方の板垣にとってそれはさらにハードルの高いものだった。才能のある奴らに勝つためには人一倍努力した。
板垣は、最初のうちはそれほどの選手でもなく、試合とは無縁の存在だった。競争の中では陰険なところもあったが、現在の地位にあるのは一心に上を目指した結果だった。
その板垣からすると、特待生はエリートのボンボンのような存在だった。才能に恵まれ、練習でも優遇される。ベンチも試合に出ることもすぐ手の届くような存在だ。それが少しばかり怪我をしたからといって部活をサボるようになる。それが、板垣の朋也へ対する苛立ちの最大の原因だった。
なんにせよ、問題を起こしてしまった板垣はバスケ部の登録からも外れることになった。大上は生徒の生活態度には厳しく、実力以上に素行や礼儀といったことを重んじる顧問だった。
しばらくして、朋也が呼ばれることとなった。
朋也は白髪の老教師、幸村に連れられて生徒指導室へと向かった。幸村に連れられ、朋也は不貞腐れながら廊下を歩いていた。丁度、職員室を通りかかったところで、いきなりドアが開いた。
朋也がその音の方向になんとなく目をやると、中から人が現れた。朋也は一瞬、その生徒の姿に驚かされた。
髪を見事な金髪に染めた、童顔の男子生徒。背は朋也より少し低い上、さらに丸く背を屈めている。ポケットに手を突っ込んだ蟹股姿勢。その上、顔はガーゼや絆創膏で覆われている。本人はいかにも悪ぶっているようだが、愛嬌のある顔がまったく凄みを感じさせない。
（おかしな奴だ。）
朋也はつい大口を開けて笑ってしまった。そもそも金髪というの

が珍妙だった。
相手の生徒もまた、朋也を見て大笑いした。自分と同じように絆創膏とガーゼで顔を覆う黒髪の男子生徒を見て、変な親近感が生まれたのだった。
胸の紋章を見ると、同学年のようだった。進学校といわれる私立高校の中にも変な生徒はいるものだ、と朋也は思ったのだった。
「おい、岡崎。」
笑い声に気付いて、幸村が声を掛けてきた。
「何だ、お前たち。ほれ、岡崎。さっさといくぞ。」
「お前、何やったの？」
例の不良生徒が朋也に訊いてきた。
「こいつ、上級生に殴りかかりおった。お前と同じじゃよ。まったく、世話を焼かせる奴じゃわい。」
朋也に変わって幸村が説明した。
「ほれ、行くぞ。」
幸村は朋也を促した。
廊下を歩きながら、朋也は振り返り、逆に歩いていく金髪男に目をやった。
「ほれ、どうした。」
幸村に催促されて去って行く朋也の後ろ姿を、彼もまた振り返って眺めるのだった。
彼の名はすのはら春原陽平。朋也と同じスポーツ特待生でサッカー部だという。朋也が誰です、と幸村に訊くと、教えてくれた。
実際には、今しがた、元サッカー部になったところだった。丁度、退部届を提出した帰りだという。それは、謹慎後、陽平に会った時に聞いた。
自宅謹慎は三日間で済んだ。お互い初めてのことでもあり、他校や外部と関わったわけではなかったことも幸いした。幸村の温情も作用していた。
「朋也くん。今日、学校から連絡があったよ。」

ベッドの上に横たわっていた朋也は突然の声に驚いた。反射的に体を壁側に背け、直幸が視界に入るのを避けた。
「朋也くん。上級生を殴ったんだって。」
朋也は無視を決め込んだ。直幸の声は虫唾が走るのだった。
「暴力は良くないな。なあ、朋也く……」
朋也は耐え切れなくなり、一気に立ち上がった。
「アンタがそれを言うのか、俺の腕をこんなにしたアンタが！　何、親みたいなこと言ってんだよ！　ぜんぶ俺が悪いってのかよ！　アンタみたいな、アンタみたいなクズに言われたかねーよ！」
朋也は思い切り壁を殴りつけると飛び出していった。それこそ、直幸を殴り倒してやりたい気分だったが、拳は前には出なかった。
その後、謹慎期間中、朋也はほとんど外出して直幸とも口を利かなかった。
数日後、朋也と陽平は再会した。
同じ一年で、同じ特待生、同じ部活あぶれ組。朋也と陽平は妙なシンパシーを感じて一緒につるむようになった。
陽平が寮生であったことも朋也が親密になる切っ掛けとなった。朋也は他人の親でもどこか警戒感を持ってしまうところがあった。“親”という存在に対して無意識に嫌悪感を持ってしまうのだった。
だが、寮であればその心配もない。陽平もその浮いた存在から友達もなく、寮でも暇を持て余していたようだった。朋也といういい暇つぶしができたのだろう。
それは朋也も同じだった。陽平は朋也が不思議に思うほど阿呆な発想を平然とする奴だった。それを見ているだけでも結構飽きないものだ。寮の門限まで悠々と入り浸ったのだった。食事も陽平の部屋で済ませるようになった。
ほとぼりが冷めた頃、朋也は退部届を提出した。大上は鼻息を荒くして嫌味を言ってきたが、朋也は大上と接さなくて済むと思うと清々した。
スポーツ特待生にはそれぞれある程度の枠がある。野球では何人、

サッカーでは何人、という具合だ。これは不動のものではないが、ある時期はサッカー部が多く、ある時期はラグビーが少ない、というような不均衡をできるだけ起こさないための処置だった。また、推薦枠は中学校にとって重要な情報であり、しっかりと固定して各中学校に提示しておかなければ、中学校にも迷惑が掛かる。そういった事務的なものは、私立高校としてしっかりしておかなければ信用を失う。公立高校に比べて高い授業料を受け取る私立では信用は最も重要なものだった。

それゆえ、特待生を自由に増やしたりはできない。同じマイナースポーツでありながら、競技人口の少ないラグビー部は部員の確保が難しく積極的に県内外に呼び掛けなければならなかったが、それに比べればバスケ部は部員の確保がそれほど難しくもなかった。

そんな事情のために、バスケ部の特待生はそれほど多くない。そもそも、レギュラー五人で行う競技であるため、サッカーやラグビーに比べてどうしても少ない枠しか割り振られないのだ。その上、特待生が問題を起こして退部するようなことになると、特待生枠そのものを削られる可能性すらあった。

それを考えると大上は頭が痛かった。結果を出さなければ枠は増やせない。会議でも主張のしようがない。限られた予算の中で優遇される特待生とは、それだけ特別な存在であり、それゆえに生活態度においても他生徒の模範となることが不文律に求められた。

まして、生徒指導を預かる身となった大上にとって、自らの部から問題児を出したのでは飼い猫に噛まれるようなものである。大上の朋也に対する評価は、その期待の高さと反比例して悪化していくのだった。

朋也が退部をしたことは、直幸にとっても重要な意味を持っていた。すなわち、朋也が特待生でなくなり、一般生徒として籍を置くことになったのである。

しかし、校則に特待生であるからどうしろ、という記載はない。あくまで、特待生制度について学校側と保護者側とで交わされるだ

けで特に生徒に対して特別なことがあるわけではなかった。
寮については退寮させられる場合があったが、それでも世の中のように強制退去させるわけにはいかない。未成年の学習機会を横暴な振る舞いによって阻害することはできないからだ。あくまで保護者と生徒の自発性によって退寮し、新たな住まいを求めるか、転校するかの措置を取るのである。
陽平もまた、そうした事情から持ち堪えることができた。特待生で退部するもの事態が少ないが、そうしたものは大抵退寮していった。特待生の集まる寮では肩身が狭くなり、周囲の寮生もそうした生徒を見下すからだった。だが、陽平の強靭な精神力はそんな些細なことを気にともしないのだった。
「春原。おまえ、寮を出なくて大丈夫なのか？」
「なに、岡崎。僕に路頭に迷えっての？」
「はは、そりゃ見物だな。」
「まっ、大丈夫だけどね。」
「なんでだ？」
「僕の実家は東北だからね。よほどのことがない限り追い出されることはないよ。まっ、例え地球が滅んだって、出て行く気はないけどね。」
「春原、おまえ……。」
朋也は新しい漫画本を取ろうと席を立った。
「おっ、そういえば、春原。お前のラジカセ、なかなかいいな。ちょっと見せてくれ。」
「おっ、まぁね。こっち来てから買ったやつだから、最新の新品だぜ。」
「ふぅん、今のはこんな感じなのか。」
「なに、ラジカセに興味あるの？」
「ああ、ちょっとな。おっ、ＣＤ付いてんじゃんかよ。」
「だから言ったろ。最新だって。」
「おい、春原。俺にくれ。」

「アンタ、いきなり何言い出すんですかっ！」
「いやぁ。お前じゃどーせ演歌しか聴かないと思って。」
「いいよねぇ、演歌。上野発の夜行列車　降りた時から～♪　って、僕、何者ですかっ！」
（相変わらず、ノリがいい奴だなぁ。）
「岡崎。お前、ラジカセ持ってないの？」
「ああ、ちょっと壊しちまってな……。新しく買おうと思うんだが、迷ってるところなんだ。」
「そうなの。へへん、まぁ、僕に聞いてくれれば、何でも答えちゃうけどね。」
「いやぁ、それはまたにしとくわ。」
陽平が大袈裟にこける。
「そこは聞きたいって言いましょうよ、ねぇ！」
「ああ、めんどくさいから。」
「ねぇ、聞いてくださいよ、岡崎くーん。」
「抱きつくな、気持ち悪い。」
「ねぇ、冷たいこと言わないでさぁ。」
「だぁーー、わかったから放せぇ！」
朋也は思い切り陽平を引き離した。
「ふふーん、じゃあさっそくこの春原大先生が教えてあげましょうっ。」
「前置きはいいから、早くしてくれ。」
「まぁまぁ、そう慌てない、慌てない。僕が見たところ、これからの時代はずばりＣＤだねっ！」
「ほう……。」
「これからはカセットは時代遅れ。ラジカセにＣＤが付いていないなんて、カレーに福神漬けが付いていないようなもんさ。」
陽平は両手を腰に掛けて胸を張った。
どう考えても、電器屋の店員にそう売り込まれたとしか思えない。
「なぁ、春原。一つ聞いていいか？」

「はいはい、何でも聞いてよねー。」
「お前、カセットはどのくらいある？」
「ああ、カセットねー。ジャジャーン。見てよ、僕のコレクション。」
陽平は自信満々にケースに満タンに収まったカセットテープを朋也に見せた。
陽平が持っているケースと同じようなものがまだ棚の下の方にいくつかあるようだ。
（なかなかすごい数だな。しかし、これだけあって、聞いてるとこ、あんまりみないな……。）
「おまえ、ＣＤどのくらいある？」
「えっ。ああ、そこに一枚。」
「……。」
「……。」
「仕方ないでしょーっ。まだ買ったばっかりなんだし、それにあんまり売ってないんだからっ。これからなんだよ、これから。」
陽平は鼻息を荒くして腕組みをした。
「聞いてみていいか。」
一息ついたところで朋也はＣＤを手に取った。
（こりゃ、どんな曲が入ってるんだ？）
ＣＤのジャケットはきれいな写真が載っていて、視覚的にとても刺激的だ。朋也は試行錯誤してプラスチック製のケースを開けた。実際、ＣＤを触るのは初めてだった。円盤状の物体はキラキラと光沢があり、妙な感じだ。
（これをこうセットするのか。）
未知の機械に触れるのは楽しい。
再生ボタンを押して音楽が流れ出す。陽平は好きなのか、鼻歌で合わせている。
陽平の趣味はともかく、音は確かに透明感のある音のように聞こえる。朋也は、ぜひ別の曲で聞いてみたいものだ、と思った。

（ＣＤか……。）
朋也は感慨深そうにラジカセを見詰めた。

直幸は帰宅すると、ポストの中を覗き込んだ。ここのところ、岡崎家宛てに重要な郵便物などまず来ることはなかったが、一週間に二、三度は一応確認してみる。ポストという存在は何となく覗きたくなる。それはもう性分だった。
（ん？　珍しいね。）
小さな角封筒が入っていた。宛て先は光坂高校。直幸は首を傾げて、家の中に入っていった。
特待生制度利用取消しの通知は、直幸を愕然とさせた。私立高校の学費はおおむね公立高校の二倍はした。それが直幸の双肩に圧し掛かってきたのである。
「無間地獄」
直幸は目の前の世界がぐるぐると回るようだった。
年齢以上に老けて見えた直幸は、あの事件以降さらに老け込んだ。それこそ、履歴書の年齢をそれこそ詐称だろうと言われてしまうほどだった。白髪が目立ち、頭髪は濃い灰色に見える。頬はこ痩けて頬骨が浮いた。三〇代後半にして姿はすでに五〇代と見紛うほどだった。
貯金を全て使い果たしたら、生活できなくなる。
それは直幸にとって恐怖だった。何もかも失い、路頭に迷うことになるのだ。親失格と言われようとも、朋也を路頭に迷わすわけにはいかない。その気持ちは今でも変わらない。
家を売ればそれでも幾分かの資金が手に入れることはできただろう。だが、直幸にはどうしてもこの家を手放すことはできなかった。この期に及んでそんな未練は何もならないかもしれない。
それでも直幸にとって縋りついてでも守らなければならないもの

がここにはあるのだ。
いや、もうそれはどこにもないのかもしれない。抜け殻となったこの家に守らなければならないものなど現実には存在していないのかもしれない。
だが……。
直幸には逃げ道などどこにもなかった。
押し寄せてくるものを全て受けてでも経ち続けなければならない。たとえそれが身を削るようなことであっても。
直幸はこの頃から完全に心を失ったかのように抜け殻となった。誰に対しても、感情という感情を表に出すようなことはなかった。いや、出せなくなった。
心の奥底に封印し、すべての痛みに対して鈍化し、無機質な人形のように立っているだけの存在。
直幸の中にある最後の支柱。それは岡崎家を経済的に支えることだった。とにかく、朋也の生活を維持することだけに直幸の力は注がれた。父親として認められなくとも、体がひし拉ごうとも、朋也と一緒に生活しているという幻想を守ることができるのは生活を維持することのできるお金のみだった。
だが、そうした直幸の心の奥底を感じなくなると、直幸は不思議と楽になった。朋也と話をすることも、それほど苦痛や緊張を伴わなくなった。
朋也は相変わらず邪険にしたが、そうしたことにもあまり痛みを感じなくて済むようになったのだった。
だが、その直幸の態度は朋也にとってはまったく異なるものとして映った。直幸は知らず知らずのうちに距離を置くことで、痛みを和らげているに過ぎなかった。
朋也は直幸という存在が恐ろしくなった。
何を言ってもまったく効かない。ほとんど無表情の顔が僅かに口元を動かして不気味に笑みを称えて近づいてくる。まるで、赤の他人にいきなり声を掛けられたような感覚。マネキンと話しているよ

うな手応えの無さ。一体何を考えて、何のつもりで接してくるのか。
目の前にいるのは本当に人間なのか。
そう思いたくなるほどの違和感と不快感で身の毛が弥立つのだ。
直幸と接していると、言い知れぬ孤独感を感じた。全身から体温が抜け落ちるような寒気を感じた。朋也は苛立ちと不安感で一杯になる胸の苦しみを吐き出すように言葉を発して叫んでしまう。
「アンタは一体何なんだ!?」と。
最初に拒絶したのは朋也だった。
だが、朋也は混乱してそんなことなど思いも寄らない。親のような態度をされたくなかったはずなのに、直幸が他人行儀になれば不快感から苛立った。
何をしても叱りもしない。どんなことがあっても微笑を絶やさない。朋也は、そんな直幸と同じ空気を吸うだけで嫌だった。
朋也はそんな直幸から逃げ出すように家を飛び出すのだった。
朋也は孤独に喘いでいた。朋也自身は、寂しいなどと明確に認識はしていなかった。ただ、苛立ちと憤りが沸き起こってきて、それを解消するために刺激を求め、人や明かりを求めて街をさまよ彷徨った。
一方で、朋也は人に簡単に近づこうとはしなかった。孤独でありながら、人と深く接することをどこか避けていた。人と接することに臆病になっていたのだった。表面上接することは簡単だったが、本音の付き合いをすることはほとんど無かった。
陽平と接する時でさえも、朋也は本心を隠していた。いや、故意にではなく、無意識にそうしてしまう。何より、朋也自身が自分の弱い心に気付きたくなかったからなのかもしれない。
朋也はいつでも自分を誤魔化して、周りの刺激に気を取られていたのだった。
その頃、直幸の仕事の方は非常に不安定だった。
ビルの清掃員をした時には、トイレの中で倒れて眠ってしまった。
コンビニエンスストアの夜間アルバイトをした時には、深夜の休

憩中に眠ってしまい、レジが出てこないと苦情の電話が来てクビになった。

細かい部品を扱った作業ではイライラが募って爆発させてしまうこともあった。

接客では元気がない、愛想がない、陰気だと不評になり、数日から数週間程度しか続かなかった。

引越し業者の仕事は肉体的に辛く当日に見切りを付けられた。

新聞配達や郵便配達、見本販売やチラシ配りなどさまざまなアルバイトもこなした。

接客はおおむね不評だった。朗らかそうな直幸の容貌は好印象を持ちやすかったが、声が小さい、押しが弱い、と販売には向かなかった。

それでも好評を得ることができたのが商店街の売り子や電器屋の説明販売だった。直幸はテレビに詳しく、説明を丁寧にすることができた。売り子は仮装をして看板を持って商店街を歩くだけで、体力的にはきついものの、それほど難しい仕事ではなかった。

だが、そうしたごく短い間だけの仕事では僅かな収入しか得られなかった。飲食店の皿洗いなども、疲労や不注意で食器類を壊し、長くは続けられなかった。

直幸は、不定期に働いたが、生活リズムが安定せず疲労を蓄積させた。しっかりと食事を摂らなかったことも原因の一つだった。

この頃、直幸は一日中眠気に悩まされた。脳が充分に活性化されず、常に意識がぼやけているような、頭の重い状態が続いていた。

直幸は疲れているのだろう、と睡眠薬を飲んで眠った。

しかし、それは逆効果だった。薬の影響か、脳は覚醒しにくく、一方で熟睡もできなくなっていた。常時、体のだるさを感じるようになり、それは眠っても解消されるものではなかった。集中力を欠くようになり、とても仕事どころではなかった。

公共トイレ、公園などの清掃作業員として、それでも何とか働き続けていたが、能率は非常に悪く、体ばかりが負担を感じていた。

朋也もまたアルバイトを始めていた。家を出る資金を貯めるためだった。

飲食店やコンビニ、ガソリンスタンドなど色々なところでアルバイトをしていた。学校に見つからないように、できるだけ離れたところや、あるいは裏方を選びもした。

僅かなりにもお金を稼げるようになると、朋也は尚更に直幸を蔑むようになった。学生の自分でも簡単にお金を稼ぐことができる。それをなぜ大の大人である直幸にできないというのだろう。家に帰って来ればゴロゴロと横になっているだらしのない直幸に敬意を払うような余地は一遍もないと思われた。

それでも、朋也も鬼ではない。

情けない親ではあったが、親には違いない。機嫌のいい時は、そのまま寝ては体に悪いと毛布を掛けてやることもあった。

直幸がそれに気がついて他人行儀に礼を言うと、朋也はまた無性に腹が立った。

（――心配してやってる――人の気も知らないで。）

勝手に自分の世界の仲にいるような直幸が許せなかった。

家族であるはずなのに家族でない。親子であるはずなのに親子でない。そんな関係に朋也は深く傷付くのだった。

（あんなのはもう、親じゃない。）

朋也のその想いは止め処なく大きくなっていくのだった。

一日ボーっとしている直幸の中で、最後の柱も壊れそうになっていた。

（体も辛いのに、無理して働いて何になる？）

（それでお前は報われるのか？）

（お前が少しばかり頑張ったところで何になる？）

（どうせ朋也だってよろしくやってるんだ。お前だって好きにすればいい。）

（あいつはお前のこと親なんて思っちゃいない。何でこっちがあいつの面倒を見てやる必要がある。）

（なっ、自分で稼いできたお金なんだ。自分の好きなように使えばいいだろ。）
（お前はもう充分にやったよ。これ以上、苦労する必要なんてどこにもないさ。）
（働くなんてめんどくせーこと、止めちまえよ。そうすりゃ、楽んなるぜ。）
直幸は心の中の甘い囁きに負けていた。
無趣味だった直幸が何をするわけでもなくただ怠惰に過ごすだけだったが、収入はほとんどなくなってしまった。
たまに理性を取り戻して日雇いに通い、その帰りに酒で全て飛んでしまう。やがて、ずっと長いこと家にいると暇になり、近所や商店街をぶらぶらし始めた。さらに散歩に飽きると、派手なネオンの光るパチンコが気になり、やり始めた。
またたまに日雇いに出掛けて、散財する。そんな生活が続いていた。
そうして迎えた春のある日、直幸はいつものように出掛け、そして昼過ぎには帰宅した。壁に寄りかかり、酒を飲んでいると、うとうととしてそのまま眠ってしまった。
「……さん。」
肩を揺すられて、直幸は気がついた。
ぼんやりとした目で前を見ると、朋也が屈んで手を掛けていた。
「これはこれは。また朋也くんには迷惑を掛けてしまったかな。」
直幸は申し訳ない、と自分の頭を撫でた。
朋也は直幸を見ると、突然立ち上がって去っていってしまった。
（あれ？　朋也くんは、どうしたのかな？）
直幸は朋也の出て行った方をぼんやりと見詰めていた。
直幸は何度か、街や公園で酔い潰れ、警察の世話になったことがあった。自宅に連絡が行き、朋也に家に連れ戻された。
（朋也くんに迷惑を掛けないようにしなくては。）
そうは思ってみるものの、直幸の行動が改まることは無かった。

直幸は相変わらずの生活を続け、家々が夕日に染まる頃に家に帰った。

（おや？　めずらしいね。）

直幸が玄関の引き戸を開くと、玄関には革靴が脱ぎ捨てられていた。

（朋也くんが帰ってきているのか？）

いつも朋也は日没前に家にいることは稀だった。また、一度帰宅しても、着替えて再び外へ出てしまう。まだ明るい時分に朋也が家にいることは珍しかった。

直幸が二階に上がると、確かに朋也はそこにいた。集中して何かをしているようだった。

「おお、懐かしいね。」

それは、昔やっていたアニメ番組『だんご大家族』を思わせる三色団子だった。朋也はその串団子に染色することでだんご大家族のキャラクターを模していた。その可愛らしさに、つい懐かしさが湧いて出た。

突然声を掛けられ、朋也は反射的に椅子ごと飛び退けた。朋也はスイッチが入ったように一瞬にして警戒心を強め、直幸を睨みつけた。

「これは、どうするんだい？」

直幸は朋也の方を見た。

「友達にやるんだ。」

朋也はその目を避けるように顔を背けた。

「私にも手伝わせてくれないかい？」

直幸が一歩進み出ると、朋也は反射的に一歩退いた。

「どうすればいいのかな。教えてくれないかな？」

「触るなっ！！」

直幸が団子に手を掛けると、朋也は大声でそれを拒絶した。

朋也の頭に一瞬、渚の顔が映ったのだった。渚というのは、本名、ふるかわ古河渚。始業式の日に校門前の坂の下で偶然出会った少女

だった。聞くところによると、体が弱く病気がちで、学校も結局留年してしまったという。

そんな彼女には夢があった。彼女は演劇をやりたいということで、活動休止中の演劇部を立て直すため、部員募集のポスターを作製していた。朋也も少なからず彼女に協力することになったのだった。

どうにも見ていて危なっかしいところがある、頼りない少女だった。その所為か、朋也はついつい渚に口を出してしまうのだった。

朋也はなぜ渚が気に掛かっているのか、自分ではまったくわからなかった。ただ、彼女のことを考えると、つい力が入る自分がいた。

朋也が作っていたのは、『だんご大家族』を模した串団子だった。だんご大家族は一時代前に流行った番組で、今では関連商品もまず見つけるのは難しいだろう。

実際、『だんご大家族』の団子を探してみたものの、見つけることはできなかった。ポスターを作って頑張る渚へのご褒美のつもりだったのだが、手に入らないのでは仕方ない。お手製団子を作って渡そうというのだった。

それは、朋也にとって大切なものだった。

朋也自身は気付いていなかったが、ずっと取り組むものが無く時間を浪費していた朋也にとって目標がある渚は眩しい存在だった。そして、一緒に何かをすることで、自分も渚と同じように何かを手に入れられる、何か成せる、というような感覚を感じ取りたかったのだ。

自分の手の中に残る確かな手応え。ひたむきに立ち向かえる存在。そして、自分がそこにいてもいいと思える居場所。朋也はそれを求めていた。

自分が居てもいい場所とは、つまり、自分を必要としてくれる存在が居る場所だった。

朋也は一時でも感じられるその瞬間をとても大切に思っていた。

本人自身が明確に理解していたわけではない。ただ、体は自然とそれに反応していた。

それゆえにである。

掌で包み込むように大事に、大事に、壊れ物のように扱いたい大切なものを土足で踏み込んで穢す醜い存在――この場における直幸の存在――は決して許すことができなかった。

目の前の団子を守ることは、自分の心を守ることでもあったのだ。

自分の知る限りの全ての醜いものを詰め込んだような直幸の存在。そして、親でありながら、自分と他人のように接してくる直幸の存在。その存在は朋也をとことん苛立たせた。

「いい加減にしてくれ！　何だよ、その他人行儀な口の利き方！」

朋也は全身から湧き出る負の感情を直幸に向かってぶつけた。

「俺はアンタの何なんだよっ！」

朋也は思い切り部屋の壁を叩いた。

「朋也くん。」

激しく肩を揺らす朋也に、直幸は声を掛けた。

朋也は、自分の激昂もまったく肩透かしにされたような虚しさを感じ、居心地の悪さを感じた。朋也は直幸を退け、団子の袋を持ち去った。

直幸はそんな朋也をとど止める言葉が出ず、ただ後ろ姿を見送るだけだった。

何と声を掛ければいいのか、どう接すればいいのか、直幸にはわからなかった。

優しく接すればいいのだろうか。厳しく接すればいいのだろうか。長い月日の中で、そうして行き着いたのが今の直幸なのだ。直幸にはもうどうしたらいいのか、わからなかった。

所詮は父親失格。どう接したところで、意味はないのかもしれない。直幸はただ、立ち尽くすしかないのだった。

それからの朋也は今までとは何か違うようだった。相変わらず遅刻やサボりはあるようだったが、それでも学校に通うことが楽しいように見受けられた。それは直幸の贔屓目なのかもしれない。だが、直幸には何か、楽しそうに見えるのだった。

そう。よくよく考えてみれば、直幸にもそんな時があったのである。直幸も高校二年の一時期ではあったが、とても学校に通うのが楽しいと思えた時期があった。それは遥か遠い日の話であるが、今の朋也ももう同じ年頃なのだ。

直幸は今までも朋也の意向を尊重して育ててきたつもりだった。育ててきた――そう表現していいのであれば、間違いなくそうであった。

高校から何度か電話が掛かってきたことがあった。遅刻や早退、授業を抜け出す、校舎や生徒に悪戯をするなど色々と問題行動が目立つということで、保護者に注意を喚起するための電話だった。

「そうですか。でも、朋也くんももう自分で判っていると思いますから、大丈夫だと思います。」

直幸は大抵そう答えていた。

朋也は学校では何かと問題児として見られていた。入学してまもなく上級生と暴力事件を起こすなど、進学校の生徒たちのすると常軌を逸した事件を起こした生徒である。もちろん、問題を起こす生徒は他にいないわけではなかった。上級生の後輩いびりやいじめの類い、万引きなどの対外問題も含めて全ての生徒が品行方正とはいかなかった。

だが、陽平と行動を共にしたことは朋也をも目立たせる効果があった。

陽平の行動は突飛で幼稚だったが、そのなり形からとにかく目立つのだ。朋也もやっていることが実にくだらないと思っていても、陽平を見ていると商いのだった。それでも二年に上がると強力な学級委員の影響もあって、だいぶ未遂に終わっていたようだった。この委員長というのがまた目立つ存在で、騒ぎには事欠かなかったのだった。

だが、それまでの状況と今とでは少し違っていた。今までと同じように遅刻もすれば、サボりもした。それでも確かに、朋也は一歩一歩何かに向かって歩みを進めているのだった。

直幸はこの頃改めて、もう自分の道を歩みだしているのだろう、と思えた。もし、朋也が直幸を頼ってくるようなことがあれば、力が必要なことがあれば、その時はしっかりと支えればいい。それが親として、などというのはおこがましい気がしたが、いつか朋也が頼ってくれる時があったら嬉しいと直幸は思うのだった。それは、まだ自分の存在価値があるのだ、と信じられるからだった。

「朋也くんの進路についてどうお考えですか？」

そう尋ねられたのは、初夏の陽気の暖かい午後のことだった。

直幸が自宅前の曲がり角を曲がると、家の前に誰かが立っていた。

「どちら様ですか？　何か家に御用でしょうか？」

「あっ、岡崎さんですか？　岡崎朋也君のお父さん？」

「えっ、ええ、まあ。どちら様ですか？」

「ああ、これは失礼。私、光坂高校の教師をしております、もぎ茂木と申します。朋也くんの担任をしています。」

「ああ、これはこれは。朋也くんですかな？」

「いえ。今日はお父さんにお話を伺いに。」

「私に？」

「ええ。お父さんは、息子さんの進路についてどうお考えですか？」

「朋也くんはどう言っているんですか？」

「いえ、今日はお父さんと話がしたくて来たんですよ。私も本人とは話しをしますから、今日はお父さんの考えを……。」

「だから、それは私が決めることじゃない。朋也くんは朋也くん。彼が決めることです。」

「んぁ、ですが、彼はまだ学生で、保護者の意見もうかが何……」

「いえ。朋也くんは朋也くんです。私が口を出すことではない……。」

「しかし……。」

「お話がそれだけでしたら……、これで失礼させていただきます。」

「あっ、お父さん。お父さん。んぁ、あーー。」

茂木は激しく頭を掻いた。

朋也はその光景を路地の曲がり角から眺めていた。
朋也は、茂木に家庭訪問で連れてこられたが、隙を見て逃げ出したのだった。だが、途中で渚に見つかってしまい、仕方なく自宅へ戻ることになった。その時偶然居合わせたのだった。
朋也は直幸と茂木の会話を聞いて、苦々しい想いだった。直幸はわれかん我関ぜず、を決め込んで全て朋也の決めることだという。朋也には、それが自分を投げ出した言葉としか思えなかった。
朋也は嫌なものを見た、というようにその場を立ち去っていった。
渚は、朋也の苦虫を噛み潰したような顔を見て、その心を慮った。父、直幸の言葉は、とてもそっけなく聞こえてきた。
朋也は、一緒に歩く渚に自分たちのことを少しだけ話した。
「あの人は、いつも一人であやって穏やかに笑って、一人で生きてきたんだ。」
朋也は直幸をそう評していた。
温かい家族しか知らなかった渚にとって、それは衝撃的だった。そして、とても悲しいことだと感じていた。
「俺と親父は、もうずっと前から家族じゃないんだ。」
朋也は少しばかり寂しそうに自分たちのことを話したのだった。
夕暮れ時、朋也が家に戻ると、直幸は眠っていた。
直幸はあの後、酒を飲んで寛いだ。テレビの音は寂しさを忘れさせてくれた。酒を飲むと、うとうととして眠ってしまったのだった。
朋也は簡単な身支度を済ませた。
朋也を不憫に思った渚が自分の家に来ないか、と誘ってくれたのだ。朋也は渚の好意に甘んじた。元々家を離れたかったのだから、それは本望だった。
だが、いざ離れるとなると、少し寂しさが湧くものだった。
それは、朋也が本当は家を離れたくなかったからだったが、今の朋也にはつまらない感傷としか思えないのだった。
朋也はとりあえずの支度を終えると、部屋を出た。
テレビを付けたまま眠る父親の姿に複雑な想いが去来する。朋也

は屈み込み、直幸の体を揺すったが、直幸は起きなかった。
一言、何か言おうと思ったが、起きなかったのでそのまま立ち去ることにした。どうせ、掛ける言葉など、ないのである。
朋也が玄関で靴を履いていると、テレビの音が消えた。それは、直幸が目を覚ましたという証だろう。朋也の体に緊張が走り、体が硬直した。
「朋也くん。どこかへ行くのかい？」
静かな足音の後、背中から声が聞こえた。
「友達の家に。」
「大きな鞄だねぇ。」
その言葉に、朋也は鞄を強く握り締めた。
「しばらく泊めてもらう。いつ帰るかは、決めてない。」
直幸は、一瞬喉が詰まった。息子の背中が嫌に遠くに見える。
「そうか。寂しくなるね。朋也くんは、いい話し相手だったからね。」
「こっちにも都合があるんだ。わかってくれ。」
「そうだね。」
「じゃあ、いくから。」
朋也は直幸の言葉に耳を傾けはしたが、一度も直幸を見ようとはしなかった。
直幸は、ずっと朋也の頭の方を見詰めていた。いつ、朋也が顔を向けてくれてもいいように。いつでも、朋也の目を見られるように。だが、ついにその時は来なかった。
朋也もまた、去っていく自分を強く退き止めもしない直幸に更なる失望を感じていた。もちろん、止められたところでそれに従う気も無かった。
それでも、形だけでも引き止めようとするのが親というものだろうと思う。もはや、直幸にとって自分が息子ではないのだ、と改めて痛感するのだった。
今まで帰ってきた家と別れることは独特の感慨があった。ずっと

出て行きたかったはずなのに、いざその時が来ると胸の中は寂寥と哀愁が漂った。

この家にはいい思い出なんて、何も無かった。出て行けば、もう戻ってくることもないだろうと思う。

（それとも、いつか戻ってこられる日が来るのだろうか……）

朋也は虚ろな寂しさに引きづられるように、いつ来るとも知れない日が訪れることを思った。それは、朋也の心の奥底に眠る願望であったかもしれない。心の深淵に埋もれた純粋な想いの欠片が漏れてそう思わせたのかもしれない。

そんなことはきっとありはしないだろう。

虚しい考えを打ち消すように、朋也は一歩一歩、古き棲家を離れていった。その一つ一つの足取りが新しい人生の始まりであることを願って。

朋也が古河家に持ってきた荷物は最低限のものだった。生活用品は古河家に甘えさせてもらい、不足の物は貯金を下ろして揃えた。教科書類もほとんど学校に置きっ放しにしていて、足りない物は人から借りればいい。いまさら勉強熱心になる気はことさらなかったから、朋也はそれで充分だった。

朋也は幼い時からずっと孤独を抱えてきた。

それゆえに、直幸に話し掛け、直幸の話を聞きたがった。直幸に触れ、直幸に触れられたかった。短い時間しか過ごせないからこそ、純粋にそれを求めた。

だが、いつの間にか、素直にそれを求められなくなっていった。それはおかしなことではない。子どもは成長していくと、だんだんと自分の欲求にただただ素直であり続けることはできなくなる。気恥ずかしさもある。遠慮もある。見栄もある。それはさほど珍しいことではない、至って普通のことだった。

朋也が充分に満たされているのであれば、それでもよかった。けれど、朋也の心の中には常に孤独があり、愛情に飢えていた。接したかった。愛されたかった。いや、より愛されているのだという確

証を持てるだけの触れ合いが欲しかったのだ。
その心の渇きは、日々変貌を遂げ、理想と乖離していく直幸に対して邪念となって現れた。嫌悪感と疎外感に包まれ、素直になれなくなっていった。
朋也はもう、険しい表情で睨むことでしか、心の中の飢えを表すことができなくなっていた。激しく声を荒げ罵ることでしか、奥に沈みこんだ幼い日からの愛されたい想いを表すことができなくなっていた。
朋也にはもう、自分が直幸を愛し、愛されたいのだということすら忘れてしまったのだった。
朋也は日々悪化していく内の世界を捨て、外の世界に救いを求めた。自分の孤独を埋めてくれる何かが欲しかった。
それは何でも良かった。ただ、自分が何かをしていることで成果が上がり、他者から認められれば自分の心は少しばかり安心できるのだった。
けれど、仮のものは仮のものでしかなかった。朋也は一時的な満足感を得ても、それはしばらくすると消えてしまった。
朋也はもっと強い何かを求めるようになっていた。
停滞する自分の世界を変えたい、変わりたい。
朋也は、自分を必要としてくれる場所を求めていた。そして、自分を愛し、自分が安らげる場所が見つかることを願っていた。
朋也は、幼い心の声が聞こえないまま、外の世界へと安らぎを求めていった。
直幸もまた、孤独に苛まれていた。
敦子を失った悲しみ。民事裁判での心を引き裂かれるような想い。仕事の中での疲労と孤独。それらを乗り越えさせてくれるものは愛する家族、朋也しかいなかった。
だが、朋也と接することのできる時間は僅かにしか存在しなかった。
たった一人で幼い子どもを育てるには、世の中というのはあまり

にも厳しいものだった。

親たちの手を振り切ったのは直幸自身だった。新たな生活の中で新しい人との交わりを生み出すことができなかったのは直幸の不徳ゆえだったかもしれない。切羽詰った状態でも親に縋らなかったことは直幸のつまらない意地の所為かもしれない。

結局、自業自得なのだ。無力な直幸がいけなかったのだ。そう言ってしまうことは容易いだろう。確かに直幸は未熟だった。

それでも、直幸は自分の手で朋也を育てたかった。育てなければならないと自分に誓ったのだった。

現実は、それほど甘くはなかった。

直幸は苦しみや辛さを紛らわすために酒や煙草に救いを求めた。その結果、朋也に粗暴な態度を取ってしまったこともあった。

日に日に離れていく我が子を追い求めながら、それでも手を伸ばすことができなかった。寂しいという自分のエゴで朋也を縛ることはできないからだ。

酒や煙草は孤独を少しばかり和らげてくれた。

もっと話したい。もっと話を聞きたい。もっと触れたい。もっと触れて欲しい。その想いとは裏腹に朋也は直幸の手から離れていった。

直幸は朋也を縛りたくはなかった。幸三らに囲まれた直幸は縛り付けられたような窮屈さの中で育った。だからこそ、親が子どもを縛ってはいけない、子どもの思うままに生きさせてやらなければ子どもが不幸だ、と思うようになっていた。

朋也に充分に接してやることのできなかった直幸は、お菓子を与えたり、おもちゃを買い与えることで、自分にできないことを物で補った。朋也が喜ぶ顔が嬉しく、直幸は進んでそれをした。

朋也が離れていくと、直幸は安らぎの時間を失った。酒や煙草、睡眠薬などに頼ることで、孤独と向き合わないようにした。孤独感から逃げた。

朋也が自分の世界を持つことは嬉しいことだった。子どもが成長

と共に親の手を離れていくことはごく自然なことだった。
直幸もそれは理解していた。理解していたからこそ、朋也を求める自分自身との差異に苦しんだ。
苦痛の中で生活も荒んだ。楽しかった食事も、楽しかった寝る前の一時も、何もかもなくなっていた。一緒に手を繋いで散歩をした。保育園の帰り道でおんぶをした。それら全てはもはやどこにも存在しない。直幸の周りにはもう朋也の温もりはどこにもなくなってしまっていた。
家の中の静寂に耐えられなくなると娑婆を歩いて気を紛らわし、パチンコの喧騒で誤魔化した。
直幸は酒や煙草、さらには娯楽によって孤独を紛らわし、自分の心と向き合うことも捨てた。
愛してやまないたった一人の家族に自分の気持ちを伝えることすらできない。ついには自分の想いの正体さえも見失い、息子にどう接していいのかさえわからなくなった。
自分の心を封印して表層的に接するだけとなった直幸に、朋也を引き止める力などなかった。
孤独を振り払うために外の世界を求めた朋也と、孤独と苦痛を刺激物によって塗り固めて封印した直幸の、家族二人の共同生活はこうして幕を閉じたのだった。

第八章

朋也が岡崎家を去ってから一月ほどが過ぎた頃だった。岡崎家を誰かが訪ねてきたようだった。

直幸が戸を開けると、そこには制服を着た女の子が立っていた。

「あの、岡崎、朋也さんのお父さんですよね」

渚は緊張した面持ちで直幸と対面した。普段、朋也のことを「岡崎さん」と呼んでいるが、目の前にいるのも「岡崎さん」である。渚は付け加えるように朋也の名前を口にした。

「え、ええ」

直幸は少し言い淀んだ。父と尋ねられてはい、と答えていいのかどうか、迷いがあった。もはや、自分が親であるという確証をどうして持つことができるのだろうか。

だが、戸籍上そうである以上、直幸はまだ朋也の父親である。

「朋也くんは今出掛けていていませんが、何か用があるのですか？」

「いえ。今日はお父さんに用があって来ました」

「私に？」

「はい。私、古河渚といいます。実は、今度学校で学園祭があるんです。そこで私たち演劇をやるんです。朋也くんも演劇部として頑張ってくれています。だから、もし良かったら見に来てください」

渚は頭を下げ、可愛らしい封筒を直幸に渡した。

「これは？」

「学園祭の招待状です。お願いです。ぜひ見に来てください」

渚はもう一度頭を下げると、失礼します、と走っていった。

直幸はもう一度手渡された封筒を見た。可愛らしいカラフルな封筒に、『岡崎さんのお父さんへ』と書かれている。

直幸は顔を上げると、少女が走り去っていった方を見た。路地は、傾きかけた日の光で長い影を作り始めていた。

文化祭当日は、快晴とはいかなかった。季節を考えれば、それを

望む方が酷だろう。雨が降っていなかっただけましだった。

直幸は、演劇の開演時間に合わせるように校門前の坂道を登っていった。風は酷く湿り気を帯びていて体にまとわりつくようだった。

直幸は、朋也の姿を見たい想いは強かったが、あって再び拒絶されることに怖さがないといえば嘘になる。そうした想いは足取りを重くさせた。自分に、見に行く資格があるのかどうか、何度も自問した。

それでも、離れ離れの息子の姿はやはり見たいと思う。例え、応えられなかったとしても、会えなくても、一目見ることができれば充分本望ではないか。

思えば、朋也は毎日この道を辿っているのだ。それは直幸には感慨深いものだった。それだけでも何か、朋也に近づけたような気がして嬉しくなるのだ。

直幸には、それが少しばかり滑稽に思えた。数年経って、初めて息子の通った道を知るなど、やはり自分は親として失格なのだろうと思う。

学園祭は盛況だった。

おそらく生徒の家族や近所の住民なのだろう、私服の人々もきれいな衣装を着てやってきていた。生徒たちの活き活きとした表情が眩しかった。

朋也もあの生徒たちと同じように一生懸命勤しんでいるのだろう。そう思うと、嬉しいのか、切ないのか、複雑な想いだった。

活気に満ち溢れたこの世界は、屍のように生気を失いつつあった直幸にとって強すぎる光だった。朋也が遠くへ行ってしまったようで、寂しくもあり、嬉しくもあるのだ。

こういう明るい世界で過ごしていれば、きっと幸せだろう。

もう、自分には巡ってこないかもしれない光景を目にして、直幸は細い目をさらに細めた。

校門で配られていた校内の見取り図を確認しながら、直幸は体育館へと足を運んだ。

体育館は暗幕が敷かれ、僅かな隙間から光の筋を作っていた。直幸は暗がりの中を、僅かな光を頼りに空いている席に座った。
周囲にはすでに大勢の人たちが次の演目を待ち望んでいる。
いよいよアナウンスが流れ、垂れ幕が上がった。
(あの子か)
つい先日顔を合わせた少女の姿を見て、なんとなく親近感が湧いた。
静まり返った観衆の中で、ぽっかりと浮かび上がったステージ。
その上で立ち尽くす少女は何かを見失ったように、困惑したように、瞳を濡らし、顔を覆った。
そこに突然、男が現れ、あらん限りの声を上げて遥か先に佇む少女を叱咤した。
「子どもの夢は、親の夢なんだ」
男はそう叫んだ。「親」と言っていることは、あの少女の父親なのかもしれない。
「自分たちの夢をお前の夢にしたんだ」
彼は、そうも言っていた。
母親らしき女性が立ち上がり、声を掛けた。
舞台裏からも声が聞こえてきた。
「俺たちの挫折した想いも、いま、お前が背負ってるんだよ。」
それは聞き覚えのある声だった。いや、聞き間違うはずのない声だった。
(そうか……)
直幸は少しばかり昔のことを思い出した。
朋也の腕を奪ったのは、他ならぬ直幸だった。
(子どもに夢を捧げた親と、子どもの夢を潰した親か……、本当に、私は親失格なのだな……)
直幸は暗闇の中で苦笑を漏らした。
想いはあの親と同じはずだった。朋也には伸び伸びと生きて欲しかった。そのためにできることは何でもしようを思っていた。けれ

ど、自分にできたことといったら、息子の夢を奪うことだった。
直幸は自分の愚行を悔いた。
同時に、何かに向かっていると思えた朋也の見ていたものがわかったような気がした。朋也が足掻き、苦しみながら、それでも自分の道を、世界を切り開こうとして頑張ってきた想いを知った。
それは、まだ代替であって、完全に自分自身のものではなかった。けれど、他人の夢に賭けて一緒に努力することで、自分もその夢の一員になれる。共に歩むことができる。そういう夢の叶え方もあるだろう。
直幸は、朋也の成長を確信した。
朋也はずっと一人だった。一人寂しく留守番しているしかなかった。そして、いつの間にか本当に一人になってしまっていた。
朋也は必要なものを外に求めて探してきた。一人ぼっちの世界に何かを生み出そうとした。一人ぼっちの世界を打ち壊す何かを求めた。
それは長い長い旅だった。
何もない世界。その世界を飛び出すための翼をやっと手にいれたのだ。温かくて、賑やかな世界へと飛び立つ翼を。
幕が終わると、会場からは温かい拍手が送られた。
直幸もまた、拍手を送った。
直幸はこの演劇を通じて、さまざまなことを発見することができた。それはとても充実感のあるものだった。
直幸はそのまま、家に帰ろうかと思っていた。着いたばかりの頃は、少なくとも、あまり会おうという気は起きなかった。だが、今はとてもいい気分だった。一言お礼を言いたい。そう思うことは不思議なことではなかった。
直幸は辺りを見回し、中庭で朋也と、もう一人の少女――渚といったか――の姿を見て取った。
（そうか）
その二人の姿を見て、直幸は合点が行った。

（そういえば、団子を作っていたことがあったな。そうか、あの頃から……）

直幸は遠い昔のことを思い出したのだった。あの頃も同じ年頃だったが、自分で何かを決める年頃なのだろう。

（もう、そういう年頃なんだな）

直幸は感慨深かった。

直幸が歩み寄ると、二人は直幸に気付いたのだった。

朋也は素早く顔を背けた。それは直幸にとって辛い反応だったが、今の直幸にはそうした朋也も温かく見守りたい気持ちだった。

「いらしてくださったんですね」

渚が声を掛けた。

「招待状を貰ったからね」

それを聞いた朋也は渚に非難の目を向けた。

「すいません、勝手なことして。でも、ご連絡した方がいいと思って」

「お芝居見せてもらったよ。いいお話だったね」

朋也は直幸が語り出すなり、顔を背けた。

「ありがとうございます」

「昔のことを思い出したよ、色々と」

直幸は朋也を一瞥したが、朋也は顔を見せようとはしなかった。目の前にいて顔を見ることもできないのは少々辛かった。

「それじゃあ、私はこれで」

「はい」

直幸は、背を向けるとゆっくりと歩き始めた。

と、後ろから声が聞こえた。

「あんまり、酒飲み過ぎるなよ」

直幸は少々驚いた。

直幸が振り返ると、朋也は顔を背けたままだったが、どんな言葉であれ、自分に掛けてくれたことが嬉しかった。

朋也はどれほど自分のことを憎んでいるだろうか。それでも言葉

を掛けてくれる朋也の優しさが嬉しかった。
（朋也はもう、新しい道を歩み始めている）
朋也はまだ若く未熟だが、それでも今はただ、朋也が自分の道をしっかり持てることを応援するだけだ。
雲は随分と流れ、雲間からは光の帯が幾重にも街を照らしていた。
明日はきっと晴れるだろう。

朋也が家を去った後しばらくの間、直幸は何度も二階の朋也の部屋を覗き込んだ。目が覚めると土間に靴が置いてないか確認していた。朋也が帰っているかもしれない。そして、どこにも姿が見えないと、落胆した。
だが、学園祭の後、直幸はもう一度も二回へ上がることはなくなった。
今までと同じような生活を繰り返し、それでも何とか食い繋いでいた。
心の奥底から「働け」と呼び掛ける声が聞こえたが、体はその言葉通りには動いてくれなかった。
夏の間、直幸はそれほど寂しさを感じずに過ごすことができていた。あの演劇と、渚の父、あきお秋生の言葉のおかげだったのだろう。
だが、空はいつまでも晴れてはいなかった。曇りがあり、雨があり、雪がある。
気温が下がり、冬が刻一刻と迫ってくると、直幸の体が冷えるのと同じように、心の中も冷え込んできた。
朋也は自分の道を歩み始めたのだ。
直幸はそれを邪魔してはいけないと思う。それに、直幸がどこにいるのかもわからない。学校に押し掛けでもしたら、きっとまた嫌われてしまうだろう。

この期に及んでも、直幸は朋也に嫌われることを気にしていた。
だが、それで切り替えられるほど、直幸の精神力は力を残してはいなかった。
「朋也、朋也ぁぁ」
時には朋也の名前を呼び、泣き叫んだ。
時には憤りから、物に当たった。
時には壁に頭をぶつけて自分を痛めつけた。
叫び声や悲鳴、激しい物音が聞こえ、近所では不気味がられていた。
直幸は憔悴していた。
「あんた、酷い顔してるねぇ」
そう声を掛けられたのは、パチンコの台に座っていた時のことだった。
「最近、よく来ますね」
声を掛けてきたのは田村という男だった。
最初は簡単な世間話程度だった。あまり話を切り出さない直幸に構わず自分のことや世間のことを色々並び立ててきた。
田村は随分と馴れ馴れしく声を掛けてくるのだった。
「今日の調子はどうです」
「え、いえ。まったくダメです」
「ははは、そうですか。俺は、今日はまあまあってとこでした。祝杯にって、大したもんじゃないですけど」
田村は不揃いな歯を見せた。あまり品のいい笑い声ではない。
田村は袋から取り出すと、缶詰を一つ直幸に手渡した。酒のつまみにするような肴の煮付けだった。
田村は何かと直幸のことも気に掛け、親切な言葉を掛けてくれた。
「随分と疲れてるようですけど、大丈夫ですか」
「仕事、見つかりましたか？」
「よく眠れてますか？」
直幸は、最初のうちは図々しい田村を少々疎ましいと思っていた。

だが、声を掛けられ続けると親しみが湧いてくるのだった。
「こんにちは。そういえば、岡崎さんは競馬とかやらないんです？」
「ええ。私はしませんね」
「そうですか。いやぁ、当たればパチンコより配当はいいと思いますけどねぇ。残念だなぁ。今度、試しにやってみません？　レース聞いてるだけでも、飽きませんよ」
「はは。考えておきます」
そんな風にして、田村は色々と直幸に教えたのだった。
うまい金の借り方、なんていうのも田村は言っていた。
「うちは間に合ってますから」
「今度、機会があったら教えますよ」
田村はまた下品に笑うのだった。
直幸はいくつか仕事を紹介されることもあった。あまり職業安定所で目にするような仕事ではないものも田村はよく知っていた。田村が言うには、世の中、表も裏もある、のだそうだ。確かにそうかもしれない。
仕事を紹介されることで、直幸はより田村に気を許すようになったのだった。
田村が話を打ち出してきたのは、そんな頃だった。
「実は、いい薬があるんですよ。これがなかなかよく出来ていて、目がパッチリ覚めるんですわ」
一日中眠気が覚めないことがある、という直幸の話を聞いて、田村はそう紹介してきた。
「岡崎さんには特別お教えしますよ。いや、中のいい人にだけ教えてるんですよ。結構値段張るもんでね」
「お金が掛かるものなんですか……。それじゃあ、私にはちょっと手が……」
「いやいやいや、気にしないでください。私と岡崎さんの仲じゃないですか。少し分けてあげますからね、気に入ったら考えてくれればいいですよ」

「いや、しかし、高価なものでは悪いですから……」
「大丈夫ですよ。それに、これを使えば体も驚くほど軽くなるんですよ。疲れなんか吹き飛んじゃいますから。仕事だって、全然平気ですからね」
田村は快く薬の袋を渡してくれた。
「ちょっと強い薬ですのでね、あんまり重ねて服用すると副作用があるので、本当にきつい時だけにしてくださいね」
田村は薬の使い方に注意を促した。直幸は親切に説明してくれる田村に感謝して家に持ち帰るのだった。
それから数ヶ月もした頃のことだった。
「何？　ちょっといや、放してよ」
「敦子。待ってくれ、敦子ぉ」
「いや、だれかぁ、助けてー」
女性の悲鳴に近くを歩いていた男性が走り寄ってきた。
「おい、あんた！　一体、何してる」
「うわぁ、邪魔をするなぁぁぁっ！　敦子は俺の妻だぁぁぁ、返せぇぇぇ」
中年男は一瞬と惑って、女の方を見た。
「違うわよ。私は敦子なんて女じゃないわ！」
「ちょっとあんた、止めなって！　その人は人違いだって言ってるよ！」
男は不審な男を女性から引き離そうと必死に腕を広げた。
「うわっ」
不審な男は力いっぱい中年男を張り飛ばした。
「邪魔するなぁぁぁ。敦子ぉぉぉ、何で逃げるんだぁぁぁぁ。俺のこと忘れたのかぁぁぁぁっ！」
中年男はカッとなって、暴漢に体当たりした。
周囲の人々も騒ぎに気付いて騒然としている。若い男たちも中年男に加勢して、暴漢を取り押さえた。
寸暇置いた後、近くの交番から駆けつけた警官が駆けつけたのだ

った。警官が白昼堂々凶行に及んだ無頼を暴行及び傷害の現行犯で逮捕すると、騒然としていた通りの人々からは安堵の声が漏れた。

「それじゃあ、まず名前と年齢ね」

「岡崎直幸、四〇歳です」

白日の繁華街で愚行に走った犯罪者はそう応えた。目に隈を作り、深く削れた頬は確かに何かをやらかしそうな顔だ、と取調官は思ったのだった。

ベッドタウンとして長閑な住宅街のイメージがある光坂市で起こった事件はすぐさま地方ニュースで放送されることとなった。

朋也はそれをひとづて人伝に知らされることになった。朋也が就職した電気会社の知り合いだった木下と偶然再会したのだが、その木下からの電話で事件を知ることになったのだ。

直幸は取り調べの間、高崎警察署に留置されていた。

朋也が訪れたのは、逮捕から数日後のことだった。朋也は心底直幸に会いたくはなかった。だが、渚の強い説得によって仕方なく留置場を訪れたのだった。

朋也は勤め先から、元請け会社の現場監督として推薦する話を受けていた。考えた結果、その話を受けようという法に意志が傾き始めた頃にこの事件だった。

結局、先方からは断りの連絡が入り、この話は破断した。

高校時代はバスケットを、今度は働き口までも、失った。朋也はとても直幸に会いたいなどと思えるはずがなかった。朋也の心中は、真夏の太陽のように、灼熱と業火に包まれていた。それこそ、手が届くなら絞め殺してしまうかもしれないほどの怒りを抱えながら、朋也は直幸と対面した。

朋也と渚は折りたたみの椅子に腰を下ろしたまま直幸を待った。

しばらくすると、ガラス向こうのドアが開き、警官に連れられて直幸が入ってきた。

朋也はずっと、脇を見たまま、直幸が入ってきても顔を合わせることはなかった。隣にいる渚もまた緊張した面持ちで足元の塀を眺

めていた。
どれほどの時間が過ぎたのだろう。面会時間からすれば、ほんの数秒のことだったかもしれない。しかし、まるで何日もそうしているような長い時間、沈黙が続いた。
朋也は、口を開いたら炎がほとばし迸るのではないかというほどの激情を、口をつぐ噤むことで抑えていた。
「あんたは……」
沈黙に痺れを切らしたように、朋也が口を開いた。
朋也はできるだけ自分を抑制しながら言葉を発した。
「あんたは、一体、何がしたいんだよ。人の人生邪魔して、楽しいのかよ。俺はアンタのこと、親だなんて思ってない。けど、世の中はそうは思ってくれない。俺はアンタの息子なんだ」
朋也は一通り話して息をついた。
しばしの沈黙。
期待しているわけではなかったが、直幸からの反応がなく、朋也は落胆した。
「なあ、もう、しゃべる気もないのかよ。迷惑掛けた息子に、なんか言うことないのかよぉっ！」
朋也は押さえ気味ではあったが、直幸にぶつけるように言葉を掛けた。どんな返答でも許せはしなかっただろう。だが、何もないなど、自分が惨め過ぎる。朋也は直幸に喰らえとばかりに言葉の拳をぶつけた。
だが、その拳は肩透かしに終わった。
朋也が初めて直視した直幸は、穏やかに微笑みを浮かべたまま、まっすぐに朋也を見つめていた。
「ふざけんなよっ！」
朋也はそれまで耐えてきた感情の奔流を一気に爆発させた。
「朋也くん」
渚が朋也に声を掛けた。
朋也は直幸を睨みつけたまま、仁王立ちした。

直幸は時間が止まったように微動だにしなかった。
「もういい。これ以上話すことなんてねぇよ。一生そういう生き方してろっ！」
「朋也くんっ」
朋也は、渚の呼び止める声も無視して、留置場を後にした。
朋也はその後、激しい怒りを近くの塀にぶつけた。それは、怒りをぶつけるというよりも、肉体を痛めつけることで精神的苦痛を和らげるのに似ていた。
自暴自棄になる朋也を渚は小さい体で必死に押さえた。
烈火の如き朋也の暴発は、渚の温もりによって静けさを取り戻した。渚の、灼熱の太陽よりも温かい感触は穏やかなさざなみ細波のように朋也の心を洗い流すのだった。
朋也はこの日、渚にプロポーズしたのだった。
二人は、直幸の予感した通りに結ばれることとなった。
その日、直幸は久しぶりによく眠ることができた。いや、久しぶりに目を醒ましたようだった。
直幸は嬉しかった。
「親だなんて思ってない」
そう言っていた朋也がわざわざ会いに来てくれたのだ。愚かな男の元へ、自ら進んで。それが嬉しくないわけがなかった。
いままで、どんなに求めても会うことができなかった息子に会うことができたのだ。それは心が洗われるほど嬉しかった。錆付いた自分の愚かさを掻き消すように気持ちは晴れ晴れとしていた。
また、迷惑を掛けてしまった。また、怒らせてしまった。
それは直幸にとって心苦しさがないわけではなかったが、そうしたことにもう直幸の心は麻痺していた。いや、体が麻痺していたのだ。
直幸の体は、心の機微を表すほどもう敏感ではなかった。
取調べも裁判も、粛々と行われた。通行人にけがをさせてしまったことを、直幸は素直に詫びた。

法廷に立つことは、直幸に不快な記憶を呼び覚ませる恐れがあったが、それは起こらなかった。そういう敏感さを、直幸は失っていた。あらゆるものから鈍感になることでしか、もはや自分を保てなくなっていたからだった。

傍聴席には、直幸を知るものは誰も訪れなかった。

直幸は誰も知らないまま、判決を言い渡され、前橋刑務所で刑に服することになった。

入所間もない頃は、直幸は薬物の禁断症状に悩まされることになったが、それも徐々に解けていった。

最も幸いしたのは、直幸の体調の回復だった。

それまでろくな生活を送っていなかった直幸にとって、強制的とはいえ規則正しい生活と約束された食事は直幸の体力を回復させていった。

そして、刑務所で初めて迎えた春、直幸に面会者が現れた。

また一段と成長した朋也と渚だった。

「俺、こいつと一緒になる」

朋也は相変わらず顔を合わせようとはしてくれなかったが、しっかりと結婚の報告に訪れてくれたのだった。

直幸は、そんな朋也の優しさが嬉しかった。

「そうか。おめでとう」

直幸は若い二人の門出を素直に祝福した。

「ありがとうございます」

「ええっと、渚、さんといったか」

「はい、渚です」

「朋也くんを、よろしく」

「こちらこそです」

「お幸せに」

直幸の心には、爽やかな春風が舞っていた。

直幸はこの時、本心から幸せを感じていた。あの時の二人が、こうして結ばれた。朋也はしっかりと道を歩み、成長していったのだ

と、確信できる瞬間だった。

直幸は満ち足りた気持ちで二人を見詰めた。そして、もう、自分の存在価値もなくなるのかもしれないと、少し寂しさも感じるのだった。

それから数年の間、直幸は順調に刑期を消化した。刑務所の中がこれほどまでに清々しいものだとは直幸は思わなかった。それは直幸の事実誤認だが、直幸にとって久しぶりに生きている実感を感じられる時間でもあったのだ。

直幸の目は、再び目に光を宿してきていた。

直幸は、朋也を襲った悲劇的な運命を知ることなく娑婆へと戻ってきたのだった。

数年ぶりに戻った我が家は懐かしかった。ポストや玄関には封筒が散らばっていて汚らしかった。それらは年金や保険料、水道光熱費の請求書、そして逮捕前に積み上げた借金の請求書だった。

家の中は土間から先全て埃が積もっていた。居間に落ち着く場所を見つけると、辺りを見回した。随分と散らかっている。それが直幸の生活の赤裸々な姿だった。

直幸は家の中を見て回り、一階の様子だけを確かめた。電気もガスも水道も止まっていた。それも当然である。

直幸は適当に掃除を終えると、仕事を探しに出掛けた。四〇歳を過ぎた直幸にまともな収入など見込めるはずもなかったが、直幸一人が生きていく分にはそれほど高い望みもいらなかった。何より、少しでも収入を得られることが大切だった。

街に出てみると、だいぶ様相は変わっていた。職業安定所のある駅近くは大きく発展し、駅舎も新しくなっていた。直幸は久しぶりということもあり、街の様子を窺うのだった。

街の北側の高台は大きく開発され、住宅が増えていた。その一番奥には総合病院が建ったばかりだという。人口増加が進む街の医療の中心基地として期待されるところだろう。

朋也の通っていた光坂高校もまた新しい様相を呈していた。かつ

ての旧校舎が取り壊され、新たに同じデザインの新校舎が完成した。こちらも人口増加に伴う生徒の増加を見込んでいるに違いない。

街の発展は南東から徐々に北西へと移動しつつあった。西側の山々は新たな商業基地と、周辺の新興住宅地としての開発計画が進みつつあり、工事車輌が激しく行き来しているようである。この土地の土は遠く離れた東京湾岸地域の埋め立てに使われるのかもしれない。車に載せられ壮大な旅路に出るのだ。

今まで住み慣れた土地が姿を変えていく様は新鮮でもあるが、哀愁も漂うものだった。

直幸はとりあえず手作り弁当屋のアルバイトを始めた。あまり物をいただくこともでき、非常に生活の助けになった。

直幸は、もう朋也の心配もいらないだろう、と考えていた。それよりもまず、自分の借金返済に努めなければならない。直幸は少しずつ、生活を立て直していこうと決意するのだった。

だが、そうした直幸の想いは儚いものだった。貧しいなりにも安らげる生活はほんの僅かな時間しか許されなかった。

取立屋が自宅に姿を現し始めたのだった。さらに、どこから嗅ぎ付けたのか、直幸が勤める弁当屋まで押しかけて居座り、営業妨害を始めるのだった。それにはさすがに店長も即断直幸を解雇した。

その後も取立屋はしつこく現れ、直幸の周りを付きまとった。

直幸は本屋、飲食店、ガソリンスタンド、土木工事、清掃業、電器店、金属加工、ゴム製品工場と実にさまざまな職場を転々とした。

高校中退の中年前科者。雇われる方が不思議だという顔をされることさえあり、雇われても数週間持てば大幸運だった。

時代はバブル景気の崩壊を迎えていた。取立屋が必死になるのは不良債権の増加を何としても減らすためでもあった。

さらに、そうした景気状況は直幸の就職を間違いなく抑圧した。高校、大学の新卒者でさえ身を凍らせるような時代がもう目の前にやってきていた。

一九九二年度卒業生以降の求人削減、内定取消は日本中の人々に

恐怖を与え、それまで体験したことのない不況の到来に人々は悲鳴を上げた。戦後、一途成長と拡大を続けてきた日本の経済成長時代の終焉だった。

直幸は次第に追い込まれていった。

そして、ついにその時がきたのだった。取立屋は直幸の自宅に押しかけ、さまざまな物を持ち出し始めた。

「なんだぁ、借金している分際でテレビとはいい暮らしだな、おい」

「こっちの冷蔵庫はどうします。ちょっと古そうですけどね」

「いいのだよ、全部持ってっちまえば。あとでいらないものは捨てればいい。持っていけるもんは全部持っていくんだ」

取立屋はありとあらゆるものを持ち出した。

エアコンも取り外され、洗濯機も持ち去られた。容赦なく二階までも粗探しした。

「おい、兄貴。イイもん見つけましたぜ」

「ん、なんだ?」

直幸は視線を向けた瞬間、目を丸くした。

若い取立屋が持っていたのは敦子にプレゼントするはずだった指輪のケースだった。

「あああ、それだけは、それだけは勘弁してください」

「なんだぁ、お前は黙ってろよ」

別の取立屋が直幸を払い飛ばした。

「ほう。なかなか高そうなもん、持ってんじゃねーか。」

「ニセモノじゃねーのか?」

「さあな、そんなことは俺たちが考えることじゃねーよ。ほら、持ってけ」

「頼む。頼みます。それだけは、それだけは持っていかないでください。お願いだ。他の物は持っていっても構わないから、それだけは勘弁してください。持っていかないでくれ」

「てめぇ、何様のつもりよ。お願いできる立場だと思ってんの?こういう贅沢してるから借金作るんだよ。まったく、気が知れねぇ

よ」
「う、うう」
「ちっ、白けたな。また来るからな」
そう言って取立屋は去っていった。
直幸は嗚咽を漏らす以外になかった。
取立屋は後日再び訪れてきたが、鍵を壊してまでは入ってこなかった。
だが、まったく外出しないわけにも行かず、その時を狙われた。
直幸が現れるのを待ち伏せされ、踏み込んできた。そうしてさらに持ち出せるものを持ち出していった。
敦子と撮った写真も踏み潰され、仏壇すらも持ち去られた。高そうな服も、さらに箪笥やベッドさえも運び出した。
それでも、土地と家の権利書を奪われなかったのは幸いだった。権利書は簡単に見つかるような場所に置かないように、と屋根裏に隠されていたのだった。
何とか住む家までは奪われなかったものの、直幸に残った物はほとんど何もなかった。
朋也の部屋も、敦子の寝室も、もはや蛻の殻だった。大切な思い出の品も失い、直幸の心はズタズタに切り裂かれたのだった。
それからの直幸の生活は過酷だった。
直幸は、それでも何とか必死に命を繋いだ。公園や公共トイレの水を飲み、水道や川の水を汲んで生活用水にした。飲食店に残飯を求め、ごみを漁ることもあった。飲み捨てられたビンや缶のあまりを飲んで、腹の足しにした。
物乞いもした。
川で服を洗い、体も洗った。
公園や川原の雑草も食えないかと口に入れたが苦くてたまらなかった。
トイレも外で済ませた。
直幸にとって、家は寝る場所以外の機能を果たさなくなった。

刑期中に回復した体は見る見る痩せ細っていった。
こうした生活が続くと、直幸は徐々に正気を失い、錯乱するようになった。
「そうだ。保育園に朋也を迎えにいかなきゃ」
保育園の前で立ち尽くし、保育士や保護者に不審がられた。
「そんなはずは。朋也、朋也ぁ、パパが迎えに着たぞぉ！」
しつこく問い、警察を呼ばれたこともあった。
「ほら、朋也、ご飯できたぞ」
器の上には腐った残飯やごみが盛られ、直幸は朋也を探して家中を探し回った。
「お、かくれんぼか。よぅし、見つけてやるぞ」
直幸は、家の内外を問わず、徘徊するのだった。
そうして時々我に返り、ごみを片付けるのだった。
「すいません、朋也が帰って来ないんです。誰か、見た人いませんか？」
近所の住民は直幸を気持ち悪がり忌み嫌った。
時々、朋也がいないことに泣き喚いた。
自分がいけないから朋也がいなくなったと自分を責め、床に頭を打ち付けた。
直幸は、今が一体いつなのか、何年何月何日か、まったくわからなくなっていた。
どれくらいの時間が過ぎたのだろう。
他人を見れば怯え、家の中で震えた。
時々朋也のことを思い出して呼びかけた。
「今度、おもちゃを買ってあげるから出ておいで」
「また、お菓子を買ってあげるから機嫌直してくれ」
直幸は外へ出ると、粗大ごみを探した。中には使えるものもあったからだ。街の発展は至るところに不法投棄がなされていたが、直幸にとって、それは宝の山でもあった。
直幸はガラクタを集めて、路上に市を開いた。その中にはまだ使

える物もあったが、誰も買おうとはしなかった。あまり居つくと、近くの住人に通報され、また警察の厄介になりかねなかった。直幸は逃げるようにしてその場を去るのだった。

粗大ごみの中で使えるものは持ち帰った。それは直幸にとって戦利品だった

川で洗っているとはいえ、体臭は漂うようになった。直幸は文字通り、地域の、街の鼻つま抓み者だった。

街を行き交う人々は眩しかった。生気に満ち溢れ、力強く地面を踏みしめている。その力感のある歩みは、まるで地を這いずる虫けらが空を駆けるように飛ぶ鳥を見詰めるようだった。

直幸はその生命力溢れる者たちに触れることは出来なかった。ただ過ぎ去っていくことを見送ることしか出来ない。

直幸は家の中でも物陰に隠れるようにして眠った。ほとんど部屋の影から動くこともなく、ほんの手を伸ばした程度の範囲が直幸の居場所だった。

直幸は時々我に返って、そこから見える家の光景を眺めた。それは、直幸の脳裏にあるものとはかなり異なるものだった。

敦子と、子供が二人か、三人。卓袱台の前で、敦子が笑い、子供たちが笑う。温かい光に包まれ、明るい声が耳をくすぐ擽る。甘えて抱き寄ってくる子供たちと、それを温かい目で見詰める敦子の姿。

敦子と直幸、そして朋也とその下に弟か妹が一人か二人いる。日々、幸せに包まれ賑やかな家族の生活。それが直幸の夢の光景だった。

「夢の城」

直幸が理想とする家の姿であり、直幸が思い描いていた家族の姿だった。敦子と朋也を見て、無理をしてまで購入した一軒家は直幸と敦子たちにとって幸せの棲家となるはずだった。

だが、その青写真は廃墟のような家の前には虚しい絵空事でしかなかった。

家の中には何もなかった。敦子の存在も、朋也の存在も、新しい

家族も、一緒に暮らすためのさまざまな家財道具も、何もかも、そこにはなかった。

家の中は静まり返っていた。

ただ、自分の呼吸の音だけがやけに鮮明に聞こえてくる。

やたらと騒がしく聞こえる外の世界と隔絶されたように、岡崎家の中は静寂に包まれていた。

それが、直幸の現実だった。

直幸は敦子の人生を狂わせた。我を貫いて郷里を離れ、敦子に苦労を背負わせた挙句に命さえも奪い去った。

敦子が恨めしそうに直幸を眺めている姿が見える。やりたいことがたくさんあっただろう。これからもたくさんの体験をして、多くの人々と幸を分かち合うことができただろう。若くして亡くなった敦子の無念は推量に難くない。

直幸は朋也の人生を狂わせた。幼い朋也を置き去りにし、自分のエゴに腐心した挙句に夢を打ち砕いた。

朋也が恨めしそうに直幸を睨みつける姿か見える。これからもたくさんの体験をして、より高みへと上っていったことだろう。新しい人と出会い、お互いに切磋琢磨していったに違いない。せっかく手に入れた夢を諦めなければならなかった朋也の無念は想像に易しい。

全て、自分が壊してしまったのだ。それを思うと、直幸の凍りついた心でさえも針の穴を通すように刺激した。

何が間違っていたのだろう、と直幸は思う。

これは、身の程をわきま弁えず親許を飛び出した直幸へ対する報いなのだろう。

直幸は後悔の念に苛まれ、自分自身の存在を心底憎いと感じていた。自分には生きる価値などないのだと念じた。

それなのに、直幸は自ら命を絶つことはなかった。どんなに直幸の心が軋み、砕け、霧散しようとも、醜くは這いつくば蹲って生きながらえるのだ。その直幸の心の奥底にあり、直幸の生きる意志―

―死なない意志――を支えているのはたった一つの言葉だった。
――朋也を立派に育てること。
あの日、敦子に誓った言葉は呪詛のように直幸に纏わりついて離れなかった。その言葉は何度も直幸を苦しめ、縛り付ける重荷となった。だが、それは絶対に捨ててはいけない直幸にとって大切な、たった一つに絆だった。敦子との約束、そして、朋也とのえにし縁。これを失えば、直幸は本当の意味で何もかも失い、孤独の中に沈んでしまうのだ。
朋也を立派に育てたことをどうやって直幸は知るのだろう。それは、朋也に認められることでしかなかった。朋也が直幸に育てられたのだ、と、そして立派に育つことができたのだ、と心の底からそれを実感できなければ直幸は務めを果たしたことにはならない。
朋也が立派に育つのではない。一人で立派になっていくのではない。直幸が朋也の支えとなり、手を引いて、時には踏み台となって初めて育てたことになるのだ。
だが、そんなことはもはや不可能だった。
直幸の手を離れた朋也は自分の人生を着実に歩んでいる。直幸の人生と朋也の人生はもはや乖離している。
直幸は、朋也が立派に育っていく姿を本心から嬉しいと思う。けれど、それは直幸の心を解き放つ鍵にはならないのだ。
直幸の心を解く鍵はここにはないのだった。
直幸は、今朋也が一体どういう状況にあるのかまったく知らなかった。どこに住んで、何をして、どう過ごしているのか、何一つ知らない。
それどころか、今の朋也の年齢さえもわからず、錯誤を繰り返した。
もはや、直幸は抜け出すことのできない迷宮の中を彷徨い続けるのみなのだ。
あれからどれくらいの時が経ったのだろうか。
あれとは、一体いつのことだろうか。

直幸は、幾つもの時間と、幾つもの一日、そして幾つもの月を過ごしたと思われた。そう、確かなことはわからないが、どれくらいかの時が流れたのだと思われた。

直幸は夢を見た。

『そこは、終わってしまった世界だった。

私しか存在しない世界。

他に誰もいない世界。

ここはずっと未来なのか、それとも過去なのか、わからなかった。

目の前には座卓が一つあるだけだった。

窓からは外の光が漏れてきた。

ここは他に何もない世界だった。

必要なものは外から拾ってくる必要があった。

私は外に出掛けることにした。

外にはたくさんの光の玉が満ちていた。

それは、私には触れることができなかった。

私にはわからなかったが、それは温かいような気がした。

その光は私の目の前を過ぎ去り、どこかへと飛んでいくのだった。

私はそれを見上げた。

私は遠くまで出掛けた。

遠くまで出掛けて、たくさんのガラクタを集めてきた。

ガラクタを集めて、私は何を作ろうとしたのだろうか。

それはわからなかったが、私の手は勝手に動いた。

そして、それは完成した。

けれど、それは動かなかった。

私には命を生み出す力はないから。
やっぱり、ここは終わってしまった世界だった。

そこに、誰かが現れた。
誰なのか、私にはわからなかった。
でも、とても懐かしい感じがした。
その誰かは私に向かって手を差し伸べてくれた。
私はその手を取ることを少し躊躇った。
手を取ってはいけないような気がしたからだ。

でも、私は結局、差し伸べられた手を握ったのだった。』

朋也がここに立つのは、実に何年ぶりのことだろうか。
朋也は懐かしいような、もうすっかり忘れて新しい物を見ているような不思議な感覚だった。
(また、ここに帰ってくることがあるとはな)
ポストや玄関は封筒で飾り付けられていた。とても、きれいな光景とはいえない。
朋也は家の鍵を手に取った。
(また、この鍵を使う日がくるとはな……)
朋也はずっと、鍵を捨てずにいたのだった。あれほど帰りたくない家だったはずなのに、引き出しの奥にしまったまま、朋也はその鍵を捨てることはなかった。
朋也は、自分のセンチメンタルが少し滑稽に思えた。
けれど、そんな自分の感傷的な部分のおかげで扉を開くことができる。朋也は少しだけ自分に感謝したい気分になった。
何年ぶりかに玄関の引き戸を開けると、そこは随分と汚れていたが、紛れもなくかつて自分が住んでいた家の光景だった。
「ただいま」
朋也は誰もいない玄関の前で、挨拶をした。

それは、自分が長い旅を経て、故郷へと立ち戻ったことを表明するものだった。

中からはふわり、と懐かしい匂い……ではなく、鼻を突く臭いが漂った。

家の中は静まり返っていた。

いや、まったく音がないわけではなかった。耳を澄ませると、奥の部屋からなにやら人の声のようなものが聞こえてきた。

（テレビ、いや、ラジオの声か……）

朋也は、いるな、と確信して、家の中へと進んでいった。傍らには、うしお汐がついて回る。朋也と渚の娘であり、渚の忘れ形見だった。

家の奥に進んでいくと、臭いはさらに強くなり、息が詰まりそうだった。

家の中は、台所から差す光だけで薄暗かった。ラジオの音を発している居間はさらに暗く、その僅かな光が人の背を映し出した。直幸だ。

直幸はかつてそうであったように、朋也のよく知る格好で座ったまま項垂れていた。眠っているのか、起きているのか、朋也からは判別できない。

（相変わらずなのか……）

朋也は少しばかり複雑な想いだった。

けれど、以前のように苛立ちを感じることはなかった。

部屋は以前と同じように散らかっていたが、随分と物が無くなり殺風景になっていた。

（売り払ったのかもしれない）

よく見えない部屋の様子に、朋也は漠然とそう思ったのだった。

朋也は微動だにしない直幸の傍らにより、ラジオの電源を切った。

そのラジオは、直幸のわずかばかりの戦利品だった。電池を入れればまだ充分に使えそうなラジオを見つけると、家に持ち帰ってきた。また別の機会に、さまざまな電化製品から電池を抜き取って、

使えるものを試してみる。
そうして、ラジオは声を取り戻した。
それは、唯一直幸に話しかけてくれる存在だった。どんな声でもよかった。かつて聞いていた競馬中継なども聞いた。聞き慣れたものは、少しだけ親近感を強めてくれたのだった。
その無機質の物体から発せられる声だけが、何もない世界の唯一の友達だった。
その友達の声が途切れて、直幸は意識を取り戻した。
「おお、朋也くん」
直幸はゆっくりと顔を上げ、目の前にいる人物を認めると、そう呼び掛けた。
朋也は少しばかり昔の、苦い過去を思い出し悔しさが滲んだ。また、同じことを繰り返してしまいそうになる自分に、ほんの少し、思い出した幼き日の直幸の姿を思い浮かべさせ、留まらせた。
直幸は以前よりもさらに老け込んでいた。それこそ、定年を迎えて隠居生活に入っている初老の男性のようだった。直幸の頭はほとんど白くなり、目もくぼ窪み、皺も増えていた。ぶしょうひげ無精髭を生やした頬や顎は薄皮一枚といった風だった。とても四〇半ばとは思えない姿が痛ましかった。
「ただいま」
「ああ」
「老けたな、親父」
「ああ」
直幸はふと視線を感じて、部屋を差す光の方を見た。そこには、小さな女の子が帽子を抱えて立っていた。
「アンタの孫だ」
「ああ」
直幸は少しばかり驚いた。そして、嬉しかった。朋也が自分の孫を紹介してくれるとは、夢のようだった。
夢と現実が錯誤した直幸にとって、それは夢の中の出来事だった

のかもしれない。
「こんにちは」
汐は可愛らしい声で、礼儀正しく挨拶した。
「こんにちは」
直幸は、汐を眩しそうに眺めた。
朋也が、直幸の前に腰を下ろした。もう、朋也がずっと小さな時以来、そんなことはなくなっていた。
汐はしっかりと父親の傍にいて離れなかった。
「ずっと、家にいたのか？」
「うん」
「アンタの、母親に会ってきた」
「へぇ」
直幸は、母親という言葉にあまり耳を傾けたくなかった。それは、自然と避けてしまいたくなる響きだった。
朋也が史乃にあったということは、朋也が直幸の過去の話を聞いた可能性があった。直幸は、愚かな自分の情けない姿に、朋也がさらに失望を深めたのではないかという恐怖めいたものを感じた。
直幸の姿は心の機微を敏感には表さないものの、直幸の感性はそういうことに鋭利に反応した。
「汐と旅行してな。ずっと北の……、アンタが昔、俺を連れて行ってくれたところだ」
「んん」
「色んな話を聞いたよ。大変だったんだなって思った。俺も色々思い出した。昔の事を」
直幸は、怖くて朋也を真っ直ぐに見ることができなかった。
まるで、以前の直幸と朋也が逆転したように、直幸は朋也の顔を見られなかった。これまでに、多くの人たちが自分の姿を見て嫌な顔をしてきた。罵られもした。避けられもした。そうして、直幸は人に対して臆病になっていた。目の前の息子にさえも、直幸は真っ直ぐに向けないほど、直幸は人との交わりを避けるようになってい

たのだった。
「なあ、親父。疲れたろ」
それは、直幸にとって意外な言葉だった。直幸はずっと、長いことそんな言葉を掛けられたことがなかった。ましてや、朋也になど言わずもがなだった。
直幸は思わず、喉から息が漏れた。直幸は少しだけ、朋也の顔を見た。
「そろそろ休んでもいいんじゃないのか。田舎に帰ったらどうだ。アンタの母さんが待ってる。アンタが俺の手を取って、自分で育てるって行ってくれた場所でさ」
「おお」
直幸は天井の方を見上げた。
少しばかり、その時の光景が蘇った。
「アンタ、もう充分頑張った。だからさ、もう休めよ。田舎に帰ってさ。母親と暮らしてやれよ、な?」
直幸は考え込んだ様子だった。
汐を一瞥し、そして、何を思っているのだろうか。少しばかりの間が流れた。
何かを考えているような直幸の考えを、朋也は測りかねる。
「もう、いいのだろうか……」
「? なにが?」
直幸の言葉の真意を朋也は掴めなかった。朋也は、直幸の考えがわからず、思わず訊いた。
「俺は、やり終えたのだろうか……? 」
朋也はその言葉が何を言わんとしているのかを悟った。
不意に、胸を込み上げ、目の下が疼くのを感じて朋也はそれを必死に堪えた。
「アンタ、何もかも犠牲にして、こうして俺を育ててくれたじゃないか。俺みたいな、出来の悪い息子のために人生丸ごと使ってくれたんだろ。もう充分だよっ!」

朋也は込み上げてくる想いを必死で堪えながら言葉を発した。たくさんの伝えたいこと、たくさんの話したいことが渦巻いてくる中で、その気持ちを短い言葉に込めるようにして息を吐いた。

「そうか……、いつの間にか、やり終えていたのか……」

直幸は今初めて、夢から起きたように目を開いた。

「それは……、良かった……、……良かった……」

朋也は必死で歯を食いしばりながら、直幸の言葉を聞いた。

朋也もまた、本当に久しぶりに父親と話をしたような気がした。ずっと長い間、心の触れ合うことのなかった父親の声を、本当に久しぶりに聞いた気がしたのだった。

それから朋也は家の片づけをしたのだった。

とてもすぐには片付きそうになかったが、特に散らかっていた居間をまずきれいに整えた。

水道も電気も全て止められて、電話さえも止まっていた。

これではほとんど何も出来ない。一体、直幸はどうやって生活していたというのだろうか。

朋也は公衆電話を使って会社に無理を言って休みを貰った。水道やガスも無理を言って翌日には再供給するようにお願いし、銀行に行って支払いを済ませた。

その間にもできることをしようとごみをまとめ、バケツに溜めてあった水で玄関周りの埃もきれいにした。

ごみを片付けて換気したことで、家の中は随分と悪臭が減ったのだった。

その日は岡崎家に汐と一緒に泊まった。あったはずの蒲団も録になく、夏でなければ汐も大変なところだっただろう。

翌朝、岡崎家は数年ぶりにガスや水道が復旧した。

朋也は風呂を沸かし、直幸と一緒に入った。裸を見ると、直幸の体は本当にボロボロだった。あばらも肩甲骨も、くっきりと浮き出て見える。二の腕さえも、まるで女性の腕のように細くなっていた。ずっと昔、おんぶされたことのある背中がやけに小さく見えた。そ

の体を見ると、直幸の体がいかに傷んでいるか、一目瞭然だった。
（こんなになるまで……）
朋也は感極まり、湯気の中で少しばかり顔を濡らした。
父親と一緒に入浴するのは、もう二〇年近くも昔のことだった。本当に久しぶりのことだった。やっと、親子に近づけたのだ、と朋也は胸が熱くなった。
一日経つと、汐は随分と直幸に懐いた。朋也が直幸の身支度を済ませる間、汐は直幸の膝の上に座っていた。
元々人見知りのない方だったから、異様な容姿の直幸にも物怖じしなかった。
容姿は渚に似ていたが、性格は随分と違うようだった。
人見知りの強い渚に似たのではないだろう。では、朋也だろうか。彼もまた、あまり人懐きがいい方ではない。それは、育ての親である古河夫妻の影響が強かったのだろう。
「着替えと、それから少ないけど、金も入れておくからな」
「ああ。悪いね」
「向こうには、俺から連絡するから。途中で荷物なくしたりするなよな」
「うん、気をつけるよ」
朋也は直幸に手荷物を渡した。
昔は鉄道もなかなか不便で、青森に帰るには始発に乗っても終電でつかないこともあった。それゆえ、寝台特急の利用価値は高かった。
だが、東北新幹線が開通した今となっては、半日程度で青森まで行きつける。今は盛岡までだが、すでに八戸にまで延長する計画が進んでいる。どんどん東北は近くなっていくのだろう。
発展しているのは光坂市だけではない。日本全体が少しずつ変化しているのだ。
「家のことは俺が何とかしておく。借金の始末もやっておくから」
「ああ、済まないね」

「汐、ほら。おじいちゃんにバイバイって」
「バイバイ、おじいちゃん」
「ああ」
直幸は、かつて朋也にそうしたように、汐の頭を優しく撫でた。
「それじゃ、ここで」
「体に気をつけろよ」
「ああ」
「酒、飲み過ぎるなよ」
「ああ」
「煙草も吸い過ぎるなよ」
「ああ」
「長生きしろよ。絶対に、恩返しに行くからな。絶対に、行くからな。」
直幸はずっと昔と同じように優しく笑って朋也を見詰めてくれている。
その直幸の顔がぼやけて見えなくなる。
ずっとずっと幼い日のことを思い出し、昔、よく頭を撫でてくれたことを思い出していた。直幸は僅かな時間でも、ほんのちょっとしたことでも必ず朋也に声を掛けてくれていた。いつの間にか忘れてしまっていた遠い日の記憶が、直幸に触れたことで、洪水となって蘇ってきた。
朋也の目の前は、過去の記憶と重なり合ってよく見えなかった。
「どうした、朋也」
朋也は滝のように溢れ出す涙に顔を濡らしていた。堪えても、堪えても止め処なく涙は流れ落ち、朋也は必死で声を殺して泣くのだった。
「どうして泣いている」
直幸は、幼い日、朋也が泣いていた時にそうしたように、自分より高くなった息子の頭を撫でた。
汐が心配そうに朋也を見て、ズボンの裾を掴んだ。

「ああ、ごめんな、汐」
「心配しなくていいんだ」
笑顔を作った朋也を、汐は不思議そうに見詰めた。
「父さん、今日まであありがとう」
朋也は改めて直幸に向き直り、長い年月の感謝の言葉を送った。
「ああ」
しばらくの間、男二人見詰めあった。
直幸は何も言葉が出なかった。この嬉しい気持ちを表す短い言葉が見つからなかったからだった。
朋也もまた、間を嗜んだ。
『ありがとう』
それ以上の言葉があるだろうか。
「じゃあ、行くよ」
「ああ、元気で」
「朋也も、元気で」
直幸は身を翻し、駅へと続く道を歩いていった。
朋也は直幸の旅立っていく姿をずっと見詰めていた。直幸の背中は曲がり、切なくなるほど小さく見えた。
(あの人は幸せだったのだろうか)
朋也は直幸の背中を見送りながら、直幸の半生を思った。
直幸は、最も幸せと思われた時期に最愛の妻を亡くし、その後、たった一人で息子のために生きてきた。
朋也はその半生を思うと、自問せずにはいられなかった。
ずっと直幸を見守り続ける朋也の手を、汐が掴んだ。
朋也はその感触に握り返すことで答えた。
直幸は振り向くことなく歩んでいった。それは、仕事をやり終えた満足感なのか。それとも、未練を残さないための決意だったのか。
それは、朋也には知る由もないことだった。
「父さん」
朋也は直幸が見えなくなるまでずっと眺めていた。

真夏の太陽は高く、濃く澄み渡った空は地上の人全てに平等に光を分け与えていた。

こうして、直幸の愛する我が家での生活は幕を閉じるのだった。

直幸が実家に到着したのは、夕暮れ前だった。

白鳥の飛来地で知られる小湊はかはく夏泊半島の東側の付け根にあった。

駅から岡崎家までの道程はそれほど風景が変わってはいなかった。もう半世紀も訪れていないような気がするほど、その道は懐かしいものだった。まるで、自分独りだけが長い時間を旅してきたような錯覚を覚える。

ずっと貧しい生活を送ってきた直幸には、岡崎家の門がやたらと大袈裟に感じられるのだった。

直幸は懐かしい生家の玄関を開けた。

(そうだ。こういう音だったな)

引き戸のちょっとした音さえも直幸には懐かしく感じられた。

「ただいま帰りました」

直幸は、昔していたように、挨拶をした。

奥から初老の女性が現れた。老いてもなお凛とした雰囲気を備えている。紛れもなく母だった。

(母さんのだいぶ、老けたな……)

史乃は直幸を見て、眉を少しばかり動かした。

普通の人ならば、諸手を上げて驚いているかもしれない。史乃は相変わらず動じないのだった。

史乃はそれでも内心驚いていた。

地方のニュースにしかならなかったから、史乃は直幸が逮捕された当時の姿すら知らない。ただ、興信所の調査によってそれを知ったに過ぎないのだった。

直幸の風貌は、史乃と並んでもまったく息子だとわからないほど老け込んでいるのだった。それが直幸の苦労を物語っていた。

それこそ、史乃は直幸を抱きしめてよくやったと慰めてやりたいくらいだった。

「母さん、ただいま帰りました」

「ええ、お帰りなさい、直幸さん。さあさ、お上がりなさい」

直幸は深く一礼した。

「失礼します」

「何を言っているの。ここはあなたの家ですよ」

例え同じ言葉を語ったとしても、その声色によって感じ方も変わるものだ。史乃の声にはあの人をひれふ平伏させるような覇気がなくなっていた。そして、どこか丸く優しげに聞こえる声だった。

史乃とて母親である。変わり果てた息子の姿を見れば優しさで抱きしめてやりたいと思う。

「さあさ、荷物を置いていらっしゃい。あ、ところで、直幸さんはお食事はもうお済みですか？」

「え、いえ、まだです」

「そうですか。それはよかった。丁度、今支度をしているところなんですよ。一緒に召し上がりましょう」

史乃は少し楽しそうに奥へと去っていった。

直幸は少し拍子抜けした。

直幸は家を勘当されているものと思っていたし、事実そうだったのだ。罵倒されるようなことをしてしまったのだから、待っていると言われても多少の覚悟はするものだ。それが、雷どころか、牡丹も落ちない。直幸は少々呆気に取られた。

だが、史乃のあんな柔らかい顔は初めて見たような気がする。きっと、元々そういう性分だったのだろう。

直幸は荷物を置きに久しぶりの自分の部屋を訪れた。自分が去ったままだった。少しばかり落ち着いた後、直幸は史乃の元へと向かった。

「母さん。そういえば、父さんはどうしているのかな？」
「亡くなりましたよ。あなたのことを馬鹿息子と罵って」
史乃は朗らかに、事も無げに言ってのけた。そういうことを顔色も変えずに言える史乃はやはりすごいのだった。
直幸は対称的に暗い表情を見せた。結局、謝る間もなく去られてしまうとは、つくづく親不孝ものだと思う。
「ふふふ。直幸さん、あまり気にしないでください。その話は後でゆっくりしましょう。まずはご飯を食べないと、元気が出ませんよ」
「はあ」
その後、直幸は史乃と一緒に食事をした。学生の時以来、実に三〇年ぶりのことだった。
史乃は色々なことを話してくれた。
食事の片付けも手伝わされながら、直幸は岡崎家であったことをいろいろと聞かされたのだった。
直幸は、自分のことをあまり話そうとはしなかった。だが、史乃はそんな直幸に無理に口を割らせるようなことはしなかった。
岡崎家には今、史乃しか暮らしていない。奉公人もみんな辞め、広い家が寂しくなっていた。それでも、最後に勤めてくれた奉公人が時々様子を見に来てくれるのだという。
史乃が食事に洗濯、家事全般を自分で行なっている姿というのは直幸には想像がつかなかった。奉公人がいるのが当たり前で、史乃は僅かな手伝い程度にしかしていなかったのが直幸の記憶にある史乃だった。
史乃は幸三の話もしてくれた。
「あの人は、最後まであなたの勘当を解くとは言わなかったんですよ」
そういう史乃の表情はどこか嬉しそうだった。
「あの人は、頑固者でしたから」
史乃は、そう幸三のことを振り返った。
幸三は史乃より一〇も年上だった。空襲によって工場を失い、幸

三は心底落胆していたという。それから幸三は再起を誓い、父親に頭を下げて資金を借りた。そうして努力の結果、再び事業を軌道に乗せることができたという。

青森の焼け野原は、幸三のみならず大勢の人々にとって大きな傷となり、絶望を与えた。その復興が計られる中、未来の希望として生まれてきたのが直幸だった。幸三は大いに直幸に期待を寄せたのだった。

史乃もまた、空襲によって多くのものを失った。いや、失ったものは幸三の比ではなかった。史乃は一緒に疎開してきた親兄弟、親戚までも失い天涯孤独となった。

幸三は若い史乃を見初めて口説いたが、同時に史乃の良き支えとなってくれた。天涯孤独の史乃を幸三が親に説得してくれなければ奉公することも出来なかった。

全てを失った史乃は、気丈に振舞い、本当に強く成長した。その強い史乃にとっても、幸三は掛け替えのない愛する夫だった。

陽気なところもあり、頑固で意地っ張りなところもあり、真面目で一生懸命なところもあり、そして何より優しく史乃を愛してくれた。

そんな幸三だからこそ、史乃は信頼を寄せ続けていた。どんなことがあっても、幸三に寄り添った。

直幸の勘当を頑なに解かなかった幸三の真意を史乃だけは理解していた。

「あなたに会いたかったのですよ。そして、謝らせたかったのです。そうでないと、自分が負けたみたいでしょう。あの人は本当に負けず嫌いで、頑固者でしたから」

直幸は、深い感慨を持って手を合わせた。

（もっと、話がしたかったな……）

直幸と岡崎家の亀裂は徐々に埋まっていくのだった。

史乃は相変わらず厳しかった。特に基本的な生活については煩く言われ、酒も煙草も止めさせられた。

朝もしっかりと起こされ、食事も洗濯も手伝わされ、のんびりだらだらとはいかなかった。それでも、直幸は体調を回復させていった。少しずつ顔色もよくなり、元気を取り戻しつつあった。

夏泊半島の自然は直幸にとって大きな恵みとなってくれた。地元の農家や漁師たちとも挨拶を交わすようになった。

夏泊半島は帆立の産地でもあり、椿の名所としても知られていた。風光明媚の土地柄は直幸に活力を取り戻させてくれた。

直幸は元気を取り戻すと、そろそろ潮時だろうと決意したのだった。

直幸は、青森に帰ってきた以上、どうしてもやっておかなければならないことがあった。それは、直幸にとってとても精神的に重いものだった。

だが、全ての清算はしなければならない。直幸はそのために青森まで戻ってきたといっても過言ではなかった。

直幸は明くる日、青森市新城の住宅街にやってきたのだった。清水家を訪れるためである。

空は灰色の雲に覆われ、辺りは薄暗かった。

生垣の木々は寂しそうに風に揺られ、ザワザワと音を立てていた。

清水家の前に来ると、直幸はさすがに緊張した。

「ご免ください」

直幸は玄関の前で声を上げた。

「はーい」

少し篭って聞こえたが、聞き覚えのある声だった。

玄関の引き戸が開くと中からは雅子が現れた。

「こんにちは、岡崎です。ご無沙汰しています」

直幸は、深々と頭を下げた。

雅子は直幸を見て驚き、そして表情を曇らせた。

「そうですね。ご無沙汰しています……」

雅子は、直幸が清水家を訪れた真意を測るように間を取った。

「今日は、敦子さんに会わせてもらいに来ました。ぜひ、会わせて

下さい」
直幸は立ったまま、頭が地面に付くのではないかという勢いで敬礼した。
「そうですか。では、会ってやってください」
雅子は迷っていたのだろう、少し間を空けてから答えたのだった。
直幸が清水家に上がるのはこれが二度目のことである。一度目は緊張していて、懐かしむほど覚えていないが、確かにこんな雰囲気だった。そう思わせる程度には記憶していたようだ。
仏壇は客間に供えられていた。
直幸は座蒲団を促されて部屋の中に入った。
清太郎に怒鳴りつけられた部屋である。今日も、清太郎に怒鳴りつけられるのを直幸は覚悟していた。
直幸はハッと気がついた。
そういえば、清太郎の姿が見えなかった。在宅なのか、不在なのかもわからなかった。
「失礼ですが、清太郎さんはお出掛けですか？」
その時、雅子の表情が再び曇った。
「主人は、昨年、心不全で亡くなりました」
今度は直幸が驚く番だった。
あの、気力の塊のような清太郎が亡くなったというのは正直驚きだった。直幸の表情もまた深く沈むのだった。
（もう一度、しっかりと謝りたかった……）
後悔先に立たずとはよく言ったものだった。敦子を奪った罪を、しっかりと清太郎に対して清算したかった。だが、もうその時は永遠に訪れないのだと思うと罪悪感がこみ上げてきた。
（そうか……）
直幸は、何もかも手遅れになるな、とそう思うのだった。
「謹んで、お悔やみ申し上げます」
「いえ、ありがとうございます。主人は、裁判が終わった後、燃え尽きちゃったんでしょうかね。人が変わったみたいに元気がなくな

ってしまって、休みの日には散歩に出掛けるような体を動かすのが好きな人だったのに、ほとんど出掛けなくなってしまって」

それは、直幸の心には痛い言葉だった。

直幸は、雅子がなぜ自分を家に上げたのか、疑問に湧いた。事情から想像するに、敦子も清太郎も、直幸が殺したようなものなのである。雅子の心の中でどんな感情が渦巻いているのか、想像するだけで怖かった。

直幸は雅子の顔をまともに見ることなどできなかった。

「さあ、声を掛けて上げてください」

しばらく間をおいたのに、雅子が声を掛けた。それは催促しているようにも聞こえる。

直幸は、仏壇の前に改まった。直幸は伏せ目がちに蝋燭に火を灯した。線香を二本――清太郎と敦子に一本ずつ――手に取ると、火を灯して供えた。

直幸は改めて仏壇を直視した。仏壇には二人の遺影が飾られていた。直幸はその内の一つを見て目を見張った。

遺影は初老の男性と、見覚えのある少女の写真。つまり、清太郎と敦子の写真だった。

驚いたのは敦子の写真だった。その姿は、直幸が始めてあった時の姿そのままだったのだ。直幸が記憶している限り、敦子と写真を撮ったのは写真館での一度きり、たった二枚しかない。それも、一枚は清太郎に破られ、もう一枚は渡さずに密かに持ち続けてきた。その写真も今はすでになく、清太郎も雅子も敦子の成長した姿を見ることなく、敦子を失ったのである。

そして、敦子は事故で顔も負傷し、おそらくとても残せたものではなかっただろう。

敦子の遺影は青森高校の制服姿だった。それは清太郎と雅子にとっての敦子の時間が、その時で止まっていることも意味した。

直幸は改めて現実を思い知らされるのだった。

それは、謝って簡単に許されることではないのだ。生きていれば

こそ、和解の機会は巡ってくるだろう。だが、亡くなった人の罪をどう償えばいい。この世界は、そんな都合よくは出来ていないのだ。

直幸の心は激しく揺れた。

それでも、敦子にはしっかり報告しなければならない。決して逃げるわけにはいかないのだ。例えどんなに辛くても、そこから逃げ出したら、決して前へは進むことができないのだ。

直幸は、敦子が亡くなった頃のことを思い起こした。

「敦子、久しぶりだね。会いに来るのが遅くなって、ごめん」

「なあ、敦子。朋也にな、孫が出来たんだよ。可愛い女の子だった。汐っていう名前なんだ。あの小っちゃかった朋也が、結婚したんだよ。すごいだろ」

「朋也がね、私にありがとうって言ってくれたんだ。私はいい父親じゃなかった。しっかり育ててやれなかった。朋也が苦しんでる時に、何もしてやれなかったんだ。そんな私に、朋也が、充分だって言ってくれたんだよ。本当に優しい子だよ、朋也は」

雅子は、ずっと目を伏せたまま、仏壇に向かって話し続ける直幸の話を聞いていた。

直幸は滔々と話を続けた。

料理に失敗して、朋也が拗ねたこと。

朋也と一緒に散歩したこと。

朋也が運動会で活躍したこと。

音楽会で楽器の演奏もしたこと。

川に遊びに行ったこと。

掃除機でおもちゃの部品を吸い込んで泣かれたこと。

朋也がお菓子を分けてくれたこと。

夜、朋也とお話したこと。

朋也がちゃんと箸を持てるようになったこと。

朋也がおたふくになって大変だったこと。

予防注射を嫌がって学校に行きたがらなかったこと。

バッタを捕まえて飼ったこと。

虫に刺されて泣いたこと。
初めてクワガタを見て感動したこと。
宿題を聞かれたが、あんまりしっかり答えられなかったこと。
修学旅行のお土産にお菓子をわざわざ買ってきてくれたこと。
そして、酒によって朋也を叩いたこと。
おもちゃを投げつけたこと。
お弁当を作るのを忘れてしまったこと。
授業参観で失敗したこと。
三者面談に言ったこと。
朋也がスポーツ推薦に合格したこと。
朋也がバスケットを大好きだったこと。
そして……
「それなのに、それなのに、俺は……。俺はあいつの夢をぶち壊しちまったんだ。カッとなって、あいつの、朋也の腕を壊しちまったっ！　俺は、俺は最低だっ！！　誓ったのに。お前に誓ったはずなのに、俺はあいつの人生を滅茶苦茶にしちまった！」
直幸の瞳は涙で溢れ、遺影も見えなくなっていた。いや、見られるはずもなかった。見せられる顔ではなかった。
子供の夢を奪っておいて、どうして堂々となどしていられようか。
あの日の竜飛埼での誓いを果たすことができなかった。
「それだけじゃない！　俺は、おまえを幸せにするって、絶対幸せにするって誓ったのに、なのに、守れなかった。守ってやれなかった。朋也も、おまえもっ。すまん。許してくれ、許してくれ……。ううう、ごめん。ごめん、敦子！　ううう、う、敦子ぉぉ、ごめん、ほんとにごめん。敦子、俺さえいなかったらおまえは、おまえは……。うわあああ」
直幸の嗚咽は部屋を越えて家中に響いていた。
直幸は何度も何度も謝った。敦子にも、朋也にも、清太郎にも、謝り続けた。
大の大人が格好悪く、鼻水を垂らし、涙でベタベタになりながら

顔をクシャクシャにして嗚咽した。
雅子は、その姿を見ているとさすがに辛く、部屋を出て行った。
しばらくして、直幸の叫び声が静まった。まだ、肩を揺らして泣いている。
雅子は、再び部屋に戻ってきた。
「岡崎さん」
雅子は直幸の傍らに座ると声を掛けた。
直幸がボロボロになった顔を上げた。
「これ、送ってくれたのあなたでしょう」
直幸はハッとした。
それは昔、直幸が清太郎に宛てて送った封筒の束だった。
直幸はその真意がつかめず、雅子の顔を見た。
「呼んでやってくれませんか？」
「でも、これは……」
直幸は、肩の辺りが寒くなるのを感じた。敦子が両親に宛てた手紙の中に書かれた、敦子の本心を知るのが怖かった。
「あの子も、きっと、読んで欲しいって思ってますよ。ね」
雅子は意外なほど優しげな顔で直幸を見詰めてきた。
直幸は、雅子のその目には逆らえなかった。直幸は恐る恐る手を伸ばして、雅子から封筒の束を受け取った。
全て、封筒は開封済みだった。もう、雅子も清太郎も中味は知っているのだろう。
直幸は束の上の一つを手に取った。
しばらく封筒を眺め、そして、雅子の方を見た。
雅子は優しく頷いた。
直幸は、緊張しながら、封筒から便箋を取り出し、それを広げた。
その字の癖は紛れもなく敦子の筆跡だった。
直幸は決心して、その文字に目を向ける。
『お父さん、お母さんへ

前略

今日、初めて貰ったお給料で便箋と封筒を買いました。これまでもたくさんのことがありました。これからもたくさんのことがあると思います。それを少しずつ、お父さんとお母さんに報告できたらいいと思います。でも、この手紙は、いつか出せる時が来たら出そうと思って書いています。

私と直幸さんは栃木県のテレビ工場で働かせてもらえるようになりました。働くことはなかなか大変ですが、随分慣れてきました。周りの方々も親切な方ばかりです。直幸さんもとても頑張っているようです。いつか、この手紙がお父さんとお母さんに読んでもらえる日がくることを願っています。

お父さん、お母さん、敦子は元気でやっています。心配しないでください。それと、体に気をつけてください。それでは、また。

草々　敦子より　』

直幸は、次の手紙を手に取った。

『――今日、お仕事でミスをして直幸さんが怒られたようです。とても落ち込んでいました。直幸さんは繊細で、ちょっとそういうところを気にしすぎるところがあります。仕事なのでミスがない方がいいのは当然ですが、もう少し余裕を持てたらいいと思います。励ましておいたので、きっと、明日からは大丈夫だと思います。――』

『――直幸さんのところは、寮が四人部屋だそうです。とても賑やかな人たちらしく、ゆっくり出来ないといっていました。あまり騒がしいのも考えものです。直幸さんがゆっくり休めますように。――』

『――直幸さんも夜勤で働くようになりました。随分疲れが出ているようです。夜中働くのですから、当然ですよね。男の方は大変で

す。体調を壊さないか、心配です。――』

『――増渕さんの娘さんが結婚するらしいです。羨ましいです。私も早くちゃんとした夫婦になりたいです。その時は、お父さん、お母さんにちゃんと報告したいです。でも、できるか、ちょっとわからないので、すいません。――』

『――直幸さんと宇都宮に遊びに行きました。やっぱり仕事が大変なのか、寝不足みたいです。せっかく一緒に出掛けられたのに、残念です。午後は公園でお昼寝になってしまいました。でも、寮が別々なので、一緒にいられるだけで幸せです。お父さん、お母さんは二人で出掛けたいって思いますか。――』

『――私も二〇歳になりました。もう大人です。と、言いたいところですが、よくわかりません。前々から二〇になったらお酒を飲みに行こうと言われていましたが、これから色々誘われそうです。でも、直幸さんと一緒じゃないと行く気になりません。ところで、お酒はやっぱり美味しいのでしょうか。――』

『――直幸さんとアパート暮らしをはじめることになりました。役所に行った時に、直幸さんが婚姻届を見つけてきました。もう胸が破裂しそうです。一緒に住むだけでももう空に飛んでしまいそうなのに、このままでは地上に帰って来れそうにありません。お母さんは、お父さんと結婚した時、どんな気持ちでしたか。――』

『――直幸さんと一緒に暮らし始めたのですが、一緒に暮らしている以上、お料理を作ってあげたいです。直幸さんは仕事をしている間はいいと言っていますが、ここは大和女子の底力をみせるしかありません。美味しいといってもらえるか不安ですが、そう言ってもらえるように頑張ろうと思います。お母さんのように上手くなるの

が目標です。またいつか、お母さんのお料理が食べたいです。――』

『――今年の年末年始は特別です。なにせ、私の手作りお節料理で迎えるのですから、直幸さんは幸せ者です。そうでないと困ります。たくさん作ったので、いっぱい食べて欲しいです。お父さん、お母さん、明けましておめでとう。――』

『――この頃体調が優れません。食欲もありません。直幸さんがそんな私を見て、おでこに手を当ててくれました。ひんやりして気持ち良かったです。直幸さんに触れてもらえるとすごく安心します。――』

『――お腹の中に、赤ちゃんがいるそうです。びっくりです。直幸さんも喜んでくれました。喜び過ぎて大変です。両手を上げて子供みたいにはしゃぐんです。男の人は大人なのか、子供なのか、よくわからない時があります。私がお腹にいる時、お父さんは同じように喜んでくれたんでしょうか。――』

『――お腹もだいぶ大きくなって、動くのも一苦労です。ふくたぬき福狸のようになっています。直幸さんがよく触ってきますが、恥ずかしいです。直幸さんが耳を当てると赤ちゃんがよく動くような気がします。きっと、パパに早く会いたいんですね。直幸さんなら素敵なお父さんになると思います。――』

『――ついに赤ちゃんが生まれました。本当に、一時はどうなるかと思いました。でも、元気な赤ちゃんでよかったです。直幸さんも仕事の途中で駆けつけてくれました。名前は朋也です。いい名前だと思いませんか。いつか、お父さんたちに朋也の元気な姿を見て欲しいです。――』

『――直幸さんがおむつを換えるのに四苦八苦しています。でも、新しいおむつに替えると朋ちゃんは喜んで声を上げます。手足もバタバタさせます。とても可愛い笑顔です。これはきっと、将来女の子の人気者です。――』

『――初めて朋ちゃんがママと呼んでくれました。危うく卒倒するところでした。直幸さんは必死でパパと呼ばせようとしています。頑張れ、パパ。頑張れ、朋ちゃん。私もこうやって一つずつ言葉を覚えていったんですね。――』

『――花火大会に出掛けました。朋ちゃんが音に驚いて泣き出すので少し遠くから眺めました。とてもきれいでした。また、三人で行きたいです。ねぶた祭で見た青森湾の花火を思い出しました。きっと、そちらでは毎年大賑わいなのでしょうね。またいつか、行きたいです。――』

『――今日、雪が積もりました。朋ちゃんは雪を珍しがっていました。冷たくて、手が真っ赤になったので息を掛けて暖めてあげました。青森はもう随分積もっているでしょうか。こちらはほとんど積もりません。雪を見ると、やっぱり違う土地なのだと気付かされます。――』

『――直幸さんが突然家を買うと言い出しました。直幸さんは大抵唐突です。でも、突然嬉しいことをされると気絶しそうになるほど嬉しいです。でも、家を買うにはお金がたくさん必要です。あまり無理をしないで済む方法を考えたいです。――』

『――直幸さんは、とても優しくて、誠実で、純粋ないい人です。でも、一人で抱え込んでしまうところがあって、無理をしないか、とても心配でもあります。本当に、無理はしないで欲しいです。も

っと、甘えてくれてもいいんだよ。お父さんもお母さんも、直幸さんのことをもっと知ったら、きっと好きになってくれると思います。直幸さんは素敵な人ですよ。――』

『――群馬の家を購入しました。今度引越しをします。新しい生活が楽しみです。直幸さんと朋くんと三人でお散歩したいです。一度行きましたが、素敵な街です。引越しが待ち遠しいです。でも、直幸さん仕事がなかなか決まらないようです。それだけが不安です。――』

『――引越しを無事終えることができました。でも、直幸さんはそのままアパートに残ることになりました。寂しいです。すごく寂しいです。そんなママを朋くんも励ましてくれています。頑張らないといけないですよね。――』

『――直幸さんと別れてからまだ数日しかなってないのに、寂しくて仕方ありません。会いたいです。今すぐにでも会いたいです。ずっと、直幸さんのことが頭から離れません。お母さんは、お父さんと離れて暮らしたことはありますか。こんな時、どうしたらいいんでしょう。――』

『――明日、直幸さんのアパートに行きます。朋くんもすごく楽しみにしています。何を着ていこうか今から大問題です。朋くん、早くパパに会いたいね。――』

『――直幸さんがあんまり来るとお金が掛かるといいます。洗濯や掃除はこまめにやった方がいいと思います。でも、一番の理由はやっぱり会いたいからです。朋くんもパパと次にいつ会えるのかって聞いてきます。こんなことでは妻失格でしょうか。早く一緒に暮らせるようになりたい。――』

『――最近、直幸さんと過ごした青森でのことを思い出します。竜飛埼でのこと、高校の図書館でのこと、合浦公園でのこと、芦野公園でのこと。改めて、自分がどれだけ直幸さんのことが好きか、よくわかりました。私は直幸さんが大好きです。だから、私も頑張ってくれている直幸さんの力になれるように頑張らないといけないですね。――』

『――直幸さんが群馬の家に帰って来るということで、頑張って奮発してステーキ肉を買いました。今まで体験したことのない未知の世界です。贅沢だって直幸さんに叱られました。でも美味しいと言ってくれたので感激です。でも、やっぱり高いので、これからは主婦らしく賢い買い物をしようと思います。――』

『――直幸さんが契約を更新したそうです。早く帰ってきて欲しいのに。でも、直幸さんは私たちのために頑張ってくれているんだから、いつまでも甘えてばかりではいけないですよね。朋くんも大きくなってきたし、私も働かないと。家を持つことはとても大変なことなのですね。――』

『――朋くんが保育園に通い始めました。ママに会いたいって泣き出したそうです。最初のうちはやっぱり戸惑いますよね。でも、いつまでも甘えん坊じゃ駄目だよ、朋くん。お友達が出来たら、きっと、大丈夫だと思います。朋くんは私と直幸さんの子供ですから。――』

『――やっぱり、仕事は色々と大変です。これまでずっと家にいたので、体がまだ慣れていないみたいです。でも、楽しいこともあります。色んな人たちと話が出来るのは楽しいです。私も頑張って、少しでも直幸さんの力になりたいです。――』

『――朋くんが保育園でパパとママの絵を描いたそうです。今は保育園に掲示してあるようなので、明日見せてもらおうと思います。美人に描いてくれていると嬉しいです。でも、子供に描いてもらえるだけで幸せな気分になります。私も昔は描いていたのでしょうか。――』

『――今年の七夕は残念ながら雨でした。朋くんはパパといっぱい遊びたいとお願いをしました。私も早く直幸さんと一緒に暮らしたいと短冊に書きました。織姫と彦星は一年も会えないなんてどんな気持ちなのでしょう。私なら絶えられそうにありません。でも、頑張らないと。青森は、星は見えますか。――』

『――今日、近くの神社で縁日がありました。朋くんは綿菓子を口いっぱいに頬張って美味しそうに食べていました。子供は甘いものが大好きです。私も甘いものは大好きですけど。今度はパパと一緒に来たいねって朋くんと話をしました。それと、神社に直幸さんが体を壊さないようにってお願いしました。私も明日からしっかり働かないと。――』

『――今日、保育園の運動会がありました。朋くんはかけっこで一番になりました。直幸さんも頑張ってくれました。二人ともとっても素敵なので、私の中では金メダルです。パパ、お疲れさまでした。お父さん、お母さんにも二人の雄姿を見せたかったです。――』

『――昨日、久しぶりのアパートに行ってきました。直幸さんと朋くんは近くの空き地でボール遊びをしました。そのあと、直幸さんと手を繋いでお散歩しました。直幸さんの手はとっても温かくて安心できます。ずっと触れていたいです。帰るのがちょっと辛くなってしまいます。お父さんも、偶にはお母さんを散歩に誘ってみて

はいかがですか。――』

『――朋くんが七五三を迎えました。直幸さんは気が早くて、もう五月人形を買いました。半年先まで押入れの肥やしです。直幸さんも朋くんに会えるのが楽しみで仕方ないようです。――』

『――今日、生まれて初めてウェディングドレスを来ました。ヒールの高い靴はちょっと怖かったです。でも、とっても素敵でした。まるでおとぎの国にでも行ったみたい。直幸さんがプレゼントしてくれました。嬉しくて涙が出ました。私は世界一の幸せ者です。直幸さん、愛しています。のろけ惚気てしまいました。お父さんとお母さんの結婚式はどんな風だったのですか。――』

『――今年のお正月は凧揚げをしました。直幸さんが上げると朋くんは拍手をして喜びました。朋くん、一生懸命走ったのですが、残念ながら上手く出来ませんでした。頑張ったね、朋くん。お父さん、お母さん、明けましておめでとう。――』

『――今日、雪が積もっていました。朋くんと一緒に小さな雪だるまを作りました。朋くんと、私と、直幸さん。三人並べて、玄関の前に並べました。いつになるかわからないけど、この雪だるまと同じように直幸さんと一緒に暮らせる日が来ると信じています。アパートは寒いので、直幸さんが風邪を引かないか心配です。お父さん、お母さんも風邪には気をつけてください。――』

『――朋くんと一緒に、庭にお花の種を蒔きました。すごく狭い庭ですが、それでも花が咲いたらきれいだと思います。花が咲いたら直幸さんにも見てもらいたいです。いま、私たちは一生懸命幸せの種を蒔いているところです。きっと、花が咲いて、みんな幸せな気持ちになれる日が来ると思います。――』

『――直幸さんが正社員として雇ってもらえることになりました。これでまだしばらくこのままの生活になりそうです。それはとても残念です。でも、直幸さんの頑張りが認められたことは嬉しいです。体だけは気をつけて欲しいです。――』

『――今度、直幸さんが帰って来ると電話がありました。アパートには電話がないので、寮や会社から掛けてくるのですけど、冷やかしの声が漏れてきます。邪魔しないで欲しいです。電話の声は何だか特別に聞こえてドキドキしてしまいます。直幸さん、声も素敵なんですよ。――』

『――もうそろそろ直幸さんの誕生日なのですが、今年は何をあげようか考え中です。直幸さんにはたくさん素敵なものを貰って私ばかり幸せ一杯なのも考えものです。でも、直幸さんはあまり趣味がないので、これというものがわからないですね。バーゲンの服では可哀想ですし。何か、直幸さんが跳んで喜びそうなものはないものか、考えてしまいます。直幸さんにはたくさん幸せを貰いました。素敵な旦那様にちゃんとお祝いして、お返しをしたいです。お母さんはお父さんに贈り物していますか。――』

『――今日は日向ぼっこでお昼寝です。朋くんの寝顔はとっても可愛いですよ。私も一緒に眠ってしまいました。こうやって平和な日々を遅れるのもぜんぶ直幸さんのおかげです。直幸さんと朋くんがいて、私はとっても幸せ者です。――』

『――今日、新しいブーツを下ろしました。朋くんは嬉しそうにばしゃばしゃと水溜りで遊んでしまいます。結局濡れて、あんまり雨具の意味がありませんでした。でも、本人はとっても満足そう。ママの苦労をわかってください。本当に可愛いです。――』

『――私も、直幸さんに帰ってきて欲しいと思うだけでなく、信じて待とうと思います。そして、直幸さんが帰ってきたら、たくさん恩返しがしたいです。いっぱい甘えさせてあげたいと思います。お父さんも仕事で無理をしないでくださいね。――』

『――狭い庭にも花が咲きました。殺風景だった庭の風景も少し明るくなったと思います。でも、日当たりがすごく悪いので、あまり元気がないようにも思います。朋くんが花壇の絵を描きました。咲いたよ、と直幸さんに見せてあげようと思います。――』

『――今日、直幸さんが帰って来ました。家でゆっくりしていました。直幸さんがやたらと私の手を見たり、握ってきたりしました。何だか妙な感じでしたが、触れ合いたかったのかもしれません。私も直幸さんと手を繋ぐと幸せな気持ちになります。お父さんとお母さんは最近、手を繋いだことありますか。――』

『――今日、バーゲンでちょっと素敵な服を買いました。直幸さんはあんまり濃い色の服を着ないのだけど、きっと似合うはずです。今度、帰ってきた時に着てもらおうと思います。それまでしばらく箪笥の中です。ついつい買ってしまうのはよくないですね。――』

『――今年も七夕を迎えました。直幸さんが健康でありますように、とお願いしました。朋くんもパパといっぱい遊べるように、とお願いしました。織姫と彦星のように、次に出会える時を心待ちにして頑張ります。直幸さんは一家の大黒柱として頑張ってくれています。私も朋くんも、そんな直幸さんが大好きです。――』

直幸は、何度も涙を拭いながら手紙を読んだ。

何度も目を止め、手を止めながら、それでも全部読み切った。

たくさんの手紙には敦子のたくさんの想いが込められていた。
「こんな俺で、本当によかったのかな……」
しばらくの余韻のあと、直幸は口を開いた。
雅子は直幸の顔を見た。
「敦子は本当に幸せだったんだろうか」
「岡崎さん、何言ってるんですか。今、読んだでしょ。敦子は、敦子は幸せだったんですよ。あの子はあなたと一緒になって幸せだったんですよ」
雅子は直幸の手を掴んで訴えた。
「こんな俺でも、こんな俺でも、敦子は許してくれるのかな」
「何言ってるの。許すも何も、敦子はあなたのこと恨んだりしてないのよ。あなたのことを愛していたのよ。ね、そうでしょ」
「すいません。すいません、お母さん。こんなに、こんなに想ってもらってたのに、俺は、俺は敦子を守ってやれなかった……。すいません……。すいません……」
直幸は雅子の膝の上で謝った。
「何を言うの。あなたが謝る必要はないの。あなたは立派に敦子を支えてた。一家を支えていたのよ。あなたはこんななんかじゃない。あなたは立派なお父さんよ。立派な敦子の夫だったのよ。ね、もういいのよ、もう。あなたは充分頑張ったわ。ただ、あの子がちょっとだけ運がなかっただけなの。あなたの所為なんかじゃない。あなたの所為なんかじゃないのよ。もういいのよ、もういいの。ね、直幸さん」
雅子は直幸の肩を抱いた。
直幸は懺悔するように泣き続け、雅子は免罪符を与えた。元々ありもしない罪を背負い続けていた直幸の鎖を解き放つために雅子は必死に抱きしめた。
雅子とて複雑な気持ちがないわけではない。最愛の娘を奪われたという記憶は消えない。事実も変わらない。
だが、敦子のたくさんの手紙を読んで、なぜ直幸を責められよう。

敦子は自分の意思で旅立ったのだ。それを直幸の所為にだけして、直幸を苦しめても敦子はきっと喜びはしない。それどころか、怒られるに違いない。

それに、直幸の容貌をみれば、直幸がどれほど苦しんできたかは一目瞭然だった。

「直幸さん。主人に、あなたにあったら告げてくれ、と頼まれたことがあるんです。あなたにあったらね、許してくれ、そう伝えてくれって」

直幸が顔を上げた。

雅子は涙顔で笑みを浮かべ、話を続けた。

「たぶん、じぶんがそれほど長くないことを悟っていたんでしょうね。あの人は、裁判の後とっても元気がなくなったの。まるで燃え尽きちゃったみたいに。でも、この手紙が届いてから、少し元気になったのよ。きっと、あの人の中で整理がついたんでしょうね。でも、自分からそういうことというの照れくさかったんでしょうね。照れ屋だったから」

雅子はまるで我が子に話し掛けるように優しい声で語った。

「ごめんなさいね。本当は、あなたにもっと早く伝えるべきだったわね」

「いえ」

「あの子は幸せだったのよ、あなたと居られてね」

雅子は何度も頷いた。

「本当に、信じていいんでしょうか」

「何言ってるの。娘をさらっていっといて」

雅子は弾くように直幸の二の腕を叩いた。

「……」

「ほら、暗い顔しないの。もっと自信を持って！　あなたは立派な旦那だったのよ」

雅子は両手で直幸の顔を挟み、いい、と強調した。

直幸はボロボロに汚れ、赤らみた顔でやっと笑みを浮かべた。

直幸はずっと自分を責め続けていた。
そして、ずっと自分を信じられずにいた。
それゆえに、直幸は朋也に対しても正面から自分の意思をぶつけることも出来なくなってしまった。
自分は夫として、親として、そして人間として不適格者だ。
直幸は自分を信じられなくなり、出来損ないのガラクタだと思っていた。
高校時代から、直幸は劣等感を背負い続けていた。それは自分へ対する不信感となり、無力さに失望した。
直幸は何度も死のうと思った。もうダメだ、と何度も想い、死んだ方がましだと思った。生きる価値のない人間だと思った。
だが、それでも彼は生きながらえた。
彼を生の世界へ引き止めたのは朋也の存在であり、敦子との約束だった。
彼は自分が手放してしまったと思っていた朋也と敦子の存在によって、この世界に縛り付けられていた。二人の家族の絆に守られていた。
そして、この日、やっと敦子と出会うことができたのだ。
敦子の心と触れることで、やっと長い間眠り続けていた直幸の心の扉が開かれたのだ。
直幸は、誓いを立ててから後、朋也の前では一度も泣いたことがなかった。ずっと自分の心を封印して、朋也のためだけに生きようとしてきた。朋也に人生の全てを賭け、夢を賭け、歩み続けてきた。
今、全てが終わったのだった。
長い長い冬が終わりを告げ、直幸の心の中に本当に久しぶりに光が差し込んだ。
直幸はやっと、本当の自分に戻ることができたのだった。
「ねぇ、直幸さん。後で、お墓に行きましょうか」
「いいんですか」
「ええ、もちろんよ」

「ありがとうございます」
「いいのよ。あなたは敦子の旦那さんですもの」
直幸は少し照れたような笑みを浮かべた。
「でも、その前にお昼にしましょ。お腹空いたでしょ」
「いえ、お構いなく」
「そういう時は遠慮しないの」
「何か、手伝います」
雅子が部屋を出て行こうとするところに声を掛けた。
「いいのよ。それより、少し散らかってしまったから、片付けてもらっていいかしら」
雅子は直幸の足元を見て、それを示した。
「あ、はい」
「ちょっとまっててね。すぐ作るから」
雅子は部屋を出て行った。
その後、直幸は敦子の手紙を集め、その一つを手にとって再び目を通した。
（ありがとう、敦子。愛してくれて、本当にありがとう）
直幸は心の奥底から敦子に感謝した。
直幸は、敦子がいとおしくて抱きしめたい気持ちになった。その心に湧き上がる温かな感情は本当に久しぶりのような気がした。
食事を終え、直幸と雅子は清水家の菩提寺へと向かった。道中、雅子は気さくに話しかけてくれ、飽きることがなかった。
直幸は、青森を旅立ってからのことを色々話して聞かせ、朋也のことも話をした。実家とも和解ができ、一緒に住んでいることも伝えると、雅子は「それはよかったわね」と頷いてくれた。
清水家の墓は少し急な坂道を登ったところだった。
「まあ、なかなか紳士ね。ふふふ、若い人に手を引かれるなんて」
直幸は雅子の手を引いて歩いた。
お墓は少し白っぽい灰色をしたごく普通の形状だった。花が枯れて色が変色していた。

「ちょっとね、坂が大変で。なかなか来るのが大変なのよ」
雅子はそう釈明していたが、清水家からここまではお散歩気分で通うことは出来ないだろう。坂や階段もあり、少しばかり年寄りには酷な造りだった。
「ほら、あなた、敦子。直幸さんが来てくれましたよ。敦子は本当に久しぶりでしょ」
お墓をサッと流し、花を生けた。やはり花があると生えるものだった。
「敦子は花を見るのが好きでした」
「そうね。よぉく知っているわ。ほら、敦子。きれいなお花でしょ。直幸さんが選んでくれたのよ」
雅子はきっと喜んでるわ、と直幸に微笑んだ。
線香に火を灯し、二人それぞれ備えた。
それは直幸にとって特別なものだった。葬式に参列できない夫というのも珍しいだろう。略式もいいところだが、それでも直幸にとって、それは葬式と同じものだった。
二人は合掌して、黙祷した。
直幸はまたも目を潤ませた。だが、その涙は決して嫌なものではなかった。しみじみと滲み出るような涙は不思議な温かさを感じさせ、優しく頬を撫でた。その涙は愛しさと慈しみの結晶だった。
(敦子、やっとここに来れたよ。長かったね。待ちくたびれたよな。ごめんな、寂しい想いをさせて。敦子に出会えて本当によかったよ。ありがとう、敦子。清太郎さんも、ありがとうございました)
直幸はそっと目を開け、そのまましばらくお墓を眺めていた。敦子が挨拶してきたように感じて、直幸は微笑みで答えた。
「俺の、私の夢は、清水家のような家庭を作ることでした」
「ふふふ。そうなの?」
「ええ。明るくて、活気があって、優しくて、とってもあったかい。そんな家庭を築きたかったんです。敦子と一緒に」
「そう。でも、築けてたんじゃないの、そういう家庭。一緒に居ら

れなくて寂しいこともあったと思うけれど、あなたたちの心は一つだったんじゃないかしら」

直幸はまた目頭が熱くなった。雅子にそう言ってもらえることはとてもありがたかった。

「そうですね。ありがとうございます。」

雅子は大きく息をついて、気持ちを切り替えた。

「さっ、いきましょうか」

「はい」

直幸はもう一度お墓を一瞥すると、歩み始めた。

雅子は帰り道、敦子の遺骨についてお墓を移すかどうか尋ねてきたが、直幸はそのままでいいと答えた。

「清太郎さんと一緒の方が賑やかでしょ。清太郎さんもその方が寂しくない」

「まあ、ありがとう。でも、ほんと子離れできない親でどうしょもないでしょ」

「いえ。あんな風に愛されて、敦子は幸せだったと思います」

「あんまりしつこいのも考えものよ。たまたま駆け落ちしちゃったけど、あの人の許可を得ようと思ったら、いつまで経っても結婚できないんじゃないかしら」

「それは大変ですね」

「そうよぉ。それに、結婚式なんか、どうなっちゃうかわからないわよ。いきなり気が変わって結婚反対とかなったらもう大変よ」

「ははは、そうですね」

「でしょ。あんまり親バカなのも考えものよね。そういえば、敦子の子は息子でしたよね」

「ええ、朋也です」

「そう、朋也くん。でも、娘じゃなくて良かったわね」

「ははは。でも、娘は娘でよかったと思いますけど」

「一人娘は駄目よ。出て行っちゃうだけなんだから。大体泣くのはお父さんの方よ。母親の方がそういう時は落ち着いてるものよ。」

「うーん、そういうものですかねぇ」
「そういうものよ」
「俺もそうなったのかなぁ」
「きっとなったわよ。直幸さんは涙脆いですからね、間違いないでしょ」
「そんなに涙脆いですか？」
「だって、さっきだってあんなに泣いていたじゃないの」
「あ、あれは、ちょっと仕方ないですよ」
直幸は赤面して弁解した。
それを見て、雅子はふふふ、と笑った。
雅子の魔法に乗せられて、直幸は明るさを取り戻していた。
それから二年ほどの月日が流れた。
直幸は体調もとても良くなり、体力も付いてきたのだった。
直幸は額の汗を拭い、眩しい太陽の光を見上げた。空からは真夏の太陽が光を降り注いで、地面は蒸気を上げていた。
その照りつける熱波の中を、和服の女性が日傘を差して優雅に歩いてくる。
「直幸さん」
「ああ、母さん」
「今、朋也さんが青森に到着したと連絡がありましたよ」
「そうですか」
直幸は懐かしい顔を思い出していた。
「よかったのですか」
「えっ」
「朋也さんを迎えに行かなくてもよかったのですか」
「ええ、いいんですよ。せっかくの家族旅行なんですから、若い者だけで楽しませてあげましょう」
「まあ、随分と気前がいいのですね。本当は会いたくて仕方ないのではないですか」
「それはまあ、会いたいですけどね。いいんです。それに、子供た

ちに取れ立ての物を食べさせてあげたいですからね」
直幸は畑の方に目配せした。
作物は太陽の恵みをいっぱいに吸って、瑞々しい光沢を浮かべている。
「ふふふ、随分と大人になりましたねぇ」
直幸はそれを訊いて、肩を浮かせて笑みを浮かべた。
「西瓜もちょっと小ぶりですけど、これも持っていったらきっと喜びますよ」
「そうですね。精の出ることです」
直幸と史乃は一緒になって笑った。
「それにしても、暑いですね」
「ええ」
直幸は額に手を翳して大空を臨んだ。
真っ青な空の向こう、ほうほう逢逢と白い雲が立ち上っている。
風は土の匂いと潮の匂いとを混ぜて舞い、蝉は、生きている喜びを旺盛に賛歌していた。
直幸は、もうすぐやってくるであろう息子たちの訪れを心待ちにするのだった。
直幸には、朋也に話したいこと、見せたいものがたくさんあった。
今年のお盆休みは、朋也にとっても長い休みになりそうだった。

終章

直幸と史乃、母子二人の生活はそれほど長くは続かなかった。
史乃が亡くなったのだった。
史乃は最後まで、凛々しく、美しく、そして、潔かった。
史乃が亡くなった後、直幸も間もなく倒れた。
その時はさほどのこともなく退院したが、検査の結果、直幸の肝臓は極めて悪い状態であることがわかった。
深酒と不摂生によって、直幸の体は完全に蝕まれ、もう手の施しようがないところまできていた。
二度目に倒れたのはそれから僅か数ヵ月後のことだった。
直幸は畑で倒れていたという。直幸は毎年少量ではあったが、収穫した野菜や果物を朋也の家に送っていた。今年もまた、畑を始める頃合いで、様子を見に来たのだった。
近くを人が通らなければ、そのまま息を引き取っていたかもしれなかった。
朋也は家族を連れて、急いで青森へと向かった。
朋也が病院に着いた時、直幸の意識はなかった。
直幸はベッドに横たわったまま、微動だにしない。
「おいっ、父さん！　父さん！　おい、起きろよ、親父ぃ！」
「岡崎さん！　落ち着いてください」
直幸を揺すり起こそうとした朋也は看護士に止められた。
「親父。まだだろ、まだ早いだろ。まだ、死ぬには早過ぎるだろ」
朋也はベッド脇に跪いて訴えた。
「長生きしろよって言ったよな。俺まだ、アンタに何にも恩返ししてねぇのに、死ぬなよ、死ぬなよな」
「お爺ちゃん」
汐も横から声を掛けた。
「頼むよ。目ぇ、覚ましてくれよ、なあ、親父。頼むよ……」

朋也は、涙を流して懇願するように直幸に呼び掛けた。
それから少しばかりして、直幸が目を開いた。
直幸はまだまどろみの中にいた。
「親父ぃ」
「お爺ちゃん」
誰かが呼んでいる声が聞こえた。それは確かに聞こえてきた。
「お、おお」
直幸は呼吸器の中で篭った声を上げた。
「親父！　心配させやがって、馬鹿やろう」
朋也の目から再び涙が溢れ出た。
「おお、来てくれたのか」
「ああ」
「すまなかったね」
「何言ってんだよ。当たり前じゃないか」
「ん、どうした。泣いているのか」
直幸の瞳はもう朋也の顔も判別できないほど、ぼんやりとしか見ることができなかった。
直幸は朋也の頭を撫でようとしたが、腕は肘までしか上がらなかった。
朋也はその手を力いっぱい握り締めた。
「父さん、あんまり心配掛けさせんなよ」
「ああ。また、迷惑掛けてしまったね」
「何言ってんだよ。家族じゃんかよ」
「ああ、そうだな……」
呼吸器のカバーが蒸気で白くなり、直幸の一つ一つの呼吸を物語った。
「ほら、父さん。汐だぞ。ほら、汐」
「お爺ちゃん、がんばって」
孫の柔らかい掌が直幸の手を包んだ。
「ああ……。よく、……来てくれたね」

「うん」
「大きくなったね」
直幸は少しばかり首を揺らして汐らしい人影の方を見た。
「うん」
「父さん。汐な、もう来年には中学に上がるんだ」
「うん、そうだよ。お爺ちゃん」
「そうかぁ、もうそんなに……」
「汐の制服姿、見たいだろ」
「ああ、そうだね……」
直幸は僅かに唇を上げた。
「朋也、ありがとな。おまえがいて、よかった。おまえに会えて、よかった」
胸がこみ上げてきた朋也は噛み締めた。
「何言ってんだよ。お別れみたいなこと言うなよ。まだ、終わったわけじゃないんだからさ」
「ああ、そうだね……」
「そうだよ。汐の制服見るんだろ」
「あ、ああ。汐ちゃんの、制服……か。はぁ、見て……みたいね」
「だろ。だったら、長生きしなきゃだろ。もっと、もっと長生きして、汐のこと、見守ってくれよ。俺たちのこと、見守っててくれよ」
「ああ、そうだね」
「だから……、頑張れよ…。もっと長生きしてくれよ……」
「どうかなぁ」
直幸は天井を見た。
「何言ってんだよ。何弱気になってんだよ。アンタ、こんなことで死ぬような人間じゃないだろ。もっと、もっと辛い時だって乗り越えて、今まで生き延びてきたんじゃないかっ」
「はは…、そうだねぇ…」
「アンタの人生これからじゃないか。やっと、やっと自由になったんじゃないか。これからたくさんやりたいことやって、好きなよう

に生きて……、いっぱい、いっぱい色んなことして、な？　アンタの人生、まだまだこれからじゃんかよ！」

涙とはこれほど溢れてくるものなのだろうか。そう思えるよど、朋也の目からは涙が溢れ出て止まらなかった。

「……そうだなぁ」

「そうだよ。俺、恩返しするって言ったよな。これからたくさん、たくさん、恩返しするんだから、もっともっと長生きしろよな。これでもかってくらい、恩返しに来るからな。だから、だから、死ぬなよ、絶対。絶対、死んだら許さないからな」

「そうだよ、お爺ちゃん。私もお爺ちゃんに生きてて欲しいから。いっぱい見て欲しいことだってあるんだから、だからがんばって、がんばってお爺ちゃん」

直幸はもう一度、一家の様子を見て、目を細めて笑った。

「うん、そうだな。ありがとう」

「ああ。父さん、元気だせよ」

朋也からも笑みが毀れた。

直幸はそっと目を閉じた。

「父さん？　親父！」

黙り込んだ直幸を見て、朋也の一家は一斉に声を上げた。

「大丈夫です。ちょっと話して疲れたんだと思います。今は安静にさせてあげてください」

看護士は落ち着いた口調で朋也たちを促し、病室を出た。

その後、朋也たちは担当医に直幸の容態について説明を受けた。

「今はまだなんとも言えませんが、すぐに命にどうこうということはないと思います」

朋也たちは安堵の息をついた。

「ただ、お父さまのお体の具合は非常に思わしくありません。状態が状態ですので、もし回復しても、それほど長くはないと思います」

朋也も汐も表情を硬直させた。

「それに……」

「それに、なんですか？」
「ええ、直幸さんは容態が回復されたとしても、歩けるようになるかどうか……」
「！　親父っ！」
朋也は奥歯を噛んだ。
「お爺ちゃん、かわいそう」
「まだ、そうなると決まったわけではありません。ですが、ご家族の方はそういう覚悟もしておいて下さい」
医師はそれでは、と朋也たちの前から立ち去った。
（親父！）
朋也は目を瞑り、拳を握って無念を堪えた。
「お爺ちゃん」
汐もまた、目に涙を浮かべて顔を覆った。
直幸に降りかかる病魔に、朋也たちには抗う術がなかった。
直幸は嬉しかった。朋也と、新しい家族と出会えて、幸せな気持ちだった。直幸は大切な家族を失ったけれど、新しい家族も手に入れた。それは、とても幸せなことだった。
直幸は清々しい気持ちだった。
朋也に伝えたいことの全てを伝えた。
直幸がやり残したと思うことは全てやり終えた。
もう、充分満足だった。
直幸はその夜、夢を見た。
長い長い夢を見た。
それが本当に夢だったのかどうか、わからないほど長い夢を見た。
うとうととつい眠りに就いてしまった直幸に、真っ暗な視界の中で突然衝撃が襲った。
直幸は額を擦りながら、我に返った。
（んん、ここはどこだ？　俺は何をしていたんだ？）
視界が鮮明になってくると、直幸の目の前にはノートや本が広げられていた。

（えっと、何だったかな?）

まだ意識のはっきりしない直幸に声が聞こえた。聞こえたような気がして、その方を見た。

そこには、初めて出会う、直幸の忘れるはずのない女性がいた。

そこから全てが始まった。

直幸は敦子と出会い、郷里を離れ、結婚し、朋也が生まれた。

敦子を失い、朋也と二人での生活が始まった。

そして二人は別れ、再び出会った。

故郷へと戻り、史乃と穏やかな生活を送った。

直幸は長い長い夢を見た。本当に長い夢だった。

やがて、東の海が明るくなると、太陽が顔を出した。

そして、朝日が病棟を白く浮き上がらせる頃、直幸は光に誘われるようにして息を引き取った。

時代は二一世紀を迎えたばかりの青森は、長い冬を終え、春を迎えていた。

青森湾に面した合浦公園は桜が満開となり、見頃を迎えていた。

その合浦公園には石川啄木の歌碑が備えられている。

『　船に酔ひて　やさしくなれる
　いもうとの　眼見ゆ
　津軽の　海を思へば　』

啄木は、妹、光子と共に青函連絡船に乗って北海道へと渡った。

その航海の最中、光子が船酔いで弱ってしまい、啄木は妹の介抱をした。啄木は、弱って大人しくなる妹の姿を見ながら、津軽海峡の荒々しい波に想いを馳せたのだった。

岡崎直幸、享年五四歳。

津軽海峡の荒々しい波のように波乱に満ちた彼の人生は、最期、

桜並木を抜ける薫風のように穏やかに幕を下ろしたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6258i/

CLANNAD ～Before Story～ 直幸編

2010年10月8日12時44分発行